ようとも、二人の中の何れも人生を實際の生活として見てもゐないし、又言ひ現はしてもゐないといふ感情が甦つて來た。多分多くの人々の場合と同じやうに、二人とも、ものを觀察する機會が、自分の意見を述べる機會ほどよくないのであらう。何方も、彼等やその仲間を浮べてゐる滑かな靜かな流れの外に働いてゐる錯綜したいろ〳〵の力に就いては、十分な觀念を有つてゐなかつた。何方も一局部の眞理と普遍の眞理との相違を見てゐなかつた。彼等が牧師として、學者として發言の機會を得て、その心の世界に言はせたことは、外部の世界が考へてゐることゝは全く異つてゐた。

「お前は今となつては農業をするより外に仕方がないんだなあ、」悲しさうな樣子をして、眼鏡越しに遙かの野面を見遣りながら、フェリックスはいろ〳〵の話をしてゐるうちに、一番年少の弟に向つてかう言つた。「だから僕達も、それで好いとして置かなきやなるまい。だが、僕はお前に特に希望して置くが、出來るだけ道德觀念を念頭に置くやうにして貰ひたいね。農業は無論、外部的には思ひ切つた亂暴な生活を送ることだが、それにしても高尙な思索は、質素な生活と伴つて行けるもんだからね。」

「無論、行けますとも。」とエンヂェルは言つた。「そりや、もう千九百年も昔に證明されただやありませんか――まあ、ちよつと、あなたの領分を侵すことになりますがね？フェリックス兄さん、あなたは、何故僕が高尙な思索と道德觀念とを捨てゞもするやうに、考へるのですか？」

「それはね、お前からの手紙や、一緒に話してゐるときの調子から考へると――ほんのちよつとした空想かも知れないが――お前は、何處か理解力を失ひかけてゐるやうに思つたのだ。カスバアト、お前、それに氣がつかなかつたかね？」

「ねえ、フェリックス、」と無愛想にエンヂェルは言つた。「僕達はもうよく理解し合つてゐる仲ぢやありませんか。僕達は銘々定められた道を歩いてゐるんでせう。だが理解力といふことになると、兄さんは一人よがりの獨斷家として、僕の理解力なんかを打つちやつて置いて、御自分のがどうなつてゐるかを調べて見た方がいゝんぢやないかと僕には思はれるんです。」

彼等は丘を下りて食事に歸つて來たが、この食事は、何時といふ定りはなく、いつでも教區內の兩親の朝の仕事が濟み次第始まることになつてゐた。午後の訪問者に對する

便宜などは、他人事に心を奪はれてゐるクレア夫妻の念頭に、一番後に入つて來るものであつた。尤もこのことに就いては、三人の子供が擧つて、少しは近頃の觀念になつて貰ひたい、と兩親に切望してゐた。

彼等は散步で空腹になつた。搾乳場の主婦が幾分無作法に並べ立てた食卓の自宅出來の材料で出來た量の多い料理に慣れた今は、戶外の勞働者であるエンヂェルには、殊に甚しかつた。だが、老人達はどちらもまだ歸つてゐなかつた。そして、子供達が殆んど待ちくたびれてしまつた時分に、兩親はやつと入つて來た。自己犧牲の精神に富んだこの夫婦は、自分達の食慾のことなぞは忘れて、病氣の敎區民の或る者に肉食の食事を薦めてゐたのであつて、つまり、多少矛盾してゐたが、その病人達を肉體の中に閉ぢこめて天國へ行かせぬやうにしたのである。

家族の者は食卓に就いた。そして、冷たい質素な食物が彼等の前に置かれた。エンヂェルは、クリックの妻君から贈られた黑臟腸はどうしたのだらうと探し廻した。彼は、搾乳場で人々がやつたやうに、うまくそれを燒くことが出來た。そして、彼が親しく味つたやうに、その驚くべき草の風味を兩親にも賞玩して貰ひたいと思つてゐた。

「あ！　お前、あの黑臟腸を探しておいでだね、」とクレアの母は言つた。「でも、理由を知つたら、お父さんや私が少しも何とも思はないやうに、お前もきつとあれが食卓へ出ないといつて殘念がりはしないだらうね。クリックのお上さんからの親切な贈物は、丁度今、精神錯亂病に罹つて少しも稼いで儲けることが出來ないでゐる人の子供達に、持つて行つて遣つてはと私が言ふと、お父さんもさうすれば子供達は大へんに喜ぶだらうと仰しやるので、さういふ事にしたんですよ。」

「勿論、」と今度は、蜜糖水を探しながら、エンヂェルは快活に言つた。

「あの蜜糖水は、大さう酒精分が強いので、」と母親は續けた。「とても飮物としては適しませんよ。が、非常の場合などには、ラムやブランディのやうに貴いものですから、藥箪笥へ藏つて置きました。」

「原則として、私達は、この食卓では決して酒類を飮まないことにしてあるのでな、」と父親は附け加へた。

「だが、搾乳場のお上さんには何と言つたものでせう？」とエンヂェルは言つた。

「無論、事實を言ふのさ、」と父親は言つた。

「僕、實は、蜜糖水も黒臙腸も、みんなで大さう美味しく頂戴しましたと言ひたかつたのです。あのお上さんは、親切で、愉快な人でしてね、僕が歸つて行くと、早速訊ねるに違ひないんです。」

「實際に味つてゐないものを、さう言ふわけには行かないよ。」と老クレアははつきり答へた。

「如何にも——その通りです。だが、あの蜜糖水はちよつと乙な代物なんですがね。」

「ちよつと何だつて？」と、カスバアトとフェリックスは口を揃へて言つた。

「あゝ——それはタルボセイズの方で使つてゐる言葉ですよ。」と顔を赧らめながら、エンヂェルは答へた。人情を缺いてゐる點では間違つてゐても、實行の點では、兩親の方が正しいと彼は感じたので、それからもう何も言はなかつた。

二六

夕方の家族の禮拜が濟んでから、エンヂェルはやつと、大事な一二の問題を父親に切り出す機會を見出した。兄たちの背後の敷物の上に跪づいて、彼等の靴の踵についてゐる小釘を見ながら、その問題を一生懸命に考へてゐたのだつた。禮拜が濟むと兄たちは母親と一緒に部屋を出て行き、老クレア師と彼自身とだけが後に殘つた。

この青年は、最初に大規模な——英國でかそれとも植民地かで農夫としての境涯に入らうとする計畫を、この老人に切り出した。そこで父親は、エンヂェルを劍橋に遣る費用を負はされてゐなかつたので、他日、土地を購入するなりまたは借地するなりに要する費用に對して、毎年いくらかづゝ彼の爲めに貯蓄して置くのを自分の義務だと感じてゐた、彼一人を不當に扱つたと思はれては困るから、と話した。

「世間的な富といふ點では、」と父親は言葉をつゞけた。「お前は二三年もすれば、屹度二人の兄たちよりも遙かに上になるに相違あるまい。」

老クレア師のこの思ひ遣りに力を得て、エンヂェルはやつと、大事な一二の問題を父親に切り出す機會を見出した。兄たちの背後の敷物の上に跪づいて、彼等の靴の踵についてゐる小釘を見ながら、その問題を一生懸命に考へてゐたのだつた。禮拜が濟むと兄たちは母親と一緒に部屋を出て行き、老クレア師と彼自身とだけが後に殘つた。

この青年は、最初に大規模な——英國でかそれとも植民地かで農夫としての境涯に入らうとする計畫を、この老人に切り出した。そこで父親は、エンヂェルを劍橋に遣る費用を負はされてゐなかつたので、他日、土地を購入するなりまたは借地するなりに要する費用に對して、毎年いくらかづゝ彼の爲めに貯蓄して置くのを自分の義務だと感じてゐた、彼一人を不當に扱つたと思はれては困るから、と話した。

「世間的な富といふ點では、」と父親は言葉をつゞけた。「お前は二三年もすれば、屹度二人の兄たちよりも遙かに上になるに相違あるまい。」

老クレア師のこの思ひ遣りに力を得て、エンヂェルはやつと、大事な一二の問題を父親に切り出す機會を見出した。兄たちの背後の敷物の上に跪づいて、彼等の靴の踵についてゐる

いふのであつた。

父親はこの考へを不當な事とは思はないらしかつたので、エンヂェルは問ひかけた——

「どんな種類の妻が、節儉を主義とする勤勉な農夫の僕に一番似合ふとお父さんはお思ひですか？」

「眞の基督教徒の女だ。さういふ女こそ、戸外へ出たときも家にゐるときもお前の助けとなり、慰安となるだらう。その他のことは、實際どうでも好いことだ。そんな誂向きのものが見附からないわけでもない。現に私の眞面目な友達でありまた隣人でもあるチャント博士——」

「だが、何よりも先づ第一に牛乳を搾つたり、精良な牛酪を拵らへたり、素晴らしい乾酪を造つたりすることが出來なくてもいゝでせうか。牝鷄や七面鳥を巢に就かせたり、雛鳥を孵へさせたり、いざといふ時には、戸外に出て雇人たちを指圖したり、羊や犢の價を見積ることを知らなくてもいゝでせうか？」

「さうだ。農夫の妻にはな、さうだ、確かにさうだ。さうあつて欲しいものだ。」老クレアは、これまでこんなことを少しも考へてゐなかつた。「私は今、」と老クレアは言つた。「純潔な聖い女なら、豫てお前も多少心を動かしてゐた、お前の友達のマーシイより以上に、本當にお前の爲めにもなり、また確かにお前のお母さんの心にも私の心にも叶ふ者はまたとあるまい、と言はうとしてゐたのだ。なるほど、隣りのチャントの娘も、この頃はこの邊の若い牧師たちを見習つて、聖餐式のテーブル——或る日、その娘がこれを祭壇と呼ぶのを聞いて、吃驚したことがあつたが——を、祭の時、花やその他のもので飾り立てたりするやうになつたのは事實だ。だが、娘の父親は、そんなくだらないことには私同樣全然反對で、それは直せることだと言つてゐる。私も、それはほんの娘らしい發作で、決して永續きするものぢやないと思ふ。」

「さうです、さうです、マーシイは溫和しくつて、信心家です。それは僕も知つてゐます。だが、お父さん、チャント孃と同じやうに純潔で、貞淑な若い女で、しかも今言つた婦人の宗教上の素養の代りに、農場生活の任務を農夫自身と同樣に辨へてゐる者の方が、遙かに僕には適してゐるとお思ひになりませんか？」

彼の父は、人道に對する使徒のやうな見解に較べれば、農夫の妻としての任務を心得てゐるなぞといふことは、第二位に來るものだといふ信念を固執して動かなかつた。そ

こで性急なエンヂェルは、一方に父親の感情を尊重し、同時に胸に思つてゐる問題を進めようと思つて、尤もらしい話をするやうになつた。彼は、運命或は神意が、彼の行方に、農夫の伴侶たるべき資格を何から何まで備へ、また確かに眞面目な氣立の一人の女を投げ與へられたことを話し、彼女が父親の屬してゐる健全な低教會派の者であるかどうかは別に言はなかつたが、彼女は、恐らくその點では容易に胸を開いて信仰を受け容れるであらう、彼女は單純な信仰を有つてゐて、規則正しく教會へ出席もするし、正直で、感受性が強くて、發明で、或る程度まで淑かであり、女神のやうに純潔で、眉目形は類のないほど美しいなぞといふことを話した。

「その娘といふのは、お前が結婚しようとする程の家柄の者なの――つまり、立派な淑女なのかね？」二人の話中にこつそりこの書齋に入つて來てゐた母親は、吃驚して訊ねた。

「そりや普通に言はれてゐる淑女ではありません。」とエンヂェルは臆しないで言つた。「といふのは、僕は誇りを感じて言ひますが、その娘は百姓の娘なんです。が、それにもかゝはらず、淑女です――感情でも、性質でも。」

「マーシイ・チャントは、極く立派な家柄の者ですよ。」

「馬鹿々々しい！――それが何の役に立つんです、お母さん？」とエンヂェルは素速く言つた。「私のやうに今も將來も荒い仕事をしなきやならない者の妻に、そんな家柄がどんな役に立つでせうか？」

「マーシイはよい躾けが出來てゐるよ。躾けといふものは馬鹿にならないものだからね。」と母親は銀緣の眼鏡越しに彼を見詰めながら答へた。

「表面の躾けなんかぢ僕のして行かうとする生活にどんな役に立つでせうか？――だが、あの女の讀書なら僕が自分で導いてやることが出來ます。あなただつてあれを知ればさう言ふに違ひありませんが、あれは十分物分りのいゝ生徒に違ひありません。あれの胸には、詩がこぼれるほど一杯に充ちてゐます――それは實際化した詩です、若しこんな言ひ方が許せるなら。言葉だけの詩人がたゞ筆で書くことを、あれは實際の生活でやつてゐるんです……また確かに申し分のない基督教徒でもあります。恐らく、あなたが將に弘めようと望んでゐられる部族や種族や、民族の生れなんです。」

「おゝ、エンヂェル、お前は人を馬鹿にしてお出でだね！」

「お母さん、御免なさい。だが、あの女は實際殆んど日曜の朝には何時でも教會に行つて、立派な基督教徒の少女なんですから、吃度その點に免じて、社交上の常識の足らないところは大目に見て頂けるだらうし、また僕があの女を選ばなかつたら、却つて悪い事になるだらうと思ひます。」エンヂェルは愛するテスの、寧ろ機械的な正教主義について、ひどく熱心に述べ立てた。この信仰こそ（こんなに立派に役に立たうとは夢にも思はなかつた）彼女や他の乳搾りの女たちが、實行してゐるのを見ては、根本の自然な信仰から考へると、明かな虚僞だといふ理由で、彼はやゝもすれば輕蔑し勝ちなものだつた。

クレア夫妻は、息子が自分等には未知の女の爲めに要求した正教徒の信仰といふ名稱と對して、當の息子は、それを要求する資格が幾分でもあるだらうか、といふ暗に疑惑に包まれてはゐたものゝ、少くともその娘が、健全な考へを有つてゐるといふことは、見落すことの出來ない好都合だと感じ始めた。わけても二人の結合が、天の攝理で成り立つたものに相違ないから、さう感じ始めたのである。といふのは、エンヂェルは相手を選擇するのに、正教徒の信仰を條件にする譯がないからであつた。兩親は、最後に、早まつた眞似はしないがいゝ、彼女に會つてみることには異存はないと言つた。

それ故、エンヂェルは、今これ以上細かいことを述べ立てるのは差し控へた。自分の兩親は、直情的で己れを犧牲にする性質ではあるけれど、なほ中產階級の人々に特有な或る隱れた偏見があつて、それを征服するには多少の技巧を要すると彼は感じた。何故かと言へば、法律上では自由に彼の意志通りのことが出來るし、大方兩親からは遠く離れた土地で暮らすことになるから、我が子の妻の資格は、實際には彼等の生活に何の係りもない筈であつたが、彼は、自分の生涯の最も大事な決定をするに當つて、愛情を重んじて、彼等の感情を傷つけまいと願つたからである。

彼は、テスが生活の上に現はした意外な出來事を、恰も拔き差しのならない特色でゞもあるかのやうに尊重してゐる自分の矛盾に氣が附いた。彼がテスを愛するのは、テスその人を愛するからであつた。つまり彼女の魂を、彼女の心を、彼女の眞髓を愛するからであつて――彼女の乳搾りの技倆や、彼女の生徒としての機敏な性質や、そして又確かに彼女の單純な形式的な信仰の公言を愛するからではなかつた。彼女の人摺れのしない、野性のまゝの存在は、そ

れを彼の氣に入るものとする爲めに、何も世間並みの塗り換へなどをする必要は少しもなかつた。彼は、教育の如きは、家庭の幸福を左右してゐる情緒や衝動などにまだ殆んど影響を及ぼしてゐない、といふ考へを持つてゐた。幾時代も經つて行くうちには、段々に進んだ德育や智育の制度が、眼に見える程度に、恐らくは著しい程度に、人間の性情の自發的なまた無意識的でさへある本能を向上させることには、多分なるだらう。だが、今日までのところでは、教育の力も、彼の知る限りでは、その影響を蒙つた人々の精神の表皮だけを動かしたに過ぎないと言つて差支へない。この信念は、女に關する彼の經驗によつて愈々確かなものとなつた。彼の經驗は、近頃では教養ある中流階級から田園社會にも擴がつて行つたので、同一の社會層或は階級の善人と惡人とか、賢者と愚者とかの差異に較べると、一社會層の善良で賢明な女と、他の社會層の善良で賢明な女との間にある差異が、本質的にはどんなに少ないものであるかを、彼に教へた。

彼が出發しようとする朝のことであつた。兄たちはもう牧師館を立ち去つて、北の方に向つて徒歩旅行を續けてゐた。それから、一人は自分の大學へ、他の一人は自分の教

會へ戻ることになつてゐた。エンヂェルは、彼等と一緒に行けば行けないことはなかつたけれども、それよりはタルボセイズの戀人と一緒になる方が好ましかつた。若し一緒について行つたにしても、彼は一行のうちで氣まづい思ひをしなければならなかつたに違ひない。といふのは、彼は三人のうちで一番眼の肥えてゐる人道主義者であり、一番理想的な宗教家であり、又、一番精通してゐる基督學者でさへあつたが、本質は四角だのに、それを入れる爲めにと準備してくれたのは圓い穴で、元より適ふ筈はないといふ疎々しさが、始終意識の中に働いてゐたからである。彼は、フェリックスにもカスバアトにも、テスのことを敢へて話さうとはしなかつた。

母親は、彼にサンドウイッチを拵らへてくれた。そして父親は、牝馬に乘つて少し先まで送つて來てくれた。自分の方の要件は可なりのところまで進めて置いたから、エンヂェルは父親と木蔭の小徑を一緒にゆつくり進んで行く間、父親が宗務の面倒なことや、自分では親しみを見せてゐるのに冷淡な態度をとる仲間の牧師たち——彼等が有害なカルヴィン風の教義と信じてゐる主義に照らして、自分が『新約聖書』を嚴重に解釋するからといつて示す冷淡な態度の

ことなど說明するのを、快く默つて聞いてゐた。

「有害だと言ふのだよ！」と胸のすくやうな輕蔑の調子で老クレア師は言つた。そして、そんな考へが馬鹿げてゐることを明かにするところの經驗談を、事細かに語り始めた。彼は、たゞ貧乏人の間のみでなく、富んで裕かな暮しをしてゐる者の間の惡人達も、彼が機械となつて力を貸してやつた爲めに、不思議にも改宗したといふ話をした。と同時に彼は、僞はるところもなく、いろ〳〵な失敗をも認めてゐた。

後者の一例として、四十哩ほど先のトラントリッヂの近くに住んでゐるダアバァヴィルといふ若い成り上りの地主の場合を擧げた。

「キングスビアやその他の土地を所領してゐたダアバァヴィルといふ舊家の一人ぢやないんですか？」と息子は訊ねた。「それ、あの四頭馬車をかゝへてゐたといふ幽靈話の傳はつてゐる、あの妙な歷史附きの零落した一族の？」

「いや、違ふよ。正統のダアバァヴィル家は六十年か八十年前に衰へて、絕えてしまつたのだ——少くとも、私はさう信じてゐる。今言つたのは、新しく起つた一家で、その名前だけを使つてゐるらしいのだよ。あの昔の騎士一族の名

譽の爲めに、私はどうか彼等が贋物であつてくれゝばよいと思ふがね。が、お前から舊家といふものに興味のある口吻を聞くのは可笑しいな。お前はこの私ほどそれを重んじてゐないとばかり思つてゐた。」

「あなたは僕を誤解してゐます、お父さん、度々のことですが、」とエンヂェルは少し焦れつたさうに言つた。「政治的には、僕は彼等が舊いといふことの價値を疑ひます。彼等の間にあつてさへも聰明な者は、ハムレットがいふやうに、『己が世繼に反對』します。が、抒情詩的には、また演劇的や歷史的には、僕は彼等に懷しい愛着を感じてゐます。」

この區別は、決して微妙なものではなかつたが、それでも老クレア師には微妙すぎて、分らなかつた。そこで彼は先刻から述べようとしてゐた物語を續けた。その話といふのは、かうだつた——普通にダアバァヴィルと言つてゐる先代の致くなつた後、後繼者の青年は、盲目の母親を抱へてゐたから、餘り無鐵砲なことは出來なかつた筈だのに、最も憎むべき亂行を振舞つてゐた。たま〳〵その地方へ傳道に行つてゐると、老クレア師は青年の品行のことを聞き知つたので、大膽にも機を見て、この懶惰者に、精神上の狀態について、正面から說き聞かせようとした。彼は、他人

の說教壇を塞いでゐる外來者ではあつたが、かうするのが自分の義務と感じて、說教の題目には、路加傳の言葉を用ひた——『汝、愚なるものよ、汝の魂は今宵汝より召さるるならん！』すると例の靑年は、この眞正面の攻撃をひどく憤り、二人が面接すると激しい舌戰を闘はして、牧師の老齡白髮をも一向意とせずに、公然と老クレア師を侮辱するに躊躇しなかつたとの事であつた。

エンヂェルは、痛々しく思つて顏を赧らめた。

「ね、お父さん、」と彼は悲しさうに言つた。「そんな無賴の徒から、必要のない苦痛を受ける爲めに身をお曝しにならなければいゝと思ひますよ。」

「苦痛だつて？」と父親は、皺に刻まれたその顏を、克己の熱情に輝かせて言つた。「私にとつてたゞ一つの苦しみは、あの可哀さうな愚かな若者のことを思つての苦しみなのだよ。あの靑年の激昂した言葉が、また打たれてさへも、少しの苦痛でも私に與へるとお前は思ふのかい？『罵らるる時は祝し、窘められゝ時は忍び、譏らるゝ時は勸をなせり。我等今に至るまで、世の汚穢また萬の物の塵垢の如し。』コリント人に賜はつたこの舊い氣高い言葉は、今の場合でも飽くまで眞理だよ。」

「まさか打ちは、お父さん？　その靑年は打ちはしなかつたでせう？」

「うん、打ちはしなかつたよ。醉つ拂つて狂氣のやうになつた男から打たれて、堪へたことはあるが。」

「まさか！」

「そりやもう幾度も〳〵だ、お前。ところでどうだ？　私はさうやつて、我と我が肉と血を殺してしまふ罪から彼等を救つたのだよ。それで彼等は生きながらへて、私に感謝し、神を稱へるやうになつたのだよ。」

「お話のその靑年も、どうかさうあつてくれますとね！」とエンヂェルは熱心に言つた。「だが、あなたのお話から判斷すると、さうは行かないやうに思はれますね。」

「それでも、尙ほさうあることを願ふよ、」と老クレア師は言つた。「そして、恐らく、もうこの世であの男と再び會ふことはあるまいが、私はあの男の爲めに、永久に祈つてやるよ。が結局、あの私のつまらん言葉の一つでも、何時かはあの男の胸に、良い種のやうに芽を出さんとも限らないからな。」

何時もさうだが、今もクレアの父親は、子供のやうに信じ易くなつてゐた。そして息子は、父親の褊狹な獨斷を受容れることは出來なかつたが、その實行を尊敬し、この敬神家の底に英雄を認めないではゐられなかつた。テスを自分の妻としようとする問題が起つてゐるのに、父親は彼女が富裕であるか、それとも一文なしかを糺さうなどゝたゞの一度も思ひつかなかつたのを知つて、今彼は父親の實行を、これ迄よりも一層尊敬したのであつた。この同じ脫俗的な性質があればこそ、エンヂェルを農夫として生計を立てさせるやうに餘儀なくし、また恐らくは、彼の兄たちを、活動の出來る間でも貧しい牧師の地位に甘んじさせて置くのであらう。しかもエンヂェルは、依然としてそれを崇拜した。實際エンヂェルは、自分が異端の說を抱いてゐながら、往々、人間としては兄たちの何れよりも自分は父親に近いと感ずるのであつた。

二七

ぎら〳〵する眞晝の大氣に浸りながら、丘を上り谷へ下りして二十餘哩の遠乘りをした後、彼はその日の午後、タルボセイズから一二哩西に離れた丘に着いた。彼は其處から又しても水氣の多い濕潤な綠の盆地、ヴァール又はフルウム河の谷間を見下した。高地から下方の肥沃な沖積土層に下り始めると、すぐに周圍の空氣は重々しくなつて來た。そこを夏の果實や、靄や、乾草や、花などの恍惚させる芳香が、大きな香氣の溜池にしてしまひ、その時刻になると、動物や、蜂や、蝶にまでも睡氣を誘つてゐるやうに見えた。クレアは、今ではその土地によく馴れ親しんでゐたから、牧場に點在してゐる乳牛を長い距離を隔てゝ見てさへ、それ等の一頭々々を名指すことが出來る位ゐであつた。此處で、學生時代には全く知らなかつた態度で、人生をその內側から見る力が出來たことを知つて、彼は得意の念を禁じ得なかつた。また彼は、元より兩親を深く愛してはゐたが、歸省生活の經驗を味はつた後で、かうして此處へ歸つて見ると、副木や繃帶をかなぐり捨てゝしまつたやうに感ぜずにはゐられなかつた。といふのは、タルボセイズには土地の大地主といふものがゐないので、英吉利の田園生活ののんびりした氣分を抑へるたゞ一つのお定りの拘束さへ、この土地にはなかつたからである。

搾乳場には、戶外に人の姿も見えなかつた。人々は、夏になると非常に早起きをするので、是非とも必要とされてゐた一時間かそこらの、いつもの午睡を樂しんでゐたのであつた。門口には、木箍のはまつた乳桶が、幾度となく洗

ひ擦すられたので、水氣ばんで、白ちやけたまゝ、その爲めに特に其處に据ゑられてゐる皮を剝いだ榛枝の叉の上に恰も帽子掛の帽子のやうにかゝつてゐた。何れも皆、夕方の乳搾りに早速使へるやうに用意され、乾かしてあつた。エンヂェルは中へ入り、家のひつそりした廊下を通つて裏口の方に行き、其處で暫らくの間聽き耳を立てた。同じやうな鮒が、男達の幾人か横になつてゐる荷車小屋から聞えて來た。暑さに苦しんでゐる豚のぶう〳〵きい〳〵唸る聲が、もつと遠くの場所から起つて來た。葉の大きな大黄や、甘藍もまた眠りこけて、その廣いぐにや〳〵になつた葉の表を日光に曝したまゝ、恰もすぼめかけた傘のやうに垂れ下げてゐた。

彼は馬具を外して、馬に飼葉を與へた。そして、再び家の中へ入ると、丁度時計が三時を打つた。三時といへば、午後のクリーム搾ひの時刻だつた。クレアは、時計の打つ音と同時に、頭の上で床板の軋るのを聞き、また降りようとして、梯子段に足の觸れる音を聞いた。それはテスの足音で、次の瞬間には、もう彼女は自分の眼の前に下り立つてゐた。

彼女は、彼の入つて來るのを聞かなかつたので、其處に彼がゐようなどゝはてんで思つてゐなかつた。彼女は欠伸をしてゐるところだつた。そして彼は、蛇の口でゞもあるかのやうな眞紅なその口の内部を見た。彼女は片方の腕を、編み束ねた髪の毛の上まで達するほど高く伸ばしたので、日燒けのしてゐる部分よりも上の繻子のやうな滑らかな肌を見ることが出來た。顔は午睡の爲めに上氣し、瞼は瞳孔に重く覆ひ被さつてゐて、彼女らしい特質が溢れるほど彼女から發散してゐた。それは、まさしく女の魂が他のどんな時よりも肌身に移り映え、その最も精神的な美がいやが上にも自づと肉を暗示し、また性そのものが、外へ向つて自然と現はれる瞬間であつた。

やがて兩の眼は、まだ顔の隣り近所がすつかり覺め切らない中に、先づ膜のやうな重い隔りを通してきら〳〵と閃めいた。喜びと、恥かしさと、驚きとを一緒に搗き交ぜた妙な眼差で、彼女は叫んだ。

「あら、クレアさん！　何んて吃驚させるの、私を――私は――」

最初彼女には、彼が戀を打ち明けたのをきつかけにして二人の關係は變つてゐたといふ事に思ひ到るだけの猶豫はなかつた。が、一番下の梯子段の方へ進んで來るクレアの

優しい表情に出會ふと、テスの顔には、二人の間柄が一切呑み込めたといふ氣持が浮んで來た。

「可愛い、可愛いテッシイ！」と彼は、腕を彼女に廻し、顔を彼女の上氣した頬に押し當てゝ、囁いた。「お願ひだから、もうこれからは僕をさんづけで呼ばないでくれ、僕は君故に、大急ぎでこんなに早く歸つて來たんだよ！」

テスの感じ易い心臟は、彼のそれに動悸を傳へて、答への役を果した。そこで二人は、入口の赤煉瓦の床の上に立つた。彼がしつかりと彼女を胸に抱いてゐると、太陽は窓から斜めに射し込んで、彼の背中を、彼女の傾げてゐる顏を、額顳顬の青い靜脈を、素肌の腕を、それから襟首を、頭髪の内部までを照らした。着物を着たまゝ寢てゐたので、彼女は日向ぼつこをしてゐた猫のやうに溫かつた。最初彼女は、眞面に彼の顔を見上げようとはしなかつたが、間もなく、その兩の眼は見上げた。それで彼の眼は、時には綠に、時には黑く、時には灰色に、また時には黃色にと輝く小纖維がある爲めに、絶えず表情の變化する彼女の瞳孔の深さを測つた。その間に彼女の方では、二度目に眼を覺ましたイヴがアダムを見詰めたやうに、彼をぢつと眺めてゐた。

「私、クリーム搾ひに行かなくつちやならないの、」と彼女は言ひ出した。「私、今日はデップ婆やだけしか手傳ひがないんですの。お上さんは旦那と一緒に市場へ行つてしまつたし、レッティは加減が悪いし、他の者は何處かへ行つてゐて乳搾りの時までは、屹度歸つて來ますまいから。」

二人が牛乳庫の方へ退いた時、デボーラ・ファイアンダーが梯子段の上に現はれた。

「僕、歸つて來たよ、デボーラ、」と、クレアは上へ向つて言つた。「だから、テスのクリーム搾ひを手傳つて遣れるよ。それに、屹度お前も疲れてゐるだらうから、乳搾りの時間まで、下りて來なくつていゝよ。」

恐らくその午後、タルボセイズの牛乳は、十分には搾はれなかつたに相違ない。テスは夢心地に浸つてゐて、親しく見馴れてゐるものが、光や影や位置は具へて眼に映つたが、ちつともはつきりした輪廓がなかつた。彼女は、搾ふ用意に先づ杓子を冷さうと思つて喞筒の下へ差し出したが、その度に、手がぶる〳〵顫へた。彼の愛情の熱度が素晴らしく露はなので、餘り烈しい陽の光を受けた時の植物のやうに、彼女はその熱を受けて恐れをなしてゐるやうに思はれた。

やがて彼は、再び彼女をひしと小脇に引き寄せた。そして彼女が、クリームの隅を切り取る爲めに鉛の器の內側を人差指で掻き廻してしまふと、彼は口で嘗めてその手指を綺麗にしてやつた。何故と言へば、タルボセイズ搾乳場の自由な風習が、今の場合、都合がよかつたからである。

「何時言ふのも同じだから、今言つてしまはう、ね、」と彼は穩かに再び言ひ出した。「極く實際的な問題を君に話したいんだよ。そりや、先週牧場でのあの日からずつと僕は考へ續けて來てゐることなんだ。僕は遠からず結婚したいんだ。僕は農夫なんだから、ねえ。農場を整理することを一切心得てる女を、妻に欲しいんだよ、君はその女になつてくれないかね、テッシイ？」

彼は、自分の理性が承認しないやうな一時の衝動に負けたのだとは彼女に思はれたくないやうに、この話をして行つた。

彼女はすつかり惱ましさうな樣子に變つた。彼女は、近接する事から生ずる避けることの出來ない結果に、つまり彼をどうしても愛するやうになる結果に屈服してゐた。が、こんなに不意に續いて起つた必然の結果を、豫測してはゐなかつた。實際、クレアとてもこんなに早く話さうなぞといふ積りはなかつたが、つひ彼女に打ち明けてしまつたのであつた。骨身が崩れるかとも思はれるやうな烈しい苦しみを感じながら、彼女は立派な女となつて、その避け難い、またきつとした答への言葉を囁いた。

「あゝ、クレアさん——私、あなたの奥さんなぞにはなれませんわ——私、どうしてもなれません！」

自分できつぱりした答へをして置きながら、その語調は、テスの心臟を破裂さすやうに思はれ、彼女は悲しくなつて顏を俯向けた。

「だが、テス！」と、彼女の答へに吃驚して、一層彼女の體を貪るやうに固く抱き締めながら、彼は言つた。「君はいやと言ふ積りかね？　本當に、君は僕を愛してゐるのかね？」

「えゝ、ゐますとも！　世界中の誰のものとなるよりも、一番あなたのものになりたいんです。」苦しんでゐる娘の美しい、正直な聲はかう答へた。「でも、あなたと結婚することはどうしても出來ません！」

「テス！」と彼は、腕を差し伸べて彼女を支へながら言つた。「君は誰か他の者と婚約があるんだね！」

「いゝえ、いゝえ！」

「ぢや、どういふわけで僕を拒むの？」

「私、結婚したくはないんです！　結婚するなんてことはまだ考へたこともありません。私、とても出來ません！　たゞ私、あなたを愛してゐたいだけです。」

「だつて、何故？」

愈々問ひ詰められて、言ひ抜けをしなくてはならなくなつて、彼女は口籠つた——

「あなたのお父さまは、牧師さんでせう。そして、あなたのお母さまは、あなたが私風情の女と結婚するのをお厭がりでせう。お母さまは、あなたを淑女と結婚させたいんでせう。」

「馬鹿言つちやいけない——僕は、兩親にも話してあるんだよ、僕が故郷へ歸つたのも、一つはその爲めだつたんだ。」

「私、出來ないやうに思ひます——とても、とても！」と彼女は繰り返した。

「餘り急だつたかね、こんな風に申し込むのは、え？」

「えゝ、そんなこと思ひも寄りませんでした。」

「若し君が後のことにしてくれといふなら、ねえ、テッシイ。暫らくの猶豫をして上げるよ、」と彼は言つた。「此處へ歸つて來るなり、いきなり君に話してしまふなんて、僕も恐ろしく無茶だつた。もうこのことは、暫らく何も言ふまい。」

彼女は再びきら〳〵輝くクリーム掬ひを取り上げ、喞筒の下へ差し出して、新たに仕事にとりかゝつた。だが彼女は、いくら試つてみても、以前のやうにこの仕事に必要な巧妙な手際で、クリームのすぐ下側を打つことがどうしても出來なかつた——時には、牛乳の中へ突つ込んでしまつたり、また時には、空を切つたりした。彼女は、もう殆んどものが見えなかつた。それは、悲しみの爲めに湧いて來る二滴の涙が眼にたまつて、視線をくもらしたからである。何で悲しいのか、彼女は、これをこの一番親しい友、また懷しい相談相手にも決して打ち明けることは出來なかつた。

「掬へない——掬へない！」と彼女は彼から顏を背けながら言つた。

もうこの上彼女の心を騷がし、仕事を妨げまいとして、思ひ遣りの深いクレアは、もつとあり觸れたことを話し出した——

「君は全く僕の兩親を、誤解してるんだよ。世の中に生き

てゐる人のうちで、一番質朴で、まるつきり野心なんかない人間だよ。今ぢや僅かしか殘つてゐない福音派の中の二人なんだ。テッシイ、君は福音派ぢやないかね？」

「私、知りません。」

「君は几帳面に教會へ行くね。そして此處の牧師はあの高教會の主義はとらないと聞いてゐるが。」

毎週その説教を聽いてゐながら、テスが此處の教會の牧師の意見に就いて抱いてゐる觀念は、全然その人の話を聽いたこともないクレアの觀念よりも、寧ろぼんやりしてゐるやうであつた。

「私、あそこで聽くことを、今までよりももつとしつかり考へることが出來ればいゝと思ふの、」と彼女は、當り障りのないことを言つた。「それが出來ないんで、私大變悲しくなることが時々あるの。」

彼女はちつともわざとらしくなく話したので、エンヂェルは、たとひ彼女はその主義が高教派なのか、低教派なのか、それとも廣教派なのか知らなくつても、宗教上の立場から、父親が彼女に反對することは出來ないだらうと、心の中で確信した位ゐであつた。彼自身では、實際には彼女が抱いてゐる、明らかに子供の時分に吹き込まれたと見える、まとまりのない信仰が、どつちかといへば、語法の分類からいへば、トラクタリアン派（十九世紀の初め、オックスフォードに起つた宗教運動。英國教會の一派）であり、また、本質からいへば、汎神論的であることを知つた。まとまりのないものであらうとなからうと、それを亂さうなぞとは、彼の思つても見ないことであつたのだ——

汝、その妹をそのまゝに置け、妹が
祈るとき、
その幼心に描く天國を、その樂しい
夢を
また汝、それとなく諷刺などして亂
すなかれ
おだやかなる日を送る生活をば。

彼はしばしばこの忠言を、音樂的である割合ひに、餘り正直でないやうに思つて來た。だが、今彼は喜んでこれに從つた。

彼は尚ほ今度の訪問中の出來事とか父親の生活振りとか自分の主義に對する彼の熱意などに就いて話した。彼女は

だん〳〵落着いて來て、クリーム掬ひからはその顫へも消え去つた。彼女が次々に一つづゝ鉛の器を濟まして行くと、彼はその後から、ミルクを吐かす爲めに栓を拔いて歩いた。

「私、入つていらつしやつた時に、あなたは少し鬱いでるやうに思ひました。」自分に關する話題から遠ざかつてゐたいので、彼女は思ひ切つて、こんなことを言つた。

「さうだらう——實はね、父からいろ〳〵父の身にからまる心配事や、厄介事をうんと聞かされてね、こいつは、何時も僕を惱ます問題なんだ。父は非常な熱心家だから、自分と考へ方を異にしてゐる人達からは、いろ〳〵とひどい扱らひや鐵拳を受けるんだよ。で僕は、あんな老人がそんな屈辱を受ける話は聞きたくないでね。とりわけ、眞面目もそこまで行つたんぢや、ちつとも爲めにならないと思ふと尚更なんだよ。ついこの頃父が關係した、極めて不愉快な場面のことを僕に話したんだがね。或る傳道團體の代理になつて、此處から四十哩ばかり離れた處で、トラントリッヂの近くへ説教に行き、何處かその邊で、放埒な若い破廉恥漢に出會つたんで、職務上忠告したんださうだよ——何でもその邊のさる地主の息子だつて話だが盲目のお袋がある

つていふ事だ。僕の父は、その紳士に眞正面からぶつかつて行つたんで、ちよつと騒動が持ち上つたんだよ。實際父は、無益だつてことが分りきつてゐるのに、見ず知らずの者に押しつけがましく忠告するなんて、下らん事をしたもんだと僕は思ふんだ。だけど父はね、自分の義務と思ひ込んだものは、たとひ何であらうと、時宜に適してゐようがゐまいが、屹度するんだよ。で、ほんとの惡人といふ連中の間にばかりぢやなく、煩さい思ひをさせられるのが嫌ひな、のんきで氣樂な連中の間にまで大勢敵を作るんだからね。さういふ辱めを受けて置きながら、きまつて父は光榮だと言ふんだよ。また、それが間接には何かの爲めになるだらうとも言つてるんだ。が、僕はだん〳〵老衰して行く父に、そんなことをして體を擦り減らして貰ひたくはない。そんな豚共は、好き勝手にごろつかせて置きやいゝと思つてるんだ。」

テスの表情は、だん〳〵堅くなり、生氣がなくなつて來て、赤いふつくらした口も、痛々しげに見えた。だが、彼女はもう少しも顫へを見せなかつた。父親のことが、再び自分の心に戻つて來たので、クレアは、テスに格別注目してはゐなかつた。かうして二人は、液體の入つた幾つもの

長方形の桶の眞白い列に、それからそれへと移つて行き、やがてすつかり終り、窓けてしまつた。丁度その時、他の乳搾り女達が歸つて來て乳桶を取り上げた。そしてデップは、新しい牛乳が詰められるやうに、鉛の鑵を湯で洗ふ爲めにやつて來た。テスが乳牛のゐる牧場へと立ち去る時、彼は優しく言つた——

「それで、僕のことは、テッシイ？」

「あら、駄目です——駄目です！」アレク・ダアバアヴィルのことが話されてゐるうちに、自分の過去のいざこざを新たに聞いたので、彼女は悲しい絶望に襲はれてかう答へた。「私、とても出來ませんわ！」

彼女は他の乳搾り女達に加はつて、自分の悲しい氣づまりを外氣で拂ひ除けようとでもするやうに、牧場の方へ急いで出て行つた。娘達の一團は、野獸のやうな大膽な樣子でひたすら——無限の空間に慣れ切つてゐる女の、向う見ずな、自由な動作——波に漂ふ水泳者のやうに、大氣の中に身を任せたといふ態度で——ずつと遠い牧場で乳牛が草を食つてゐる處へとだん〳〵近付いて行つた。今テスが再び現はれて、『人工』の殿堂からではなく、自由無礙な『大自然』から仲間を選ぶのは、彼から見るといかにも自然な事のやうに思はれた。

二八

彼女から斷られようとは夢にも思つてゐなかつたものの、その爲めにクレアは、いつまでも弱つてはゐなかつた。女に對する彼の經驗は、往々拒絶も承諾の前提に過ぎない場合があるといふことに氣付く程度には廣かつた。が、狹いといへば可なり狹いもので、今度の拒絶の仕振りには、羞恥の爲めの躊躇とは大へん違つたものがあることを見分けることが出來ない位ゐであつた。彼女が既に彼から言ひ寄られるまゝになつてゐたといふ事をその確實さに力を添へるものと彼は解釋してゐた。しかも田畑や牧場では、『無報酬で戀の役をつとめる』（シエークスピアの「ハムレット」中にある句）ことも決して無駄と考へられてはゐない、何故かといへば、此處では、言ひ寄ると、野心家達の娘が身を固めたいとばかり願つてゐるので、その爲め情熱だけを目的とする健全な考へが癒着してゐる、いやに世間體を氣にして暮す土地でよりも、一層屢々出鱈目にまた言ひ寄られるだけの甘い歡樂の爲めに、色よい返事にありつくからである——といふことを十分知らなかつた。

「テス、何故君は、あんなにはつきり『いゝえ』と言つたんだね？」と彼は二三日經つてから彼女に訊ねた。

彼女はぎよつとした。

「聞かないで下さいね。何故だかは、私あなたに言ひましたわ——幾らか。私ははいといへる程よい女ではないんです——その資格のない者なんです。」

「どうして？　立派な淑女ではないといふのかね？」

「えゝ——まあそんなことです、」と彼女は囁いた。「あなたのお家の方々は、私を輕蔑なさるでせうよ。」

「實に、君はあの人達を誤解してゐるよ——僕の父や母を。兄たちなんか、どうでも構はないんだ——」彼は滑り拔けられないやうに、彼女の背中で指を握り合はせた。「ねえ——心ぢやさういふつもりぢやないんだらう、ねえ？——屹度さういふつもりぢやないと思ふんだ！　君がすつかり不安にさせてしまつたんで、僕は本を讀むことも遊ぶことも、何をすることも出來やしない。僕はちつとも急いぢやゐないがね、テス、たゞ知りたいんだ——君のその黙い唇から聞きたいんだ——君が何時か僕のものになつてくれるつていふことをね——何時でも君の好きな時でいゝんだ。が、何時かはなつてくれるかね？」

彼女はたゞ頭を振り、彼から眼を背けることしか出來なかつた。

クレアは彼女をぢつと見詰め、顏の表情を、恰もそれが象形文字でゞもあるかのやうによく吟味した。拒絶は本當らしく思はれた。

「ぢや、僕はかうして君を抱いてなんぞゐちやいけないんだ——ね、さうだらう？　僕は君に對して、何の權利も有つてはゐないんだ——君のゐる處を探し歩いたり、君と一緒に歩いたりする權利は少しもないんだ！　正直に言つてくれ、テス、君は誰か他の男を愛してゐるのかね？」

「どうしてそんな事がお聞きになれますの？」と彼女は何處までも自分を抑へて、言つた。

「君にそんなことがないつてことは、僕もほゞ承知してゐる。だが、それでは、何故君は僕を拒絶するんだね？」

「私あなたを拒絶はしませんわ。私は、あなたに仰しやつて下すつて、いゝんですわ——決して、私の氣に障るやうなことはないんですの。」

「だが、僕を夫とすることは、とても出來ないつていふん

だね？」

「えゝ——それは別のことです——それもあなたの爲めを思ふからですわ、本當にあなた！　あゝ、私の言ふことを信じて下さい、たゞあなたのお爲めを思ふからなんです！私はそんな風にして、あなたのものになる約束を結んで、自分に大きい滿足を與へたくはないんですの——何故つて——何故つて、私そんなことは出來ないんですもの。」

「でも、君は僕を幸福にすることだらう！」

「あゝ——ほんとに、さうお思ひでせう、でもあなたは知らないんですわ！」

今のやうな時には、彼女の拒絶の根據が、社交上のことも禮儀のことも少しも辨へないからといふ愼ましい彼女の心づかひからであると思ひ込んで、彼は何時でも、君は驚くほどいろ〳〵の事を知つてゐる、多藝多能の女だ、と始終口癖のやうに言つた——それは、確かに間違つてはゐなかつた。彼女は、生來の敏感さと彼に對する崇拜とから、彼の用語を、彼の語調を、また彼の知識の斷片を、驚くべき程度に聞き覺えたからである。かうした優しい論爭と自分の勝利の後では、彼女は何時でも一人で、若し乳搾りの刻限ならば一番遠くにゐる乳牛の下へ、若しまた暇な休みの時間ならば菅の叢の中へ、又は自分の部屋へ入つて行つて、表面では冷靜な拒絶をして置きながら一分と經たないのに、默つて悲嘆の涙に暮れるのであつた。

內心の鬪爭は非常に激しかつた、そして彼女の心は、どこまでも強く彼の心の方に傾いてゐた——二つの燃える心が一つの哀れな小さい良心に對抗してゐるやうに——ので彼女は、力の及ぶ限りいろ〳〵な手段を用ひて、自分の決心を護らうとした。彼女は固い決心をして、タルボセイズに來たのであつた。何も知らずに自分と結婚した爲めに後日その夫たる人に辛い悔恨をさせるやうな踏み出しには、どんなことがあつても、彼女は同意する譯に行かなかつた。自分の心が公平で又良心がかうと決定したものは、今でも破棄してはいけない、といふ考へを彼女は抱いてゐた。

「何故誰かゞ、私の事情を一切あの人に話してくれないのかしら？」と、彼女は言つた。「たつた四十哩しか離れてゐないのに——どうして此處まであの噂が屆かないんだらう？　誰かしら知つてゐるに違ひないのに！」

が、誰も知つてゐる者はないやうだつた。また誰一人、彼に語り聞かせる者もなかつた。

二三日の間は、それ以上何も言はれなかつた。彼女は、

部屋仲間の者たちが自分がたゞのお氣に入りといふだけでなく、選ばれた女と見做してゐるのをその顏色から推察した。けれども、自分が彼の望むまゝになつてゐないといふ事も、自づと彼女たちにも知れないではゐなかつた。

テスは、自分の生命の綱が、明らかな快樂と明かな苦痛といふ二つの股でこれほどはつきりと綯ひ合はされてゐた時を、今まで決して知らなかつた。次の乾酪造りの時、彼女とクレアはまた二人きりになつた。主人も手傳つてはゐたが、その妻と同じやうに、この頃になつて二人の關係を嗅ぎつけたらしかつた。尤も二人は、非常に周圍に氣を配つて歩いてゐたので、その疑ひもほんの微かなものに過ぎなかつたことは言ふまでもない。が、兎に角、主人は彼等を二人きりにさせた。

彼等は後になつて、桶へ入れるやうに、先づ凝乳の塊りを碎いてゐた。この仕事は、大仕掛けにパンを碎くやうなものであつた。そして一點汚れのない純白な凝乳の中で、テス・ダアビフィールドの兩手は自然薔薇の淡紅色に輝いた。エンヂェルは一摑みづゝ桶の中へ入れてゐたが、急にそれを止めて兩手を彼女の兩手の上へ平らに載せた。彼女の袖は、肱のずつと上までまくし上げてあつたので、彼は低く屈んで彼女の柔かい腕の內側の靜脈へ接吻した。

九月初旬の天候は蒸し暑かつたけれども、彼女の腕は凝乳の中に浸つてゐたので、彼の口には丁度採り立ての葦のやうに冷たく濕りつぽく感ぜられ、そして乳精の味がした。だが彼女は、まるで敏感な神經の束のやうなものだつたから、觸られると急に脈動は昂まり、血液は指の先までも傳はつて、冷たかつた腕もほてつて來た。それから、『これ以上に躊躇する必要があるか？　男と男の間と同じやうに、男と女の間であつてもまた、眞實は眞實だ』とその心臟が言ひでもしたかのやうに、彼女は眼を上げた。その眼差は優しく、半ば笑つて唇を動かしたとき、一心に彼の眼に注がれた。

「何故僕があんなことをしたか分るかね、テス？」と彼は言つた。

「私を大へん愛して下さるからでせう！」

「さうだよ、それから新しい賴みの前置きとしてだよ！」

「もうこれつきり言はないで下さい！」

彼女は、抵抗力が自分の僞らぬ欲求に打ち潰されてしまひはしないかと、急に氣づかふやうに見えた。

「おゝ、テッシイ！」彼は續けた。「君が、何故さう氣を揉

ますのか、僕にはさつぱり分らない。何故僕をさう失望させるのだね？　君はまるで媚女のやうだ。確かにさう見える——町でも一流どころの媚女のやうだ！　あいつ等は、丁度君がするやうに氣紛れで、風向きが分らないんだ。しかも、タルボセイズのやうな僻地でそれを見ようとは、思ひがけないことだ……だが、ねえ、」と、今の言葉がどんなに彼女の心を傷つけたかを知つて、彼は急いで附け加へた。「僕は、君が、およそこの世で最も正直な、一點も疵のない女だつていふことを知つてゐるよ。だから、僕がどうして君を浮氣女だなんて思ふことが出來よう？　テス、見たところ、君は僕を愛してるらしいんだが、それが本當なら、何故僕の妻になるつていふ考へを厭がるのかね？」

「私はその考へが厭だなんて言つた覺えは、一度もありませんし、またそんなこと言へつたつて言へませんわ、何故つて——そりや本心ぢやありませんもの！」

今はもうとても堪へられなくなつて、彼女の脣は戰いた。そして、彼女は逃げ出さずにはゐられなくなつた。クレアはひどく苦しみ、困惑してしまひ、彼女を追つかけて廊下で捉へた。

「言つてくれ、言つてくれ！」彼は自分の手が凝乳だらけになつてゐるのも忘れて、興奮し、彼女を抱きかゝへながら言つた——「是非言つてくれ、君は僕以外の誰のものにもならないつてことを！」

「言ひます、私言つてしまひます！」と彼女は叫んだ。「そして御得心のいくお答へを致します、若し今離して下さるなら。私の經驗をお話しします——自分のことを何も彼も——一切のことを！」

「君の經驗を。よし、承知した。どれほどでも。」彼は彼女の顏を覗き込みながら、氣持のいゝ皮肉を言つて承諾した。「僕のテスは、屹度、あそこの庭の生垣に、今朝初めて咲いた晝顏と殆んど同じ位る澤山の經驗を有つてゐることだらうね、何でもお話し、が、僕に相應しくないなんて、馬鹿氣た言ひ方はもうよして貰ひたいね。」

「えゝ、心掛けますわ——しないように！　それから私の理由をお話しゝませう、明日——來週。」

「ぢやどうだらう、日曜頃では？」

「えゝ、日曜に。」

到頭、彼女はその場を立ち去つた。そして、全く誰からも見られない屋敷のうちの、わけても低い側にある梢の刈り込まれた柳の茂みの中へ退いてしまふまで、一度も立ち止らなかつた。此處でテスは、恰も寢床の上でもあるやうにかさ〳〵鳴る蘆の下生の上に體を投げ出し、烈しい苦悶を續けて、何時までも蹲まつてゐた。がその苦悶は、どういふ結果になるかを氣遣ふ心配すら、全然靜めることの出來ない時々に湧いて來る歡喜の爲めに、亂されるのであつた。

實際、彼女は默諾の方へ卷き込まれて行つた。彼女の呼吸の一吐一吸は、血液の一波一動は、耳の中で止つてゐる鼓動といふ鼓動は、本能と一緒になつて、彼女が狐疑逡巡してゐるのに向つて放つ反抗の聲であつた。向う見ずに、考へなしに彼の申し出を受け容れてしまひ、何んにも打ち明けず、分つたらそれまでといふ事にして、祭壇の前で彼と手を繋いでしまひ、苦痛といふ鐵の齒が閉ぢて、入れなくならないうちに爛熟した快樂を貪り取れ——それが戀の教へるところだつた。そして殆んど恐ろしいまでの歡喜に浸つて、テスは、こんな風に悟つた。幾月も幾月も、淋しく自己を責めたり、將來は嚴肅に孤獨を守つて行かうと努力したり、思案したり、又計畫したりしたとて、結局戀の教へるところが勝利を得ることだらう、と。

午後の時間は、どん〳〵經つて行つたが、彼女はまだ柳の茂みの中に止まつてゐた。彼女は叉のついてゐる掛臺から、乳桶をがら〳〵と取り下ろす音や、乳牛を集める時に起る『うおゝ——うおゝ』といふ聲を聞いたが、彼女は乳搾りに出ては行かなかつた。皆は自分のそわ〳〵してゐる姿を見るに違ひないだらうし、主人は又、その原因がたゞ單に戀の爲めだと合點して、好人物らしく自分にからかふであらう。そしたら、自分はその當惑に堪へきれないであらう。

彼女の愛人は、彼女の昂奮し過ぎた狀態をそれと察して、姿を現はさないことに對し、何とか口實を設けてくれたに相違なかつた。何故かといへば、別に彼女は尋ねられもしなかつたし、また呼ばれもしなかつたから。六時半になると太陽は空に据ゑられた大きな熔鐵爐のやうな趣きを呈して、地平線に沈んで行つた。そして程なく、一方には、奇怪な、南瓜のやうな月が登つた。始終刈り込みをされて、自然の形態をすつかり歪められてゐる梢を刈られた柳は、その月にくつきり浮き上ると、針の頭髮をした怪物と化した。彼女は屋内に入つて、燈火なしで二階へ上つた。

それが丁度水曜日であつた。木曜日となつた。そしてエンヂェルは、遠くから彼女を考へ深く眺めてゐたが、決して

押しかけては來なかつた。マリアンを始め、他の仕込みの乳搾り女たちは、何かしらはつきりした話が始まつてゐると推察してゐるらしかつた。といふのは、寢室でも彼女たちは、彼女に強ひて何の話も仕掛けなかつたから。金曜日は過ぎ、土曜日が來た。明日は約束の日であつた。

「私は負けてしまふかも知れない――『はい』と言つてしまふかも知れない――あの人と結婚してしまふかも知れない――私の力では、それをどうすることも出來ない！」その夜彼女は上氣した顏を枕に押しつけ、他の女たちの一人が、眠つてゐながら吐息の中に彼の名を呼ぶのを聞いて、嫉妬を感じながら喘いだ。「私以外の誰かにあの人をやるなんて、そんなこと私には我慢が出來ない！　でも、これはあの人を誤まることだ。そして、あの人があのことを知つたら、悶え死になさるかも知れない！　あゝどうしよう、この胸――あゝ――あゝ！」

二九

「ところで、今朝わしは誰の噂を聞いたと皆は思ふかな？」搾乳場主のクリックは、翌日朝飯の席についたとき、むしやむしや食つてゐる男たちや娘たちを、謎を掛けるやうな眼付で見廻しながら、言つた。「さあ、ちよつと誰のことだと思ふかな？」

一人が當てゝ見た。それから次の者が當てゝ見た。クリックの妻君は當てゝ見なかつた。といふ譯は、彼女はとつくに知つてゐたからである。

「實はね、」と主人は言つた。「あのだらしねえ父なし子のジャック・ドロップのことなんだ。彼奴め、この頃或る寡婦と一緒になつたんだ。」

「まさかジャック・ドロップがね？　ひどい奴ねえ――まあ考へて見ると！」と乳搾り女の一人が言つた。

この名前は、すぐテス・ダアビフィールドの意識の中へ入つて來た。それは、自分の情婦を裏切つて、後になつてその若い女の母親に、攪乳器の中で手酷い目に會はされた男の名前だつたからである。

「それで、男は約束通り、あの元氣な母親の娘と結婚したんですか？」エンヂェル・クレアは、身分が立派だからといふ意味で、クリックの妻君の爲めに何時でも追放されて行つてゐる小さいテーブルに靠れて、今まで讀んでゐた新聞紙をめくりながら、何の氣なしに訊ねた。

「ところがさうぢやないんでさあ。彼奴はそんな氣なんかちつともなかつたんで、」と主人は答へた。「今言ひますが、相手は寡婦さんなんですよ。女には金がありましてね、何でも――年に五十磅かそこいらの收入らしいです。で、彼奴の狙つたのは、それだけなんでさあ。二人は大急ぎで結婚しちやつたもんです。それから女は、結婚した爲めに年に五十磅の收入がなくなつたつてことを、彼奴に話したんでさあ。これを聞いた時の、彼奴の心ん中を、まあちつと考へて見て下せえ！　それからといふものア、彼奴達がやつてきた犬と猿の寄り集まりみてえな暮し方ア、何處にありませう！　彼奴アいゝ氣味でさあ。だが、可哀さうに、困つたなアその女で、貧乏籤抽いたちふ譯でさあ。」

「本當に、その女は馬鹿だよ。死んだ亭主の幽靈が祟るかも知れないつて、もつと早く言つて置けばいゝものをねえ、」とクリックの妻君は言つた。

「うん、うん、」主人は何方つかずに答へた。「それにしても、その前後の事ア見え透いてゐらあな。その女は世帶が持ちたかつたんだよ。だから、まかり間違つて彼奴に逃げられちや大變と思つたんだ。まあ、そんなやうにや思はねえかな、おい女たち？」

彼は、娘たちの並んでゐるところを見渡した。

「二人が式を擧げに教會へ行くちよつと前に、つまり相手がどうしても身が退けなくなつた時に、打ち明けて置けばよかつたんだに、」とマリアンが叫んだ。

「さうよ、さうすればよかつたんだわ、」とイズが合槌を打つた。

「相手の下心を見拔いてゐたに違ひないわ。だから、斷るのが本當だつたんです、」とレッティが急に力味返つて言つた。

「それからお前はどう思ふかな？」と主人はテスに意見を求めた。

「私、その女は――相手に本當の事情を打ち明けてしまふか――でなかつたら、斷るのが本當だと思ひますわ――私には分りませんが、」牛酪つきのパンを咽喉につかへさせたまゝ、テスは答へた。

「それを何方でもする位ゐなら、死んでしまつたがいゝだよ、」百姓家の一軒から來てゐる亭主持ちの手傳人ベック・ニップスが言つた。「戀と戰爭には何をしたつていゝんだ。私なら、その女の通りに結婚するよ。そして、自分で話したくない前の亭主のことを何んによらず前以つて言はなかつたからつて、相手がとやかく言はうものなら、麵棒で打

つたゝいて遣りますよ――あんなひよろ〳〵の小男なんぞ！　どんな女だつて、その位ゐのことは出來ますよ。」

この冗談に續いて笑聲が起つたが、テスはほんの申し譯の爲めの悲しい微笑をそれに補つたゞけであつた。皆には喜劇に思はれるものも、彼女には悲劇であつた。そして皆の暢氣なのが、堪へられなかつた。彼女は間もなく食卓から起ち上り、自分の後にクレアも從いて來るだらうと思ひながら、曲りくねつた小徑を、或は灌漑用の溝の片側へ、或は他の側へと歩を運んで行つて、やがてヴェール河の本流の側に突つ立つた。男たちが、ずつと上流の方で水草を刈つてゐた。そしてその塊――その上に乘れば殆んど乘れたかも知れないやうな綠の毛莨の浮島が、彼女の傍を漂ひ流れて行つた。草の長い房は、乳牛の逃るのを防ぐ爲めに打ち込んである杭に引つかゝつた。

さうだ、そこにその苦痛があるのだ。一人の女が身の上話をするといふこの問題――その女自身には最も重い十字架である――が。他の人達には單に慰みとしか思はれないのだ。それは恰も、人々が殉教者の行ひを見て噺り笑ふかのやうであつた。

「テッシイ！」といふ聲が、彼女の背後から聞えて來た。

そしてクレアが溝を跳び越え、彼女の足下へ下り立つた。

「私の妻――直ぐにね？」

「いえ、いえ。私、出來ませんわ。あなたの爲めに。あゝ、クレアさん。あなたの爲めに、私はいゝえと言ひます。」

「テス！」

「私、矢つ張りいゝえと言ひます！」と彼女は繰り返した。

彼はこんな答へを豫期してはゐなかつたから、聲をかけたすぐその後で、彼女の垂れ下つてゐる頭髮の眞下と思はれる腰に輕く腕を廻してゐたのだつた。（若い乳搾り女たちは、テスもその一人であるが、日曜日の朝には教會へ行くことゝて髮を特に高く結び上げる前に一旦それを解くのである。そしてそのまゝ朝飯を食べるのだつた。その結び方は、頭を乳牛に押しつけて、乳搾りをするには不向きだつた。）若し彼女が『いゝえ』の代りに『はい』と言つたら、彼は必ずテスに接吻したに相違なかつた。言ふまでもなく、彼はさうする心算だつた。が、彼女の斷乎とした拒絶は、控へ目がちな彼の心を引き止めた。同じ家に住んで、親しくしてゐるといふ境遇の爲めに、厭な時にも面を會はさなければならないので、彼女は女として非常に不利益な立場に立たされてゐた。從つて彼は、假に彼女が自分からもつ

と離れてゐて、自分を避けることが出來るものとしたら、堂々と用ひたかも知れない甘言をこの場合弄するのは、彼女の弱味につけ込むやうなものだと感じた位ゐであつた。彼は一時捉へてゐた彼女の腰を放し、接吻するのを差し控へない譯には行かなかつた。

『いえ』『はい』は、全くこの手を放すか放さないで決るのであつた。今何が彼の申し出を斷る力を彼女に與へたかといへば、たゞ主人が語つたあの寡婦の話だけであつた。そしてその力は、ことによると、次の瞬間には抑へつけられてしまつたかも知れない。が、エンヂェルはもう何も言はなかつた。彼は、顏に困惑の色を浮べて、その場を立ち去つてしまつた。

日毎に二人は顏を合せた――以前よりは幾分度數が少なくなつたが。かうして、二三週間は經つてしまつた。九月も末になると、彼女は相手の眼の中に、また言ひ寄つて來るらしい氣勢を知ることが出來た。

今度の申し出の手順は、前のとは變つてゐた――恰も彼女の拒絶は、結局たゞその申出の奇拔なのに面喰つてゐる若さと羞恥の結果に過ぎないと、彼は心に決めてしまつたやうであつた。その問題が話頭にのぼつてゐる時に見せる

相手の一時逃れの言ひ拔け振りは、この考へを尤もと思はせた。そこで彼は、もつと女の心を咬るやうな方法を用ひ、決して言葉以上に進んだ振舞ひはすることなく、つまり抱擁などを繰り返さうとはせずに、出來るだけ言葉の上で骨折つた。

かうしてクレアは執拗に、しゆう〳〵音を立てゝ迸り出る牛乳のやうに低い調子で彼女を口說いた――時には乳牛の横腹で、時にはクリーム掬ひの折に、又時には乾酪造りの場合や雛を孵してゐる家禽の間で、又は仔を生む豚の間で――どんな乳搾り女とても、これほどまでに男に口說かれた例はなかつたやうに。

テスは自分が負けてしまふに相違ないと知つた。以前のアレクとの關係には道德的な力があるといふ宗教的の考へも、正直になりたいといふ良心の願ひも、これから先長くその申し出に對抗しつゞけて行くことは出來なかつた。彼女は熱烈に彼を愛してゐた。彼女の眼には、彼が神のやうに映つてゐた。そして、立派な教育は受けてゐなかつたものゝ、生れつき優雅な美しさを具へてゐた彼女の性質は、彼の保護者的な指導を切に求めてゐた。かうしてテスは、『私はあの方の妻にはどうしたつてなれない、』と獨言を繰

り返してゐたけれども、その言葉は無駄であつた。彼女の氣の弱い證據は、力なぞ入れないで、靜かに言へる事柄を述べるその口裏に現はれてゐた。古くからの問題を言ひ出す彼の聲の一々の響きまでが、恐ろしい幸福感をもつて彼女を動かした。そして彼女は、自分の怖れてゐる言ひ直しを、却つてしきりに望んだ。

彼の態度は——男として誰がさうならずにゐよう？——まさしくどんな狀態、どんな變化、どんな攻撃、又はどんな現實暴露の下にあつても、彼女を愛し、慈しみ、護らずにはゐない人の態度であつたから、それに接してゐる時は、彼女の憂ひも輕くなる程であつた。やがて季節は秋の彼岸に近づかうとしてゐた。そして、まだ天氣はよかつたが、日脚は一頃よりはずつと短かくなつて來た。搾乳場では、又しても朝の長い間を蠟燭の灯で仕事が行はれた。或る朝のこと、三時から四時の間に、クレアの口說がまた新たに始まつた。

彼女は寢衣のまゝで平常のやうに彼を呼び起す爲めにその扉口へ駈け上つて行つた。それから着物を着更へ、他の者を呼び起さうと思つて、自分の部屋へ歸つて來て、十分經つか經たないうちに又蠟燭を片手に持つて梯子段の上り口の方へ歩いてゐた。丁度それと同じ時に、彼は襯衣姿で上から下りて來た。そして腕を擴げ、梯子段を通させまいとした。

「さあ、浮氣屋さん、下へ行く前に、」と彼は横柄に言つた。「僕が言ひ出してからもう二週間だよ。この儘ぢやどうにも仕樣がない。君は眞底を是非とも打ち明けなくちやいけないよ。でなかつたら、僕はこの家を出て行かなくちやなるまい。たつた今、僕の部屋の扉が隙いてゐたので、君の姿を見たんだ。君のその體の安全の爲めに、僕は出て行かなきやならない。君には分らないんだ。ねえ？　もう』ほい』と言つてくれるかね？」

「私今起きたばかりですわ、クレアさん、だから私を虐めるのは、まだ早過ぎますよ！」彼女は口を尖らした。「私を浮氣屋なんていはなくてもいゝでせう。それは殘酷です、當つてゐません。もう少し待つて下さい。お願ひですからもう少し待つて下さい！　これから合間々々に、そのことを本當に眞面目に考へてみます。階下へ行かして下さい！」

彼女が蠟燭を横側に支へながら、眞面目さうに言つた言葉を笑顏で打ち消さうとした時には、彼女は、いくらか、

今彼が言つた浮氣な人間の樣子を見せた。

「ぢや、僕をエンヂェルと呼びなさい。そしてクレアさんなんて言はないことだ。」

「エンヂェル。」

「いとしいエンヂェル——つて言つたつて、いゝぢやないかね？」

「さう言へば私が承知することになるんでせう。さうぢやあ　ませんか？」

「君が僕を愛してゐることにはなるよ。よしんば僕と結婚しないにしてもだ。が、それなら、君がずつと以前に、もう立派に認めてゐたぢやないか。」

「ぢや、ようございますわ、『いとしいエンヂェル』、どうしても言はなきやならないんなら、」と、彼女は蠟燭を見詰めながら小聲で言つた。そして不安に戰きながらも、その口元には心憎いばかりの微笑を漂はした。

クレアは、婚約の言葉を得るまでは決して彼女に接吻しまいと決心してゐたのであつたが、テスがクリーム搦ひや乳搾りが濟んで、結ひ上げる餘暇の出來るまでは髮を無雜作に頭の上に束ねたまゝで、乳搾りの上衣を可愛らしくまくし上げて其處に立つてゐると、どうしたわけか、彼はその決心を破つて、ほんのちよつと彼女の頰へ脣を持つて行つた。彼女は振り返つて彼の方を見もせずに、またその上一言も口をきかないで、大急ぎに梯子を下りて行つた。他の娘たちは、もう下りてゐた。そしてその問題は、沙汰止みとなつた。戸外の夜明けを知らず最初の冷たい合圖の光とは全く違つた、朝の蠟燭が發散する薄ら淋しい黃色い光に包まれて、マリアンを除いた他の皆は、考へ深さうに、また疑はし氣に二人を眺めた。

クリーム搦ひが濟んだ時——この仕事は、秋の近づくと共に牛乳の出かたが減るに連れて日毎に減じて行くのだつた——レッティや他の者たちは、戸外へ出て行つた。二人の繼人も、彼等の後に從つた。

「僕たちの生き〳〵した生活は、あの女たちのとは大變な相違だね、さうぢやないかね？」明け方の冷たい蒼白い光の中を自分の前に立つて小刻みに歩いて行く三つの姿を見詰めながら、彼は感慨深さうに、彼女に言つた。

「私、何もそんなに違つてゐるとは思ひませんわ、」と彼女は言つた。

「何故さう思ふんだね？」

「殆んどない位ゐですわ——生き〳〵してゐない女の生活

なんていふものは。」テスは恰も、その新しい言葉に心を動かされでもしたやうに、ぢつと思ひめぐらしながら、言つた。「あの三人には、あなたが考へてゐるよりは、もつといろんなものがあるんです。」

「あの女たちの中に何があるのかね？」

「三人が殆んど三人とも、」と彼女は言ひ出した。「私よりはいゝ奥さんになることが出來——大方、出來——るでせう。そして多分、あの方たちは、私に負けない位ゐ——あなたを愛してゐます。」

「あゝ、テ、シイ！」

彼女は寛大な氣持になつて、他人に愛を讓らうと隨分思ひきつて決心はしてゐたものゝ、彼の覺えず發したその叫び聲を聞くと、すつかり安心したやうな樣子を見せた。今彼女はその決心を遂げたのであつた。そして二度と自分を犧牲にしようといふ勇氣はなかつた。二人の中へ百姓家の一軒から來た乳搾りの一人が加はつたので、兩人の極く深く立ち入つたことはもう何も言はなかつた。が、テスは、今日こそこの問題がどつちかに決るであらうといふことを知つてゐた。

その午後、主人の家族や手傳人の中の人が、平常の通り搾乳場からずつと距つた牧場の方へ下りて行つた。そこでは多くの乳牛が、別に家へ追ひ込められずに搾られるのであつた。が、犢が增えるに連れて、乳牛の出す乳の量は次第に減つて行つた。そして、水氣に富んだ繁茂季節に雇はれ、今は餘計者となつた乳搾り女たちには、お暇が出た。

仕事はゆつくり進行した。一杯になつた一つ〳〵の乳桶は、その場に引いて來てあつた大きな彈條附の荷馬車に載つてゐる丈の高い鑵の中へ注ぎ込まれた。また乳牛は乳を搾られてしまふと、のそ〳〵と歸つて行つた。

鉛色の夕空に、胸掛けを白くくつきりと不思議に光らせたまゝ、他の者と一緒に其處へ來てゐた搾乳場主のクリックは、突然、彼の重い懷中時計を見た。

「おや〳〵、こりや、思つたより遲いわい、」と、彼は言つた。「冗談ぢやねえ、ぼや〳〵してゐると、この牛乳は汽車に間に合はんかも知れねえぜ。今日は、こいつを送り出す前に家へ持つて行つて、どつさりある奴と混ぜてゐる時間がないわい。此處から眞直に驛へ持つて行かなくちやなんねえ。誰か騙つて行くものはねえかな。」

クレアがさうしようと申し出した。尤もこんなことが、彼のする仕事に屬してゐるのではなかつたが。彼はテスに一緒に行かないかとたづねた。その夕暮は、太陽は沈んでゐたが、この季節にしてはぽか〳〵と蒸し暑かつたので、テスはたゞ頭巾だけを被り、腕も丸出しにして、ジャケツも着けないで、出てゐたのであつた。確かに遠乘りする服裝ではなかつたので、彼女は薄着を見返つて答へにかへた。が、クレアは優しく行くやうに薦めた。彼女は自分の乳桶と椅子とを家へ持ち歸るやうに主人に託して、承諾の意を現はした。そして彈條附の荷馬車に乘り込み、クレアの傍に座を占めた。

三〇

黃昏れて行く日の光の中を、二人は、すべてが灰色に見える數哩の彼方まで延びてゐて、一番遠い端れでエグドン・ヒース（ハーディの作中に屢々現はれて來る名高い高地。ドーチエスタア東部一帶に起伏した、大小の丘陵を總稱した名稱。元より、假作上のものである）の暗い、嶮しい傾斜を背景にしてゐる牧場の中を通じてゐる、平坦な馬車道を進んで行つた。その高地の頂きには、樅の林や並木があつて、鋸齒のやうになつてゐる頂上は、恰も正面の眞黑くなつた、魔宮を飾る櫛形胸壁の塔のやうに見えた。

二人は、お互ひに接近してゐるのだといふ意識にすつかり呑まれてしまつてゐたから、暫らくの間は、話も始めなかつた。沈默はたゞ背後にある背の高い鑵の中ではね上る牛乳の音で破られるだけであつた。二人が辿つて行つた小徑は、非常に寂しかつたので、榛の實は殼から自然に滑り落ちるまでは枝に殘つてゐるし、木苺は重い房になつて垂れ下つてゐるといふ風だつた。折々エンヂェルは、鞭の革紐を飛ばして、その一つに卷き付けては、それを捥ぎ取つて同伴者に與へるのだつた。

どんよりしてゐた空は、間もなく前觸れの雨の滴を落して、その意味を告げ始めた。そして鬱々してゐたその日の空氣は、氣まぐれな微風に變つて二人の顏を嬲つた。河や水溜りの水銀のやうな光澤は消えてしまつた。さうだ、河も水溜りも、明るい廣い鏡から、表面は大目鑢のやうになつた光澤のない鉛板に變つた。だが、そんな光景も彼女の屈託を少しも動かさなかつた。彼女の顏色は、持前の桃色に季節の爲めにいくらか鳶色が加はつてゐたが、雨の滴に打たれてその光澤を一きは深めてゐた。髮の毛といへば、乳牛の横腹で押されて平常のやうに結んであるのが解け落ちてきやらこの女帽の垂布から迷ひ出てゐて、濕氣の爲めに粘々し、殆んど海草と變らないやうになつた。

「私、來るんぢやなかつたと思ひますわ、」と彼女は空を眺めながら、呟いた。

「雨でお氣の毒だね、」と彼は言つた。「が、此處へ君を控へてるんで、僕はどんなに嬉しいか分らない！」

遠くにあるエグドンは、雨の紗の後にだん〳〵消えて行つた。夕闇は次第に濃くなり、道は所々畑の門と交叉するので、並足よりも早く馬を驅ることは、安全でなかつた。空氣はどちらかと言へば、冷え〳〵してゐた。

「腕にも背にも何んにもかゝつてゐなくつて、君は風邪を引きやしないだらうかね、」と彼は言つた。「僕の方へずつと寄つておいでよ、さうすれば、雨もさう體には障るまい。この雨が、僕に加勢してゐてくれるのかも知れないと思つてゐるからいゝやうなものゝ、若しさうでもなかつたら、僕はとてもやりきれないよ。」

彼女は、目立たないやうに寄りかゝつて行つた。そして彼は、時々ミルクの罐の日除に使ふ大きな帆布で二人を包んだ。テスはクレアの手が塞がつてゐるので、それを自分からばかりでなく、クレアの體からも滑り落ちないやうに押へてゐた。

「さあ、これでまたすつかりいゝ。あゝ——駄目だ、よくないや！　僕の襟元へ少し落ちて來る。だから、君の方へはもつと落ちるに違ひない。うんさう〳〵、その方がいゝがね。君の腕は、まるで濡れた大理石みたいだね、テス。帆布で拭いたらいゝよ。さあ、君さへ動かなきや、もう一滴だつてかゝらないよ。ところで、ね、——僕の、例の問題のことだが——あの永い懸案になつてゐる問題のことだが？」

暫らくの間彼が聞くことの出來た答へと言へば、たゞ濡れた路を打つ馬の蹄の音と、背後の罐の中ではねる牛乳の音ばかりであつた。

「君の言つたことを覺えてゐるかね？」

「えゝ、覺えてますわ。」と彼女は答へた。

「ぢや、家へ歸る前にね、いゝかね。」

「精々しますわ。」

彼はその時は、それ以上何も言はなかつた。二人が馬車を進めて行くにつれて、カロライン時代（チャールズ一世及びチャールズ二世の時代を指す）の舊い莊園風の屋敷の片割が、大空に聳え立ち、又それも程なく過ぎて後の方へ殘されてしまつた。

「あれは、」と彼は興を添へる積りで、彼女に話し掛けた。「面白い古蹟なんだよ——或る舊いノルマンの一家のもの

だつた、數ヶ所の屋敷の一つでね、その一家といふのは、昔この地方で大變な勢力を有つてゐたダアバヴィル家つてんだ。僕はその何れの屋敷の前を通る時でも、あの一族の者を思ひ出さないことはないんだよ。たとひ兇猛な、權柄づくな、封建的な名門にしても、兎に角名門の高かつたさういふ一族が亡びるつてことは、何だか悲慘だね。」

「全くですわ。」とテスは言つた。

二人は、そのあたりに擴がつてゐる暗の中に、漸く一つの微かな灯でそれと分りかけて來たすぐ近くの地點を眼指して、そろ〳〵進んで行つた。其處は、晝間だと暗綠色の背景に、時々氣まぐれな白い蒸氣が筋を曳いて、この世離れた土地と近代生活とをつなぐ斷續的な瞬間を示すのであつた。近代生活は日に三四回この地點へ蒸氣の觸角を延ばしては、この土地の生活に觸れ、そして恰も觸れたものが氣に合はないものでゞもあるかのやうに、再び急いで觸角を引つ込めるのであつた。

二人は、小さい停車場の煤けたラムプから發する微かな灯の處へ着いた。それは、可なり貧弱な地上の星ではあつたが、或る意味では、タルボセイズの搾乳場や人類にとつては、天上の星に比べれば、とても恥かしい存在ではありながら、それよりも遙かに大切なものであつた。新しい牛乳の罐は、降りしきる雨の中に下ろされ、テスは近くの柊の木の下に小さな雨宿りの場所を得た。

やがて、汽車のしゆつ〳〵と蒸氣を立てる音が聞え、極めて靜かに、濡れた線路の上に停つた。牛乳は忙しく一罐づゝ無蓋貨車の中へ移された。機關車の灯はしばらくの間、柊の下に身動きもしないでゐるテスの姿をぱつと照した。尖つてゐる曲柄や車輛から見れば、丸々とした腕をむき出しにし、顏や髮を雨に濡らして休んでゐる優しい豹のやうな不動の姿勢の何時つくつたとも分らない又流行のものでもない更紗の上衣を着て、木綿の女帽を眼深に被つてゐるこの人ずれのしない娘ほど、よそ〳〵しいものはなかつたに違ひない。

彼女は、情熱的な性質の人にはよく見られる事ではあるが、默つて言はれる通りに再び愛人の傍に乘り込んだ。そして、二人がまた帆布の中に頭も耳もすつぽり括まつてしまふと、今はもう一寸先も分らぬやうな夜の中へ勢ひよく引つ返した。テスはなか〳〵敏感なので、物質的進歩の旋轉ともいへる汽車に、僅か二三分間接したゞけであつたが、その狀景が彼女の心から離れなかつた。

「倫敦の人は、明日の朝飯にあれを飲むんでせうね、さうぢやありませんか？」と彼女は訊ねた。「私たちの決して見たこともない見ず知らずの人たちが。」

「さうだよ——多分飲むことだらうね。僕たちが送つたままではないけれど。頭にのぼらないやうに、度を緩めてからね。」

「乳牛など見たこともない貴族方や、貴族の奥様方や大使や百人隊長（羅馬時代の将校。立派な軍人といふ意味で使つたものであらう）や、淑女方や商店の女主人や、それから赤ん坊たちがね。」

「うん、さうだよ、屹度ね、殊に百人隊長たちがね。」

「私たちのことは何も、またそれが何處から來るのかも知らないし、また私たち二人が間に合ふやうに着けばよいと思つて、今夜雨の降る中をどんな風にして幾哩も〳〵の原つぱを馬車で駈つたかなんてことは、考へない人たちなんでせうね？」

「僕たちは立派な倫敦の人たちの爲めにばかり馬車を走らせた譯でもないよ。多少僕等自身の爲めに——例の氣掛りな問題の爲めもあつたんだよ。あれは君きつと決めてくれるだらうね。ねえテス、えゝと、僕がこんな風にいふのを許しておくれよ、君はもう僕のものなんだからね。さうだらう。君の心は、つて言ふ意味なんだよ。さうぢやないかね？」

「あなたは、私と同じやうに御存じの癖に、えゝ——さうですわ——さうですわ！」

「ぢや、君の心がさうだといふのに、何故君の手がさうなつちやいけないのかね？」

「その理由は、たゞ〳〵あなたの爲めを思ふからなんです——問題が一つある爲めなんです。私、あなたにお話しゝたいことがありますわ——」

「だが、それが全く僕の幸福の爲めであり、また僕の世間的な便宜の爲めでもあるとしたらね？」

「えゝ、さうなんです。若しあなたの幸福の爲め、また世間的な便宜の爲めでしたらいゝんですわ。でも、此處へ來ない前の私の身の上を——私、お話しゝたいんです——」

「さうだ、それは僕の幸福の爲めばかりでなく、僕の便宜の爲めでもあるんだ。若し僕が英吉利でなり植民地でなり、素敵に大きな農場を持つことになれば、君は妻として、僕にとつてどんなに貴いものになるか知れない。そりや、この地方の一番大きなお屋敷育ちの女なんかより、ずつといゝんだ。だから、どうか——どうか、ねえ、テス、君が

僕の邪魔になるだらうなんていふ考へは捨てゝしまつておくれ。」

「ですけれど、私の身の上を。私、あなたにそれを知つて頂きたいんです——あなたは私に打ち明けさせて下さらなくてはなりませんわ——そしたら、今までのやうに、私が好きでなくなるでせう！」

「話したかつたらお話しよ。ねえ。ぢやその貴い身の上といふのを。さて私はかく〳〵の土地で生れました、紀元一一年にかね。」

「私はマアロットで生れました。」彼の言葉は冗談半分に言はれたのであつたが、彼女はそれを手掛りとし、その後を受けて言つた。「そして其處で育ちました。尋常六年で學校をさがりましたが、大へん敏捷だから立派な先生になれるだらう、つて言つてくれましたので、先生にして貰ふことに決まりました。ところが、家庭の方に煩さいことがありましたの。父はあまり働きもせず、それに少しはお酒もいたゞきましたの。」

「なるほど、なるほどね。可哀さうに！　格別珍らしいことぢやないね。」彼は、一層自分の側へ近く彼女を抱き寄せた。

「それから——身の上になりますと——いえ、私には——大へん珍らしいことがあるんですの。私は——私は、あの——」

テスの呼吸は早まつた。

「さうかね。君、構はないからお話しよ。」

「私——私——はダアビフィールドでなくつて、ダアバアヴィルなんですの——先刻通り過ぎましたあの古い屋敷を有つてゐたといふ方々と同じ一族の子孫ですの。そして——私たちの一族は、すつかり零落して、跡方もなくなつてしまつたんです！」

「ダアバアヴィルだつて！——なるほどさうか！　で、心配のことつていふのは、それだけなのかね、テス？」

「さうです、」と彼女は微かに答へた。

「ところで——それを知つたからつて、何故僕が今までよりも君が好きでなくなるつていふのかね？」

「あなたは舊家が大嫌ひだつてことを主人から聞いてゐましたわ！」

彼は靴を立てゝ笑つた。

「なるほど、或る意味ぢや全くその通りだよ。僕は貴族の世襲主義を何よりも憎んでゐる。そして、理論上僕たちの尊敬すべき家系は、たゞ一つ肉體上の家系などには關りな

く、賢い、また徳の高い精神上の家系だけだと思ふ。だが、その話を聞いて、とても面白くなつた——どんなに僕が面白くなつてゐるか、君には想像もつかないだらうね！　あの有名な家系の一人だつてことに、君は自分で興味を感じないかね？」

「いゝえ、私はそれを悲しい事だと思つてゐます——此方へ参つて、目に見える丘も田畑も一度は自分の祖先の所有だつた、といふことを知つてからは、猶更さうです。また、別の丘や田畑はレッティの祖先のものだつたし、他の丘や田畑はマリアンの祖先のものだつたかも知れないんですから、私、それを殊更尊いとは思ひません。」

「その通りだ——現在土地を耕してゐるどんなに多くの人たちが、一度はその所有者であつたかを知れば驚くばかりだよ。僕は時々こんな風に怪しむことがあるんだ。何故政治家の誰かゞこの事情を利用しないんだらうかと。だが奴等はそれを知らないらしいんだよ……僕は何故、君の名前がダアバヴィルに似てゐることに氣が付いて、この分りきつた轉訛のいはれが分らなかつたんだらう。氣掛りな祕密といふのは、そのことだつたんだね！」

彼女は到頭言はないでしまつた。これからといふところで、彼女の勇氣は挫けてしまつた。何故もつと早く打ち明けなかつたか、と彼が非難するのを恐れた。そして自分を保護しようとする本能の方が、打ち明ける勇氣よりも強かつた。

「勿論、」と何も知らないクレアは續けた。「僕は、君が純粹に英國民のうちでも長い間苦しみ、默々としてゐる者であつて、上には現はれない一兵卒から血を引いてゐる者であつて、他の者を犧牲にして自分達の勢力を張つた少數の我儘勝手な者から出たものでないといふことを知つたら、その方がどんなに嬉しいか分らないさ。が、君に對する愛情で買收されてしまひ、そんな事は、問題でなくなつたよ、テス。（と言ひながら彼は笑つた）。何だか僕もさういふ我儘勝手になつたやうだね。君の爲めに、僕は君の家柄を喜ぶよ。世間は仕方のないほど上品振つてゐるんだ。で、君の血統についてかういふ事實があると、僕の考へ通りに君を物知りの女に仕立てゝ置きさへすれば、僕の妻として君を認める世間の態度がかなり違ふかも知れない。僕の母なんかも妙な人だから、その爲めに君をずつとよく思ふだらうよ。テス、君は名を正確に綴らなくてはいけないよ——ダアバヴィルつて——早速今日から。」

「私、さうしない方が、一層いゝと思ひますの。」

「でも、さうしなくつちやいけないよ。ねえ！　驚くね、何だつて俄か成金たちは、大勢かういふ家名に跳びつきたがるんだらうね！　うん、さう〳〵、その姓を名乘つてゐる仲間の一人があるよ——何處といつたかしら？——たしかチェイズの森の近くだつたと思ふ。ほれ、何時か君に話した、僕の父と爭論をしたつていふ男だよ。何て妙な暗號なんだらうね！」

「エンヂェル、私何ですか、その名を使ひたくないやうな氣がしますわ！　緣起の悪い名のやうですわ！」

彼女は興奮してゐた。

「それぢや、テレザ・ダアバヴィル嬢と僕がつけて上げよう。僕の名を使ひなさい、さうしたら、君は自分の名が避けられるだらう！　祕密を明かしてしまつたのに、まだこの上どうして僕を拒むんだね？」

「若し私を妻となさる事が確かにあなたを幸福にするなら、それにあなたがどうしても〳〵私と結婚したいとお感じでしたら——」

「感ずるよ、君、無論！」

「私かういふ積りなんです。つまり、あなたが私をお望みで、たとひどんな罪が私にあつても、私なしではもう生きられないといふ程であつてこそ、始めて私は承知しなければならないと思ふんですの。」

「承知してくれる——承知したと言つてくれるね！　君は永久に僕のものになつてくれるだらうね。」

彼はひしと彼女を抱いて接吻した。

「承知しますわ！」

かう言つてしまふとすぐ、彼女は急に涙も出ない烈しい啜泣きを始めた。餘りに烈しいので、氣が狂つてしまふかとも思はれた。テスは決してヒステリイ性の女ではなかつたので、彼は吃驚した。

「何故泣くんだい、ねえ？」

「私、分りません！　ほんとに！——考へると私、本當に嬉しくてなりません——あなたのものになつて、あなたを幸福にするのかと思ふと！」

「でも、これぢや大して嬉しいとも見えないやうだね、テッシイ！」

「私、かういふつもり——あの自分の誓ひを破つてしまつたから泣くんです！　私、死ぬまで結婚しないと言ひましたの！」

「だが、若し君が僕を愛するなら、僕と一緒になるのを喜ぶ筈ぢやないかね？」

「そりやさうです、さうです、さうですとも！　でも、ああ、私生れて來なかつたらよかつたと時々思ひますわ！」

「ところで、ねえテス、君がひどく興奮してゐるし、また人の氣持なぞがよく分らないつていふことを僕が知つてるからいゝものゝ、さうでなかつたら、今の一言は餘り嬉しいもんぢやないよ。若し僕が好きだつたら、どうしてそんなことを思ふやうになるだらうね？　君は僕が好きなの？何とかして、その證據を見せて貰ひたいなあ。」

「私、見せたでせう、その上どうして證據が見せられませう？」彼女は氣も狂ふばかりの愛しさを見せて叫んだ。「ぢや、かうすれば、もつといゝ證據になるでせうか？」

彼女はクレアの頸に抱きついた。そこで彼は始めてテスが自分を愛するやうに、心も魂もすつかり打ち込んで、愛してゐる者の唇にする熱した女の接吻が、どんなものであるかを知つた。

「さあ——もう信じてくれますの？」と、彼女は顔を眞紅にし、眼を拭きながら訊ねた。

「信じるとも。心から決して疑つてなんかゐなかつたよ——

——決して、決して！」

かうして、彼等は帆布の中で一塊りになつて闇の中を驅つて行つた。馬は氣の向くまゝに走り、雨は彼等に烈しく打ちつけた。彼女は、もう承諾してしまつたのだ。こんなことなら初めから承諾した方が增しであつた。萬物に行き亙つてゐる『歡喜を求める欲望』——丁度潮流が頼りない雜草を押し流すやうに、人類を驅つてその目的へ向はせずにはゐない恐ろしい力——は、社會上の規約をぼんやり考へた位ゐのことでは、どうにもなるものではなかつた。

「私、お母さんに知らせて遣らなければなりませんわ、」と彼女は言つた。「さうしても構はないでせうね？」

「無論構はないさ、赤ちやん。君は僕に比べれば子供だよ、テス。こんな場合にお母さんに知らせることがどれほど當然なことか、また僕がそれに反對することがどれほど間違ひだかつてことを知らないんだもの。何處にお母さんは住んでゐるの？」

「同じ處——マアロットに。ブラックムーアの盆地のずつと向う側です。」

「あゝ、ぢやこの夏前に、君には會つてたんだね——」

「えゝ、草原であの舞踏があつた時に。でもあなたは、私と踊らうとしなかつたでせう。あゝ、あれが今となつて、何かの凶兆にでもならなければいゝんですが！」

三一

テスは可なり熟の籠つた急ぎの手紙を、すぐその翌日母親の許へ書き送つた。するとそれに對して、その週の末にダアビフィールドの女房の覺束ない、一昔前の手蹟で書かれた返事が來た。

愛するテスよ——一筆申上げます。この手紙が、有難いことに息災で暮してゐる私の手元を今出て行くと同じに、また息災なお前の手元にも着くやうに祈つて。愛するテスよ、お前が間もなく、本當に結婚しようとしてゐるといふことを聞いて、私どもはみんな喜んでゐます。が、お前からたづねてお寄越しのあの事に就てはね、テス、私ども二人だけの間だが、たとひどんな事があつてもあの過ぎてしまつた災難のことを一ことでもお婿さんに言つてはならないと、極く內密ではあるが、固く言つて置きますよ。尊い家柄の爲めに大へん威張つてゐるお前のお父さんへは、何も彼もすつかりは話しませんでした。

お前のお婿さんも、大方同じやうに立派な家柄でせうがね。澤山の女——その中には、この土地で一番えらいものたちも幾人かゐます——には、これで若い時分にみんな苦勞があつたもんです。そして、他のものがそれを吹聽しないのに、何もお前から吹聽するにも及びますまい？　そんな馬鹿な娘が、何處にあるもんですか。殊にそれは、ずつと以前のことであり、ちつともお前の過失ではなかつたんですもの。お前から五十度訊かれても、私は同じことを答へます。それに、胸の中にあることを何も彼も言つてしまふのがお前の子供らしい氣性——何といふ無雜作なことでせう——だから、私はお前の幸福を思つて、あのことは決して口にも素振りにも出さないやうにとお前に約束さしたでせう。それからお前もこの家を出て行くとき、よく〳〵固くそれを約束したでせう。それを夢にも忘れてはなりません。私はまだそのことも、また近づいてゐるお前の結婚のこともお父さんには言つてありません。あの人は、きつと何處へ行つても、そのことを喋り散らすでせうからね、可哀さうに他愛もない人なんだから。

愛するテスよ、精々氣を引き立てなさい。それから、

結婚の贈物にサイダーの大樽を一樽送つて上げるつもりです。お前の地方には澤山ないし、あつても薄い酸つぱいのしかないといふことを聞いてゐますから。では、今はこれだけで筆を擱きます。どうぞお前のいゝ人に、くれ〴〵も宜敷くね——

お前のいとしい母

ジェー・ダアビフィールドより

「まあ、お母さん、お母さん！」とテスは低い聲で言つた。

彼女には一番重苦しい事件も、母親のダアビフィールドの護謨のやうな魂には、全く輕く觸れただけであるのが分りかけて來た。テスの母は、彼女と同じやうに人生を見てはゐなかつた。過ぎ去つた日の惱みの種である挿話も、母親にとつてはほんの一時の出來事にしか過ぎなかつた。が、たとひ理窟がどうであらうとも、これから取らうといふ方針としては、どうも母親のいふことが正しいやうに思はれた。沈默が、彼女の崇拜する人の幸福の爲めには、見たところ一番いゝやうに——どうしても、これは沈默でなければならない——と思はれた。

かうしてテスは、自分の行ひを支配する權利を少しでも有つてゐる後にも先にもたつた一人の人が與へてくれた命令で氣強くなつて、だん〴〵落着いて來た。彼女は、責任を脫して、心はこの幾週間よりもずつとうき〳〵して輕くなつた。彼女が承諾した日からその後の十月になると始まる晩秋の幾日かは、彼女の生涯のどんな他の時よりも恍惚狀態に近い氣持で、生活を送ることの出來る一季節となつた。

クレアに對する彼女の愛には、世間的な點が殆んどなかつた。彼女はすつかり信じきつてゐるので、彼がこの上ない善良性の所有者に見えた、——指導者が、哲學者が、又は友人が知らなければならないことは、何も彼も皆知つてゐる人に見えた。彼の體の輪廓をつくつてゐる線といふ線は、男性美の完成である、彼の魂は聖人の魂である、彼の智は豫言者の智であると思つた。彼に對する彼女の愛の持つ叡智は、愛となつて、彼女に威嚴を添へた。彼女は、王冠を戴いてゐるやうに見えた。彼女に對する彼の愛の持つ同情は、彼女がそれを知つた時、彼に對する心持を獻身的に高めさせた。彼は時々大きな、何物かを崇拜してゐるやうな彼女の眼に出會ふことがあつた。それは、量り知

ことの出來ない底で、その奥底から、恰も目の前に何か不滅のものを見てゞもゐるかのやうに、ぢつと彼を瞶めるのであつた。

彼女は過去を捨てゝしまつた——それを踏みにじり、掻き消してしまつた。まるで燻つてゐて危險である石炭を踏み消してもするやうに。

彼女は、男といふものが女を愛する場合に、彼のやうに恬淡で、俠氣があつて、庇護するやうな態度になれるものとは曾つて知らなかつた。エンヂェル・クレアは、この點では、彼女の考へてゐた人とはすつかり違つてゐた。實際、途方もなく違つてゐた。彼は本當に、動物的といふよりも寧ろ精神的で、自分といふものをよく抑へた。そして、不思議な位ゐ下劣な趣味を脫してゐた。冷靜な方ではなかつたが、熱狂的といふよりは寧ろ快活であつた——バイロン風（詩人バイロンの如く熱情的、浪漫的な氣質をいふ）といふよりも、寧ろシェリイ風（詩人シェリイの如く、萬象を美化し、空想化する性質）だつた。しようと思へば生命がけの戀をすることも出來たが、寧ろ特に空想的、架空的になり易い戀をする方で、愛する者を飽くまでも自分自身の欲望から守ることの出來る潔癖な感情を持つてゐた。このことは、今まで、乏しい自分の經驗で隨分見當違ひのことを教へられてゐたテスを、驚嘆させもし驚喜させもした。そして、男性に對する憤怒の反動として、彼女はクレアに對して常規を逸するほどに尊敬を拂つた。

二人は、率直にお互ひが一緒にゐることを求めた。正直に信じきつてゐる餘り、彼女は、彼と一緒にゐたい願ひを包み隱しはしなかつた。かういふ彼女の心持を纏めてはつきり說明して見るならば、結局こんな風にもなるだらう。つまり、一般に男を惹きつける女のつかまへどころのない性質は、生來の性質としてどうしてもつくつてゐるのではないかしらといふ疑ひが伴はずにはゐないから、戀の誓ひを立てた後では、あのやうに立派な男にとつては氣に入らぬものとなりはすまいか、といふ事だつた。

婚約期間は、お互ひ同志が戶外で無遠慮に交際するといふ田舍の習慣こそ、彼女が知つてゐる唯一の習慣であつて、彼女には、それがちつとも不思議には思へなかつた。尤も他の乳搾り女たちと同樣に、彼女がそれをどれほど當り前のことゝ見做してゐるかを知るまでは、クレアにとつては、妙に早計な事のやうに思へたのである。かうして、午後にはからつと晴れるこの十月の間、二人は、ちよろ〳〵水の流れてゐる小川の岸に沿つてゐる小徑を辿り、時には小さ

な橋を渡つて向う側に跳び越したり、また此方側へ戻つて來たりしながら、牧場をぶら〳〵散歩した。彼等は、決して渦巻いて流れる堰の音の聞えない處へは行かなかつた。そのざわ〳〵する響は、二人だけの囁きに伴奏した。一方、牧場の地平線と殆んど平行になつた太陽の光線は、光の花粉となつてあたりの景色を包んだ。二人は、立樹や生垣の蔭に、小さな青い靄を見た。しかも他處には日が赤々と照り映えてゐた。太陽は地面にごく近かつたし、芝原は全く扁平なので、クレアとテスの影法師は四分の一哩も前の方に延びるので、まるで絲色の寄洲の出鼻が盆地の傾斜面に接してゐる邊りの遙かの遠くを、指してゐる二本の長い指のやうに見えた。

人々は、此處彼處で工事に從つてゐた——今は牧場の『潑溂』、つまり、多期の灌漑の爲めに小さな用水路を浚ひ、また乳牛に踏み崩された岸を普請したりする時期だつたから。シャベルに何杯もの黒玉のやうに眞黒な砂の交つた粘土は、河がこの盆地の全幅に亙つて流れてゐた時分に此處へ運ばれたもので、土壤の中の精でもあれば、昔からの粉末玉でもあつた。それは水に浸り、精錬され、細かに碎かれた結果、非常に肥沃な地味となつてゐた。牧場がよく繁り、其處で草を食つてゐる乳牛がよく育つのは全くその爲めであつた。

クレアは、人前で戯れることに慣れてゐる人のやうな樣子で、かういふ掘仕事をしてゐる人達から見える處で、殆んど始終彼女の腰へ腕を廻してゐた。が實際は、その間といふものは、脣を開けてその勞働者達を横目で見ながら小心な動物のやうな樣子をしてゐるテスと同じやうに、恥かしがつてゐたのであつた。

「あの人達の前で、私をあなたのものと決めてお見せになるのを、あなたは恥かしいと思つてゐませんのね！」と、彼女は嬉しさうに言つた。

「思ふもんか！」

「でも、若し、あなたがかうやつて私と一緒に歩き廻つてゐることが、エミンスタアにおいでのお家の方々の耳に入つたら。たかゞ、乳搾り女なんかと——」

「およそこの世で、一番美しい乳搾り女とね。」

「皆さんは、威嚴が傷けられると思ふかも知れませんよ。」

「ねえ、君——ダアバアヴィル家の者がクレア家の威嚴を傷つけるつていふのかい？　その——君がさういふ一族のものだつていふことは、大へんな強味なんだよ。で、僕はこれを、僕たちが結婚し、トリンガム牧師から君の家柄の證據を得た時、あつと言はせようと思つて取つて置くんだ。それは別として、僕の將來は全くもう僕の家族とは無關係なんだよ——それはあの人達の生活の表面にさへ影響しないだらうよ。僕等は英吉利のこの地方を——恐らく英吉利を——去るやうになるだらう。だから世間の人が此處で僕たちをどんな風に見ようと、構ひやしないぢやないか？君は喜んで行くだらうね、えゝ？」

彼女は、彼の親しい伴侶となつて一緒に世界を旅行することを思ふと、非常に大きな感動が湧いて來たので、やつと肯定の返事が出來るだけであつた。彼女の感情は、波の音のやうに殆んど耳一杯になり、その眼にも押し寄せて來た。彼女は自分の手をクレアの手に任せた。——二人はかうして歩きつゞけて、到頭、水に映つた太陽が橋の下の河面から熔鐵のやうな光を放つて輝いてゐる場所へ來た。本物の太陽は橋の陰に隱れてゐたが、その光は二人の眼に眩ゆかつた。彼等はぢつと立つてゐた。すると小さな獺や水鳥が、水の滑らかな表面からぽくりと頭を覗かせたが、油斷のならないものが姿を現はして、立ち止り、行き過ぎないでゐるのを見てはまた潜つてしまふのであつた。彼等は、周圍に霧が立ち籠めて來て——この季節の夕方としては、少し早過ぎたが——彼女の睫毛の上にとまつて、水晶のやうに輝き、また彼の眉毛や髪の毛にも宿るやうになるまで、この河緣を歩き廻つた。

彼等は、日曜日には平常より遲く、すつかり暗くなつてから散歩した。二人が婚約を結んでから、初めての日曜日に、同じく戸外に出てゐた搾乳場の二三人の人たちは、感情的で、興奮するときれ〴〵になる彼女の話聲を聞いた。尤も、餘り遠くにゐたので、何を話してゐるのかはつきり聞き分けることは出來なかつたが、男の腕に凭り掛つて歩きながら、胸が躍る爲めに言葉が切れ〴〵になる話聲のうちに、痙攣的に喘いだり、言葉をきつてほつと安心したり、魂を乘せてゐるかのやうに思はれる小さな笑聲——彼女が愛してゐる、またすべての他の女たちから贏ち得た男と一緒にゐる女の出すやうな笑聲——他の笑聲とは全く性質の違ふ——を時々立てたりするのに氣がついた。彼等は、まだすつかり下りきらない小鳥の掠め飛ぶやうな、浮き立つた彼女の足取りに氣がついた。

彼に對するテスの愛情は、今では、彼女の生存につきものゝ呼吸や生命であつた。それは光球のやうに彼女を包み

照らしぬいて、彼女に觸れようとしつこくいろ〳〵の企みをしてゐる不快な幽靈ども——疑惑、恐怖、憂鬱、煩悶、恥辱などを抑へつけて、過去の悲しみを忘れさせた。彼女はこの幽靈どもが、まるで狼のやうに自分の周圍の光のすぐ外側で自分を待つてゐることを知つてゐた。が、彼女には彼等を飢ゑさせて、屈從させずには置かない長い一續きの力があつた。

精神的には忘れても、知識の上では同時に記憶が働いてゐた。彼女は光の中を歩いてゐたが、背後には、さういふ闇の蔭が何時でも一ぱいに擴がつてゐることを知つてゐた。その蔭は、毎日少しづゝ遠退いて行くやうでもあれば、又近附いて來るやうでもあつた。何れともつかないが、どつちかであつたには相違ない。

或る日の夕暮、テスとクレアは、家の者が皆何處かへ出掛けてゐなかつたので、留守居をしながら屋内に留つてゐなければならなかつた。二人で話し合つてゐる時、彼女は考へ深さうに彼を見上げた。すると見とれてゐるやうな彼の二つの眼に出會つた。

「私、あなたに釣合ひませんわ——さうです、どうしても釣合はないんですわ！」と彼女は、彼の敬意に對して、その爲めに嬉しさがこみ上げて來たので全く吃驚したかのやうに、低い腰掛から跳び上りながら、叫び出した。

クレアは、彼女がほんの僅かなことに興奮してゐるが、その元はまだ〳〵大きいのだと考へて、かう言つた——

「僕は君にそんな風に言つて貰ひたくないね、ねえテス！卑しむべき因襲を、小器用に利用するつてことが何もえらいんぢやないよ。眞實な、正直な、公平で、純潔で、愛らしく、そして評判のいゝ人の中に數へられるやうになつて、初めて立派な人と言へるんだよ——丁度君のやうに、ねえテス。」

彼女は咽喉から出る嗚咽を抑へようと努めた。この美德の數々を並べ立てることが、この數年來、教會でどんなに度々彼女の若い胸を痛めたことだらう。そして今また、彼がそれを數へ立てるとは、何といふ不思議なことであらう。

「何故あなたは、歸らずにゐて私を愛しては下さらなかつたんです、私が——十六で、妹や弟と暮してゐた時に。そしてあなたがあの草原で踊つた時に？　あゝ何故さうして下さらなかつたんです、何故さうして下さらなかつたんです！」と彼女は烈しく兩手を握り合はせながら、言つた。

エンヂェルは可なり眞劍に、何といふ氣の變り易い女であらう、だからその幸福の望みを遍へに自分に懸ける時には、一方ならず面倒を見てやらなければならない、とひとりで考へながら、彼女を慰め、安心させ始めた。

「さうだ——何故僕は歸らずにゐなかつたかなあ！」と彼は言つた。「ほんとに僕もさう感じるよ。それと分つてさへゐたらね！　だが、そんなにひどく悔むもんぢやないよ——悔む理由が何處にあるね？」

隱さうとする女の本能から、彼女は急いで話を外らした——

「私、あなたの心を今よりも四年だけ長く私のものにしてゐられたからなんです。さうすれば私、今迄のやうに自分の時間を無駄にせずに濟んだんです——私、もつと〳〵長い間の幸福を得ることになつたんでしたのに！」

かうして心を痛めてゐるのは、背後に長い暗い入り組んだ經緯のある女ではなくて、まだ成熟しない時分に小鳥のやうに罠にかゝつた二十一にもならない初心な一人の少女であつた。もつと十分心を靜める爲めに、彼女は小さな腰掛から立ち上つて、部屋を出て行つた。出掛ける途端に、彼女はその下袴で腰掛をひつ繰り返した。

彼は鐵架に載つてゐる青い秦皮の薪の束から燃え立つてゐる陽氣な爐火の傍に、尙ほ坐つてゐた。薪は快くぱちぱち音を立てゝ、切り口から樹液の泡をじゆう〳〵吹き出してゐた。彼女が部屋に戻つて來た時には、もう元の自分に返つてゐた。

「君は、自分でほんのちつとばかりだが氣まぐれで、むら氣だとは思はないかね、テス？」と彼は、相手の爲めに腰掛の上に座蒲團を展げて、自分もその傍の長椅子に腰を下ろしながら、機嫌よく言つた。「僕は君に訊きたいことがあつたんだが、丁度その時に君は遁げちまつたんだよ。」

「えゝ、私氣まぐれかも知れないわ、」と彼女は小聲で言つた。そして急に彼に近寄つて、その兩方の腕に手をのせた。「いゝえ、さうぢやないの、エンヂェル。私本當にさうぢやないわ——生來はねえ！」さうでないといふことを尙ほこの上に確かめる爲めに、彼女は長椅子の中の彼にぴつたり寄り添つて、クレアの肩に自分の頭の置場を見出すやうにした。「あなた、何をお聞きになりたいの——私、屹度お答へしますわ、」と彼女はおとなしく續けた。

「ぢや言ふがね、君は僕を愛し、僕と結婚することを承諾したんだらう。すると、次には『結婚の日は何時にしよ

う？』といふ三番目のことが續く譯だ。」

「私、こんな風にして暮してゐたいんですわ。」

「でも、僕は年が明けるとすぐか、それとも少し後れて、一人立ちで事業を始めることを考へなければならないよ。だから、僕は新しい境遇から起るいろんな面倒に卷き込まれてしまはないうちに、僕の配偶を安全に得て置きたいんだ。」

「でも、」と彼女は臆病さうに答へた。「ごく實際的にお話しすると、それがすつかり濟んでしまつてから結婚する方が一番いゝんぢやないでせうか？——私を此處へ置いて、あなた一人が他處へ行く事を思ふと堪りませんけれど！」

「無論君は堪るまい——それにこの場合、そりや最上の策ぢやないよ。僕は仕事を始めるにあたつて、いろ〳〵と君の手を借りたいんだ。日取りは何時にしようか？　今から二週間後ぢやいけないかね？」

「えゝ、」と彼女は生眞面目になつて言つた——「最初に、いろんなことを考へなくちやなりませんもの。」

「しかし——」

彼はもつと近くへ彼女をやさしく引き寄せた。

實際に結婚することが極く近くへ來て大きく見えて來ると、それは驚きであつた。この問題に關する相談がそれ以上進まないうちに、長椅子の角を廻つて爐火のこの部屋一ぱいに輝いてゐる中へ、主人のクリックとその妻君と、それから二人の乳搾り女が入つて來た。

テスは、彈力のある鞠のやうに彼の傍から跳び上つた。が、彼女の顏は眞紅になり、兩眼は爐火を受けてきら〳〵輝いた。

「あの方のすぐ近くに掛けてゐたら、どんな事になるかつていふ事を、私は知つてゐたわ！」と彼女は口惜しがつて叫んだ。「皆がやつて來て、屹度私たちを見つけるに違ひない、つて獨言を言ひましたの！　だけど實際は、私あの方の膝の上に坐つてゐたんぢやないわ。まるで私がさうでもしてゐたやうに見えたかも知れませんが！」

「さうかい——若しお前がそんなことをわしたちに喋りさへしなかつたら、この明りぢやお前さんたちが何處に掛けてたんだか、わしたちにや分りやしなかつたに違えねえんだ、」と主人は答へた。彼は、結婚に關する感情など更に解しない男が示すやうな、無神經な樣子をして妻の方に話し續けた——「なあ、クリスチャーナア。他の者が何んとも思つてゐねえのに、氣を廻したりするもんぢやねえつてことアー、これでも分るぜ。どうも思ふもんかね、若しこの娘さへわしに喋らなかつたら、何處に掛けてゐたかなんてちつとも考へなんかしやしなかつたらうぜ——何んで考へるもんか。」

「僕たちは、直きに結婚しようと思つてるんです、」とクレアはてれ隱しに思ひつきの冷淡さを裝つて言つた。

「へえ——お前さん方が！　さうかね、わしやそれを聞いて本當に嬉しうござえますだ、ねえ、旦那。何時かはそんな事になるこつたらうと、前から思つてをりましたゞ。この娘は乳搾り女には勿體ねえでなあ——この娘に初めて會つたその日に、わしやさう言ひましたよ——また、どんな男だつて欲しがるものでさあね。それにまた旦那百姓のお上さんにや持つて來いの素晴らしい女でさあ。この娘を側に置きさえすりや、旦那方が、執事なんかにいゝ加減にされるやうなことアありませんよ。」

どうしたのか、テスは姿をかくした。彼女は、クリックから無遠慮に讃められたので恥かしい思ひをしたといふよりも、クリックについて來た娘たちの顏色に、一層吃驚したのであつた。

夕食をすまして、彼女が寢室へ行くと、仲間の者はみんな其處にゐた。

灯が一つ點つてゐた。そして娘たちは、銘々純白の姿でテスを待ちながら、寢床の上に坐つてゐた。一同は丁度復讐をしようとして並んでゐる幽靈のやうであつた。

けれども彼女は、二三分するうちに、彼女たちの心持に少しも惡意のないことを知つた。彼女たちは、持たうなどとは決して期待してもゐなかつたものが失くなつたとて、それを損失だなどゝは殆んど感ずることが出來なかつた。彼女たちの位置は、傍觀的であり、また批評的であつた。

「あの方がこの女と結婚するんですつて！」テスから眼を離さずに、レッティは小聲で言つた。「この女の顏にすつかり書いてある！」

「あんた、あの方と結婚するんだつて？」とマリアンが訊ねた。

「えゝ、」とテスは答へた。

「何時？」

「何時か。」

これを彼女たちは、たゞの言ひ拔けにすぎないと思つた。

「えゝですつて——結婚するんだつて、あの方と——紳士

の方と！」とイズ・ヒュウエットが繰り返した。

三人の娘たちは、それから何かに惹きつけられでもするやうに、次々に寢床から這ひ出して、素足のまゝテスの周りに立つた。レッティは、恰もかういふ奇蹟の起つた後の友達の體を檢めでもするかのやうに、テスの肩に兩手をのせ、他の二人は、腕を彼女の腰に卷いて、ぢつと顏を覗き込んだ。

「まあ何て顏色でせう！　殆んど考へられない位ゐだわ！」とイズ・ヒュウエットが言つた。

マリアンはテスに接吻した。「本當ねえ、」と彼女は唇を引つ込めながら、囁いた。

「それは、この人が可愛くつてしたの、それとも今しがた其處へ誰かさんの唇が觸つたからなの？」とレッティは、素つ氣なく、マリアンに言ひつゞけた。

「そんなこと考へてなんぞゐなかつたわ、」とマリアンは、簡單に答へた。「私、たゞそれが不思議に思へてゐたゞけのことだつたの——この人があの方の奥さんになるつてことがさ、そして他の誰でもないつてことがさ。私これがいけないとは言はないわ。私たちの誰だつてさうだわ。つていふわけは、私たちは結婚なんてこと考へてゐなかつたんだもの——ただあの方を想つてゐたゞけだもの。それにしても、世界中であの方と結婚するのは、他の誰でもなくつて——立派な淑女でもなけりや、絹や繻子で着飾つてゐる他の誰でもなくつて、私たちのやうに暮してゐるこの人なんだからねえ。」

「その爲めに、あんた方は本當に私を嫌はないでくれますの？」テスは低い聲で言つた。

彼女たちは、恰も答へは彼女の顏付の中にあるとでも考へたかのやうに返事をしないうちに、純白な寢衣に包まつたまゝ、彼女に寄り添つた。

「分らないわ——分らないわ、」と、レッティ・ブリッドルは呟いた。「私あんたを憎みたいの。でも憎めないわ！」

「私の感じもその通りなの、」とイズとマリアンとが同意した。「この人を憎むことが出來ないの。どうしたのか、この人は憎ませないやうにするんだもの！」

「あの方は、あんたゝちの誰方かと結婚するのが當然なんですわ！」とテスは小聲で言つた

「何故なの？」

「あなた方はみんな私よりも立派な方なんですもの。」

「私たちがあんたより立派だつて？」と娘たちは低いゆつくりした語調で囁いた。「違ふわ、違ふわ、ねえテス！」

「いゝえ立派ですとも！」とテスは急き込んで反對した。そして急に彼女たちの縋りついてゐる腕を突き放し、簞笥の上に俯伏せになりヒステリックに泣き出して、續けざまに、「えゝ、さうです、さうです、さうなんですわ！」と繰り返した。

一度崩折れてしまつたので、もう彼女は泣き止めることが出來なかつた。

「あの方はあんた方の誰方かを奥さんにするのが本當なんです！」と彼女は泣き叫んだ。「私、今でもあの方にさうしていたゞくやうにするのが本當と思ひますわ！　あの方の爲めには、あんた方の方がいゝに違ひないんですもの——私、何を言つてゐるのか分らない！　あゝ！　あゝ！」

彼女たちは、テスの處へ歩み寄つて抱きかゝへた。だが彼女は、まだ啜り泣きに體を震はしてゐた。

「水を少し持つて來てよ、」とマリアンが言つた。「この人は、私たちの爲めに氣が轉倒したんだよ、可哀さうに、可哀さうに！」

彼女たちは、靜かに彼女を寢床の側に連れて行つて其處で溫かい接吻をした。

「あの方の爲めには、あんたが一番いゝのよ、」とマリアンは言つた。「私たちよりはずつと淑女らしくつて、學問もあるんだもの。とりわけ、あの方がいろ〳〵なことを澤山あんたに敎へ込んだんだからね。だからあんただつて、鼻を高くしていゝんだわ。あんたは、屹度、鼻を高くしてゐるんでせう！」

「えゝさうよ、」と彼女は言つた。「だから私、こんなに泣き崩れてしまつたのが恥かしいの！」

彼女たちがみんな寢床へ入つて燈火が消されると、マリアンは自分の寢床から、彼女へ囁いた——

「あの方の奥さんになつても、テス、私たちのことは忘れないでね。それから私たちが、あの方を想つてゐることをあんたに言つたことや、どんなにあんたを憎むまいとしたか、またほんとに憎みもせず、憎むわけにも行かなかつたこと、それといふのもみんな、あんたがあの方に見立てられた者だつたし、私たちは決してあの方から見立てられようと望みもしなかつたからだつていふことなどを、思ひ出してくれるでせうね。」

かういふ言葉を聞いて、テスが苦しい身を刺すやうな涙を流して新たに枕を濕したことにも、また心臟も張り裂けるやうな氣持で母親の言ひつけなどに頓着せず一切の身の

上をエンヂェル・クレアに打ち明けて——彼を裏切ることとも考へられ、またこの娘たちに對しても惡いことをするやうに思はれる沈默を守つてゐるよりも、寧ろ打ち明けて、天にも地にも掛け替へのないあの人に賤しめられるなら賤しめられもし、また母親には馬鹿者と見做されもしよう、と決心するやうになつたことにも、彼女たちは氣が付かなかつた。

三二

この悔悟する氣持が働いて、彼女は婚禮の日取りを決めることが出來なかつた。十一月の初めになつても、その日取りはまだ定まらないでゐた。尤も彼は、一番有效な機會を見計らつては彼女を促してゐた。けれどもテスの願ひは何も彼もが現在のまゝで續いて行く、永久の許嫁でゐたいといふにあるらしかつた。

牧場はもう變りかけてゐた。が、乳搾りの始まらない午後も早いうちなら、暫く其處らをぶら〳〵する位ゐにはまだ溫かゝつた。そして、一年のうちでもこの季節になると、搾乳場の仕事も少しの間位ゐは散歩することの出來る狀態になつてゐた。太陽の方向にある濕つた芝土を見渡すと、ぎら〳〵閃めいてゐる細い蜘蛛の巢の波紋が、丁度海の上に射した月光の跡のやうに太陽の下にあるのが彼等の眼に見えた。蚋は自分たちの果敢ない幸福のことは少しも知らず、恰も體内に光でも持つてゐるやうに透き通つて、輝いてゐるこの小徑をふわ〳〵飛び越え、やがてその光の中から出拔けてすつかり見えなくなつた。かういふものを眼の前に見ると、彼は何時も日取りのことがまだ決らないでゐることを彼女に思ひ起させた。

或はまた、夜になつて、クリックの妻君がわざと彼にその機會を與へようとの考へから設けられた或る用たしで、彼女について行つた時、彼は彼女に訊ねることもあつた。この用たしといふのは、大抵、この盆地の上の傾斜にある百姓家へ行つて、羣置場へ移されてゐる產期の近附いて來た牝牛がどんな樣子であるかを、檢べて來ることであつた。それは、牝牛の世界には今大きな變化の來る季節だつたからである。一群の動物が、毎日この產科病院に送られた。其處では、犢を產んでしまふまでは藁を飼料とされた牝牛たちは、お產も濟み犢が步けるやうになるとすぐ犢と共に搾乳場へ引き戻されるのであつた。犢を賣るまでには時がかゝるが、その間は、無論、殆んど乳搾りは行はれなかつた。けれども、犢が他所へ連れ去られてしまふと同時に、乳搾り女の連中は、平常の通りに仕事に取り掛らなければならなかつた。

かういふ暗闇の散步は幾度も繰り返されたが、一度その歸りがけに、二人は、平地に蔽ひ被さつてゐる大きな礫土質の崖の處へ來て、其處にぢつと立ち止つて聽き耳を立ててゐた。丁度河は水嵩を增してゐて、ごう〳〵と堰から流れ出で、暗渠の下をちよろ〳〵音を立てゝ流れた。一番小さい溝までが、すつかり溢れてゐた。何處にも近道をするところがなく、徒步の通行者は、是非ともきまり切つた道を通らなければならなかつた。眼に見えない盆地のいたるところから、種々樣々な音調が聞えて來た。それは、自分たちの足下に大きな市街があつて、このがや〳〵いふ音は、其處に住んでゐる人々の叫び聲ではないだらうか、と彼等を空想させずにはゐなかつた。

「何だかかう、何萬といふ大勢の人々が、」とテスは言つた。「市場で集會を開いてゐて、議論をしたり說敎をしたり、喧嘩をしたり毀り泣いたり、呻いたり祈つたり、また呪つたりしてゐるやうですね。」

クレアは、特別氣にもとめてゐなかつた。

「今日クリックが、多の數ヶ月間は大して手傳ひも要らない、つていふやうなことを、君に話さなかつたかい？」

「いゝえ。」

「牝牛はどん〳〵あがつて行くんだよ。」

「えゝ。昨日は六頭か七頭、それから一昨日は三頭羣置場の方へ行つたので、もう羣置場の方のはかれこれ二十頭近くなつたでせう。あゝ——ぢや犢のお產に私の手は要らない、つていふんぢやないかしら？　あゝ——私もう此處では用のない人なんだわ！　それだのに私は、どうかしてと思つて一生懸命に——」

「クリックが、もう君は要らない、つてはつきり言つたわけぢやないんだよ。が、僕達の間を知つてるんで、僕が降誕祭の晚に此處を出る時、君を一緒に連れて行くだらうと思つてゐたと、實際上機嫌で、しかも出來るつたけ丁寧に言つたよ。で、君を手離してしまつてどうしてやつて行くか、と僕が訊ねると、クリックは、實際のところ今はほんの少しの女手さへあれば間に合ふと言つたきりだよ。僕は、罪なことだけれど、クリックがかうして否應なしに君に結婚を承諾させてくれるやうにしたのを、寧ろ嬉しく感じた譯だ。」

「私、あなたが嬉しく感じるなんて、間違つてゐると思ひますわ、エンヂェル。要らなくなるつてことは、たとひ同時に此方の都合のいゝ場合でも、きまつて悲しいもんですからね。」

「さうだよ、確かに都合がいゝよ——君もそれを認めてゐるんだね。」彼は指で彼女の頬を突つついた。「おや！」と彼は言つた。

「どうしましたの？」

「言葉尻を捉へられてたんで、顔を赤くほてらせてゐるんだよ！　だが、僕はどうしてこんなに巫山戯てなんかゐるんだらう！　お互ひに巫山戯るのはよさう——人生は眞面目過ぎるんでね。」

「さうですとも。そのことは、大方私の方が先に知つてましたわ。」

彼女は、その時知りかけてゐたのであつた。結局彼との結婚を斷つて——昨夜の氣持に從つて——この搾乳場を去るといふことは、或る搾乳場ではなく、何處か未知のところへ行くことに外ならなかつた——といふのは、乳牛の産時が近付いて來たので、乳搾り女は要らなかつたからである——それはまた何處か、エンヂェル・クレアのやうな神のやうな人のゐない農場へ行くことであつた。彼女は、さう思ふと厭で仕方がなかつた。故郷へ歸ることは、考へてみても尚更厭だつた。

「だから眞面目にいふんだよ、テス、」と彼は續けた。「君は多分、降誕祭の晩には此處を出なくつちやならないだらうから、その時、僕が君を自分の妻として連れて行くことは、どう見ても望ましいことだし、又便宜でもあるぢやないか。そればかりぢやなく、若し君が、この世で一番ものの分らない女だといふのなら別だが、さうでなかつたら、僕たちがいつまでもこんな風にして生活をつゞける譯には行かないつてことが、分るだらう。」

「私、こんな風にしてゐられたらいゝと思ひますわ。何時でも夏や秋のやうで、あなたは何時でも私に言ひ寄り、そして、何時でもこの夏の間のやうに、私のことを想つてゐて下すつたら！」

「そりや僕は何時でもさうするだらうよ。」

「あら、あなたがさうして下さるだらう、つていふことは知つてゐますわ！」彼女は突然彼を信じる熱情に溢れて、叫んだ。「エンヂェル、私は永久にあなたのものとなる日を決めませう！」

かうして到頭、左右に聞える樣々な水の音に包まれて暗い中を家の方へ歸つて行く間に、日取りは二人の間で取り決められた。

二人が搾乳場に着くと、クリック夫婦は早速そのことを告げ知らされた——また內密にして置いてくれといふ頼みも受けた。といふのは、結婚はなるべく內々にして置きたいといふのが戀人たち二人の望みであつたから。主人は、間もなく彼女に暇を出さうと考へてはゐたが、今になつて見ると、彼女を手離すことについて大へん氣を揉んだ。クリーム掬ひをどうしよう？　アングルベリイやサンドバーンの貴婦人たちに送る飾り牛酪は誰が搾へよう？　クリックの妻君は、長い間愚圖々々してゐたことも到頭お終ひになつたのをテスの爲めに喜び、テスを一眼見るや否や、ありふれた戶外の勞働者ではない、屹度誰かに選ばれるに違ひないと見て取つたことや、テスが此處へ着いた日の午後に裏庭を歩いてゐたところは人並外れて立派に見えたといふことや、彼女が立派な家柄の者であると自分は言ひ切ることが出來たといふことなどを語つた。が、實際のところクリックの妻君は、テスがだん〳〵近附いて來るに連れて、如何にも優しい、美しい娘だと思つたことだけは覺えてゐたが、人並外れて立派に見えたといふことは後でいろ〳〵のことを知つて想像を逞うした結果であつたかも知れない。

テスは今、意志といふものは少しもなく、たゞ〳〵時の翼に乘つてどん〳〵運ばれて行つた。きつぱりと、もう約束はしてしまつた。何日といふことも書き留められてしまつた。彼女は生れつき非常に悧巧で、農夫や同じ仲間よりも、寧ろ自然の現象と一層廣く交つてゐる人々に共通した宿命觀を認めかけてゐた。從つて、戀人の仄めかすことは何でもうん〳〵と言つて應ずるさういふ氣持に特有な、受身の態度に卷き込まれてしまつた。

けれども彼女は、表向きは結婚の日を知らす爲め、實際はもう一度母の助言を求める爲めに新たに母親へ手紙を書いた。自分を選んだのは紳士であるといふことを、恐らくお母さんは十分考へなかつたであらう、結婚後の告白も、もつと下等な男なら氣輕く受け流すかも知れないが、あの人はそれと同じ心持で受け容れてはくれますまい、と。だがこの手紙は、母親のダアビフィールドからは、何の返事も齎らさなかつた。

エンヂェル・クレアが、すぐ結婚することが實際に必要であると、自分にもまたテスにも尤もらしく說いたには說い

たが、その段取りには、後になつて明かになつたことである。）

「實を言ふと、ねえテス、君を僕の保護と同情から離しては、何處へも殘して置きたくはないんだ。」

これだけに止まつてゐるなら、この理由はいかにも正しい理由であつた。彼がテスに及ぼした影響は實に著しかつたので、彼女は彼の態度や習癖、彼の言語や口吻、彼の好き嫌ひに何時の間にか染み込んでしまつた。それだのに今彼女を農場に一人殘して置くといふことは、折角調子の合つて來たのをまた後戻りさせるやうなものであつた。もう一つ別の理由でも、彼は彼女を自分の手許に置きたかつた。彼の兩親は、人情として、彼が彼女を英國なり植民地なりの遠いところへ連れ去つて行く前に、少くとも一度は彼女に會ひたがつてゐた。そして、兩親がどんな意見を持つてゐたからとて、彼が自分の考へを變更するやうなことはなかつたので、彼はこんな風に判斷した。何か有利な仕事始めの機會を探しながら自分と二ヶ月も下宿屋住居をしたなら、彼女が辛い務めのやうに感ずるかも知れないこと——つまり、牧師館で母親と會ふことを幾らか樂にさせるであらう、と。

次に、彼は粉挽水車場の作業を少しばかり見て置きたいふのが、丁度その時分彼の考へてゐたことである。

と思つた。それは、これを麥作りに利用することが出來るかも知れないと考へてゐたからである。ウェルブリッヂの大きな古い水車場——、嘗つて、或る修道院の水車場であつたが——の持主は、何時でもお氣の向いた時お出で下されば、この舊いしきたりの作業法をお目にかける、又、二三日の間自由に御自分で手をお下しになつても、差支へございませんと申し出てゐた。クレアはこの頃の或る日のこと、詳しいことをたづねる爲めに、二三哩へだつた其處を訪問して、夕方になつてタルボセイズへ歸つて來た。彼が、少しの間ウェルブリッヂの粉挽水車場で送らうと決心してゐることを、彼女は知つた。一體何が彼にこの決心をさせたのだらうか？　それは親しく粉挽や篩ひ方を調べる機會といふよりは、寧ろこんなにまだ破損しなかつた昔はダアバァヴィル一族の分家の邸宅になつてゐたその農家に宿をとることが出來るといふ、偶然の事實であつた。これが、何時でもクレアが實際問題を解決する遣口であつた。つまり、當の問題とは少しも關係のない感情で決める主義だつた。彼等は、結婚したら直ぐに出掛けて町や宿屋を旅して廻ることは止めて、二週間そこに滯在することに決めた。

「それから、兼ねて聞いてゐた倫敦の先にある農場を踏査に出掛けることにしよう、」と彼は言つた。「そして、三月か四月頃までに、二人で父や母を訪問しよう。」

こんな風な手順の問題が、起つてはまた過ぎて行つた。そして彼女が彼のものになる日が、とても信じられないその日が、近い將來の中に大きく浮き上つて見えた。十二月の三十一日の除夜か、その日だつた。あの方の妻、と彼女は獨言を言つた。本當だらうか？　二人の二つの體が全く一つになる、これを分つものは何もない、どんな出來事でも二人で分け持つ。何の不思議があらう？　だが、また何故だらう。

或る日曜の朝、イズ・ヒュウエットが教會から戻つて來て、テスにこつそり話しかけた。

「あんたは今朝家へ呼ばれ（原作者註。「家へ呼ばれる」とは結婚豫告を公けにするといふ意味の地方語）なかつたのね。」

「何ですつて？」

「今日はあんたが、初めて訊かれる時だつたのに、」と彼女は落着いてテスを見ながら、言つた。「あんたは除夜に結婚する筈だつたんでせう、えゝ？」

相手はすぐさうだと答へた。

「で、三度訊かれなければならないのよ。だのに、日曜は

あともうたつた二度しかないぢやないの。」

テスは頬が蒼白めて行くやうに感じた。イズの言ふ通りで、無論三度なければいけないのである。大方、あの方が忘れてしまつたのだらう！　若しさうだとすれば、一週間延ばさなくてはならない、それにしても縁起の悪いことだ。どうしたら愛人に思ひつかすことが出來るだらう？　彼女は、これまでは非常に引つ込み思案であつたが、自分の大切な寶を失ふやうなことがあつてはならないと、急に慌て出し驚き出した。

自然に或る出來事が起つて、彼女の心配を取り除いてくれた。イズ・ヒュウエットが結婚廣告の落ちてゐることを、クリックの妻君に話した。するとクリックの妻君は、既婚女の特權を振つて、この點に就いてエンデルに話した。

「あれをお忘れになつてゐたのですか、クレアさん？　結婚豫告のことをですよ。」

「いゝえ、忘れちやゐませんよ、」とクレアは言ふ。

他人のゐないところでテスに會ふなり、彼はかう言つて安心させた——

「結婚豫告のことでみんなが何と言つても、氣にしちやいけないよ。結婚許可の方が僕達には面倒がなくていゝだらうと思つて、僕は君に相談を掛けずに、結婚許可の方に決めて置いたんだよ。だから、日曜の朝教會へ行つて、君の名前を聽きたくつたつて聽かれやしないさ。」

「私、別に聽きたいなんて思つてはゐませんでしたわ、ねえ、あなた。」と彼女は昂然として言つた。

だが、それにも拘らず順序よく運んだのを知ることは、誰かゞ彼女の身の上を楯に取つて故障を申し立て、結婚を禁じてしまひはすまいか、とまでに恐れてゐたテスにとつては、非常な安心であつた。事件はなんと彼女に都合よく運んでゐることだらう！

「でゝ私、すつかり安心といふ譯には行かない、」と彼女は獨言を言つた。「かういふ何から何までの幸運も、やがて禍の手で搓き取られてしまふかも知れない。神樣のたさることは大抵さうなんですもの。やつぱり普通の結婚豫告をして貰つた方がよかつたのに！」

が、何も彼も順調に運んだ。あの方は、持ち合せの一番いゝ白の上衣で婚禮して欲しいのか、それとも新しいのを一着調へなければならないのか、どつちだらうと彼女は迷つた。その問題は、幾つかの大きな包みが彼女宛に屆いた時、初めてそれと知れた彼の用意周到さで綺麗に片づいた。

包みの中には二人の考へてゐた略式の結婚に相應しいやうな、女帽から靴下に至るまで衣裳全部が入つてをり、また晝着の禮服まで添へてあつた。この包みが屆いてから間もなく、彼は家の中へ入つて來た、そして二階で彼女がそれを解いてゐる音を聞いた。

一分も經つたかと思ふと、彼女は顏を上氣させ、眼には涙を浮べて下りて來た。

「まあ何んてあなたは氣がつくんでせう！」と彼女は頬を彼の肩の上に載せて囁いた。「手袋やハンケチまでも！　可愛い私の——何んと親切で、何んて思ひ遣りの深い！」

「いや、いや、テス、ほんのちよつと倫敦の女商人へ註文してやつたぎけなんだよ——それだけのことなんだ。」

それから、彼女が餘りに浴びせすぎる讃辭を外らさうと思つて、彼は、二階へ行つてゆつくり品物がよく體に合ふかどうかを調べてみなさい、それで、若し合はないやうだつたら、村の女裁縫師に賴んで少し直して貰つたら好いと話した。

彼女は二階へ戻つて、上着を着けてみた。一人で、彼女はしばらく鏡の前に立つて、絹布の裝ひになつた體裁を見てゐた。やがて彼女の頭には、母親がよく歌つた不思議な着物の小唄が浮んで來た——

一度不義したその妻びとに
それは決つして似合ふまい

（『少年と外套』といふ四十九節からなる小唄の第八節から引抄したもの。この小唄のもとは、パーシイの『古代英詩遺集』に見えてゐる。貞操を破つたものは、或る不思議な衣服で露見するといふ傳說は、中世によく行はれた。）

これはダアビフィールドの女房が、テスのまだ子供の時分によく搖籃に片足を載せ、唄の調子に合せて搖りながら如何にも樂しさうに、また如何にも小憎らしさうに彼女に歌つて聞かせたものだつた。若しこの服裝が、小唄の着物が女王ギネバ（騎士物語の主人公として有名なアーサー王の后で、ランスロットと戀に落ちた姫）を裏切つたやうに色が變つて、彼女を裏切つたとしたら。彼女はこの搾乳場に來て以來、今が今まで一度もこの唄を思ひ出したことがなかつた。

三三

エンヂェルは、二人がまだゞの愛人同志である間に、彼

女と連れ立つて試みる最後の小旅行といふ意味で、搾乳場から離れた何處かで彼女と一緒に結婚前の一日を過したいと感じた。それは彼等のすぐ前に微笑んでゐる他のもつと重大な日と一緒に、もう二度と再び繰り返すことの出來ない事情にあるロマンティックな一日であつた。で、彼は先週中に、一番近い町へ行つて少しばかり買物をすることを仄めかして置いたので、二人は一緒に出掛けた。

搾乳場でのクレアの生活は、彼と同じ階級の世界から見れば、まるで隱遁者の生活であつた。數ヶ月間、彼は一度も町へ近づかなかつたし、馬車の必要もなかつたから決して傭つて置きもしなかつた。若し馬に乘るか馬車を驅るかする時は、主人の短脚馬か、二輪馬車かを借り受けた。その日は、彼等は二輪馬車で出掛けた。

それから彼等は、生れて初めて一つ用事の相談相手となつて買物をした。丁度降誕祭の前日で、柊や寄生樹が其處此處に山と積んであつた。町には、さういふ日であつた爲めに、近鄉の四方八方から入り込んで來た見知らぬ者が一ぱいに溢れてゐた。テスは、顏が美しい上に更に幸福さうな表情を浮べて歩いてゐる罪として、彼の腕に凭れて人中を動いて行く時には、ぢろ〳〵大勢の者から見られるのであつた。

夕方になつて、彼等は先に宿を取つて置いた宿屋に戻つた。そしてテスは入口の處で、エンヂェルが馬と馬車とを戸口の方へ引いて來るのを見に行つてゐる間、待つてゐた。大廣間は客で一ぱいで、絶えず出たり入つたりしてゐた。かういふ人たちが出入りするので、扉が開閉する度毎に廣間の燈火がテスの顏をすつかり照した。二人の男が出て來て、わけても彼女の傍を通り過ぎたその中の一人は、吃驚してぢろ〳〵彼女を見上げ見下ろした。こゝで彼女は、この男がトラントリッヂの者かも知れないと思つた。尤もその村は幾哩も遠く離れてゐるので、トラントリッヂから此處へ來る者は滅多になかつたが。

「別嬪だね、あの娘は、」と他の一人が言つた。

「いかにも、素敵な別嬪だ。だが、俺の大きな間違ひでないとすりや――」そしてすぐ、彼は後の言葉を濁してしまつた。

クレアは、丁度その時厩から歸つて來て、閾のところでその男に出會ひ、例の言葉を耳にし、またテスが縮み上るのを眼にした。彼女に對する侮辱を聞いて、彼はぐつと癪に障つた。そこで全然何を考へる暇もなく、頤を目がけて拳骨で力任せにその男を擲りつけ、廊下へ後ざまによろよろと突き出した。

男は立ち直つて、打ちかゝつて來る氣勢を見せた。そこでクレアは、戸の外側に出て防禦の身構へをした。だが彼の相手は事情を考へ直し始めた。この男は、テスの傍を通り過ぎながら改めて彼女を見なほし、そしてクレアに言つた――

「失禮しましたよ、君。全く思ひ違ひでした。わしやあの方を、此處から四十哩先の別の女と思つたんです。」

クレアも、自分が餘り輕卒だつた、また、宿屋の廊下などに彼女を立たせて置いたのは自分が惡いと感じ、こんな場合にきまつてする謝罪をして、擲つた箇所を癒す膏藥代として五志この男に與へたのである。かうして互に機嫌よく挨拶を交して別れた。クレアが馬丁から手綱をとり、この若い二人が馬車で立ち去つてしまふと同時に、二人の男は反對の方向へ繰り出した。

「それで、ありや思ひ違ひだつたのかえ？」と二番目の方が言つた。

「毛ほども思ひ違ひぢやないよ。だが俺は、あの紳士の氣を惡くしたくなかつたんだ――何でしたいもんかな。」

一方、愛人同志はどん〳〵馬車を進めてゐた。

「ねえ、私たちの結婚を、少し延ばすことは出來ないでせうか？」とテスは味も素氣もない力の拔けた聲で訊ねた。

「若しさうしたければつて意味なんですよ？」

「いゝや、君。氣を落着けておくれよ。彼奴を僕が擲つたんで、後で訴へでもすると思つてゐるのかね？」と彼は上機嫌で訊ねた。

「いゝえ――私はたゞ――若し延ばさなくつちやならないなら、つていふ意味です。」

彼女が何の積りでさう言つたのか餘りはつきりしなかつた。そこで彼は、そんな空想は忘れてしまへと彼女に言ひつけた。彼女は素直に、出來る限り言ひなりに從つた。けれども彼女は家へ歸る途中、ずつと沈んでゐた、ひどく沈んでゐた。そして到頭、「ずつと〳〵遠い、この邊からは何百哩も離れた遠い處へ二人で逃げませう。さうしたらもう二度とこんなやうなことは起る氣遣ひはないし、過去の幽靈だつて其處までやつて來る筈はありませんもの、」と考へるやうになつた。

二人はその夜、梯子の中段で殘り惜しい別れを告げ、そしてクレアは自分の屋根裏部屋へ上つて行つた。後二三日

しかないので、間に合ひ兼ねては大變だと思つて、テスは幾つか細々したものを始末しながら起きてゐた。起きてゐるうちに、頭の上のクレアの部屋で起る物音を聞いた。床を踏み、また苦悶してゐる音であつた。家中の他の者は、みんな眠つてゐた。そこで、若しクレアが病氣になつたのではないかしらと氣掛りになつたので、彼女は閂け上つて行つて、彼の部屋の扉をノックして、どうしたんですと訊ねた。

「あゝ、何でもないんだよ、君、」と彼は內側から言つた。「騷がせて濟まなかつた！　だがその理由はまあ面白いんだ——僕アぐつすり寢てゝ夢を見てたんだ。君を侮辱した彼奴とまた摑み合つてる夢をね。そして君が聽いたのは、今日荷造りしようと思つて引き出した旅行鞄を拳骨で散々ぶん毆つてた音なんだ。僕ア眠つてゐながら、時々こんな氣まぐれをやり出す癖があるんだよ。行つてお寢み、もう心配しないでおくれよ。」

これは、彼女の不決斷の天秤を撥ねさせるに必要な最後のおもしであつた。彼女は自分の過去を口づから彼に告白することは、どうしても出來なかつた。けれども別に方法がない譯ではなかつた。彼女は坐り込んで用箋四頁にあの三四年前の出來事の簡單な敍述を認め、封筒に納めてクレアに宛てゝ宛名を書いた。そこで、弱い氣がまた出ないうちにと思つて、靴も履かないでこつそり階上へ上り、扉の下へその手紙を辷り込ませた。

當然のことながら、その夜は目覺め勝ちであつた。そして頭の上で、最初の微かな音のするのを、聽き耳を立てゝ待つてゐた。

それは平常通り聞えて來たし、矢張り平常通り彼は下りて來た。彼女も下りて行つた。彼は梯子段の下で彼女と出會つて、接吻した。それが何時もの通りの熱い接吻であつたことは確かであつた！

彼がいくらかそわ〳〵して萎れてゐるやうに見えると、彼女は思つた。けれども、彼は二人きりになつた時でも、彼女が打ち明けた事に就いては一言も口に出さなかつた。一體あれを見たのだらうか？　彼から、あの問題に就いて口を切らない限り、自分からは何も言へないと、彼女は感じた。かうして、その日は過ぎた。そしてどう思つたにしても、彼がその事を自分の胸一つに納めて置かうとしてゐることは明かであつた。しかし彼はいつもと變らず率直で優しかつた。彼女の疑ひは子供らしいものだつたらうか？　彼は自分を赦したのだらうか。また實際の自分を知り、ま

さしくさういふ自分として愛し、そして自分の不安を愚にもつかない夢魔を笑ふやうに笑つてゐるのだらうか？　本當に手紙を受け取つたのだらうか？　彼女は彼の部屋を一通り覗き込んで見たが、それらしいものを何んにも見ることが出來なかつた。ことによると自分を赦したのかも知れない。けれども、たとひ彼がそれを受け取らないにしても、屹度自分を赦してくれるだらうといふ熟狂的な信賴を、彼女は急に抱くやうになつた。

每朝每夜、彼は矢張り同じであつた。かうしてゐるうちに、除夜の日、結婚の日は明けた。

愛人たちは乳搾りの時刻にも起きなかつた。といふのはこの搾乳場に逗留するこの最後の一週間といふもの、彼等は客人らしい待遇を受けてゐたし、又テスは特別に彼女だけの部屋を一つ與へられる光榮に浴してゐたからである。朝餐の時に階下へ下りて行つて見ると、前の日に見たのとはすつかり變つて、彼等を祝ふ爲めにどんな趣好がこの大きい豪所に施されてゐたかを知つて、彼等は吃驚した。朝のまだ非常に早い時刻に、主人は、大口を開いてゐる煙出しの隅を白く、また煉瓦の爐を赤く塗らせ、それから燃え立つばかりの黃色い緞子の通風幕を、今まで其處に用を務めてゐた黑い小枝模樣の附いた古い垢染みた藍色の木綿のと取り換へて拱門へ懸けさせた。陰氣な多の朝の、實際この部屋の焦點となつてゐたものをすつかり新しくしたこの光景は、部屋全體ににこ〳〵微笑むやうな樣子を投げた。

「お祝ひに、何かしてえと思つてたんです、」と主人は言つた。「それで、昔この邊でやりましたやうに胡弓や四絃琴をすつかり取り揃へて、一つ大騷ぎをしようと思ひましたんですが、あんたが聞かつしやんねえから、まあ音のしねえものと思つて、精々これだけ考へついたんでさあ。」

テスの一家の者はずつと遠くに暮してゐたから、たとひ誰かゞ招かれたとしても、不便な爲めに一人もこの婚禮の式へ連なる譯には行かなかつた。だが、事實誰もマアロットからは招待されなかつた。エンヂェルの家の方へは、彼から手紙を差し出し、正式にその時刻を知らせ、若しお出で下さる御好意があるなら當日少くとも一人は式に連なつて貰へると、大へんに嬉しい、といふ事を言つてやつた。兄たちは憤慨してゐるものと見えて、更に何とも返事を寄越さなかつた。ところが父と母とからは、何方かと言へば悲しむやうな手紙を寄越し、向う見ずに結婚するなんて早まつたことをしてくれたと嘆きはするが、乳搾り娘のやう

な者を息子の嫁に貰はうとは思ひも寄らないことながら、お前もう自分の事は自分で誰より一番よく判斷することの出來る年齡になつてゐるのだから、それをせめての心遣りとしてゐる、といふ意味を傳へて來た。

クレア家の者のこの冷淡な態度は、近いうちに出して見せて驚かしてやらうと思つてゐた素晴らしいカード札を持ち合せてゐなかつたらクレアの氣を揉ませたかも知れなかつたが、それがあるので、左程でもなかつた。搾乳場からやつと出たばかりのテスを、ダアバァヴィル家の者だ、また淑女だといつて他人前に出すのは無謀であり、危險であると彼は感じてゐた。で彼は、自分と一緒に二三ヶ月旅行もし、また讀書もして世間の風習にも馴れたところで、彼女を連れて兩親を訪問し、かういふ名門の出として少しも恥かしくない者として得意になつて彼等に引き合せながら、實はこれ〳〵と事實を傳へることが出來るやうになる時までは、彼女の素性のことは隱して置いた。少くとも、それは美しい繼人の夢であつた。恐らく、テスの素性は彼だけには、世界中の他の誰にとつてよりも一層尊く感ぜられたであらう。

テスは、直接手紙で知らせてやつたのに、自分に對するエンヂェルの態度が、尙ほ依然として元のまゝで少しも變つてゐないことを知つて、一體あの方はあれを受け取つたのだらうかと、惡いとは知りつゝ疑つた。彼女は、彼のまだ濟ましてしまはないうちに朝餐の席から立ち上つて、二階へ急いだ。長い間クレアの居間、といふよりも寧ろ巢となつてゐた變挺な殺風景な部屋を、もう一度覗いて見ようと不圖思ひ附いた。そこで彼女は梯子を上つてから、開いてゐる扉口の處に立つてよく見廻し、ちつと考へ込んだ。彼女は二三日前ひどく興奮して、手紙を押し込んだ戸口の閾の上に屈み込んだ。絨毯はずつと閾側まで屆いてゐた。そしてその絨毯の下に、彼へ宛てた手紙の入つてゐる封筒の白い緣をちらつと認めた。彼女が急いだ餘り、戸の下へばかりでなく絨毯の下へまで押し込んでしまつた爲めに、彼は明かにそれを見なかつたのである。

彼女は、氣が遠くなるやうな心持で、その手紙を引き出した。それはまさしく——彼女の手を離れた時と同じやうに封じられた儘であつた。行手の山はまだ取り除かれてはゐなかつたのだ。家の中は準備の爲めにごつた返してゐるのであるから、彼女は今、彼に讀んでもらふ譯には行かなかつた。やがて自分の部屋へ下りて行き、其處で手紙を引き

破つてしまつた。

彼が再び彼女を見ると、相手はひどく蒼い顏をしてゐたので心配した。手紙の置場を誤つたといふこの出來事を、彼女は恰も告白を妨げることか何かのやうに早呑み込みしてしまつた。が、心の中ではさうあきらめるには及ばないことを知つてゐた。まだ時間はあつたのだ。しかも何も彼もが混雜の狀態にあつた。出る者があるかと思へば、入る者があつた。主人とその妻君は立會人として附き添ふやうに賴まれてゐたから、みんな着更へをしなければならなかつた。それで思案したりゆつくり話してゐることなどは、殆んど不可能であつた。テスがクレアと二人限りになることが出來たほんのちよつとの瞬間といふのは、彼等が階段で出會つた時だけであつた。

「是非あなたにお話しゝたいんです——私の落度や過失を告白したいんです！」と彼女は努めて平氣を裝ひながら言つた。

「いや、——落度などを話し合ふわけには行かないよ——君は少くとも、今日だけは完全なものと思はれなくてはならないんだ、ねえ君！」と彼は叫んだ。「この先、僕等には自分たちの缺點を話し合ふ時間は幾らでもあらうよ。僕はその時一緒に僕のも打ち明けるよ。」

「でも、今それをした方が、私の爲めにいゝやうに思ひますわ、後になつてあなたが——」

「ぢや、ねえ變人さん、何でもお話し——ねえ、いゝかい、僕たちの宿へ落着いたらすぐにだよ。今ぢやないよ。その時、僕もまたお前に落度を話すからね。だがそんなものゝ爲めに、この日を臺なしにしてしまふやうなことは止さう。そんなものは何れ息屈な時の素晴らしい話になるだらうよ。」

「ぢや私に話させたくないんですの、あなた？」

「ないとも、テッシイ、本當に。」

着更へや出發の忙しさで、もうこれ以上の時間はなかつた。彼の言つた言葉をよく考へてみると、彼女は安心が出來るやうに思はれた。愈々押し迫つた後の二時間、ずつと彼女は何物をも征服する彼への熱愛の潮流で、どん〳〵押し流されて行き、その爲めに、これ以上に默想することなどは禁じられてしまつた。

隨分長い間抑へてゐた、自分が彼のものとなり、彼を自分の夫と呼び、自分のものとしたい——それから、必要とあれば生命も捧げようとした——彼女の一つの願ひは、到頭、迫々しい思案の路から彼女を引き上げてしまつた。着更へ

をしながら、彼女はいろ〳〵の色で彩どられた理想の雲の中を彷徨ひ歩いてゐた。その理想は、輝く光であらゆる不快な一切の出來事を掩ひ隱してしまつた。

教會は遠かつたし、殊に多のことではあつたので、彼等は馬車に乘らなければならなかつた。街道の一軒の宿屋から一臺の箱馬車を仕立てるやうに言ひ付けて置いた。これは、驛傳馬車で旅行した昔から、ずつと今日までその家に藏つてあつたものであつた。頑丈な幅と、重い輪緣と、大きな彎曲した車底と、並外れて大きな革紐と、彈條と、それから掛矢のやうな轅桿がついてゐた。御者は六十になる老人の『別當』――若い時代に餘り體を風雨に晒し過ぎ、強い酒でその補ひをしてゐた結果、慢麻質斯性痛風の患者となつた――で、馬車を駈つて、その仕事をしなくてもすむやうになつてからおよそ二十五年の間、昔の日が再び戻つて來るのを待ち設けてゞもゐるかのやうに、何にもしないで、宿屋の戸口に立ち通して來た男だつた。彼はキャスタブリッヂのキングス・アームズ館（ドーチエスタ州の町に、今もその名で聞えてゐる旅館）に常扉ひになつてゐた長い間に、貴族の馬車の轅桿に擦られ通しで、その爲めに出來た瘢痕ることのない細長い傷を、右足の外側に持つてゐた。

この厄介なぎし〳〵鳴る馬車の中に、またこの衰へた御者の背後に樂しい四人――花嫁と花婿と、クリック夫妻とが座を占めた。エンヂェルは、少くとも兄たちの一人が新郎の附添ひとして來てくれたらよかつたと思つた。けれども、その趣きを手紙で仄めかしてやつても何とも言つて來ないところを見ると、彼等は來るのを厭がつてゐることが分つた。彼等はこの結婚に不贊成だつたから、それを激勵するなぞとは思ひも寄らなかつた。彼等が列席出來なかつたのは或は却つて好都合だつたかも知れない。彼等は世間的な若者たちではなかつた。だから、この結婚をどう考へてゐるかは別問題としても、搾乳場の者たちと一緒になるといふことは、彼等の偏屈な氣むづかしさを、不愉快にするほど傷つけたに相違ない。

テスはこの時の勢ひに呑まれてゐたので、こんなことには少しも氣がつかなかつたし、何んにも見なかつたし、又どの道を教會へ連れて行かれてゐるのかも知らなかつた。エンヂェルがすぐ傍にゐることは知つてゐたが、他のことは一切が輝く靄にすぎなかつた。彼女は謂はゞ詩の中にのみ出て來る天上の人のやうなものであつた――二人が一緒に歩きながら家へ歸る時、クレアがよく彼女に話して聞か

せた、あの古典的な神の中の一人であつた。

この結婚は略式の結婚許可の手續きで行はれるのであつたから、教會には十二人ばかりの人がゐるだけであつた。たとひ千人の人がゐたとしても、彼女にこれ以上の影響を與へはしなかつたであらう。彼等は、彼女の現在の世界からは、星の距離ほども隔つてゐた。彼女が相手に貞節を誓つた時の、我を忘れた嚴かな氣持になつてゐるところを見ると、ありふれた性の感覺などは、一片の雲のやうなものに思はれた。彼等が一緒に跪づいてゐる間に、勤行がしばらく止んで、彼女は思はず知らず彼の方へ體を寄せかけたので、肩が彼の腕に觸つた。彼女は不圖心をかすめた考へに吃驚した。そして彼が實際に其處にゐるといふことを確かめ、また、彼の信實さへあればどんなことが起らうとも大丈夫であると自分の信念を固める爲めの動作が、ひとりでに起つた。

クレアは彼女が自分を愛してゐることを知つてゐた――體のあらゆる曲線がそれを證據立てゝゐた――だが、彼はその時、彼女の熱愛の底深さを、その一途な氣持を、そのやさしさのほどを知らなかつた。またその熱愛が、どれほど長い間の苦しみを、どれほどの正直さを、どれほどの忍耐を、眞實を保證してゐるものであるかを知らなかつた。

彼等が教會から出ると、鳴鐘者は、その掛けてあつた所から鐘を搖り動かした。それで、三拍子のつゝましい響が鳴り出した――その音が一ぱいに出されゝば、こんな小さな教區の慶事にはこれで十分だと、教會建立者が考へてゐた響であつた。門に通ずる小徑を夫と共に、塔の傍を通り過ぎながら、彼女は音波が輪をなして擴がるのを感じない譯には行かなかつた。それは今彼女が呼吸してゐる緊張しきつた心の雰圍氣と競つてゐた。

聖ヨハネが太陽の中に見た天使のやうに、自分から發するのではない光を受けて明るく感じたこの精神狀態は、教會の鐘の音がすつかり消えて、結婚式の感動が落着いてしまふまで續いた。彼女は今になつて始めてこま〴〵したものを一層はつきり見ることが出來た。またクリック夫妻は、二輪馬車で自分たちを迎へによこすやうに命じて、乘つて來た馬車を若夫婦に任せたので、彼女は初めてその乘物の構造や特徴を觀察した。默つて腰掛けたまゝ、彼女は長い間ぢつと眺めてゐた。

「なんだか心が浮かないやうだね、テッシイ、」とクレアは

言つた。

「えゝ、」と額に手を當てながら、彼女は答へた。「私、いろんなものを見て顫へるんです、何も彼ももの〳〵しいことばかりね、エンヂェル。取り分け、この馬車は前に見たことがあつて、よく知つてゐるやうな氣がしますの。ほんとに變だわ——屹度夢で見たに違ひないの。」

「あゝ——お前はダアバァヴィル家の馬車の傳說を聞いた事があるんだらう——この邊で大變に評判だつた時分のお前たち一族に就いて。この地方に傳はつてゐる迷信だがね。で、このがた〳〵の馬車を見て、お前はそれを思ひ出したんだよ。」

「私、そんなことを聞いた覺えありませんわ、」と彼女は言つた。「どんな傳說なの——聞かして下さらない？」

「さうだね——今のところは、あんまり詳しく話したくないんだ。十六七世紀頃の或るダアバァヴィル家の者が、そのお抱への馬車の中で恐ろしい罪を犯したといふんだよ。その時から、この一家の者がこの古い馬車を見たり、またその音を聞いたりする時にはいつでも——だが後日で話さう——少し陰氣な話だから。屹度、それに就いての漠然した記憶が、この古い馬車を見た爲めにお前の心へ蘇返つて來たんだよ。」

「私、そんな話を前に聞いたやうには憶えてゐませんわ、」と彼女は囁いた。「私の一族の者がそれを見るのは、死なうとしてゐる時でせうか、エンヂェル、それとも私達が罪を犯した時なんでせうか？」

「さあ、テス！」

彼は接吻して彼女を默らせた。

彼等が家へ歸つた頃には、テスは後悔してゐて元氣がなかつた。彼女はなるほどエンヂェル・クレア夫人に相違はなかつた。が、彼女はこの名に對して幾分でも道德上の資格を有つてゐたであらうか？ アレキザンダア・ダアバァヴィル夫人といつた方が、一層本當ではなかつたか？ 戀の强さは、正しい人にあつては責むべき罪の隱蔽と思はれさうなことを是認し得るだらうか？ 彼女は、かうした場合に、女はどういふ態度を採るべきかを知らなかつた。それに相談相手が全くなかつた。

だが、二三分の間に自分の部屋に一人きりでゐるのに氣がつくと——この部屋へ入るのも今日が最後である——彼女は跪づき、そして祈つた。彼女は『神』に祈らうと努めた。けれども、本當に彼女の歎願の的となるものは、自分

の夫であつた。この人に對する彼女の崇拜は非常に强かつたので、それが何かの凶兆なのではあるまいかと、彼女は我ながら心配した。彼女は、ロオレンス僧正が言つた次の言葉に思ひ到つた——『かゝる烈しき歡喜は烈しき最後を見ん。』（シエークスピヤの「ロメオとジュリエット」中にある僧正の言）それは人間の境涯にとつては餘りに無謀だつたかも知れなかつた——餘りに濃厚であり餘りに放奔であり、餘りに致命的であつたかも知れない。

「あゝ、あなた、何故私はこんなにあなたが戀しいんでせう！」彼女は其處にたつた一人きりで囁いた。「あなたの愛していらつしやる女は、本當の私ではなくて、私の姿をした女なんです。嘗つて私がさうだつたかも知れない女なんです！」

午後になつた、そして出發の時刻が來た。彼等は、ウェルブリッヂの水車場に近い古い農家に二三日宿をとるといふ豫ての計畫を實行しようと決心してゐた。彼は粉挽きの作業を研究する間、其處に住んでゐる積りであつた。二時になるともうすることは何もなく、たゞ出發するばかりになつてゐた。搾乳場の雇人たちは、見送る爲めに赤煉瓦の入口の內側に立つた。主人とその妻君も戶口まで送つて出た。テスは三人の部屋仲間の者が一列になつて、塀に凭り掛り、悲しさうに頭を垂れてゐるのを見た。別れ際に彼女たちは姿を見せるかどうかをひどく疑つてゐたのであつたが、彼女たちは最後まで堪へ忍び、しつかりとして其處に姿を現はしてゐた。彼女は、何故優しいレッティがそんなに弱々しく見え、イズがそんなに慘めに悲しさうに見え、またマリアンがそんなに氣拔けしたやうに見えるのかをよく知つてゐた。そして彼女たちの不幸を思ひ遣つてゐるので暫くの間彼女は、何處までも附纏つて來る自分自身の不幸を忘れてゐた。

彼女は思ひつくまゝに、彼へ耳打ちした——

「これが後にも先にもたつた一度ですから、可哀さうに、あの方たち皆に、接吻して上げて下さいませんか？」

クレアはさういふ離別の形式——彼にとつては形式に過ぎなかつた——に反對もしなかつた。そこで彼女たちの前を通りすがる時、立つてゐる彼女たちに順々に接吻して、一々『さよなら』を言つた。二人が戶口の處へ來た時、テスは女らしくそのお慈悲の接吻の效果を見ようとしてちらと振り返つたが、その眼の中には、勝利の色があつてもいい筈だつたがまるでなかつた。若しあつたとしても、どれ程この少女たちが感動してゐるかを見たならば、忽ち消え

てしまつたであらう。今の接吻は、彼女たちが努めて鎭めようとしてゐた感情を呼び覺して、明かに悪い結果を齎したのであつた。

こんなことには、ちつともクレアは氣が附かなかつた。耳門の方へ出て行きながら、彼は主人とその妻君とに握手を交はし、彼等の厚遇に最後の感謝を表はした。それが濟むと、二人が立ち去るまでしばらくの沈默があつた。それは、牡鷄の鬨をつくる聲で破られた。赤い鷄冠をもつた白い牡鷄がやつて來て、家の前の彼等から二三碼足らずの處にある柵の上にとまつてゐた。そしてその聲は、彼等の耳をつんざいてぞつとさせ、溪谷の底へ斜するやうに消えて行つた。

「おや？」とクリックの妻君は言つた。「晝鳴きだよ！」

二人の男が、庭の門の處に立つて、それを開けて抑へてゐた。

「こりやいかんぞ、」一人は耳門の處にゐる一團の者にその言葉が聞えることも考へないで、他の一人に囁いた。

牡鷄はまた鳴いた——クレアの方へ眞直に向つて。

「はてな！」と主人は言つた。

「私、あれを聞きたくありませんわ！」とテスは夫に言つた。

「馬車を出すやうに、御者に言つて下さい。さよなら、さよなら！」

牡鷄はまた鳴いた。

「しつ！　さつさと行つちまえ、こん畜生、行かねえと首つ玉振り上げるぞ！」主人は少し憤慨して、鷄の方を向いて追ひ立てながら、言つた。そして彼等が家へ入つた時、妻君に向ひながら——「なあ、日もあらうに、今日あんなことがあらうなんて！　俺はこれまで一年中彼奴の晝鳴きを聞いたことアねえぜ。」

「たゞお天氣が變るつてことだけだよ、」と彼女は言つた。「お前さんが考へてるやうなことぢやないよ——そんなことがあつて堪るもんかね！」

三四

彼等は、この溪谷に沿うた平垣な道を二三哩ばかり驅けてウェルブリッヂに着くと、村から左へ折れ、半ばその名に依つてこの土地を世間に知らせてゐる大きなエリザベス朝式の橋を渡つた。すぐその後に、宿をとつて置いた家が建つてゐた。その家の外觀は、このフルウム盆地を通り抜ける旅人とはお馴染になつてゐた。曾つては立派な莊園の邸宅の一部であり、ダアバアヴィル家の或る分家の所有地で、またその住居でもあつたが、その一部が破損してしまつてからは、ずつと農家になつてゐた。

「先祖のお屋敷の一つへようこそお出でを！」とクレアは彼女を下してやりながら言つたが、この輕口を後悔した。それは、餘りに諷刺に近かつたからである。

屋内へ入つてみると、彼等は二間だけを借りることにしてあつたのに、主人は彼等の來るのを利用して、これから幾日かの間友達のところへ年始廻りに出掛け、後には二人の身の廻りの僅かな用事を世話する爲めに、近所の農家から女を一人頼んであるのを知つた。すつかり獨占の出來たことを二人は喜んだ。そして、自分たちだけの棟桁の下で味ふ經驗の第一歩として、つく〴〵それを嬉しく思つた。

けれども、彼はこのむさ苦しい古い住居が、何となく花嫁の氣を腐らしてゐるのを知つた。馬車が歸つてしまふと、彼等はその傭女に導かれて、手を洗ひに二階へ上つた。丁度上り口に來たとき、テスはそこへ立ち止つて眼を見張つた。

「どうしたの？」と彼は言つた。

「まあ、なんて怖い女たち！」と彼女は笑顏をして答へた。

「私、吃驚しちまつたわ。」

彼は見上げた。そして石壁の中へ造り附けてある鏡板の上に二つの等身大の肖像畫を見附けた。この屋敷を訪れる者は誰でも氣のつくこの二板の繪は、二百年ばかり前の中年女を描いたもので、その相貌を一度見た者は決して忘れることが出來ないものであつた。一人の細長い尖つた容貌、細い眼と作り笑ひは無慈悲な陰險さを現はしてをり、もう一方の鉤鼻と大きな齒、それからぎよろ〳〵した眼は兇猛と思はれるまでの尊大さを現はしてゐて、後で、これを見た者の夢にまで出沒するのである。

「あれは、誰の肖像かね？」とエンヂェルは、傭女に訊ねた。

「年寄りから聞いたんですが、ありやこの莊園の昔の主だつちふこつてすよ。何でもダアバアヴィルとかいふお家の淑女方ださうです。」と彼女は答へた。「壁の中へ造り附けてある爲めに、どうしても取つてしまへねえんでございましてね。」

この肖像がテスの心を傷めた上に、尙は不愉快なのは、彼女の美しい容貌が間違ひなくこの肖像畫の誇張した相貌

の中に認められるといふことであつた。が、彼はこのことに就いては何も言はないで、新婚の時を送らうとしてこんな家を選んでしまつたことを後悔しながら、隣りの部屋へ入つて行つた。其處は、二人の爲めにと急いで準備されたもので、彼等は一つ金盥の中で手を洗つた。クレアは、水の中で彼女の手に觸つた。

「どれが僕の指で、どれがお前のなんだね？」と彼は顔を上げながら、言つた。「すつかりごつちやになつてしまつてるから。」

「みんなあなたのですわ、」と彼女は極めて巧みに言つて、實際よりは陽氣にしようと努めた。彼は、こんな場合に彼女が思ひ沈んでゐるのを不愉快には思はなかつた。それは分別ある女なら誰でも見せることであつた——だが、テスは、思ひに耽り過ぎてゐたと知つて、もうさうはなるまいと焦つてゐた。

太陽は、一年中の最後の短いその日の午後ももうずつと低く傾いてゐたから、その光線は小さな隙間を洩れて差し込み、黄金の杖の形をしてずつと彼女の下袴へ届き、そこへペンキ標のやうな點を作つた。二人は茶を飲みに古風な應接間へ入つて行つた。そして、此處で初めて二人限りで

食事を共にした。彼等の、いや寧ろ彼の子供らしさは、彼女と同じ一枚のパン皿を使つたり、彼女の唇のパン屑を自分の唇で掃つたりするのを面白がるといふ風であつた。彼は、相手が自分と同じ熱度でかういふ冗談事に打ち興じないのを、少し訝つた。

暫くの間默つてつく〳〵と彼女を見ながら、「この娘は可愛い、可愛いテスなんだ、」と恰も難しい章句の本當の解釋を決めでもする人のやうに、自分に言つた。「僕は、この可愛らしい人形見たいな女が、どれ程心から、また拔き差しならないほどに、善かれ惡しかれ僕の信仰や運命のまゝになつて行く者であるかを、十分眞面目に感じてゐるだらうか？　感じてゐないやうに思ふ。僕自身が女でない限りは、出來ないのぢやないかと思ふ。彼女は僕がどんな世間的な境涯にあらうとも、そこへまたついて行く。僕のなるものに、この娘もなるに違ひないのだ。僕のなれないものには、この女もなれないのだ。そして一體僕はいつかこの女を疎んじたり、或はこの女の感情を害したり、又はこの女を忘れるやうなことさへあるだらうか？　どうかそんな罪は犯さないように！」

彼等は、茶卓を圍んで搾乳場の主人が暗くならないうち

に届けると約束した荷物の着くのを待つてゐた。けれども日は暮れかけたが、荷物は着かなかつた。彼等は着たまゝで、餘分には何にも持つて來てゐなかつた。太陽が沈むと同時に、冬の日の靜かな氣分は變つて來た。戸外には丁度意氣な衣ずれのやうな音が始まつた。この秋の靜かな枯葉が焦れつたさうに掻き起されて、ざわつき、厭々ながら舞ひ上り、そして鎧窓をばら〳〵と叩いた。間もなく雨が降り出して來た。

「あの牡鷄は天氣が變るのを知つてゐたんだな、」とクレアは言つた。

彼等の給仕をしてゐた女は、自分の家へ泊りに歸つて行つてしまつた。けれどもテーブルの上へ蠟燭を置いて行つてくれたので、それに火を點けた。蠟燭の炎は、一樣に爐の方へ靡いた。

「かういふ古い家は隙間だらけだね。」エンヂェルは、炎と蠟燭の側を傳はつて垂れ落ちる溶蠟を見ながら、言ひ續けた。「あの荷物は何處へ行つてゐるんだらうな。刷毛や櫛さへないんだからね。」

「私には分りませんわ、」と彼女は、茫然して答へた。

「テス、お前今夜はちつとも元氣がないやうだね——全く何時ものやうでないよ。二階の鏡板のあの鬼婆がお前の心を亂したんだ。こんな處へ連れて來るんぢやなかつたよ。一體、お前は本當に僕を愛してゐるのか知ら？」

彼は、彼女が愛してゐることは知つてゐた、そしてこの言葉は少しも眞面目で言つたのではなかつた。けれども、彼女は情緒がこみ上げて來て、胸が一杯になり、傷ついた動物のやうに縮み上つてしまつた。涙を流すまいと努めたが、どうしても一滴又一滴見せない譯には行かなかつた。

「本氣で言つたんぢやないんだよ！」と彼は後悔して言つた。「お前は荷物が來ないんで心配してゐるんだらう。どうしてヂョナサンの爺やが持つて來ないのか、僕には理由が分らない。もう七時ぢやないか？　あゝ、いよ〳〵やつて來た、爺やが！」

戸口でノックする音がしてゐた。誰も他に取次ぐ者がゐなかつたから、クレアが出て行つた。彼は手に小さな包みを持つて部屋へ歸つて來た。

「なあんだ、ヂョナサンぢやないんだよ、」と彼は言つた。「何んて焦れつたいんでせうね！」とテスは言つた。

この包みは特別仕立ての使者が持つて來たのであつて、エミンスタアの牧師館からタルボセイズに着いたが、この

包みは二人以外の誰の手にも渡してはいけないといふ命令を受けてゐたので、すぐ彼等の後を追つて此處まで來たのであつた。クレアはそれを燈火の下へ持つて來た。長さ一呎足らずのもので、ズックで包まれて、父親の印の附いた赤い封蠟で封じられ、父親の手蹟で『エンヂェル・クレア夫人へ』と宛てゝあつた。

「これはお前へ宛てた、一寸した婚禮の贈物だよ、テス、」と、彼は包みを彼女へ手渡しながら言つた。「何て氣のつく人たちだらう！」

テスはそれを手に取つた時、多少面喰つたやうな風であつた。

「私、あなたに解いて頂きたいと思ひますわ、ねえあなた、」と彼女は、包みの裏を返しながら言つた。「私、こんな大きな封印を破るのは厭です、怖いやうで。代つて解いてねえ！」

彼はその包みを解いた。中にはモロッコ皮の函が入つてゐて、その上に手紙と鍵とが載つてゐた。

手紙はクレア宛のもので、次のやうに認めてあつた。

御機嫌は如何——御身がまだ少年であつた折、御身の名づけ親ピトネース夫人が逝かれる時、その方——派手好みの親切な婦人だつた——が、自分の寶石筐の中味の一部分を拙者に託され、御身が他日妻を娶る場合、御身と、誰なり御身の選ぶ者とに對するあの方の親愛の印に御身の妻に贈つて欲しいと、殘して行かれたことを多分御身は忘れてゐられることゝ思ふ。拙者はこの依頼を引受け、それ以來、その金剛石は取引の銀行家に固く預けて置いた。事情を考へてみると、幾分失當の振舞ひと感ぜぬではないが、御身も知る通り、拙者は、今となれば、金剛石の使用權が生涯正しく屬することになる婦人に、その品を手渡さなければならなくなつてゐる。だから早速御送りした。嚴密に言へば、この品は御身の名づけ親の遺言狀の條件に從つて、相傳動產になることゝ信ずる。この事に關した條項の精しい言葉は、中に封入して置いた。

「さうだ、そんなことがあつた、」とクレアは言つた。「だがすつかり忘れてゐた。」

筐を開けて見ると、中には頸飾りや腕環や耳環や、それから又、他に細かい裝飾品と一緒に入つてゐた。

テスは、最初それに觸れるのを憚かつてゐるやうに見えたが、クレアがその一擶ひを擡げた時には、暫らくの間、彼女の眼はその寶石同樣に輝いた。

「これが私のものですか？」と彼女は信じられないと言つたやうに訊ねた。

「さうだとも、確かに、」と彼は言つた。

彼は爐の火をぢつと見入つた。彼がまだ十五歲の少年だつた時、彼の名づけ親の地主の妻君——自分が今までに知るたつた一人の金持だつた——が、どんなに自分の成功を信じ、また自分の爲めに素晴らしい成功を豫言したかを思ひ出した。かういふ派手な裝飾品を彼の妻やその子孫代々の妻たちの爲めに貯へるといふ事には、さうした臆測の成功と少しの不調和もないやうに思はれた。寶石は今、何となく皮肉に閃めいた。「だが何故？」と彼は自問した。もとよりこれは全然虚榮の問題に過ぎない、若しそれを夫婦といふ方程式の一方に入れるとしたら、もう一方にも入れてよい筈である。自分の妻はダアバアヴィル家のものだ——果して誰が彼女以上にこの裝飾に似つかはしいといふのであるか？

突然、彼は熱を籠めて言つた——

「テス、着けて御覽——着けて御覽！」そして彼は、手傳つてやる爲めに爐の火から顏を反向けた。

が、恰も魔術にかゝりでもしたかのやうに、彼女はもうそれを身に着けてゐた——頸環も、耳環も、腕環もそれから何も彼も。

「だが長上衣が本式でないね、テス、」とクレアは言つた。「そんな金剛石の擶ひを着けるには、胸部の開いたやつでなければいけないんだよ。」

「さうなの？」とテスは言つた。

「さうだよ。」と彼は答へた。

彼は、ほゞ夜會服の仕立方に似通つたものとする爲めに、彼女の胸衣の上部をどんな風に縫ひ込んだらいゝかを彼女に教へた。そして、彼女がその通りにし、頸環についた垂飾りが註文通りに彼女の咽喉の眞白なところにぽつりと下つた時、彼は後へ身を退いて、彼女を眺めた。

「やあ素敵だ、」とクレアは言つた。「何て、美しいんだらう！」

誰も知つてゐる通り、綺麗な鳥も綺麗な羽毛故で、質素な樣子と質素な身裝をしてゐれば、通りすがりの人の眼にはさほど美しいとも見えない百姓娘でも、『人工』のあらん限りの助けを借りて流行界の婦人のやうに裝ふならば、驚く

べき美人となつて咲き出ることであらう。が一方、夜半の舞踏會にあらはれる美人も、百姓女の野良着を纏はせ、曇つた日に單調な蕓菁畑に立たせたならば、往々見すぼらしい姿しか見せないであらう。彼は今まで、テスの肢體や容貌の、化粧姿の秀れて麗はしいのを認めたことがなかつた。

「お前がそれで舞踏室へ現はれさへしたら！」と彼は言つた。「いや、さうぢやない——さうぢやない、ねえお前。僕は、垂附の帽子を被り、木綿の上衣を着てゐるお前が一番好きのやうだ——さうだ、かうした身裝よりずつと好きだ。かういふ裝飾をしてゐても、ちつとも品位負けはしないがね。」

テスは、自分が素晴らしい身裝をしてゐると思ふと、心が躍つて顔を赧らめたが、まだ幸福を感ずるといふ譯には行かなかつた。

「私、脫ぎますわ、」と彼女は言つた。「ヂョナサン・ケイルに見られるといけないから。私には似合はないでせう、ねえ？私、賣つてしまはなくちや、と思ふんですけれど？」

「もう少しその儘でおいでよ。賣るんだつて？　いけないよ。そんなことをしたら、信頼を裏切ることになるからね。」

彼女は思ひ直して、易々と從つた。彼女には話すことがあつた。そしてかういふ裝ひをしてゐるといふことが、その際何かの足しになるかも知れなかつた。彼女は寶石を着けたまゝで、腰を下ろした。そして二人はまた、一體ヂョナサンは荷物をもつて何處を歩いてゐるのだらうかと、推測に耽つてゐた。彼が來たら飲ませようと思つて、注いで置いたビールは、何時までも置いた爲めに、氣が脫けてしまつた。

それから間もなく、彼等は側卓子に用意してあつた夕食を始めた。食事がまだ濟まないうちに、爐の煙がぱつと一揺れして、立ち昇る煙の渦卷が、恰も巨人の手で煙突の頂上をちよつと蓋でもされたかのやうに、部屋の中に舞ひ擴がつた。それは、外側の扉が開いた爲めであつた。重々しい足音が廊下に聞えて來た。そこで、エンヂェルは出て行つた。

「いくら敲いても、どなたも一向聞きつけてくれませんもんで、」とヂョナサン・ケイルは辯解した。といふのは、足音が聞えて來たのはヂョナサン・ケイルだつたからである。「それに、外にや雨も降つてますんで、勝手に戸を開けましただ。旦那、荷物を持つて參りやしたよ。」

「無事に屆いたんで何より結構だ。が、隨分遲かつたなあ。」

「へゝ、さうでやすな旦那。」

ヂョナサン・ケイルの口調には、晝にはなかつた何か沈んだやうな調子があつた、また前額には、寄る年の皺の上に心配の皺も刻まれてゐた。彼は言葉を續けた——

「あなた樣とあなた樣の奥樣——と、かう今ぢや申しやすが——が、今日の午後お發ちになつてからでさあ、搾乳場ではすんでの事にえらい恐ろしい愁傷事になりかけた事がありやして、わし達みんなぶつたまげちまつたですよ。旦那、あの牡鷄の晝鳴きをお忘れぢやありますめえね？」

「おい、どうしたんだ、——何が——」

「はい、あれは、これ〳〵の兆せだといふ者もあれば、いやこれ〳〵だと言ふ者もありまさあ。が、その持ち上つたことつていふのは、可哀さうにレッティ・ブリッドルが、身投げして死なうとしやしたんで。」

「まさか！　本當かい！　だつて、あの娘は他の者と一緒に僕達にさよならを言つたが——」

「さうでやすな。で旦那、あなた樣と奥樣——と、かう天下晴れておなりになりましたから申しやすが——わしの申しやす通り、あなた方お二人がお出掛けになりますてえと、レッティとマリアンとが帽子を被つて、戸外へ出て行きやしたぢ。丁度除夜のことで、大した仕事もなし、連中は心からほろ醉ひ機嫌になつてゐたんで、誰も大して氣にも止めなかつたぢね。二人は眞直にリュウ エバラァドへ行つて幾らか飲り、それからドリー・アームド・クロスへ突つ走つて、そこで、二人は分れたらしいんでがすよ。レッティは家へ歸るやうな風して、じめ〳〵した牧場を突ん拔けて行き、マリアンは別な居酒屋のある隣村へ行つたんでさあね。それから先、レッティがことはさつぱり分らなかつたですが、船頭が我家へ歸り途に大沼の傍に何だかあるのを見つけましたぢ。そりやあの娘の帽子と肩掛で、丸めてあつたんでさあ。船頭は水の中にあの娘を見つけやした。船頭とも一人の男と、もう死んでゐると思つてあの娘を家へ運んで來やしたが、だん〳〵生き返つて來ましたぢ。」

エンヂェルは急に、テスがこの陰氣な話を立ち聞きしてゐるのに氣がついて、廊下と奥の間に續いてゐる次の間の戸を閉めようとその方へ行つたが、彼の妻はもう體の周りに肩掛を羽織つて、外側の部屋へ出て來て、眼を荷物とその上にきら〳〵光つてゐる雨滴に茫然向けながら、この男の話に聞き入つてゐた。

「で、そこへ持つて來て、マリアンですがね。あの娘は、絹柳の生えてゐる沼地の傍にずぶろくに醉ひ潰れてゐる所を見附かつたぢゃね——顏を見ても分る通り、あの娘は平常食ひしんぼの女にや違えありませんが、酒類と來ちやこれまでに志ビールの外は手に觸つたことアねえてんで通つてましたぢがね。見た所、娘達アみんな氣が變になつちまつたらしうがすー」

「そしてイズは？」とテスは訊ねた。

「イズは何時も通り家にゐやすが、なんでこんなことになつたんか、分るつて言つてますよ。それ考へてひどく鬱いでゐるらしいでがすよ、可哀さうに、無理もねえけど。そんなわけでやして、あなた樣の荷物二つ三つ、それに奥樣の寢衣やお化粧道具を荷車に積み込んでる丁度そん時、こんなことが持ち上りやしたんで、わしも後れてしまつたぢゃね。」

「さうかい。時にヂョナサン、そのトランクを二階へ上げてくれないか、それからビールを一杯引つかけて、出來るだけ急いでお歸りよ、彼方に用が出來るといけないからね。」

テスは奥の間に引つ返し、爐の火の傍に掛けて、惱ましさうにぢつとその火を見入つてゐた。彼女は、荷物を始末してしまふまで、梯子段を上つたり下りたりするヂョナサンの重い足音を聞いた。それからまた自分の夫が取り出してやつたビールや、與へられた祝儀に彼がお禮を言つてゐるのを聞いた。やがてヂョナサンの足音が、戸口から遠のいて消え、荷車が遠く軋り去つた。

エンヂェルは太い樫の門を挿して戸を固め、彼女が爐に屈み込んで掛けてゐる處へ入つて來て、背後から兩手で彼女の兩方の頰を挾んだ。彼は相手が快活に跳り上つて、あれほど待ちあぐんでゐたのだから、すぐに化粧道具を解くことだらうと思つてゐたが、彼女は立ち上りもしなかつたので、彼は、爐の火の輝いてゐる彼女の傍へ掛けた。夕食のテーブルの上の蠟燭は、爐の火の輝きを邪魔するには、餘りに細くなり、そしてちら〳〵顫つてゐた。

「殘念なことをした、お前にまで娘共のあの悲しい話を聞かしてしまつてね。」と彼は言つた。「だが、そんなことで氣をくさらしちやいけないよ。あの通り、レッティは生れつき病的なんだからな。」

「ちつとも原因がないのにね、」とテスは言つた。「だのに、さうなる原因のある者は、それを隱してさうらしくない風を裝つてゐたんですわ。」

この事件は、テスの心の秤を一變させた。彼女たちは單純な無邪氣な女であつたのに、報いられぬ戀の不幸を背負つた。彼女たちは『運命』の御手でもつと好遇されていゝ筈であつた。自分こそもつと虐待されるべきであつた。——それだのに自分は選ばれた者となつた。償ひをしないですべてを取るのは罪の深いことだ。自分は償はう、最後の一厘までも。自分は告白しよう、此處で今直ぐ。彼に手をとられ、爐の火に見入つてゐる時に、この最後の決心に彼女は行き着いた。

もう焰の立たなくなつた奥から發する强い耀きが爐の兩側面と背面とを、またよく磨かれてゐる薪架や、合はない古い眞鍮の火箸を、てら〳〵と光る色で塗つた。爐棚の下側や火に最も近いテーブルの脚は、はつきりした光で照り輝いた。テスの顏や頸にはこの同じ溫い光が反射した。その光を受けて、一つ〳〵の寶石は、金牛星や天狼星——白や赤や綠に閃めく星座に變つた。そして彼女の心臟が鼓動する度に、その色が入り混つてきら〳〵輝いた。

「今朝、僕たちの過失を告白し合はうと言つたことを覺えてゐるかい？」彼女がまだ動かないでぢつとしてゐるのに氣がついて、彼は突然かう訊ねた。「まあ冗談のつもりで言つたんだね。そして元よりお前は冗談に言つたんだらう。だが僕に取つちやありや好い加減の約束ぢやないんだよ。僕はお前に告白したいんだ、ねえ、お前。」

彼の方からかう言ひ出すとは、全く思ひ掛けない、願つたり叶つたりのことで、彼女には天祐の仲立とも思へる力があつた。

「何か告白しなくつちやならないんですつて？」と彼女は直ぐに嬉しさうな、救はれたやうな樣子さへ見せて言つた。「思ひ掛けないことだつたらうね？　さうだ——お前は僕を買ひ被つてゐたんだ。さあお聞き、頭を其處へ當てゝね、僕は寬恕して貰ひたいんだからね。また前に打ち明けなかつたからつて怒つて貰ひたくないんだからね。尤も打ち明けて置くべき筈だつたんだらうが。」

何といふ妙なことだらう！　この人は自分の生寫しみたいだ。彼女は默つてゐた。そこでクレアは話を進めた——

「僕が今迄それを打ち明けなかつたといふ理由は、お前といふ、ねえお前、僕の一生の大きた寶——僕に言はすればお前は特待校資格さ——を手に入れる機會を無くしたくなかつたからだ。兄の特待校資は大學で得たんだが、僕のはタルボセイズの搾乳場だ。いゝかい、僕はそれを危くし

たくなかつたんだ。一ヶ月前——お前が僕のものになつてくれる約束をした時——に打ち明けようとは思つたんだがどうしても出來なかつた。それを話したら、お前は驚いて僕から逃げてしまひはすまいかと、思つたんだ。告白するのを延ばした。それから昨日お前に話さうかと考へたんだ、話せば少くとも、僕から逃れる機會をお前に與へることになる。だが、僕は話さなかつた。それから僕は、今朝梯子の中段でお互ひの過失を告白し合はうと約束した時も、話さなかつた——僕は實際罪を犯してゐたんだ！　だが、お前が其處に如何にも嚴かに掛けてゐるのを見ると、僕は打ち明けないではゐられない。僕を赦してくれるかしら？」

「えゝ赦しますとも！　私は屹度——」

「さうか、さうして欲しい。だが、ちよつとお待ち。お前は知らないんだ。まづ事の發端から始めるよ。僕の父は可哀さうに、僕の主義が主義だから僕を永遠に失はれた人間ぢやないかしらと想像してるがね。僕は無論、テス、お前に劣らず立派な道德の信奉者だよ。僕は人々に教を說く者にならうと常に望んでゐたんだ。だから、教會へ入ることが出來ないと知つた時は、非常に落膽した。僕は清淨無垢を讃美した、たとひそれを要求する權利はなくともだ。それから不純、不貞を憎んだ、今日でもさうしようと望んでゐるが。十全靈感（聖書に書かれてあることは、凡て神の靈によるものだといふ說）といふことには異論があるとしても、人は心から、ボーロの次の言葉には衷心から贊成しなければならない——『兩人の師表たれ——言語に於いて、會話に於いて、慈善に於いて、精神に於いて、信仰に於いて、純潔に於いて。』我々哀れな人間にとつては、これが唯一の護衞兵だ。『正しき生涯』と聖ボーロとは妙な取り合せであるが、羅馬の一詩人（ホレースのこと。次の句は、彼の「オード」から採つたもの）は言つてゐる——

過失に汚れず、正しき生涯を送る人こそムーア種族の
振るとかいふ槍も弓矢もその要あらじ。

ところで、何處やらは思ふばかりで實行の伴はない願望で敷きつめてあるさうだ。（何處やらは地球のこと。この句は諸國に風に流布してゐたもので、ジョンスン博士も口にしたことは、傳記作者ボスウエルが傳へる所である）さういふことを何も彼も強く肝に銘じてゐたのだから、他の人々の爲めといふ立派な目的を抱いてゐながら、その自分が躓き倒れてしまつた時、どんな烈しい悔恨の念を胸に抱いたかはお前にも分るだらうね。」

彼はそれから、既に前置きして置いた生涯の一時期、倫

敦で疑惑と艱難とにさいなまれて、恰も水に浮んだ栓のやうに漂々浪々してゐる中に、或るいかゞはしい女と二日二晩に亙る放蕩三昧に耽つた時のことを、彼女に話した。

「仕合せなことに、僕は直ぐにと言つてもいゝ位ゐに、自分の愚かさに眼が覺めた。」と彼は續けた。「その女ともう一言も口を利くのがいやになつて、家へ歸つて來てしまつた。二度と再びそんな罪は繰り返さなかつた。ところで、僕は飽くまで男らしく、禮をつくしてお前に接したいと思つた。さうするにはこれを話さなければならないんだ。赦してくれるかい？」

彼女は彼の手を堅く握つて答へに代へた。

「では、そんなことは今すぐ、また永久に水に流してしまはうね！　實際、あんまり痛ましいことで、今のやうな場合には不向きだ——で、何かもつと浮き立つ話をしよう。」

「まあ、エンヂェル——私嬉しい位ゐ——だつて今度はあなたが私を赦して下さることが出來るんですから！　私まだ自分の告白を濟ましてゐません。私にも告白がありますわ——覺えてゐるでせう、さう言つたのを。」

「あゝ、確かに。ぢや今度はそれだ、この意地惡さん。」

「あなたは笑つてお出でゞすが、眞面目な點では大方あなたのと變りがないでせう。いえ、それよりもつとひどいかも知れませんわ。」

「もつとひどいなんて譯のある筈がないよ、お前。」

「筈がないつて——えゝ、ほんとにそんな筈はありませんわね！」彼女は希望をつないで嬉しさうに跳び上つた。「ほんとにもつとひどい筈はありませんわ。」と叫んだ。「全く同じなんですもの！　ではお話しゝます。」

彼女は再び腰を下ろした。

彼等の手はまだ組み合されてゐた。火格子の下の灰は、爐の火に眞上から照らされて、燒野のやうに見えた。空想に耽る者の眼には、この眞紅な炭火の輝きも『最後の審判の日』の怪光と見えたかも知れない。それは彼の顏や手の上に、また彼女の上に落ち、彼女の額の邊のほつれ毛へ射し込み、その下の細かい皮膚を輝かした。彼女の姿の大きな影が壁と天井とに浮き上つた。彼女は前へ屈んだ、すると、頸にかけてゐる金剛石がみんな蟾蜍がするやうな氣味の悪い瞬きをした。それから彼女は前額を彼の額顏に押しつけたまゝ、アレク・ダアバヴィルと知るやうになつた事やその結果に到る身の上話を語り始めた。隱しもしないで言葉を囁きながら、また眼瞼を垂れて打ち萎れながら。

第五編　女は償ふ

三五

彼女の物語は終つた。それは繰り返されたり、説明が補はれたりさへした。テスの聲は始めから終りまで、最初の調子より高くは殆んどならなかつた。假にも辯解めいた文句などは言はなかつた、そして彼女は泣きもしなかつた。

けれども、彼女の告白が進むに連れて、外界の事物さへその表情を變化させないではゐないやうに見えた。火格子の火は鬼の子——恰も、テスの困つてゐる場合など少しも構はないといつたやうに、意地惡く、可笑しな風に見えた。爐圍ひは、これも冷淡に構へて、歯をむき出して徒らに苦笑ひをしてゐた。水瓶から反射する光は、たゞ色彩の事にばかり心を向けてゐた。周圍の物はどれもこれも、怖ろしい話の反復には責任がないことを申し立てた。しかもクレアが彼女を接吻してゐた瞬間から、何一つ變化したものはなかつた。いや寧ろ何一つ物の實質の變つたものはなかつた。だが物の精はもう變つてしまつてゐた。

彼女が話を止めると、今まで仄かに聞えてゐた諦言の印象が、二人の頭腦の隅々へ先を競つて逃げ込み、實に馬鹿馬鹿しい、半盲目時代から來る反響となつて、聞えて來るだけであつた。

クレアは見當ひの動作であるが爐の火を掻き立てた。彼には話の意味がまだすつかり呑込めてゐなかつた。彼は燠を掻き立てゝから、つと立ち上つた。女の告白が今やつと強い力で彼に傳はつたのであつた。彼の顔は蒼ざめてゐた。彼は考へを集中しようと努めて、矢鱈に床を踏んだ。彼はどんなに骨を折つて見てもしつかりと考へることが出來なかつた。無意味にもぢ〳〵してゐるのは、その爲めだつた。ものを言つても、それは彼女が今迄に聞いた、變化の多い調子のうちでも一番不十分な、平凡な聲であつた。

「テス！」

「え、あなた。」

「僕はこれを信じなけりやならないのかね？　お前の擧動から見ると、それを眞實と取らなければならない。あゝ、まさかお前は氣が狂つてゐるんぢやあるまいねえ！　當然狂つてゐなくちやだが、狂つてはゐないんだ……ねえお前テス——お前の身には何にも、そのやうな事實の假定を證據立てゝゐるものはないぢやないか？」

「私、氣なんか狂つてはをりません、」と彼女は言つた。

「それでも——」彼は茫然彼女を瞶め、眩暈を感じてゐるやうな氣持で、言葉を續けた。「何故お前はそれを前に言つてくれなかつたんだ？　あゝ、さうだ、前に言はうとしたんだな、ちよつと——だが、僕がそれを留めてしまつたんだ。よく覺えてゐる！」

かう言つた、又は他の場合で述べた言葉は、底の方は痲痺したまゝになつてゐる河の表面に浮ぶ小漣に過ぎなかつた。彼は背を向けて彼方へ行くと、椅子の上に凭れかゝつた。テスは彼のゐる部屋の中程まで追つて行くと、其處へ立ち止つたまゝ、涙も出ない眼でぢつと彼を瞶めてゐた。やがて、辷り落ちるやうに彼の足もとに跪いて、そのまゝの位置でぐつたりと蹲まつてしまつた。

「二人の愛に誓つて、どうぞお赦し下さい！」乾いてゐる口で、彼女は囁いた。「同じ事であなたをお赦しゝたんですから！」

そして彼が何とも答へないので、再び言つた。「あなたが赦されてゐるやうに、私をお赦し下さい！　私はあなたを赦してゐるぢやありませんか、エンヂェル。」

「お前は——さうだ。お前は赦してくれた。」

「でも、あなたは私を赦して下さらないんですか？」

「おゝ、テス、赦すつてことは、この場合には適用出來ないんだ！　以前にはお前といふ人がゐたが、今はお前はそれと別な人間なんだよ。ちえツ——どうして赦すつてことが、そのやうな妙な——手品に憑じられるもんかね！」

彼は話をやめて、この手品といふ解釋をぢつと考へ込んだ。それから突然、物凄い地獄の笑ひ聲のやうに、不自然な薄氣味の惡い——聲を擧げて笑ひ出した。

「止して下さい——止して下さい！　私もう、そんなことを仰しやると、本當に苦しくてたまりません！」と彼女は烈しく叫んだ。「あゝ、どうぞ可哀さうと思つて下さい——どうぞ可哀さうと！」

彼は答へなかつた。そして彼女はすつかり蒼白になつて跳び起きた。

「エンヂェル、エンヂェル！　どうしてそんな笑ひ方をするんです？」彼女は叫び出した。「私の身になつたら、どんな思ひがするかお分りでせうに？」

彼は頭を横に振つた。

「私はこれまで、あなたを幸福にしようとばかり望んだり、

願つたり、祈つたりしました！　で、さうすることがどんなに嬉しいだらうと、又さうしなかつたらどんなに卑しい妻になるだらうと思つてゐました！　ほんとにその通り私は思つてゐたんです、エンヂェル！」

「それは分つてゐる。」

「エンヂェル、あなたは私を愛してゐて下さることゝばかり思つてました——私を、この現在の私といふものを！　その愛して下さるのが私であるとしたら、まあ、どうしてそんな顔付をなすつたり、そんな言葉を口にしたりなさるんでせう？　私、怖くなつてしまひます！　あなたを愛するやうになつたんですから、もう永久に愛します——どう變らうとも、どんな辱めを受けようとも、あなたはどこ迄もあなたなんですから。私、それ以上は望みません。どうしてあなたが、まあ、私の夫のあなたが、私を愛しなくなるなんてことがありませう？」

「僕は繰り返して言ふが、僕の愛してゐた女はお前ぢやないんだ。」

「それで、誰だつて仰しやるんですの？」

「お前の姿をした別の女なんだ。」

彼女は、彼の言葉を聞いて、前から氣遣つてゐた豫感が實際になつたやうに感じた。彼は自分を一種の詐欺師と無邪氣な女の假面を被つた罪の深い女と見做してゐるのだ。それに氣がつくと、彼女の蒼白な顔には恐怖の色が現はれた。頬は弛み、口は殆ど圓い小さな穴のやうな形に見えた。自分をそんな風に見てゐるのかと思ふと、惰ろしさに怯けづいて、彼女は我れ知らずよろめいた。そこで彼は、彼女が倒れさうだと思つたので、つと進み寄つた。

「お坐り、お坐り、」と彼は優しく言つた。「お前は氣分が悪いんだ、さうなるのも尤もだがね。」

彼女は何處にゐるのかも、緊張した顔付で自分の顔を見られてゐるのも、また、自分の眼付が相手の體をぞく〳〵させてゐるのも知らずに坐つた。

「おや、私、もうあなたのものぢやないんですね、えゝ、エンヂェル？」と彼女は頼りなさゝうに訊いた。「私ではなく私に似た別の女なんですつて？　あなたが愛してゐるのは。そんな風に仰しやるの。」

彼女はその像を思ひ浮べたので、慘酷な扱ひを受けた人のやうに、自分の身の上を、不憫に思はない譯には行かなかつた。現在の自分の立場を一層はつきり認めて來ると、眼には涙が一ぱいたまつて來た。彼女はぐるりと向きかへて、わつと泣き出し、自分を可哀さうに思ふ涙を堰止めることが出來なかつた。

クレアはその變り方を見て、ほつと救はれた。といふのは、彼女が打ち明けたことを考へるやうになつたので、その方が打ち明け話の悲しみよりは彼にとつては面倒でなくなつて來たからである。彼はぢつと堪へ、冷靜に、女の激しい悲しみが自然に弱つてしまつて、激しい號泣が時々の泣きじやくりになるまで待つてゐた。

「エンヂェル、」狂氣染みた、潤ひのない病的な聲はもう影を潜めてゐたので、彼女は急に、その自然の調子で言つた。「エンヂェル、私は大へん悪い人間なので、二人で同棲する資格はないんでせうか？」

「どうしたらいゝのか、僕にも見當がつかないでゐるんだ。」

「私、何もあなたと同棲させて下さいとは申しません。エンヂェル。だつて私にはそんな資格がないんですもの！　私たち二人が結婚したことを、母や妹達へ知らせることはしますまい、何時か知らせてやらうつて言ひましたけれど。また宿にゐるうちに裁つて拵へる積りでゐたお針袋を仕上げたりして、奥さん氣質になることはいたしませんわ。」

「しないつて言ふのかね？」

「えゝ、私、あなたがしろと仰しやらなければ、もう何も致しますまい。で、若しやあなたが私からお逃げになつても跡を追ふやうなことは致しますまい。また若し、この上もう少しも口をお利きにならなくても、お訊ねしていゝとあなたが仰しやらない限りは、何故とお訊ねするやうなことも致しますまい。」

「だが、何なりしろと若し僕が命じたら？」

「さうしたら私、可哀さうな奴隷のやうに從ひませう。たとひ打ち倒れて、死ねといふやうな命令であつても。」

「そりや結構だ。だが、お前の今の獻身的な心持と、これまでの自分を守つて行かうとしてゐた心持との間には、調和がないやうな氣がするね。」

これが始めて反撥の意を示す爲めに言はれた言葉であつた。けれどもテスに對して磨きのかゝつた皮肉を投げつけるのは、犬か猫に向つてそれを投げつけるやうなものであつた。その微妙な魅力は、味はゝれないで彼女の耳を過ぎてしまつた。彼女は、たゞそれが、怒氣に支配されてゐると思はれる敵意を含んだ音とのみしか解しなかつた。彼女は、彼が自分に對する愛情を無理に抑へてゐるとは知らず

に、默り續けてゐた。彼女は、彼の頰に涙が、まるで顯微鏡の擴大レンズでゞもあるやうに、その皮膚の毛孔を擴大するほど大きな涙が、靜かに頰を傳つて落ちるのに、殆んど氣が付かなかつた。そのうちに、彼女の告白が彼の生活や彼の世界に起した怖ろしい大きな變化を考へる意識が、再び彼に戻つて來た。彼は、現在自分の立つてゐる新しい境遇の中を進んで行かうと、死物狂ひになつて努めた、何かそれに應ずる活動が必要であつた。だが、どんな活動であつたか？

「テス、」彼は出來るだけ優しく言つた。「僕はね、ぢつとしてゐられない。——この部屋の中に——今といふ今はね。僕は少し散歩して來るからね。」

彼は靜かに、部屋を出て行つた。そして二人の夕食の爲めに彼が注いで置いた二杯の葡萄酒——一つは彼女に、も一つは自分に——は、そのまゝ口もつけられずに、食卓の上に殘されてゐた。彼等の折角の『愛餐』（初期基督敎徒の會食をいふ。聖餐式後當者が各自の家から寺院に齎らした肉とパンとを會者と相集つて共に食したといふ）も、こんなことになつてしまつた。二三時間前に茶を飮んだときには、愛の戲れから二人は一つの茶碗で飮み合ふことさへしたのに。

彼は出がけに戸を靜かに引き寄せたのではあつたが、その閉まる音で、テスは昏睡狀態から覺めた。彼はもうゐなかつたので、彼女はぢつとしてはゐられなかつた。急いで外套を引つかけると、恰も二度と再び歸つては來ない積りでゞもあるやうに、蠟燭の灯を消して、扉を開け、彼の跡を追つた。雨は上り、夜は綺麗に晴れてゐた。

彼女は直きに彼に追ひついた。それは、クレアがゆつくり別にあてもなく歩いてゐたからであつた。彼の姿は淡灰色の彼女の姿と竝ぶと、まつ黑く、薄氣味惡く、厭なものに見えた。そして彼女は、極く僅かの間ではあつたが、あんなにまで得意がつた寶石の手觸りを、今は皮肉と感ぜずにはゐられなかつた。クレアは彼女の足音を聞きつけて振り返つて、彼女が隨いて來たと悟つても、少しも頓着しないらしかつた。そして、彼は家の正面にある大きな橋の、口を開いてゐる五つの拱門の上を渡つて行つた。

往來の牛馬の足跡には、水が一ぱい溜つてゐた。雨が丁度それに溜る程度に降つて、洗ひ去つてしまふほど强くはなかつたからである。この小さい幾つもの水溜りに、彼女が行き過ぎるに連れて無數の星影が映つては素早くきらきらと飛び去つた。若し彼女が、その水溜りに星屑を——こんなつまらないものゝ中に影を落してゐる宇宙の中でも一

番廣大無邊なものを見なかつたなら、恐らく頭上に、星が閃めいてゐることに氣付かなかつたであらう。

今日二人が通つて來た土地は、タルボセイズと同じ盆地にあつたが、何哩か大河の下流の方になつてゐた。そして周圍は廣々と開けてゐるので、彼女は決して彼を見失ふことがなかつた。家を離れると、道路は牧場の中をうねつてゐた。その道について彼女は彼に追ひつかうとか、彼の注意を惹かうとかする積りは更になく、たゞ默つたまゝわけもなく、忠實に彼の跡を追つた。

が、うつかりして歩いてゐる間に、彼女は終に彼の側まで來てしまつた。それでも、矢張り彼はまだ何んにも言はなかつた。今まで騙されてゐたことがはつきり分ると、そのあとでは、往々、ひどく慘酷になるものだ。そして今クレアの心には、それが强く〳〵働き出してゐた。戸外の空氣は、明らかに、衝動に驅られて行動するやうな傾きをすつかり彼から奪ひ取つてしまつた。彼女は、彼が全く色眼鏡なしに——すつかり裸のまゝの自分を見てゐることを知つてゐた。また『時』が、その際、自分に向つて諷刺するやうな頌歌を、こんな風に歌つてゐることも知つてゐた——

見よ、汝の假面去られん時、戀人は汝を憎まん、
汝が運命の傾く時、汝が顏に昔かはらぬ美はあるまじ。
それ、汝の生命は木の葉の如く散り、雨の如く灑げばなり。
また、汝が頭の薄絹、悲しみとなり、いたゞきし冠、苦痛となればなり。

彼はまだぢつと考へ込んでゐた。彼女が側にゐるといふことも、今はもう緊張した思索を破り、又は紛らすだけの力がなかつた。彼にとつては、彼女の存在は實に弱い弱いものになつてしまつたに相違ない！　彼女はクレアに話しかけないではゐられなかつた。

「私、何をしたんでせう——一體、何をしたといふのでせう！　あなたに對する私の愛を妨げたり裏切つたりするやうなことは、私、何も申し上げはしませんでしたわ。あなたはまさか、私が故意と巧らんだやうにお考へぢやありますまいね？　あなたが怒つてゐらつしやることは、あなたが勝手に考へてゐることなんです、エンヂェル。私にあるのではないんです。おゝ、私にあるのではありませんとも。

それに、私は、あなたの考へてゐらつしやるやうな、そんな人を騙すやうな女ぢやありませんわ！」

「ふん！——なるほどね。騙すやうな女ぢやない、ね。だが、同じ女ぢやないんだ。さうだ、同じ女ぢやないんだとも。僕にお前を責めさせないやうにしてくれ。僕は誓つたんだ、責めないつて。で、責めるのを避ける爲めには、何でもする積りだ。」

が、彼女は狂氣のやうになつて辯解をつゞけた。そして、默つてゐた方がよかつたと思はれることまでも、恐らく言つたであらう。

「エンヂェル！——エンヂェル！　私、子供だつたんですの——その時には私子供だつたんですの。男といふものをちつとも知らないでゐたんですもの？」

「お前が罪を犯したといふより、罪を犯させられたんだつてことは僕も認めるよ。」

「ぢや、赦して下さつてもいゝぢやありませんの？」

「赦しはしよう。だが、赦すつていふことで、何も彼もがきまりがつくといふものぢやないよ。」

「そして、愛しては下さらないの？」

彼は、この質問には答へなかつた。

「まあ、エンヂェル——あんなことは往々有り勝ちのものだつて母が言つてますわ！——私の場合なぞよりもつと酷い幾つもの事實を母は知つてゐます——そして夫の方では、大してそれを氣にもしてゐないんです——それを負かしてしまふこと位ゐはどんなことをしてゞもするんです。それでも、女の方は、とても私があなたを愛してゐるやうには夫を愛しちやゐないんですわ！」

「止めてくれ、テス、議論は止めてくれ。社會が違へば習慣も違ふんだ。それぢやまるでお前を、社會一般の釣合なぞといふことを少しも辨へてゐない、もの分らない百姓女と、僕に言はせようとするやうなものぢやないか。お前は自分で何を言つてゐるのか分らないんだ。」

「私、身分から言へば百姓に過ぎないんですの。でも性質はさうぢやありませんわ！」

彼女は、急にむつとして言つたが、忽ちもとの平靜に返つた。

「だから尚更困るんだよ。お前の家の系圖を掘り出したあの牧師が、いつそ口を噤んでゐてくれた方がよかつたらうと僕は思ふんだ。僕はお前たちの一族の衰退を、この他の事實と——つまり、お前にしつかりした點がないといふ事實と結びつけないわけには行かないんだ。老衰した一族とは、取りも直さず老衰した意志、老衰した行爲を意味することになるんだ。まあ本當に何故お前は態々お前の素性などを知らして、餘計にお前を賤しめる手掛りを僕に與へたんだ！　僕の方では、新しく萠芽えた自然兒だとお前を思つてゐたとこだつたのに。それにお前は、生産力の盡き果てた貴族の、遲れた實生えなんだ！」

「その點では、私の家と同じやうに惡い家が澤山ありますわ！　レッティの家だつて、昔は大きな地主だつたのですし、搾乳場のビレットの家だつてその通りでした。それから、今荷馬車の馭者をしてゐるデビィハウスの一家だつて、昔はド・ベェウの一族だつたんでせう。私のやうなものは、何處にだつてありますわ。それがこの土地の特徴なんですもの、仕方ありませんわ。」

「それだけまた、この土地は困りもんだよ。」

彼女は、かういふ非難の言葉を、たゞ大體の意味だけ取つて、その細かい一々の意味は考へても見なかつた。彼はもう今までのやうに、彼女を愛してはゐなかつた。そして愛さうとする事以外は何に依らず、彼女にはどうでもよかつたのであつた。

二人はまた默つて歩き廻つた。後になつてからの噂に依ると、その夜遲く醫者を迎へに出たウェルブリッヂの農家の者が牧場でこの二人に出會つたが、二人は恰も葬式の列のやうに、前後に重なり合ひ、話もせず、そろ〳〵と歩いてゐて、ちらと覗いて見ると、その顏色は、何か心配事でもあるやうな悲しさうな樣子をしてゐたといふことであつた。暫らくして、その男は歸途また同じ野原で二人に會つたが、前と少しも變らず、ゆつくりと、時刻にも、佗しい夜にも、まるで無頓着のやうに、進んでゐたといふことだつた。百姓は自分のことや、家の病人のことに氣を取られてゐたので、この奇妙な出來事を氣にも掛けなかつたが、餘程時が經つてから思ひ出したのであつた。

百姓家の者が、往つて歸つて來るその間に、彼女は夫に向つて言つた——

「私は、あなたの一生を大へん不幸にする原因とならずにはゐないだらうと思ひますわ、向うに大河がありますから、私、あそこへ身を投げて死んでしまつても構ひませんわ。私、ちつとも憶れてはゐませんの。」

「いろ〳〵馬鹿なことをやつてゐる上に、また人殺しまで僕はやりたくはないんだよ、」と彼は言つた。

「自分からさうしたといふことが分るやうに、私、何か殘して置きますわ——自分から恥ぢてしたことだと分るやうに。さうしたら、世間の人はあなたを咎めやしないでせう。」

「そんな馬鹿々々しいことをいふものぢやない——僕はそんなことを聽きたくはないよ。かうした場合にそんな考へを持つのは、實に馬鹿氣たことだ。それは悲劇といふよりも寧ろ嘲笑といふ方なんだ。お前は、今度の間違ひの性質をちつとも了解してゐないんだね。若しこれが世間に知れたとしたら、十中の八九人までは、屹度滑稽といふ眼でそれを見るだらうと思ふね。頼むから、家に歸つて、休んでおくれ。」

「ぢや、さうしますわ。」と彼女は柔順しく言つた。

二人は、水車場の裏手にある有名なシトオ派（佛蘭西のシトオに一〇九八年創設せられたベネデクト派の修道僧團をシトオ派といふ）の寺院の名高い廢墟に通じてゐる道を、ぶら〳〵廻つてゐた。その水車場は、何世紀か以前にはその僧院に附屬してゐたものである。食物は永久に必要なので水車は今だに動いてゐるが、信仰は果敢なく移り變るものであるから、寺院は既に廢滅に歸してしまつだ。一時的なものに仕へることが永遠なものに仕へることに勝つて永續することは、人の始終見てゐる事實である。彼等はぐる〳〵歩き廻つてゐたので、まだ家から餘り遠くない處にゐた。そこで彼女は彼の指圖に從つて、たゞ大河にかかつてゐる大きな石橋まで行き、其處から街道に沿つて二三碼行きさへすればよかつた。彼女が家に戻つて見ると、爐の火はまだ燃えてゐたし、何も彼も出て行つた時のまゝになつてゐた。彼女は一分間も階下にはゐないで、荷物の運び込まれてある階上の自分の部屋へ上つて行つた。彼女は此處の寢臺の端へ坐り、茫然と邊りを見廻してゐたが、やがて、着物を脱ぎ始めた。寢臺の方へ燈火を移すと、その光線が不圖白木綿の天蓋の上へ射した。何かがその下に垂れ下つてゐた。そこで、彼女は何んであらうかと、蠟燭を上げてそれを見た。一枝の寄生樹であつた。エンヂェルが其處へ吊して置いたので、すぐ彼女はさうだと知つた。これこそ荷造りにも、また持ち運びにも非常に厄介だつた不思議な小包の正體であつた。その中味を、間もなく自然とその用途が分るだらうと言つて、どうしても彼は打ち明けなかつた。興に乘り、嘆き切つて、彼は其處へ懸けたのであつた。その寄生樹が、今となつては如何にも馬鹿々々しく不調和なものに見えた。

彼が柔いでくれるやうな見込みは少しもなさゝうに見えたから、もう何んにも氣遣ふこともなく、殆んど何んの希望もなくなつて、彼女は物憂さうに横になつた。深く悲しんで考へ疲れて來ると、きまつて睡眠が隙を覗ふものである。安靜よりも樂しいが、これを禁ずるいろ〳〵な氣分の間にあつて、獨りこの安靜を歡び迎へるのはこの悲しみであつた。そして、二三分間經つうちに、淋しいテスは、嘗つて彼女の祖先の婚禮の部屋になつたことのあるらしい部屋の香ばしい靜けさに圍まれて、我を忘れてしまつた。

その夜遲くクレアもまた、家の方へ引つ返した。靜かに居間へ入ると、燈火を點けて、方針を考へて置いた人のやうな態度で、其處に据ゑてあつた古い馬毛の長椅子の上へ自分の膝掛を擴げて、粗末ではあるがそれを寢椅子に造り變へた。横になる前に、彼は跣足のまゝで、窃つと二階へ上つて行き、彼女の部屋の戸口に立つて聞き耳を立てた。規則正しい呼吸は、彼女が深い眠りに落ち込んでゐることを語つてゐた。

「有難い！」とクレアは囁いた。しかも、彼女が生涯の重荷を自分の双肩に移してしまつたので、今は何んの氣苦勞もなく安眠してゐるのだと思ふと——たとひ、その考へが全然眞實でないまでも、ほゞ眞實に近いと思ふと——彼は激しい苦痛を感じないではゐられなかつた。

彼は踵をめぐらして下へ降りようとした。だが、ぐづ〳〵と決し兼ねて、再び彼女の扉の方へ向き直つた。その拍子に彼には、ダアバヴィル家の貴女たちの一人がちらと眼についた。その肖像は、テスの寢室の入口の直ぐ上に掛つてゐた。蠟燭の灯で見ると、その畫は不愉快を通り越してゐた。陰險な巧らみがその貴女の容貌に潜んでゐた。それは異性に對する一團に思ひ込んだ復讐心——その時、彼にはそんな風に見えたのであつた。その肖像にあるチャールズ王朝時代の胸衣は廣く開いてゐた——頸飾りを見せる爲めに、彼がテスの胸衣を縫ひ込まして出來たのと少しも變らなかつた。そして、彼は二人の間に或る共通點があるといふ、痛ましい感じを再び經驗した。

彼を喰ひ止めるものはこれで十分だつたので、彼は再び歩を返し、そのまゝ降りて行つた。

彼の樣子は落着いて冷靜であつた。固く結んだ小さな口は自制の力を現はし、顔にはまだ、彼女の告白の時から擴がり出した怖ろしい素氣ない表情が現れてゐた。それは、もう情慾の奴隷ではないが、しかもそれから立派に釋放さ

れる位置に決して立つてゐない人の顔であつた。彼はだゞ人間は、どんなに悩ましい經驗にめぐり合せるものであるか、又、物事がどんなに意外に起るものであるかを考へてゐるだけであつた。今までテスを慕つて來た長い間は元より、つい一時間前まで、彼女ほど清い、優しい、純潔なものは、何も有り得ないやうに思つてゐた。けれども、

少し缺けたかと思ふと、何んといふ身も世も、消え失せたやうな變り方であらう！

彼は、彼女の胸の底が、正直な、生々したその面に現はれてゐないと獨言を言つたが、それは彼の考へ違ひであつた。けれどもテスには、彼を考へ直させる辯護人が一人もついてゐなかつた。彼は尙ほ考へ續けた。ぢつと瞶めてゐる時は、決して舌が語つてゐることゝ少しでも違つた意味を現はしたことのないあの眼が、彼女の表面の世界と對立して、いがみ合つてゐる背後の世界を見てゐようなどゝいふことが、一體有り得る事だらうか。

彼は居間の例の寢椅子に凭りかゝると、燈火を消した。夜は、無關心に、冷やかに入つて來て、その場を占めた。

それは彼の幸福をもう丸呑みにして、今ではそれを平氣で消化し、そしてまた殆んどその顏色も變へず、平然として他の幾人とも知れない人の幸福をも、鵜呑みにしようと身構へてゐる夜であつた。

三六

クレアは、灰色の、恰も罪惡でも犯してゐるやうにこつそり忍びやかに射して來る夜明けの光を受けて、起き上つた。

煖爐は、消えた餘燼を殘したまゝ彼の前に立つてゐた。展げられたまゝの晩餐の卓上には、二つのコップに一ぱい注がれた葡萄酒が、今はもう氣も拔け、味もなくなつてゐた。彼女の空いた椅子、又彼自身の椅子、その他の種々の家具調度は、一體どうすればいゝのか？　といふ默つてゐる事の出來ない間ひを發せずにはゐられないやうな、永劫變らない樣子をしてゐた。二階からは、少しの物音もしなかつたが、二三分の中に、門口を叩く音が聞えた。彼等が滯在中いろ〳〵の用をしてくれる筈になつてゐる、近所の農家の女であらうと、彼は憶ひ出した。

この家に今第三者が現はれるとすれば、如何にもばつの

惡いことになるだらう。そこで、彼は既に着更へをしてゐたので窓を開けて、今朝は自分達でどうにかやれさうだと彼女に告げた。女は手に牛乳の罐を持つてゐた。彼は、それを戸口に置いて行くやうにと言つた。女が行つてしまふと、彼は家の裏手の方へ行つて、焚木を探して來て、手早く火を焚きつけた。食料戸棚には玉子や、牛酪やパン、その他の物が澤山あつた。そこで、直ぐにクレアは朝飯の支度をした。それは搾乳場で得た經驗で、かうした世帶向きの事を器用にやつて退けられるやうになつてゐたからであつた。燃えてゐる焚木の煙が、見たところまるで蘭華の冠のついた圓柱のやうに見える煙突から立ち昇つてゐた。通りがゝりの土地の者はそれを見て、新婚夫婦のことを思ひ出して、その幸福を羨んだ。

エンヂェルは、一わたりあたりを見渡して、階段の下まで行くと、ありふれた聲を出して呼んだ——

「御飯が出來たよ！」

彼は表の扉を開けて、朝の空氣の中へ二三歩歩き出した。暫くして戻つて來ると、彼女はもう居間へ來てゐて、機械的に朝飯の食器を直してゐた。彼が呼んでから僅かに二三分しか經つてゐないのに、すつかり身仕舞ひが出來てゐるところを見ると、彼が呼ばない前から着更へが濟んでゐたか、或はその時には殆んど濟みかけてゐたに相違なかつた。髮の毛は後の方へ大きく圓い塊りに束ね、着物は新調の——白い頸飾りのついた、水色をした毛織の——一つである通衣をつけてゐた。手と顏とは冷たさうに見えた。多分着更へをしてから長い間、火の氣のない寢室に坐つてゐたのであらう。彼女を呼ぶクレアの調子が大へん丁寧だつたので、暫らくの間、彼女は新しい希望の輝きに元氣づいたやうであつた。けれども、彼を一目見ると、直ぐにそれも消えてしまつた。

實際彼等二人は、嘗つては火であつた死灰に過ぎなかつた。前夜の激しい悲しみは、今も尙ほ重苦しく續いてゐた。もう何ものも、二人の何方をも熱情に燃え立たしめるやうなことは、出來ないやうに見えた。

彼は相手に向つて優しく話した。彼女もまた、同じやうに相手任せの調子で答へた。到頭彼女は、自分の姿も人眼を惹くものであるといふことにはまるで氣のつかない人のやうになつて、きりつとした彼の顏に見入りながら彼のところへ寄り添つて行つた。

「エンヂェル！」と彼女は言つて、立ち止つた。そして嘗つ

ては自分の戀人であつた人が、肉體を具へて其處にゐるといふことが殆んど信じられないといふ風に、微風のやうに輕やかに指で彼の體に觸れて見た。彼女の眼はきら〳〵輝いた。蒼白い頬は、半ば乾いた涙が、きら〳〵其處に跡を殘してはゐたけれども、平常の福々しさを見せてゐた。そして、いつもは赤い熟したやうな唇が、頬と殆んど同じ位ゐ蒼白くなつてゐた。彼女は動悸を打つて、まだ生きてはゐるが、心のうちにある悲しい重みに壓されて、心臟はひどく不規則に鼓動してゐたから、この上少しの刺激でもそれに加へたならば、直ぐに實際の病氣を惹き起し、特色のある眼は曇つて、唇は薄くなるだらうと思はれる位ゐであつた。

彼女は何處までも純潔に見えた。自然は、氣紛れな手管を用ひてテスの容貌に處女の烙印を捺し付けてゐたから、彼は、あきれたやうに彼女を瞶めずにはゐられなかつた。

「テス！　ありや事實ではないと言つてくれ！　ねえ、斷じて事實ぢやないつて！」

「事實なんですの。」

「一言々々がかい？」

「一言々々がですの。」

彼は、恰もそれと知りつゝ、彼女の唇から好んで嘘であると言はせて、或る詭辯術に依つてそれを本當の否定にしたいと思つてゞもゐるかの如く、嘆願するやうに彼女を瞶めた。けれども、彼女は飽くまでもかう繰り返すばかりであつた。——

「事實なんですの。」

「今生きてゐるのかね？」そこで、エンヂェルは訊ねた。

「赤ん坊は亡くなりました。」

「だが、その男は？」

「生きてゐますの。」

最後の絶望の色がクレアの顏を掠めた。

「英蘭土にゐるのかね？」

「えゝ。」

彼はぼんやり二三歩あるいた。

「僕の立場は——かうなんだ、」と、不意に彼は言つた。「僕はかう考へたんだ——誰でもさうだらうが——社會上の地位もあり、資產もあり、世間の事も知つてゐる妻を手に入れようといふ野心をすつかり放擲してしまへば紅い頬が得られるやうに、確實に田園の清いものが手に入れられようと思つたんだ。ところが——勿論、僕はお前を非難の出來

る人間ではないよ。またさうしようとも思はないがね。」

それから先は言つて貰ふ必要のないまでにテスは、すつかり彼の立場を感じた。丁度そこに彼の立場の苦しい點が潛んでゐるのであつた。彼が何も彼も失つてしまつたことを彼女は知つた。

「エンヂェル——いよ〳〵となれば、あなたには最後の逃げ途があるといふことを、私知つてゐなかつたら、成行きに任せてかうしてあなたと結婚はしなかつたでせうよ。尤も私、あなたはどんなことがあつても決して——」

彼女の聲は嗄れて來た。

「最後の逃げ途といふと？」

「私を捨てるといふことなの。あなたは私を捨てることが出來るんですもの。」

「どんな風にして？」

「私を離緣してよ。」

「馬鹿を言つてはいけない——どうしてお前はさう單純なんだらう！　どうして僕がお前を離緣出來るんだね？」

「出來ませんの——かうして打ち明けてしまつても？　私の告白で、その理由が出來たらうと、私思ひましたの。」

「おゝ、テス——お前はあんまり、あんまり——子供らしい——一人前になつてゐない——未熟とでも言ふんだらうか！　お前はどんな人間なのか、僕にはちつとも分らない。お前には法律といふものが分つてゐないんだ——お前には分つてゐないんだ！」

「何ですつて——あなた出來ないと仰しやるの？」

「全く、僕には出來ない。」

痛ましさと雜り合つた羞恥の色が、すぐ聽き手の顏に現はれた。

「私思ひましたのよ、」と、彼女は囁いた。「あゝ、あなたの眼にどれほど不都合な者に私が見えるかといふことが、今になつてよく分りましたの！　私を信じて下さい——どうぞ信じて下さいね。私は魂にかけて、あなたがさうすることが出來るとばかり思つてゐましたの！　あなたがどうかさうして下さらないやうにとは望んでゐましたけれど、あなたの決心一つで、また、すこ——すこ——しも私を愛して下さらないのでしたら、捨てることが出來るつてことを、少しも疑はずに、信じてゐましたの！」

「それはお前の考へ違ひだよ、」と彼は言つた。

「あゝ、そんなことなら私、してしまへばよかつた、昨夜思ひ切つてしてしまへばよかつた！　だけど、私にはその

勇氣がなかつたんですわ。そこがやつぱし私らしいとこなんですわね！」

「何をしようつていふ勇氣だい？」

彼女が何とも答へなかつたので、彼は相手の手を執つた。

「一體何をしようと、お前は考へてゐたんだね？」と彼は訊ねた。

「自殺してしまはうと考へましたの。」

「何時？」

彼女はこんな風に何處までも追求する彼の態度に怯ぢて身悶えした。「昨夜なの、」と彼女は答へた。

「何處で？」

「あなたの寄生樹の下でよ。」

「こりや驚いた——どんな風にしてさ？」と彼は嚴しく訊ねた。

「私、若しお怒りにならないなら、申し上げますわ！」と彼女は身を竦ませながら言つた。「私の箱の紐でしようと思ひました。でも、私には出來なかつたんですの——いよいよといふところが！　あなたのお名の汚れになりはすまいかと思ひましたから。」

自殺的に出たのではなく無理に言はされたこの告白が、意外な性質のものであつた爲めに、彼はそれを聞いて、眼につくほど驚き顫へた。だが、彼はまだ彼女を抑へて放さなかつた。そして眼を彼女の顏から外らして、下を向いて言つた——

「ねえ、よく聽いておくれ。お前は、決して、そんな怖ろしい事を思つてはいけない！　どうしてそんなことが出來るんだね！　もうそんなことは思ひ立たないと、夫としての僕に固く約束してくれるだらうね。」

「喜んでお約束しますわ。それがどんなに間違つてゐたかが分りましたから。」

「間違つてゐるとも！　お前には全く不似合ひな思ひ付きだ。」

「だつて、エンヂェル、」と彼女は落着いた無頓着な樣子で、眼を大きく開いて彼の方を見ながら辯解した。「それは全くあなたの爲めを考へて思ひついたことなの——どうしてもあなたが離婚といふやうな厭な辱しめをお受けになるに違ひないと思はれましたから、そんな辱しめを蒙らせないで、あなたを自由にして上げたいと考へましたから。自分の爲めにさうするなんてことは、決して、夢にも考へなかつたんですの。だけど、自分で手を下してする位ゐぢや、まだ勿體なすぎるといふものよ。お氣の毒にも、あなたこそ私に鞭を加へる筈の人なんです。若しそれがお出來なら、他にあなたの逃れる途はないんですから、それを決行するといふお氣にされなれましたら、私は一層強くあなたを愛するやうになるだらうと思ひますわ。私もう、自分がまるつきり價打のない人間のやうに思はれますの！　大變あなたのお邪魔になるやうに思はれるんですの！」

「しツ！」

「えゝ、止せと仰しやるなら私もう申しませんわ。あなたに逆ひたい望みは、私にはちつともないんですもの。」

彼にはこれが僞りでないことは分つてゐた。昨夜の絶望に陷つてから、彼女の元氣は全くなくなつてしまつた。そしてもうこの上向う見ずな事をする心配はなかつた。

テスは氣を取り直し、甲斐々々しくまた朝の食卓の支度に取りかゝつた。どうにかそれも調つたので、二人はお互ひの視線を會はせないやうにと思つて、同じ側の席に掛けた。お互ひ同志、飲み食ひする音を聞くのは、最初は何だかもどかしい氣がしたが、これをどうする譯にも行かなかつた。それにまた、食べた分量は二人とも極く僅かだつた。食事が終ると、彼は立ち上り、晝餐に歸つて來る時刻を言つて置いて、此處へ來た唯一の實際の目的であつた水車場の仕事を研究するといふ計畫を果す爲めに、機械的に、水車場の方へ出かけて行つた。

彼が行つてしまふと、テスは窓際に立つた。やがて、水車場の構內へ通じてゐる大きな石橋を渡つて行く彼の姿を認めた。彼はその背後に沈み、その先の線路を横切つて、姿をかくした。そこで彼女は、がつかりもしないで、注意を室內に向けて、食卓を掃つたり、取り片づけたりし始めた。

手傳ひの女が間もなくやつて來た。その女にゐられるのは、初めの間テスには窮屈だつたが、後には、却つて慰めとなつた。十二時半になると、彼女は手傳ひの女を獨り臺所へ殘して置いて、居間へ戻り、エンヂェルの姿が再び橋の蔭から現はれて來るのを待つてゐた。

一時頃に彼は姿を現はした。彼がまだ四分の一哩も先の方にゐるのに、彼女は我れ知らず顏を赧らめた。彼が入つて來る時迄にはすつかり食事を用意して置かうと、彼女は臺所へ走つて行つた。彼は先づ、前日二人が一緒に手を洗つた部屋へ入つて行つた。それから居間へ入つて來ると、皿の蓋は、まるで彼自身の動作によるものでゞもあるやう

に、皿からすつと持ち上つてゐた。

「實にきつかりだね！」と彼は言つた。

「えゝ。あなたが橋を渡つてお出でなのを見てゐましたから。」と彼女は言つた。

食事は、彼が午前中寺院水車場でしてゐたことや、粉篩ひの方法や、舊式な機械、その或る種のものになると、今は廢址の堆積となつてゐる隣りの修道院の禮拜堂にゐた修道僧の爲めに粉を挽いてゐた當時から、ずつと今日迄始終使はれ通して來たものだらうと思はれる位ゐで、新しい改良された方法については、大して彼を啓發しさうにも思はれない機械のことなど、平凡な談話のうちに過ごされた。一時間ばかりするうちに彼はまた家を出て、夕暮に歸つて來ると、その晩はずつと書類の調べに忙しくしてゐた。彼女は邪魔になつてはいけないと思ひ、年寄の女が行つてしまふと臺所へ退いて、一時間以上も出來るだけ忙しく、立ち働いてゐた。

クレアの姿が、扉口に現はれた。

「そんなに働くんぢやないよ、」と彼は言つた。「お前は僕の召使ひぢやないんだ。僕の妻なんだもの。」

彼女は顏を上げた、そして幾らか晴々しくなつた。「私、さう思つても差支へないの——ほんとに？」と彼女はいぢらしくも、からかひ口調で呟いた。「名前だけつて言ふお積りでせう！　さうですわ、私、もうそれ以上にならうとは思ひませんの。」

「さう思つても差支へないだつて、テス！　お前は實際さうなんぢやないか。何んだつて、そんなことをいふんだね？」

「分りません、」と彼女は、涙で語調を曇らしながら、急いで言つた。「私、かう思ひましたわ。私——私は相當な人間ではないからつていふ積りよ。あなたに申し上げてありますわ、もうずつと前に、私はそんなに正しい者ではないと思ひますつて——だから、私あなたと結婚したくはなかつたんですの、たゞ——たゞ、あなたがお薦めになつたもんですから！」

彼女は咽び泣きを始めた。そして彼に背を向けてしまつた。その素振りを見ては、エンヂェル・クレア以外の者だつたら、どんな人をも引き寄せないではゐなかつたに相違ない。彼の素質は、言つて見れば、溫和しく、優しかつたのであるが、その奥底には、恰も柔かい粘土の中に鑛脈があるやうに、固い理詰めの沈澱物が潜んでゐて、それを貫通しようとするどんなものゝ刃先をも曲げずにはゐなかつた。それが彼に『教會』の信條を受け容れることを拒み、また彼に、テスを許すことを喰ひ止めたのであつた。それに彼の愛情そのものも、火といふよりも光輝といつた方で、異性に對しても、それを信じなくなれば同時に追ひ求めることも止めてしまふのであつた。この點では、知識の上では賤しんでゐながらも感能的には溺れてゐるといふやうな、世の多くの感じ易い人々とは反對であつた。彼女の嗚咽の止むまで、彼は待つてゐた。

「せめて英蘭の女の半分でも、お前のやうに品があればいゝと思ふよ。」一般の女に對して皮肉を投げつけるやうに彼は言つた。「それは品位の問題ぢやなくて、主義の問題だ！」

彼は、素直な人の眼が一度表面の現象に愚弄されたと知つたら、何處までもしつこくその人をこゞらせずにはゐない無慈悲な浪にまだ搖られてゐるので、こんな風なことや、これに似たやうなことをもつと彼女に向つて言つた。その實、底を割つて見れば、まだ同情といふ退潮が流れてゐたので、世間的の女ならそれを手頼りに彼を征服したかも知れなかつた。が、テスはこれに氣がつかなかつた。何事も當然の報いと諦めた。そして殆んど口さへ開かなかつた。彼に對する熱愛に搖ぎのないことは、實際、悼ましいばかりであつた。彼女は生來敏感な性質であつたが、今では彼に何と言はれても、取り亂しはしなかつた。決して自分勝手なことを求めなかつた。興奮するやうな事もなかつた。自分に對する彼の振舞ひを惡いと考へるやうなこともなかつた。丁度今彼女は、何處までも自我の主張を追ふ現代に立ち戻つて來た獻身的な使徒の愛そのものとなつてゐたのかも知れなかつた。

この夕方も、夜も、また晨も、前日と全く同じやうに過ごされた。一度、たゞの一度だけ、彼女は——つひ先頃までは自由な、また、我を張つてゐたテスが——ちよつと彼に言ひ寄らうとした。それは食事が濟み、三度目に彼が粉挽水車場へ出掛けようといふ時であつた。食卓を立ち掛けに、彼は「それでは」と言つた。そこで彼女も同じ言葉で答へて、同時にその口を彼の口の方へ向けた。彼はその誘ひに應じようとはせず、急いで側を見ながら、かう言つた——

「時間通りに歸つて來るからね。」

テスは打ちのめされでもしたやうに、縮み上つてしまつ

た。これまで彼は隨分度々、彼女の不承知にも關はずこの唇に觸れようとしたのであつた——お前の口や呼吸は、お前が主なる食物としてゐる牛酪や鷄卵や牛乳や蜂蜜の味がするから、自分もその口や呼吸から滋養素を取るのだとか、さういふいろ〳〵の冗談を彼は陽氣に屢々言つてゐた。けれども、今ではそれを振り向かうともしなかつた。彼は急に彼女の縮み上る樣子を見て、優しく言つた——

「ねえ、いゝかい、僕は今後の方針を考へなければならないんだよ。二人が早速別れたら、お前に對する世間の非難が必ず湧いて來るに違ひない。それを避ける爲めには、どうしても暫らく一緒にゐる外はないよ。が、これはほんの形式の爲めだといふ事を、お前も承知してゐて貰ひたい。」

「えゝ、」とテスは判然して言つた。

彼は出て行つた。そして水車場へ行く途中、靜かに立ち止り、もつと優しく接してやればよかつた、少くとも一度位ゐは接吻もしてやればよかつたと、暫時の間彼は竊かに思つた。

かうして二人は、絶望的な一日二日を、全く同じ屋根の下で一緒に暮した。けれども二人の間には、まだ戀人同志にならなかつた以前よりも、餘程の隔りがあつた。彼が自分でも言つた通り、今後取らなければならぬ方針を一生懸命考へてゐるので、彼の活動力が餘ほど鈍つてゐることは彼女にもよく分つた。一見かうまでやさしい素直な氣持の底にかういふ固い決意のあるのを見て、彼女はぎよつとせずにはゐられなかつた。彼の言行一致は、實際、餘りに殘酷であつた。彼女はもう今では、赦されることを豫期してはゐなかつた。彼女は、彼が水車場へ行つてゐる間に、彼から遁れ出ようかと幾度となく考へたが、若しこのことが世間へ知れ渡つた時には、彼の爲めにならないばかりか、却つて一層彼に煩悶と屈辱とを與へることになりはしないかと、恐れたのであつた。

一方クレアは、本當に深く默想してゐた。彼の考へは停滯してゐなかつた。考へる爲めに彼は病氣になりかけてゐた。考へる爲めに心身を蝕ばまれ、考へごとでへと〳〵になつた。以前の生々した、變化に富んだ家庭を樂しむ氣持から惱まされてゐた。「どうしたもんだらう——どうしたもんだらう？」と、獨り言をいひがなら彼は歩きまはつた。それを、彼女は不圖耳に入れた。その爲めに彼女は、今まで祕して來た將來に就いての沈默を破つてしまつた。

「ねえ——あなたは長くは私と同棲しないお積りなんでせう——さうでせう？　エンヂェル、」と彼女は訊ねた。窪んだ彼女の口元は、その顏に漲らいだ靜かな表情を保つてゐる手段が、まつたく機械的であることを示してゐた。

「僕には出來ない、」と彼は言つた。「自分を賤しめずに、また、一層悪いことには、恐らくお前をも恥かしめずにはね。無論僕たちは、普通の意味では同棲出來ないといふんだよ。今のところでは、どう感じようとも僕はお前を賤しめはしない。まあ率直に言はしてくれ、でないと僕の惱んでゐることがすつかりお前には分るまいから。その男の生きてゐるうち、どうして僕たちは同棲出來るかね？——その男こそ、本當のお前の夫なんだ。僕はさうぢやない。若しその男が死んだら、また話は別だがね……おまけに、困つてゐるのはそれだけぢやないんだ、別の方から考へても起つて來るんだ——それはね、僕たちとは別の人間の將來に關係のあることなんだ。僕たちの間に子供が生れ、だんだんと年が經つて、この過去の事柄が知れて來ること——そりや屹度知れずにはゐないんだから——を考へて御覽。地球の上の何處にだつて、誰も出て來ない、又は他處から入り込まない所なんて、決してないんだからね。そこで、僕たちの血肉を分けた可哀さうな子供たちが、その嘲弄の下に育つて、年をとるに連れてだん〳〵その壓迫を十分に感ずるやうになつたとしたら、どうだらう！　何といふ幻滅だらう！　何といふ前途だらう！　かういふことがないとも限らないと考へた後でも、お前にはまだ『一緒にゐてくれ』と言へるかね？　この上別の不幸へ飛んで行くよりも、現在僕たちの背負つてゐる不幸を、耐へ忍んで行かうとお前は思はないかね？」

心配の重みを受けて、彼女の眼瞼は、依然として垂れてゐた。

「私、『一緒にゐてくれ』とは言へません、」と彼女は答へた。「言へません。私、そこまでは考へませんでしたわ。」

テスの女らしい希望は——こゝで本當のことを言つて見れば——非常に粘り强く一つ家に永く起き伏してゐれば、いつかは親密さが加はつて來て、たとひ分別に抗つても冷酷な氣持を抑へて無くしてしまふかも知れないといふ祕かな夢想となつて復活する位ゐであつた。彼女は、普通の意味では人ずれがしてゐなかつたが、女として缺けてゐる點があるのではなかつた。そして、男女が接近してゐるといふことに、非常に强い親和力のあることを本能的に彼女が知らなかつたとしたならば、それこそ女としての特徴が缺

けてゐるといふことを示すことになつたであらう。若しこの接近から來る力が役立たないとしたら、もう彼女の賴みとするものは何もないといふことを、彼女は知つてゐた。計略の性質を帶びたものに希望を掛けるのは間違つてゐると、彼女は獨言を言つたが、なほさういふ種類の希望をすつかり消す譯には行かなかつた。今彼の最後の申し立てが述べられた。そして彼女が言つたやうにそれは新しい考へであつた。事實、彼女は今まで、決してそこまでは考へてゐなかつた。そして彼女は、自分を輕蔑するであらうと思はれる、これから先に生れるかも知れない子供をまざ〳〵と彼が描き出したので、何處までも人道的である正直な心へ、恐ろしいほどの確信を起さずにはゐなかつた。彼女はたゞ經驗だけで、或る境遇の下では善良な生活を送るよりもよいことが一つあるといふことを、教へ込まれてゐた。それは、どんな生活を送ることからも免れるといふことであつた。受難の經驗から先を見通したすべての人々のやうに、彼女は、シュリ・プリュドオム（一八三九―一九〇七年、佛蘭西の詩人で批評家。「孤獨」「運命」「幸福」等の詩篇がある）の言葉を用ひれば『汝、世に生れ出でよ』といふ嚴命の中に、特にそれが、自分にやがては生れるかも知れないものに向つて呼びかけられたものとすると、刑罰の宣告を聞く思ひがせずにはゐられなかつた。

しかも尙ほ『自然』といふ狐のやうな老獪な老女のやり口は、實に惡辣で、今までテスはクレアに對する愛着の爲めにすつかり瞞着されてゐて、その愛が、やがて子供を生むといふ結果になつて自分だけの不幸として悲しんだものを他人にも蒙らすやうになるかも知れないといふことを、すつかり忘れてゐた位ゐであつた。

それ故に彼女は、彼の議論に反抗することが出來なかつた。それに對する答へは、勝れて敏感な者の持つてゐる自我と鬪ふ性癖から却つてクレア自身の胸に湧いて來た。彼は殆んどそれを恐れる位ゐであつた。それは彼女の又とない肉體の性質に基いてゐたので、或は彼女がそれを有望に利用するかも知れないといふ事であつた。そればかりでなく、彼女はかう言ひ添へるかも知れなかつた――『濠洲の高原とかテキサスの平原なら、誰がこの私の不幸を知るものですか、また誰が私なり夫なりを非難するもんですか？』しかも、世の多くの母のやうに、彼女は一時の現象を永久避け難いものでゞもあるかのやうに認めてゐた。そして彼女の考へは正しかつたかも知れない。女がものを直覺する心はたゞ自分だけの苦しみを知るばかりでなく、夫のそれも知るのである。たとひかういふ非難が未知の人々から、夫なり、その子供達の上に加へられないとしても、それは、彼自身の潔癖な頭腦から、その耳に達するかも知れなかつた。

この隔てが出來てから三日目であつた。もう少し彼に動物性が加はつたら、もつと氣高い人になつたかも知れないといふ奇怪な逆說を用ひるものがないとも限らないが、私達はさうは言はない。しかもクレアの愛は、實際、疑ひもなく脫俗的で缺點とも見える位ゐであり、餘りに空想的で實行の覺束ないものであつた。かういふ性情の者に對しては、眼の前に肉體が見えてゐることは、時として、それが見えてゐない時よりも訴へる力が弱いことがある。それは後の場合が、都合のよいことには、實物の缺點をかくす理想の姿を生み出すからである。彼女は自分の姿も、思つてゐた程強く自分の楯とならなかつたことを知つた。彼の形容した句は眞實であつた。本當に彼女は、彼の欲望を刺戟した女とは別の女であつた。

「私はあなたの仰しやることを、よく考へて見ました、」と彼女は卓子掛の上に人差指を動かし、今は二人を嘲つてゐる指環の嵌つてゐる片々の手で前額をおさへながら、彼に言つた。「それは、一々御尤ものことですわ。さうでなくてはいけないんですの。あなたは私から離れなくてはならないんですわ。」

「でも、お前はどうする？」

「私は實家へ歸つて差支へありませんの。」

クレアはそのことに思ひつかなかつた。

「屹度だね？」と彼は念を押した。

「屹度ですとも。私たちは別れなければならないんでせう。きつぱり極りをつけてしまつた方がようございますわ。あなたはいつか仰しやつたことがありますね、私は、兎に角男の勝れた分別も臺なしにしてその方を惹きつける者だつて。ですから若し私が始終あなたの目の前に居りましたら、折角のあなたの理性や希望に背いて、あなたの計畫を變へさせるやうになるかも知れませんの。さうしたら、後になつて、あなたの後悔も私の悲しみも、どんなにひどくなる事でせう。」

「で、お前は實家へ歸りたいといふんだね？」と彼は訊いた。

「私、あなたとお別れして、實家へ歸りたいんですわ。」

「ぢや、さうしよう。」

彼女は、別に彼を見上げはしなかつたが、思はずぎよつとした。申し出と約束との間には或る距離があつた、彼女はそれをあまりに敏速に感じたのであつた。

「私、こんなことになりやしまいかと前から氣遣つてゐましたの、」彼女は、顔を柔和しく据ゑたまゝ呟いた。「私、何も不平は申しません、エンヂェル。私——私、それが一番好いと思ひます。あなたの仰しやつたことで、すつかり悟りました。その通りですとも。私たちが同棲してゐたつて、私を咎める者は誰もありませんでせうが、年月が經つて行くうちには、何時かはあなたが何か普通のことで私に腹を立てゝ、私の昔のことを現にお知りになつてゐるやうに覺えてゐて、御自分でも思はず惡口を仰しやるお氣になる、それがひよつとして私達の子供の耳に入るかも知れませんわ。あゝ！　そんなことになつたら、今はたゞほんの氣に障る位ゐのことでも、その時には、私を苦しめて生命までも奪つてしまふやうになるかも知れませんわ！　私參りませう——明日にも。」

「そしたら、僕も此處に留まつちやゐない。何もこんなことを言ひ出したくはなかつたけれども、別れる方が得策だと悟つたんでね——少くとも暫らくは、もつとはつきりとこれまでの事の經過が具體的に分るやうになり、お前に手紙が出せるやうになるまではね。」

テスはこつそり夫の方を偸み見した。彼は蒼白になつて顫へてさへゐた。が、前と同じやうに、彼女は、自分が結婚したこの溫厚な人物の心の底に現はれた固い決心——粗雜な感情を微妙な感情に、物質を概念に、肉を靈に屈服させる意志を知つて、愕然とした。性癖や傾向や習慣などは、まるで彼の空想といふ横暴な風に吹き飛ばされる枯葉も同じであつた。

彼はそれとなく彼女の樣子に氣づいたのか、かう說明を加へた——

「僕はね、離れてゐた方が、人のことを親切に考へるんだよ、」と言つて、皮肉にまた言ひ添へた。「どうなることか分つたもんぢやないさ。恐らく散々に苦しみ、疲れ切つた揚句に、何時かは又二人一緒に落着くんだらうよ。大勢の人が是までさうして來てゐるんだから！」

その日、彼は荷造りを始めた。そして、彼女もまた二階へ上つて、荷造りに取りかゝつた。これが最後となるかも知れない別離なら、それを烈しい苦しみと感ぜずにはゐられない者同志であつたから、これから先の二人の行動には

心を慰められる臆測の光が投げかけられない譯ではなかつたが、翌朝の別れが、永久の別れとなるかも知れないと、お互が思つてゐることを、二人は知つてゐた。お互の上に働いてゐた魅力が、——テスの方では全然才藝を離れて——別れた最初の二三日は、今までよりも或は一層威力を振ふかも知れないが、時の經つに從つて、その力が弱くなるに違ひないことを、彼は知つてゐた。また彼女も知つてゐた。それから彼女を同棲者として許すことを拒む實際的な論據が、一層遠くを見せる北極光に照らされて益々力强く浮き出すかも知れないといふことを、二人とも知つてゐた。そればかりではなく、二人の人間が一度別れると——共通の棲家と、共通の環境とを捨てたとなると——新しい作物が、それ〴〵の空いた場所を充たさうとして、不知不識のうちに萠芽して來る。思ひ掛けない出來事が始めからの意圖を妨げ、そして舊の計畫が忘れられてしまふのだ。

三七

夜半は靜かに來て靜かに過ぎて行つた。フルウムの盆地には、それを告げ知らすものとては何も無かつたから。

一時が過ぎると間もなく、營つてはダアバヴィル家の邸宅であつた暗くなつてゐる農家のうちに、かすかにものゝ軋る音がした。二階の部屋を使つてゐたテスは、それを聞きつけて眼を覺した。それは、よくある釘の弛んだ梯子段の一隅から聞えて來た。彼女は自分の寢室の扉が開くのを見た。そして夫の姿が、氣味の惡いほど用心深い步調で、月光の流れを横切つた。彼は襯衣とズボンとだけしか體に着けてゐなかつた。そして、彼の眼が不自然に虛空を凝視してゐるのを知ると、はつと感じた彼女の最初の喜びは消えてしまつた。彼は、部屋の中程まで來ると、靜かに立ち止まつて、何んとも言ひやうのない悲しい調子で呟いた——

「死んでる！　死んでる！　死んでる！」

何かひどく心を攪亂するやうな力に襲はれると、その爲めにクレアは時々眠りながら步いたり、不思議な離れ業さへ演ずることがあつた。例へば、結婚するちよつと前の市場から二人で歸つた夜、彼女を辱しめた男との格鬪を、彼の寢室で再演したやうに。テスは引續いた心の苦しみが、今もまた、さうした夢遊病者の狀態へ彼を驅り立てたのであることを悟つた。

彼に對する忠實な信賴は、彼女の胸に非常に深く潛んでゐたから、彼は覺めてゐようが眠つてゐようが、彼女に、

自分の身が危ないなどゝいふやうな氣持を少しも起させなかつた。たとひ、彼が手に短銃を持つて入つて來たとしても、彼は自分を庇護してくれるのだといふ彼女の信賴を殆んど動搖させなかつたであらう。

クレアは近付いて來て、彼女の上に屈み込んだ。そして「死んでる、死んでる、死んでる！」と彼は呟いた。

彼は測り知れない悲しみを浮べた同じ眼で、ちよつとの間、ぢつと彼女を瞶めてゐたが、やがて一層低く屈み込んで、彼女を兩腕に抱きかゝへ、屍衣へでもくるむやうに敷布の中へ彼女を包んだ。それから彼は、人が死體に對すると全く同じ敬意を拂つて、寢臺から彼女を持ち上げ、室內を運び歩いた、かう呟きながら——

「僕の可哀さうな、可哀さうなテス——僕の何よりも愛しい、可愛いテス！　本當に可愛らしい、本當に善良な、本當に忠實な！」

醒めてゐろ折は、いかにも嚴しく差し止められてゐた親愛を示すかういふ言葉は、彼女の捨てられた餓ゑ切つた胸へ、言ひやうもなく香ばしく響いた。たとひそれが疲れた彼女の生命を救ふ手段であつたとしても、彼女は動いたり、蹶いたりして、今體を置いてゐる狀態を破らうとはしなかつた。かうして彼女は全く靜かに、殆んど呼吸さへしないで橫になつてゐた。そして、どうするつもりかと訝りながらも、上り口の上を、抱へられて行かれるまゝに任してゐた。「妻は——死んでしまつた、死んでしまつた！」と彼は言つた。

彼は疲れを休める爲めに、暫らく彼女を抱へたまゝ欄干へ凭り掛つた。投げ落さうとするのか知ら？　身を庇ふ念などは、彼女の胸から殆んど消えてしまつてゐた。そして翌朝出發しようといふ、恐らく永久に行つてしまはうといふ彼の計畫を知つてゐたから、この不安な位地にありながらも、恐怖といふよりは寧ろ享樂といふ氣持で、彼の腕に抱かれてゐた。若し一緒に轉げ落ち、二人一緒に粉微塵になつてしまつたなら、どんなに誂へ向きであり、どんなに願はしいことだらう。

けれども、彼は別に投げ落しもせずに、手摺の支柱を利用して、彼女の唇へ接吻した——晝の間は賤しんでゐたその唇へ。それから、新たにしつかりと抱きかへて、梯子段を降りて行つた。弛んだ梯子の軋る音も、彼を目覺しはしなかつた。そして彼等は無事に地階まで下りて來た。彼は、彼女を抱いてゐた片方の手を少しの間放して、

扉の閂をそつと滑らせて戸外へ出た。その時ちよつと扉の端で靴下を穿いた爪先を打つた。けれども彼はこの事を別に氣にする樣子もなかつた。戸外は廣々として障害物は何もなかつたので、樂に運んで行けるやうに、彼女を肩の上へ載せた。着物を着てゐなかつたので、重さは餘程減ぜられてゐた。かうして彼は屋敷內を通り拔け、二三碼離れた河の方へ背負つて行つた。

どうするのか、何か目的があるとしても、それが果して何であるのか、彼女はまだ推測する事が出來なかつた。そして、まるで第三者がするやうに、今の問題の推測に沒頭してゐる自分に氣がついた。彼女はいかにも樂々と全身をすつかり彼に任せてゐたから、自分を何處までも彼のものだと見做して、彼が勝手に片付けようとしてゐるのだと考へて、却つて嬉しい思ひをする位ゐであつた。明日は別れるといふ心配が漂つてゐる中で、彼が今實際に自分を妻のテスと認め、たとひさう認めて、僭越にも自分に危害を加へる權利があると勝手にきめるやうな所まで行つてゐながらも、猶ほ容易に自分を投げ捨てないと感ずると、それが心の慰めになるのであつた。

あゝ！　今になつて、彼が何の夢を見てゐるのか彼女には分つた——若しそんなことがあるとしても、彼女には殆んど認められないことながら、彼女が愛してゐたとほゞ同じ程度に彼を愛してゐた擠乳場の他の娘たちと一緒に、彼女を背負つて流れを渡つた、あの日曜日の朝のことを夢見てゐたのだ。クレアは、彼女を肩に載せたまゝ橋を渡らないで、同じ側を近くの水車場の方へ五六步進んで行き、到頭河の汀にぢつと立ち止まつた。

河の水はこのあたり幾哩かの牧場地を緩やかに流れて、度々幾筋かに岐れては氣まぐれに蜿蜒と迂曲して、名もない小さな小島を廻り、やがて、また先へ行つてから本筋へ落ち合つて廣々とした本流となつた。丁度彼が彼女を伴れて行つた場所の眞向ひに、かういふ流れの彼方此方から落ち合ふ箇所があつた。そして河もそのあたりは比較的廣くまた深かつた。それには狹い徒步の者しか通れない橋が架けてあつた。だが今は、秋の洪水の爲めに欄干が洗ひ去られてしまつて、たゞ丸裸の板が殘つてゐるだけであつた。しかもそれは、急流から僅か二三吋離れた上の方に渡してあつたから、ふらつかない頭腦の者にさへ、眼の眩むほど危い道になつてゐた。テスは晝間のうちに、青年たちが輕業の邊當をしてそれを渡つてゐるのを、家の窓から見てゐた。

夫も大抵その同じ藝當を見てゐたに相違なかつた。兎に角、彼は今、その橋板へ乘つて片足を前方へ踏み出し、それを渡つた。

自分を溺死させようとするのか知ら？　或はさうかも知れない。所は寂しいし、河は深くて廣く、たやすくかういふ目的を果すことが出來るのであつた。若し溺死させる積りでゐるなら、出來ないことはなかつたらう。離れ〳〵の生活を送る爲めに明日別れるよりも、いつそのこと、その方が增しかも知れなかつた。

矢のやうな急流は、二人の脚下を狂奔し、渦を卷いて流れ、水に映つた月の面を搖がしたり、歪めたり碎いたりした。水泡は、すい〳〵と流れて行き、また行手を遮られた雜草は、その堆積の後で波を跳ね上げてゐた。若し二人一緒に今この急流に落ち込んだら、腕はしつかりと結び合ひ、到底助からないに相違ない。殆んど苦痛もなくこの世を逃れ去り、そして、もう彼女に對する非難もなく、彼女と結婚した廉で彼に對する何等の非難もなくなるに相違ない。彼女と一緒に死んで行く彼の最後の半時間は、懷しいものとなるだらう。それだのに、若し、彼が目を覺ますまで二人が生き存らへるとしたら、彼の晝間の嫌忌は戻つて來るし、今のこの時間もたゞ一時の果敢ない夢として考へられるだけのものになるであらう。

二人一緒に貫つ逆樣にこの深淵の中に落ち込むやうに身動きしようかといふ衝動が、ふと湧き上つたが、しかも彼女は、それに溺れてしまひはしなかつた。自分の一命などはどうなつてもいゝといふことは、もうはつきりさせて置いた。が、彼のは——彼女にはそれに干渉する權利は毛頭なかつた。彼女を背負つて、彼は無事に向う岸へ着いた。

此處はもう、寺院の境內になつてゐる耕地のうちであつた。そして、彼は新たに彼女を背負ひ直して、二三歩進んで、やがて修道院の荒れ果てた內陣の跡へ來た。北側の壁に、僧院長の空の石棺が寄せかけてあつた。不氣味な性癖のある旅行者などは、よくその中へ入つて横になるのであつた。クレアはこの中へ、テスを大事に横たへた。二度目に彼女の唇に接吻すると、彼は、恰も大へん願つてゐた目的が遂げられでもしたやうに、深い安心の溜息をもらした。クレアは、それから地面に石棺と平行して横になり、すぐに疲れ切つて深い眠りに陷つてしまひ、丸太のやうに動かないでゐた。今までの努力を續けてゐた心の興奮が、今全くその逆りを止めたのである。

テスは棺の中に立ち上つた。夜は、この季節にも拘はらずからつとしてゐて、温かではあつたが、薄着のまゝで長く此處にゐるのは、彼に取つて危險である程度には寒かつた。若しこのまゝ放つて置かれたなら、彼は恐らく朝迄まで此處にゐて、確かに凍死してしまふに違ひなかつた。夢遊歩行をした後でかうした死にやうをする者のあるのを、彼女はこれまでに聞いてゐた。けれども自分に對する彼の痴行を知つたなら、どんなに彼は恥かしく思ふだらう。それを知つてゐながら、どうして彼を醒し、今まで彼のして來たことを知らせることが出來よう？　が、テスは石棺から出て、彼を幽かに搖つて見た。けれども、激しく搖らなければどうしても彼の目を醒ますことは出來なかつた。

敷布一枚が、情けない事だが僅かに體を保護してゐるに過ぎなかつたので、テスはぶる〳〵震へ出して來た。そこで是非共何とかしなければならなかつた。興奮の爲めに二三分の冒險の間は、幾らか體が温まつてゐたが、その恍惚たる瞬間も過ぎてしまつた。彼女の心には口で納得させて見ようといふ念が急に浮んだ。さう思ひつくと、彼女は呼び起せるほどにしつかりした決意をかためて、彼の耳元に囁いた——

「さ、歩きませう、あなた、」それと同時に、暗示するやうに彼の腕を執つた。彼は別に逆ひもせず言ふなりになつたので、彼女はほつとした。彼は彼女の言葉を聞いて、また夢に立ち戻つたらしく見えた。だがその夢は、こゝまで來て又新たな局面に入り、彼女が精靈として甦つて、彼を天國へ導いてゐるのであると彼は想像してゐるらしかつた。かうして彼女は、彼の腕を執つて住居の前にある石橋まで伴れて來て、それを渡つて邸宅の扉口に立つた。テスは全くの素足だつたので、それを石で傷め、骨までも冷え凍えた。だが、クレアは、毛の靴下を穿いてゐて、特に氣持惡くも思つてゐないやうであつた。

もうこの後は何の面倒もなかつた。彼女は彼を誘つて、彼の寢椅子の寢臺へ靜かに寢せつけ、蒲團を温かく着せ、彼の體から濕氣を乾かす爲めにちよつとの間煖爐に火を焚いた。かうした心遣りから起きる物音で、ひよつと彼が目を覺しはすまいかと、彼女は思つた。そして心竊かにさうしてくれゝばよいとも願つた。けれども、彼の心身の疲勞は甚だしかつたので、その熟睡を妨げられはしなかつた。

翌朝二人が會ふと直ぐに、テスはエンヂェルが、たとひ靜かに寢てゐなかつたと彼自身のことに氣が付いてゐたかもし

知れないとはいへ、前夜の夢遊歩行に彼女がどの程度まで關係してゐたかを、少しも、いや全く知つてゐないといふことを見拔いた。實際、彼はその朝、死んだも同じやうな深い睡眠から醒めた。そして、サムソン（「士師」記の中に出て來る強力の男。眠つてゐる間に、怪力の元を、デリラといふ女に奪はれて、醒めて全く力がなくなつたといふ）が禮を搖振つてゐるやうに、腦髓がその力試しをしてゐる初めの二三分の間に、彼は瞼ろげながら、異常な前夜の所爲を想ひ起した。けれども、彼の現在の立場に關する實際の事が、間もなく推理の力を他の問題の方へ移して行つた。

自分の心の標準を何か見定めようと、彼は心待ちに待つてゐた。前夜自分がかうしようと決したことが、朝の光に會つても消されてしまはないとしたら、たとひそれが一時の感情に刺戟されて始まつたものとしても、立派に理性に近い基礎の上に立つてゐるものであり、從つて、その點だけでは、十分信賴の出來るものであるといふことを、彼は知つた。かうして彼は、蒼白い朝の光のうちに、彼女と別れようといふ覺悟を見た。熟した、また、激した本能としてゞはなく、その本能を燃え焦がした熱情をすつかり拔きにした、白骨となつて殘つてゐる骨には過ぎないが、しかもそれだけ嚴として存してゐる本能として、見たのであつた。クレアはもう躊躇しなかつた。

朝飯の時も、それから二人で僅かな殘りの品物を荷造りしてゐる間も、はつきりそれと分るやうに、彼は、前夜の努力の爲めの疲勞を見せてゐたので、テスはもう少しのところで昨夜あつた出來事を殘らず打ち明けてしまはうとした位ゐであつた。けれども常識では認めてゐない彼女に對する愛情を、本能的にうつかり現はしたこと、また理性が眠つてゐる間に、彼の本心が威嚴と妥協したことを知つたなら、それは必ず彼を怒らし、悲しませ、愚弄させるに相違ないと思ひ返すと、彼女は再び思ひ止つてしまつた。それは、人が素面でゐるときに、その人の醉つてゐた間の失策を嘲笑するのと、餘りにもよく似通つてゐた。

若しかしたら、あの愛情を見せた醉狂な振舞ひを、微かながらも思ひ出したのかも知れない。が、彼女がそれをきつかけにして、行かずにゐて下さいと新たに自分に訴へるやうな機會をつくるだらうといふ心から、自然そのことに言ひ及ぶのを彼は厭がつてゐるのではあるまいかといふ考へが、ちらとまた彼女の心を掠めた。

彼は手紙で一番近くの町から乘物を呼んで置いた。で、朝飯がすむと間もなくそれはやつて來た。それを見ると、

彼女は、愈々最後が近付いた、少くとも一時的の最後——前夜の出來事で、彼に愛情のあることが分つたので、事によると、將來はまた彼と一緒になれるかも知れないといふ夢想を起したから——が近付いたと思つた。荷物は馬車の屋根の上に積まれ、馬車は彼等を乘せて走り出した。水車場の主人と手傳ひの老婆とは、この急な出立を見てやゝ驚いたらしい口吻だつたが、クレアは、水車の機械が自分の研究しようとする新式のものでないことが分つた爲めだと辯解した。その點だけでは間違つてはゐなかつた。これ以外には、二人の出發の樣子に、失敗をしたのだといふこと、或は一緒に家族のものを訪問に出掛けるのでないといふことを暗示するものは、何もなかつた。

二人の行く路は、二三日前、お互の胸にあれほどの嚴かな歡喜を抱いて出掛けた搾乳場の近くを通つてゐた。そしてクレアが、クリックと仕事のきまりをすつかり付けたがつてゐたので、テスもまた、二人の不幸な現狀に疑ひを抱かせまいとする限りは、どうしても彼と一緒に、クリックの妻君に訪問の禮をすることを避けるわけには行かなかつた。

この訪問を出來るだけ表立てまいとして、二人は、街道から搾乳場へ通じてゐる小門の側で馬車を降りて、並んで細道を徒歩で下つて行つた。ぽつ〳〵してゐた絹柳は刈り取られてゐた。そして二人には、その切株の向うに、クレアがテスを追つかけて是非妻になつてくれと迫つた場所が見えた。左手には彼女がクレアの竪琴の音に魅せられた圍ひ地が、また牛小舍の後に當つて遙かに遠く、二人が初めて抱擁した場面となつてゐた牧場が見えた。夏の光景を塗つてゐた黃金色は、今は灰色になつて、色彩は褪せ、肥沃な土壤は泥土となり、河流は冷たくなつてゐた。

搾乳場の主人は、屋敷の門越しに彼等を見つけると、新婚夫婦が再び顏を見せた際には、タルボセイズやその附近では差支へないとされてゐる惡戲な笑ひを顏に浮べながら出て來た。それから、クリックの妻君が、家の中から現はれた。つゞいて昔馴染の五六人も。尤もマリアンとレッティは丁度其處に居合はさないやうであつた。

テスは、みんなの惡戲な攻擊や親しみのある冗談を勇ましく堪へた。けれどもそれはみんなが豫期したのとはずつと違つた意味で、彼女の身にこたへた。二人の疎隔を祕密にして置かうといふ夫と妻との間の默契のうちに、二人は飽くまで何事もなかつたやうに振舞つた。ところで、その間

題に就いては一語も言つて貰ひたくはなかつたのであるが、テスはマリアンとレッティの話を細かに聽かされなければならなかつた。レッティは父の許へ歸つて行き、マリアンは此處を出て他處へ仕事を探しに行つた。彼女はそんな事をしても無駄だらうといふことだつた。

この話から受けた悒鬱を晴らす爲めに、テスは、自分の氣に入りだつた乳牛の側へ行つて、一頭々々手で撫でゝやりながら別れを告げた。そして彼女とクレアが、恰も身も心も融け合はさつてゐるかのやうに一緒に立ち並んで別れを告げた時、二人の樣子には、その眞相を見究めた人があるとすれば、その人は、何か妙に痛ましいところのあるのに氣付いたであらう。彼の腕は彼女の腕に觸れ、彼女の下袴は彼に觸れ、彼等の方に向つてゐる搾乳場の者全體を向うへ廻してゞもゐるやうに、二人一緒にその方へ向つて、別れの言葉にも『私たち』といふ言葉を用ひ、他眼には一つの生命の二枝とも見えたが、しかも、二人の間は南北兩極のやうに離れてゐたのである。二人の態度には、若夫婦に有りがちな羞恥とは異つた、妙に窮屈な、もどかしいところが、また、夫婦の親しみを表面に現はさうとするうちにも何處となくへまな樣子が、多分見えたかも知れない。

といふのは、二人が行つてしまふと、クリックの妻君は夫に向つてかう言つたからである——

「あの娘の眼の冴え方といつたら何て可笑しいんだらう、二人ともまるで蠟細工の人形のやうで、話といつたら、夢でも見てゐるやうな具合ぢやなかつたかね。あんたはさうは思はなかつたかね？　テスは平常から變つた所のある娘だつたけれど、いまだに、すつかり立派なお方のつんとすまし込んだ若い花嫁といふ風ぢやないね。」

二人は再び馬車に乘り、ウエザベリイとスタッグフット・レインの方へ、街道を驅つて行き、やがてレインに着くと、そこでクレアは馬車と馭者を歸した。此處で暫らく休んで谷間へ入ると、今度は二人の關係を知らない見知らぬ男に彼女の鄕里を指して馬車を驅けらせた。ナットルベリイも通り過ぎて、四辻のある中間の所まで來ると、クレアは乘物を止め、若し彼女が母親の許へ歸るつもりなら、此處で別れようとテスに言つた。馭者のゐる前では、自由に話が出來なかつたから、彼は、岐道の一つを徒歩で少しばかり一緒に歩いて來てくれないかと、彼女に訊ねた。彼女は承知した。そこで馭者に、二三分待つてゐてくれと言ひ附けて、二人はぶら〳〵立ち去つた。

「ところで、お互ひに諒解し合ふやうにしようね、」と彼は優しく言つた。「今、僕にはどうしても我慢し切れないものがあるにはあるけれども、僕達の間には少しも怒つてるなんていふことはないんだからね。僕はその我慢しきれないものを我慢するやうに努めるつもりだ。僕が落着けるやうになつたら、すぐ僕の住所を知らせるよ。そして、僕がそれを我慢の出來るやうな氣持になつたら——若しそれが願はしく思へたら、また出來るやうだつたら——僕はお前のところへ戻つて來よう。だが僕の來るまではお前の方から僕の方へ來ようとはしない方がいゝよ。」

嚴しいこの宣告は、テスには大きな傷手らしかつた。彼女は彼が自分のことをどう思つてゐるかを十分はつきり知つた。彼に對してひどい詐欺を働いた者だといふ見方から離れては、彼は彼女を見る事が出來なかつたのだ。しかも、彼女のしたやうなことをした女に、かういふ一切の責を負ふだけの罪があるのであらうか？　けれども、彼女はもうこれ以上この問題に就いて彼と爭ふことは出來なかつた。彼にならつて、彼の言葉を繰り返すのみであつた。

「あなたが、私の方へおいでになるまで、私の方からあなたの方へ行かうとしてはいけないんですつて？」

「その通りだよ。」

「では、お手紙を上げるのはいゝでせうか？」

「あゝいゝよ——若し病氣だとか、或は何か不自由なことがあればね。無論、そんなことは、無くてくれゝばいゝがね。だから、大抵は僕の方から先に書くことになるだらうよ。」

「私、すつかり承知しましたわ、エンヂェル。私がどういふ罰を受けなきやならないかつてことは、あなたが一番よく御存じなんですから。たゞ——たゞ——その罰が、餘り酷すぎて、とても私には耐へ切れないやうにだけはしないで下さいね。」

彼女がこの問題に觸れて言つたことは、それだけであつた。若しテスが手管を弄する女で、寂しい小徑で一場の芝居を演じ、氣絶し、ヒステリカルに啜り泣いたとしたら、彼は、頑固な潔癖に取り憑かれてゐたとはいへ、多分彼女に抗ふ譯には行かなかつたであらう。が、彼女の辛抱強い氣持は、彼の行路を進み易くしてやつた。そして彼女こそは、彼の二人とない勝れた辯護者であつた。誇りも屈從の中へ隱れてしまつた。——それは、恐らくダアバァヴィル家の人々に見えすぎるくらゐはつきりした、何事もその時任

せにするといふ捨鉢の態度のあらはれであつたかも知れない——そして、こちらから觸れゝば掻き鳴らすことが出來たかも知れない、幾筋とも分らない強い心の琴線にも觸れないで、そのまゝにして置いた。

二人が交したその外の話は、實際的の事柄に關することばかりであつた。彼は今、相當多額の金の入つた一封の包みを彼女に手渡した。それは、渡す爲めに兼ねて銀行から引き出して置いたのであつた。例の金剛石は、それに對するテスの所有權は彼女一代に限られてゐるやうだつた（その遺書の文面をよく解して見ると）ので、安全を期する爲めに、彼に銀行へ預けさしてくれるやうにと、彼は忠告した。そこで彼女は喜んでこれに同意した。

かういふことまで定つたので、彼はテスと一緒に馬車まで戻り、手を執つて彼女を乘せてやつた。馬車屋には賃銀を支拂ひ、彼女の行く先も言ひ聞かせた。で、彼は自分のトランクと雨傘、——此處へ携へて來た全部の品——を取り、彼女に暇を告げた。二人は、いよ〳〵其處で別れる事になつた。

輕馬車は丘を登つて行つた。クレアは、テスが瞬間でも窓から覗いてくれゝばいゝがと不圖浮んだ希望を抱いて、去つて行く輕馬車の後をぢつと見送つた。けれども彼女は車內に半分死んだ者のやうに氣を失つて横たはつてゐて、そんなことをしようなぞと少しも思つてゐなかつたし、また、さうしようとする氣力も無かつたに相違ない。かうして、彼は彼女の去つて行くのを見送つた。そして胸が苦しい餘りに、或る詩人の一句（ロバート・ブラウニング、一八一二—八九年のこと。原詩は「ピパは過ぐ」といふので、その最後の句は「神天に在ます—世は凡て正し」といふのである）を、勝手に奇妙な修正を施して、引用した——

神天に在らず——世は凡て過てり。

テスが丘陵の頂きを過ぎ去つてしまふと、彼は自分の進む方向に歩みを轉じた。そして、彼は自分がまだ彼女を愛してゐるのだといふ事には、殆んど氣づいてゐなかつた。

三八

ブラックムーアの谷間へ入つて行き、少女の頃に見た風景が四邊に展開して來るに連れ、テスは、昏迷狀態からひとりでに醒めて來た。彼女の最初の考へは、どうして兩親に顏が合されようか？　といふことであつた。

彼女は、村の入口の街道に立つてゐる通行稅取立門に着いた。幾年となくそこの番人をしてゐて彼女を見知つてゐた老人ではなく、全くの見知らぬ人が門を開けてくれた。あの老人は、多分、かういふ勤め人の交代の行はれる一月一日に去つてしまつたのであらう。最近鄕里からは何の便りも得てゐなかつたので、彼女は、その番人に何か變つたことでもないかと訊いて見た。

「あゝ、何んにもござんせんよ、姉さん、」と彼は答へた。「マアロットは相變らずのマアロットでしてね、誰彼が死んだとか何んとかつてだけでな。ジョン・ダアビフィールドは、今週、娘さんを或る百姓の旦那にかたづけやしたよ。そりやジョンの家からぢやござんせんがね。何處か、他處で祝言をしたらしいんでさあ。その紳士てえなあ身分が高えんで、それへ立ち會ふにやジョンの家族があんまり裕福でもねえつていふわけでしてね。お婿樣ア あのジョンが古い貴族の血統を引いてゐて、身代は羅馬の昔にみんな失くしてしまつたが、ちやんと今日までその一家のお寺の窖にや代代の遺骨が納つてゐるつていふことが分つたいきさつを、知らねえでゐるらしいんでさあ。でもジョン閣下は、俺達ア今彼をさう呼んでるんだがね、身上限りその祝言の日を祝ひましてな、村の衆一人殘らずに大饗應をやりましたぐよ。でジョンの上さんなんざあ、その晩ピュア・ドロップで十一時過ぎまでも歌つてゐたやうな譯でさあ。」

これを聞いて、テスはひどく心が亂れ、荷物やいろ〳〵の所持品を持つて、輕馬車で表向き我家へ歸つて行く決心がつきかねた。彼女は、荷物をしばらく家に預つて貰ふわけに行かないかと番人に訊いて見ると、別に差支へはないといふ返事だつたので、馬車を返し、裏道を通つて獨りで村へ入つて行つた。

父の家の煙突を見ると、一體どういふ風にして家へ入つたものであらう？　と彼女は自分自身に訊いて見た。その百姓家の屋內では、彼女の身內の者が、彼女を素敵な立派な身分に仕立てようとしてゐるかなりな金持の人と彼女とが、遠い所へ新婚旅行に行つてゐると厚かましく想像してゐた。ところが今彼女は、伴侶もなく、全くの一人ぼつちで、世界中探しても他に行くべきこれに勝る場所もなく、この懷しい古い門へ忍び寄つて行くのであつた。

家へ着くまでに、彼女は、人目に觸れないではゐなかつた。丁度庭の生垣の所で、彼女を知つてゐる娘——仲の好い學校友達であつた二三人の中の一人である——に出會つ

てしまつた。友達は、テスがどうして歸つて來たのかと二言三言質問をしてから、彼女の悲しさうな樣子には氣づかずに突然かう言つて話の腰を折つた——

「それはさうと、あんたの旦那さんは何處にゐなさるの、テス？」

夫は用事の爲めに他處へ行つてゐると、テスは急いで說明した。それから、この話相手と別れて、庭の生垣を登り越えた。こんな具合にして彼女は、家の方へと向つて行つた。

庭の小徑傳ひに家へ近づいて行くと、裏口の所で母親の歌つてゐる聲が聞え、それが見える處まで來ると、母親が闘の上で敷布を絞つてゐるのが分つた。テスには氣が附かずにこれを濟ましてしまひ、母親は家に入つて行つた、そこで娘はその後に跟いた。

洗濯桶は舊の樽に載つて、同じ舊の場所に置かれてあつた。そして母親は、今の敷布を傍へ投り出して置いて、腕を新たにまた桶の中へ突つ込まうとしてゐた。

「おやまあ——テス！——お前——お前は結婚したものとばつかし思つてたんだに！——今度こそはほんとにね、結婚したとばつかし——林檎酒を送つたんだが——」

「えゝ、お母さん。私、その通りなんですの。」

「これからしようといふんかい？」

「いゝえ、私、もう結婚しましたわ。」

「結婚した！　ぢや、お前の御亭主は何處にゐるんだい？」

「あゝ、あの人は、ちよつとの間、他處へ行つたの。」

「他處へ行つたつて！　ぢや、何時結婚したんだい？　あのお前の言つてよこした日だつたのかい？」

「えゝ、火曜日にね、お母さん。」

「でも、今日はまだ土曜日ぢやないかい、それにもうその方は行つてしまつたんかい？」

「えゝ。行つてしまつたんですの。」

「そりやどういふわけなんだい？　ほんとに、お前がいつでも見つけるやうなそんな御亭主なら、くたばつちまつた方がいゝ！」

「お母さん！」テスは母親の側へ寄つて顏をその胸に埋めると、急に咽泣きに沈んでしまつた。「お母さん、私、どうお話しゝていゝか、分りません！　あの人に言つてはいけないつてあなたは言つてくれましたし、お手紙にも書いて下さいました。ですけれど、私、あの人に話してしまつたんです——どうにも仕方がなかつたんですもの——で、

あの人は行つてしまひましたの！」

「まあ、お前の馬鹿つたら——お前の馬鹿つたら！」ダアビフィールドの女房は、興奮のあまりテスにも自分にも水を撥ねかけながら、怒鳴り出した。「何ていふこつたらう！私ア生き恥を晒して、こんなことまで言はなきやならないなんて！　だが、もう一遍言はなくちやゐられない、お前の馬鹿つたら！」

テスは身を顫はして泣き入つた。幾日も〳〵の緊張が到頭弛んでしまつたからである。

「私、それは分つてゐます。——分つてゐます——分つてゐます！」啜泣きしながら、彼女は喘ぐやうに言つた。「でも、お母さん、私、隱しちやゐられなかつたんです！　あの人は本當に優しくしてくれましたの——ですから、往日の事を隱して、あの人の眼を眩ますなんていふことは、惡いことだと私思つたんですの！　若し——若し——もう一度やり返さなければならないとしても——私、矢つ張り同じことをするに違ひないんです。私には、どうしても出來なかつたんです——する氣にはなれなかつたんです——そんなひどい罪を——あの人に對して犯すなんて——」

「だつて、お前、あの人と結婚したことが、もう罪を犯してるんぢやないかね！」

「さうです、さうです。それが私、悲しくつて仕方がないんです！　でも、若しあの人がどうしてもあのことを赦して下さらない決心なら、法律で立派に私を離緣することが出來るのだと、私、初めには思つてたんです。そして、ああ、お母さんが知つてさへくれたら——私があの人をどれ位ゐ愛してゐるかつてことを、半分だけでも知つてくれたら——私がどれ程、あの人を夫にしたいと思つてゐたかつてことを——そして、あの人をお慕ひする心と、どうかしてあの人に包み隱しなく仕向けたい願ひと、この二つの間に挾まつて、どんなに、私が苦しい思ひをしたかつてことを！」

テスはひどく激動してしまつたので、この上言葉を續けることが出來なくなり、どうにもならないものゝやうに、椅子に崩折れてしまつた。

「分つたよ、分つたよ、もう濟んだことは元へ歸りやしないさね！　本當に、私たちの育てる子供等に限つて、どうして他人樣の子供のやうでなく、どれもこれも揃つてぼんくらなんだらうね——分つてももうその時は後の祭でどうにもならないといふ時まで、默つてゐればいゝものを、此

方から餘計なことを喋るやうな考へなしのことをするなんて！」こゝでダアビフィールドの女房は、哀れな母親といふやうに自分の爲めに涙を溢し始めた。「お父さんが聞いたら、何と言ふか知れたもんぢやないよ、」と母親は續けた。「お父さんはあれからもう毎日のやうに、ロリヴァの家やピュア・ドロップで婚禮のことを觸れ廻つてゐるし、お前のお蔭で我家も先づ、往日の立派な地位に戻れようなんて言ひ歩いてるんだから——可哀さうに馬鹿な人つたら！——それを今お前が滅茶苦茶にしてしまつたんだよ！　本當に、困つたもんだ！」

恰も事件を或る焦點へ持ち來たすものゝやうに、その時テスの父親が近寄つて來るのが聞えた。けれども彼は、すぐには入つて來なかつた。ダアビフィールドの女房は、テスに暫らくこの場を外させて置いて、自分からこの凶報を彼に打ち明けようと言つた。先づ不意の失望に陷つた後で彼女は、テスの始めての失策に對した時と同じやうに、今度のことを災難と考へた。雨に降られた休日とか、馬鈴薯の不作にでも遭つた位ゐに考へた。また手柄になるとか馬鹿を見るとかいふことには關係なく、彼等の上に落ちて來ること、堪へられないこともないほんの外部の打擊に過ぎない事として考へるやうになつた。だが一つの教訓としては、考へなかつた。

テスは二階へ退いた。そして、寢臺の位置も變り、新しい並べ方になつてゐるのが不圖眼についた。彼女の嘗の寢臺は、末の二人の子供たちの爲めに用ひられてゐた。今は、もう其處に彼女の寢る場所はなかつた。

階下の部屋には天井板が張つてなかつたので、其處で起つてゐる事は大抵聞くことが出來た。やがて、父親が入つて來た。生きた鷄を一羽持つてゐるらしかつた。二度目の馬も餘儀なく賣つてしまはなければならなかつたから、今ではたゞの徒歩の行商人に過ぎず、籃を腕へかけて歩いてゐる有樣だつた。この牡鷄は、いつもよくやるやうに今朝もまた、自分は今働いてゐるのだといふことを人に見せる爲めに持ち歩かれてゐたが、實はもう一時間以上も足を縛られて、ロリヴァの家のテーブルの下へ寢かされてゐたのだつた。

「つい今のさつき話があつたとこさ、その——」とダアビフィールドは始めた。それから女房に向つて、娘が牧師の家へ嫁入りした事實が端緒で、牧師のことに就いて酒場で始まつた議論を、仔細に亙つて述べ立てた。「向うの家の者も、昔は俺の先祖達みたやうに『閣下』と名乘つてゐたんだよ、」と彼は言つた。「尤もこの頃ぢや、彼等の肩書は本當いふとたゞ『牧師』といふだけなんだが。」今度のことは、公けに世間へ知らしてくれるな、とテスから賴まれてゐたから、彼は詳しいことは言はなかつた。どうか娘が早くこの口止めを解いてくれゝばいゝ、新夫婦はテスの本當の姓をその儘ダアバヴィルと名乘るべきだ、御亭主の姓なんか名乘るよりもその方がずつといゝ、なぞと續けざまに述べ立てゝ、今日娘から手紙でも來なかつたかと訊ねたりした。

そこでダアビフィールドの女房は、手紙は來てゐないが、不幸にもテス自身が來てゐることを話した。

終に失敗の顚末が說明されると、ダアビフィールドには不思議な位ゐの陰氣な苦しみが生じて、陽氣な酒の醉を抑へつけてしまつた。それでゐて事件の眞相は、それを第三者があれこれと推察して感じる程にも、彼の敏感な感受性を動かしはしなかつた。

「今になつて、こんな成行きになつたと思ふと、」とジョン閣下は言つた。「しかもこの俺にや、向うのキングスビアの寺院の下に、田舍紳士ジョラアドの麥酒藏はども大きい廟所がある。俺の一族達が、記錄に載つてゐるものゝどれにも劣らねえ正銘のこの州の遺骨になつて、ごつちやに寢てるんだ。それから、もう屹度、あのロリヴァやピュア・ドロップで、連中がわしに何とか言ふだらうよ！　橫目を使ひながら、眼をまたゝかせながら、どんなにか言ふだらうよ！『こりやお前樣のとこにしちや大した緣組だ。これでお前樣は、ノルマン王時代のお前樣の御先祖達と全く同じ位に釀つたわけだな！』なんて。これぢやわしはとてもやり切れねえ。ジョン、わしや、いつそ死んぢめえてえ、爵位も何も一緒に——わしにはもう我慢が出來ねえ！……だが、先方が娘に結婚したつていふからは、どこまでも女房にして貰へるんだらうな？」

「そりや當りまへのことだよ。でもあの娘はさうして貰ふつもりなんかないらしいよ。」

「お前は、先方が本當にあの娘と結婚したと思ふかな？——それとも矢張り、初めのやうなわけなんかな——」

可哀さうに、こゝまで聞いてゐたテスはこれ以上を聞くに堪へなかつた。自分の言つた言葉が、此處でさへ、現に自分の兩親の家でさへ疑はれてゐるのだと知ると、他のことではとても感じることの出來ない反感がこの場所に對して湧いて來た。何といふ豫期しない運命の攻擊であらう！

父でさへが幾分の疑ひを持つてゐるのに、隣り近所の人々や知り合ひの人々が、どうして多くの疑ひを持たずにゐようか？　あゝ、自分はもう我家にも永居は出來ない！

從つて、彼女はやうやく二三日の滯在しか自分には許してゐなかつたが、その終る頃になつて、クレアから短い便りがあり、或る農園の視察に北部地方へ行つてゐるといふことを知らせて來た。彼の妻としての本當の華やかな地位を慕ふの餘り、また二人の間の疎隔の廣い間隙を兩親から祕す爲めに、彼女はこの手紙を利用して再び此處を出て行く理由とし、夫と一緒になる爲めに立つて行くのだといふ風に彼等に思ひ込ませた。自分に對して不親切すぎるといふ非難からなほ一層夫を庇ふ爲め、彼女はクレアから與へられた五十磅のうちから二十五磅を取り出し、エンヂェル・クレアともいはれる者の妻には、それ位ゐの餘裕は十分にあるのだといふやうに、その金を母の手に渡し、何年か前に、兩親へかけた心配や屈辱に對するほんの僅かな返禮だと言つた。こんな風に自分の威嚴を見せて置いて、彼女は彼等に別れを告げた。その後ダアビフィールドの家庭は、暫らくの間テスの贈物のお蔭で素晴らしい活氣を呈し、母親などは、若い夫婦の間に起つた不和は、二人お互ひに別居してなどゐられないといふ強い感情に支配されて自然と取りのけられてしまつた、と言つてゐたし、また實際に、信じてもゐた。

三九

結婚してから三週間の後、クレアは、有名な父の牧師館へ通じてゐる丘道を下つてゐた。下り道を行くに從つて、寺院の高い塔が、何故お前は歸つて來たのかと詰問でもするやうに夕暮の空に聳え立つてゐた。黃昏れた町では、誰一人彼に目を留める樣子はなかつた。まして彼を待つてゐる風など尙更なかつた。彼は幽靈のやうに、近づいて行つた。そして、自分の跫音さへも取り除けたい位ゐの邪魔物のやうに思はれた。

彼にとつては、人生の有樣は一變してしまつてゐた。彼はこれまで、それをたゞ思索の上だけで知つてゐたに過ぎなかつたが、今は實際の人間として分つて來たやうに思へた。實は、まだ〳〵分らないのかも知れなかつたが。それにも拘らず、彼の前に立ち塞つた人生は、もう伊太利藝術の幽婉な姿で立つてゐるのではなく、ウイアッ館（白耳義の歷史畫家ウイアツの爲めに、政府が建した博物館）の脾脫し且つ不氣味な態度で、またヴァン・ダアズ（白耳義の畫家）の習作に見るやうな憎らしい橫目をして立つてゐた。

この最初の幾週かの間にとつた彼の行動こそ、實にいひやうのない出鱈目なものであつた。古今の偉人聖賢が勸めた教へに從つて心を靜め、恰も何も變つた珍らしいことは起らなかつたかの如くに、機械的に自分の農業上の計畫を遂行しようと試みた後で、彼はかういふ偉人聖賢の中でも、自分の教へが實際に効果があるかどうかを試す程に自己を超越してゐるものは、殆んどないといふ結論に到達した。『これこそ第一のものなり——心を亂すなかれ、』と異教の道德學者は言つてゐる。それは、まさしくクレア自身の意見であつた。けれども彼の心は亂れてゐた。『汝等心を惱ますなかれ、また怖るゝなかれ。』かうナザレの人基督は言つてゐる。クレアは心からこれに共鳴した。が、矢張り彼の胸は惱んでゐた。この二人の大思想家と面接し、凡人が凡人に對する態度で熱心に彼等に訴へ、彼等の方法手段を話して貰ひたいと、どれほど彼は希望したか知れなかつた！

彼の氣分は自づと頑固な無頓着に變り、終には自分の生存を、どうでも好いといふ局外者の利害觀に從つて看てゐるのだと思ふやうになつた。

かうした心の佗しさも、彼女がダアバァヴィル家の一人であるといふ偶然の出來事から湧いて來たのだと思ふと、彼は愈々苦しい氣持にさせられた。テスは、あの力の盡きた古い血統から出た者で、彼が愛ほしく夢想してゐた下層の新しい種族から出たものではないといふことを知つた時、自分の主義を忠實に守つて、何故彼は冷然と彼女を捨て去らなかつたらうか？　これは彼の變節から起つたことであつた。だから、處罰は當然だつたのである。

次いで、彼は疲れもし、不安にもなつて來た。そして不安は次第に增して行つた。彼女に對する處置が不當だつたのではあるまいか、と思ひ迷つた。彼は覺えもなく食べ、味はふでもなく酒を飮んだ。時が過ぎて行くにつれ、過去の日の永い連續の中の一々の行爲の動機が知らず識らずに彼の眼前に現はれて來るにつれ、愛しいものとしてテスを所有したい考へが、どれほど密接に、すべての計畫や言葉や手段と混じ合つてゐたかに氣がついた。

彼方此方と歩き廻つてゐるうちに、小さい町の郊外に、移住農業家の活動地として伯剌西爾帝國にある大きな利益を並べ立てた赤や青の廣告に、彼は眼を留めた。其處では、

特別有利な條件で土地が提供されるといふことであつた。伯剌西爾は、新しい思ひつきとして多少彼の心を惹いた。テスも結局は彼地で一緒になることが出來ようし、また土地の狀態といひ、住民の思想といひ、習慣といひ、全く相反したあの國では、テスとの同棲生活を此處では實行することが出來ないやうにさせてゐる因習も、さほど力をもつてゐないかも知れない。簡單に言へば、彼は伯剌西爾を試して見ようといふ氣に強く傾いて行つた。殊に、彼地へ出かける時期が丁度間近に迫つてゐたから。

かう考へて兩親にこの計畫を打ち明けようと彼はエミンスタアへ歸つて行くところであつた。それから、テスを伴つて來ないといふことに就いては、現在二人が疎隔してゐることを明かさない範圍で、出來るだけよく說明しようと考へてゐた。門口まで來ると、新月が、腕に妻を抱いて河向うの修行僧達の墓場へと運んで行つたあの夜明けに近い時刻に古月が照した時のやうに、彼の面を照らした。けれども、今見る彼の顏はあの時よりも痛せ細つてゐた。

クレアは、この訪問のことを兩親へ豫じめ申し送つては置かなかつた。そこで、彼の到着は恰も狗が潛つて靜かな池を瞰がすやうに、牧師館の靜かな空氣を亂した。父も母も客間にゐたが、兄たちはどちらも今は家にゐなかつた。エンヂェルは中へ入つて、靜かに扉を閉めた。

「でも——お嬸さんは何處にゐるんだね、エンヂェル？」と母親は叫んだ。「まあほんとに吃驚したよ！」

「あれは母親の處にゐます——一時。僕はちよつと、急いで歸つて來たんです。伯剌西爾へ行かうと決心したもんですから。」

「伯剌西爾！　だつて、彼地の者はみんな確かに羅馬舊徒ですよ！」

「さうでせうか？　僕、そこまでは考へませんでした。」

けれども、彼が羅馬敎の邦土へ出かけるといふことの物珍らしさや不安な氣持さへも、息子の結婚に對する老夫婦の興味を長く押し除けて置く譯には行かなかつた。

「式を行つたといふ簡單なお前の手紙は、三週間前に受け取りましたよ、」とクレア夫人は言つた。「それで、あの通りお前の名附親からの賜物を、お父さまからその娘に送つて上げたわけだよ。無論のこと、こちらからは誰も立ち會はなかつた方がよかつたんでね。わけても、先方の家は何處にあるとしても其處からではなく、搾乳場で結婚する方が望みだといふからね。立ち會つてもお前には迷惑だつたらうし、私たちにしても少しも嬉しいことではなかつたでせうからね。お前の兄たちはそのことを酷く氣にかけてゐたんですよ。もう濟んでしまつたことだから、私たちは何とも苦情は言ひません。殊に、福音の使者とならうとするのでなく、お前が自由に選んだ仕事にその娘が適してゐると言ふからにはね……それにしても、私は第一にその娘を見たかつたんだよ、エンヂェル、でないまでも、その娘のことをもう少し知りたかつたんだよ。私たちは、別に贈物とーては何も送らなかつたが、その娘に何が一番氣に入るか分らないものでね。でも、たゞ遲れたゞけだといふことをお前は承知してゐてくれなければいけないよ。エンヂェル、私にしろ、また、お父さまにしろ、今度の結婚に對しては別に少しも怒つてなどゐるわけではないからね。でも、私たちが直接その娘に會へる時までは、お前の家內が好きになるのを控へてゐた方がいゝと思つたんだよ。それだのに、今お前は伴れてお出でぢやなかつた。變だね。何かあつたのかい？」

彼は、自分が此處へ來てゐるうち暫らくの間、彼女は實家の兩親の所へ行つてゐる方がいゝといふことに、二人で相談したのだと答へた。

「實はかういふ積りなんですよ、お母さん、」と彼は言つた。「つまり、僕はかねて、これならあなたのお氣に召すと僕の確信が出來るまでは此處からあれを遠ざけて置かうと思つたんです。ですが、この伯剌西爾行きを思ひついたのは極く最近のことです。若し行くにしても、今度の僕の最初の渡航には、あれを伴れて行かない方がいゝだらうと思ひます。僕の歸つて來るまで、あれは、母親の手許にゐることになりませうよ。」

「ぢや、お前が立つ前に、私はその娘に會ふわけに行かないのかい？」

或はさういふことになるかも知れないと彼は思つた。彼の初めからの計畫は、先にも言つた通り、彼女を伴れて來る事を暫らく差し控へてみようといふのであつた——兩親の偏見——感情——を何れにもせよ傷つけたくはなかつたから。またその他にも理由があつて、この考へを守つて來たのである。今出かけて行つたにしても、一ヶ年以內には再び家へ歸つて來なければならないに相違ない、だから二回目に出發する——彼女と一緒に——時には、その前に是非とも彼女をお紹介せしよう、と彼は述べた。

大急ぎで調へられた晚餐が運び入れられた。そして、ク

レアは自分の計畫の說明を更に進めた。花嫁に會へないといふ失望が、まだ母親の胸に依然として殘つてゐたが、クレアがテスに對するあの結婚間際の熱情は、老婦人の母らしい同情にすつかり染み込んでしまつて、到頭、良いものがナザレから出ることもあり得る——美しい娘がタルボセイズの搾乳場から出ることもあり得ようといふやうなことまで、殆んど想像するやうになつた。彼が食べてゐる間中も、夫人はぢつと息子の樣子を見守つてゐた。

「お前その娘のことを口で說明することは出來ないかい？　吃度、大變に綺麗な娘なんだらうね、エンヂェル。」

「それはもう言ふまでもないことです！」と彼は問題の痛いところを蔽ひ隱す妙味を添へて、言つた。

「では、その娘は純潔で、貞淑なこともまた言ふまでもないことだらうね？」

「純潔で貞淑、無論さうですとも、あの娘は。」

「ほんとにはつきりとその娘が眼に見えますよ。お前はこの前かうお言ひだつたね。姿が大變よくつて、圓々とした體格で、キューピットの弓のやうな線をした眞紅なふくよくしい唇をして、瞼毛と眉とは黑く、髮の毛は太い錨綱のやうに房々とし、菫と靑と黑の色をしてゐる大きな眼をしてゐるつてね。」

「えゝ言ひました。お母さん。」

「もうすつかり眼の前に見えるよ。そして、そんな邊鄙な土地に住んでゐたんだから、自然お前に會ふまでは世間の若い男に殆んど一人も會つてゐないんだね。」

「えゝ、殆んど。」

「お前がその娘の初戀だつたんだね？」

「勿論です。」

「世間には、かういふ初心な眞紅な口をした頑丈な百姓娘などより、もつとたちのよくない奧さんも澤山あるんだよ。確かに、私はかう望むのが當然だつたわけだね——ね、息子が農業家にならうといふのだから、その嫁も戶外の生活に慣れてゐなくちやならないつていふのは、もう全く當然のことなんだからね。」

父親はこれ程間ひかけはしなかつた、が、晩の祈禱の前に何時も讀むことになつてゐた聖書の一章を朗讀する時刻が來ると、牧師は夫人に向つて言つた——

「エンヂェルが來てるんだから、今夜は平常の朗讀の課目にしてゐる章よりは、『箴言』の第三十一章を讀む方が適當だと思ふがどうかな？」

「えゝ、本當にさうしませう、」とクレア夫人は言つた。「レムエル王の言葉を、」（これは「箴言」第三十一章の冒頭の詞）（夫同樣に夫人は聖書の章句を諳誦することが出來た。）「ねえお前、お父さまは貞淑な妻を讃美してゐる『箴言』のあの章を讀んで下さることに決めましたよ。言ふまでもなく、あの言葉は、今此處に居ない人に當てはまるものなんだよ。神樣、その女を何事によらず護り給へ！」

クレアは咽喉が詰るやうに思つた。持ち運びの出來る讀經臺が、片隅から取り出されて、爐端の中程のところへ据ゑられた。年老いた二人の召使が入つて來た。そこでエンヂェルの父は、前に言つた章の第十節を讀み始めた——

「誰か賢き女を見出すことを得ん？　その價は紅玉よりも遙かに貴ければなり。未だ夜の明けぬに起き出で、家人に糧を賄ふ。力もて腰に帶し、その腕を强くす。彼女は商品の利潤あるを知る、彼女の燈火は夜もすがら消えやらず。彼女はよく家政のことを省み、怠惰のパンを食はず。その子等は起ちて彼女を祝す、夫もまたかくし、彼女を稱ふ。多くの女子は賢くことを爲せど、汝は彼等の凡てに優れり。」

祈禱が終ると、母親は言つた——

「私は只今お前のお父さまがお讀みになつた章が、特に幾つかの點で、お前の選んだ女に實によく當て嵌るやうに思はれてならないよ。完全な女といふのは、ね、働く女のことなんだよ。怠け者とか、綺麗な婦人とかのことではなく、自分の手や、頭腦や、胸を他人の爲めに役立てる女のことなんだよ。『彼女の子等は起ちて彼女を祝し、夫もまたかくし、彼女を稱ふ。多くの女子は賢くことを爲せど、汝は彼等の凡てに優れり。』ねえ、私、本當にその娘に會つてゐたらと思ふんだよ、エンヂェル。その娘は純潔で、貞淑な女だとお言ひなんだから、私にはもうそれだけで結構なんだよ。」

クレアはもうこの上これを堪へてゐることが出來なかつた。眼には淚が溜つた。それは熔けた鉛の滴りのやうであつた。彼は、自分が心から愛してゐたこの誠實な、單純な心の人達に、急いでお寢みを言つた。この人たちは世間も、俗情も、或は彼等自身の胸の中に潛んでゐる惡魔をも知らなかつた。それはたゞ漠然とした、彼等には一向關係もないものとして感じられるだけであつた。彼は自分の寢室へ退き下つて行つた。

母親は彼の後を追つた。そして彼の寢室の扉を叩いた。クレアが扉を開けると、彼女は心配さうな眼付をして、戶の外に立つてゐた。

「エンヂェル、」と彼女は訊ねた。「お前こんなに早く離れて來てしまふなんて、何かいけないことでもあつたのかい？どうも確かに、お前は平常のやうぢやないよ。」

「その通りです、全く、お母さん、」と彼は言つた。

「その娘のことでかね？　ねえお前、私には分つてゐますよ——その娘のことに就いてだといふことは分つてゐますよ！　この三週間のうちに、お前は喧嘩でもしたといふのかい？」

「いゝえ、喧嘩をしたつていふ譯ではないんです、」と彼は言つた。「ちよつと意見が合はなくつて——」

「エンヂェル——その娘はこれまでの身の上を、調べられても別に差支へない者なんかい？」

母親の直感で、クレア老夫人は、息子の心を亂してゐるらしいやうな不安の根源になつてゐる心配事に、これと圖星を指したのであつた。

「あの娘には一つだつて汚點なんかないんです！」と彼は答へた。そして、直ぐにその場で永遠の地獄に投ぜられるとしても、その嘘を矢張り言つてゐるに相違ないと、彼は感じた。

「それなら、他のことなどは氣に掛けない方がいゝよ。何と言つても、少しの汚點もない田舍娘ほど清い者は世の中には滅多にないものだからね。最初のうちは、相手よりも教育のあるお前の氣に障るやうな亂暴な擧動をしても、お前と一緒にゐて、お前の仕込みを受けて行くうちには、屹度そんな事もなくなつて來るに違ひないからね。」

かういふ盲目的な寬大さが示してゐる怖ろしい皮肉は、今度の結婚で自分の出世をすつかり破壞してしまつたといふ、第二義的な考へをクレアの胸に深く沁み込ませた。この考へは、現實暴露のあつた後の、彼の始めの考へのうちには決してなかつたのであつた。實際、自分の身が可愛さに、自分の經歷などゝいふことに少しも重きを置いてゐた譯ではなかつたが、兩親や兄たちの爲めに、境遇を少くとも相當なものにして置きたいと願つた。そして、今ぢつと蠟燭の火を瞶めてゐると、自分は分別のある人たちを照す爲めに出來てゐるので、木偶漢や敗殘者の顏を照すのは大嫌ひだ、とその炎は無言の中に語つてゐた。

心の動搖が落着くと、時折、彼は兩親を騙さなければならぬやうな破目に自分を陷れたといふ理由で、可哀さうな妻にひどく腹を立てることがあつた。激怒の餘り、彼女が恰も部屋にゐでもするかのやうに、話しかける位ゐであつた。すると、なだめすかす悲しい媚びるやうな彼女の聲が闇を亂し、彼女の唇の天鵞絨のやうな感觸が、彼の前額の上を過ぎた。そして彼女の呼吸の溫かさを、部屋の中にはつきりと感ずることが出來た。

その夜、彼が輕蔑して認めない女は、自分の夫がいかに偉くて、また善良であるかを考へてゐた。が、この二人の上には、どちらにも、エンヂェル・クレアが認めてゐた影、言ひかへれば、自分の弱點の影よりも深い影が蔽ひかゝつてゐた。何處までも自分の考へでものを判斷しようと企ててゐたにも拘らず、最近二十五年來の標本的產物ともいふべきこの進歩した立派な志を有つた靑年も、一度不意を喰つて、その幼年時代の敎訓に押し戻されると、矢張り、習慣と因襲の奴隷になつてしまふのであつた。彼のこの若い妻とても、罪惡を嫌惡する情を抱いて生れついてゐるどんな他の女にも劣らずレムエル王の賞讃を博するに相應しい者である。何故かといへば、彼女の道德的價値は行爲をもとにして計るべきものではなく、傾向で計るべきものであるからだ、といふことを、どんな豫言者も彼に告げはしなかつたし、また、彼もこれを自分に語り得る豫言者ではなかつたのみならず、かういふ場合に、手近の姿といふものは惡く見えるのが常である。それは、陰影なしにその醜さを見せつけるからである。ところが、遠く離れた茫然した姿は、離れてゐる爲めに、それについてゐる汚點も藝術的な長所となつて崇められる。眞實のテスならぬものを考へてゐるうちに、彼は眞實の彼女を見逃してしまつた。そして、缺點あるものが、却つて完全無缺なものに勝ることがあり得るといふ事實を忘れてしまつた。

四〇

朝飯のテーブルでは、伯剌西爾が話題となつた。そして、彼地に移住して一年と經たないうちに歸つて來たといふ農業勞働者たちの悲觀すべき報告があつたにも拘らず、みんなは、クレアの提案したその國の地質を實驗することを、つとめて有望だと解釋するやうにした。朝飯後、クレアは此處の町で自分に關係のある細々したことに一切決りをつけ、自分の所有である預金の全額を土地の銀行から引き出す爲めに、小さな町へ出かけて行つた。歸りに彼は敎會の側でマーシイ・チャント孃に出會つた。彼女はその敎會の壁から、ふはつと浮き出して來たものゝやうに見えた。腕には、自分の生徒たちに貸すバイブルを一ぱい抱へてゐた。

そして、他人に心の痛みを與へるやうな出來事は、自分には却つて幸福な微笑を齎らすといふのが、彼女の抱いてゐる人生觀であつた——エンヂェルの意見に依ると、たとひそれは、神祕教の爲めに人情を不思議な位ゐ不自然に犧牲にして得た結果であるとはいふものゝ、羨ましい考へ方である。

彼が今英蘭を去らうとしてゐることを、彼女は聞き知つてゐた。そして、本當に立派な、また、有望な計畫に思はれるとも言つた。

「えゝ、商業上の意味から言へば、先づ可なり好さゝうな計畫に相違ありませんがね、」と彼は答へた。「ですが、マーシイさん、出掛けると、生存の絲がぽつきりと切れてしまひますよ。修道院生活の方がまだ增しかも知れませんね。」

「修道院生活ですつて！　まあ、エンヂェル・クレア！」

「どうしました？」

「だつて、あなたはお人が惡いわ、修道院生活つたら坊さんの事ぢやありませんか。そして、坊さんといつたら羅馬舊教のことになりませう。」

「それから、羅馬舊教は罪惡つてことに、罪惡は永遠の地獄つてことになりますね。汝は眞に危きにあり、エンヂェル・クレアよ、ですか。」

「この私は、新教を誇りとしてゐます！」と彼女はきめつけた。

するとクレアは、たゞ〳〵苦しい不幸の爲めに、人が自分の本當の主義をも輕蔑せずにはゐられなくなる惡魔のやうな氣持に投げ込まれて、彼女を自分の近くへ呼び寄せて、考へ出せる限りの最も異端的な觀念を、惡魔らしく彼女の耳元に囁いた。彼女の美しい顏に現はれた恐怖を見て、彼は急にから〳〵と笑つたが、それも自分の幸福を思ふ苦惱や心配の情に浚はれて、忽ち消え去つてしまつた。

「ねえ、マーシイ、」と彼は言つた。「あなたは僕を赦してくれなくてはなりません。僕は今氣が狂ひさうになつてゐるんです！」

全くさうだと、彼女は思つた。かうして二人は會つて又別れた。そして、クレアは再び牧師館へ入つて行つた。彼はもつと幸福な日が湧いて來ることがあるなら、その時までと、あの寶石を土地の銀行家の手へ預けた。彼はまた三十磅ほど銀行へ拂ひ込んだ——テスが入用だといへば、それに應じて二三ヶ月以内に彼女へ送金する爲めであつた。

そしてブラックムーア盆地の兩親の許にゐる彼女へ宛てゝ彼の取りきめて置いたことを、彼は手紙で通知した。この金額は、既に彼女の手に渡してある額——約五十磅——と合せれば、當分彼女の必要には十分であると彼は思つてゐた。殊に火急の場合には、彼の父親の許へ言つて寄越すやうにと、彼女は既に言ひきかされてゐた。

彼は、兩親にテスの住所を知らせて彼女と交通などさせないやうにするのが最も得策だと考へた。また二人が疎隔した本當の原因を知らなかつたので、父親も母親も、特に彼にさうせよとも言はなかつた。彼は極りをつけるべきことは早く始末したいと考へてゐたから、その日のうちに、牧師館を立ち去つた。

英蘭のこの地方を去る最後の義務として、彼は新婚の三日間をテスと共に暮したウェルブリッヂの百姓家を訪問しなければならなかつた。つまり、少しばかりの家賃を支拂ひ、彼等が使つてゐた部屋の鍵を返し、そして出立の際に殘して來た細々した二三の品物を取つて來なければならなかつたのである。これまでに投げ掛けられたうちで一番深い影——その闇を彼の上に擴げたのは、この屋根の下であつた。しかも、彼が居間の扉を開けて、その中を覗き込んだとき、先づ最初に彼の心に甦つて來た記憶は、同じやうな午後に於ける幸福な二人の到着であつた。一體となつて、一つの家に住むといふ最初の新鮮な感覺であつた。初めて二人が一緒にした食事であつた。爐邊で手を握り合つて交はした無駄口であつた。

百姓夫婦は、彼が訪問したときには野良に出てゐた。そこでクレアは、一人きりで暫らく部屋にゐた。彼の全く思ひ設けなかつた感情が、新たに胸に漲つて來たので、彼は二階の彼女の寢室へ上つて行かずにはゐられなかつた。寢臺は出れは、一度も彼の寢室になつたことはなかつた。寢臺は出發の朝彼女が親しく手を下して作つたまゝで、綺麗になつてゐた。寄生樹は、天蓋の下に彼が吊したまゝでかゝつてゐた。三四週間も經つたのであるから、色は褪せかけ、葉や實には皺が出來てゐた。エンヂェルはそれを取り下ろし、爐格子の中へ折り潰して投げ込んだ。其處に立つて、彼は始めて、今度の危機に彼が執つた處置が、果して賢明なものであつたか、まして寬大なものであつたかどうかと疑ひ出した。けれども、慘酷なほどに自分は盲目になつてゐたのではなかつたか？　取りとめのないいろ〳〵の感情が胸に一杯湧いて來たので、彼は眼を潤ませて寢臺の側へ跪いてし

まつた。「おゝ、テス！　も少し早く言つてくれさへしたら、僕は、お前を救してやつたらうに、」と彼は悲しみに沈んだ。

階下で足音が聞えたので、彼は立ち上つて階段の上り口へ行つた。梯子段の下に、彼は一人の女が立つてゐるのを見た。そして、その女が顔を上げたところを見ると、それは色の蒼ざめた、黒い眼をした、イズ・ヒュエットであることが分つた。

「クレアさん、」と彼女は言つた。「私、あなたと奥さんとをお訪ねに上つたんです、そして御機嫌はどうかとお伺ひしようと思つて、多分あなた方は此方へお歸りになつておいでのことゝ思つたものですから。」

これは、彼には大方想像のついてゐる祕密を胸に抱いてゐるが、先方では彼の祕密にまだ氣がつかずにゐる娘であつた。彼を愛してゐた正直な娘――テス位ゐに、或は殆んど彼女に劣らない位ゐに、實際的な農夫の良妻にやがてはなれるかも知れない娘であつた。

「僕は今獨りきりで、此處へ來てゐるんだよ、」と彼は言つた。「僕たちは今此處には棲んでゐないんだ。」自分が此處へ何しに來たかを說明した後で、彼は訊いた。「何方から歸るんだね、イズ？」

「私、今ではもうタルボセイズの搾乳場にはゐないのよ、」と彼女は言つた。

「それは一體どうした譯なんだね？」

イズは俯向いてしまつた。

「あすこはとても物淋しくつて仕方がなかつたんで、私到頭出てしまひました！　私今、此方へ來てゐるんです。」彼女は正反對の方向を指した。それは今彼がこれから行かうとしてゐる方向であつた。

「さうかい――これから其方へ行くのかい？　乘つて行きたいなら、一緒に伴れて行つて上げてもいゝよ。」

オリーヴ色の彼女の顏は、その色を增して來た。

「有難う、クレアさん、」と彼女は言つた。

彼は程なく農夫を見つけ、家賃の勘定と、不意にこの宿を立ち去つた爲めに、考慮に入れなければならない二三の他の事柄をも片附けた。クレアが馬車のところへ戻つて來ると、イズは彼の側へ跳び乘つた。

「僕はこれから英蘭を去るんだよ、イズ、」馬車を走らせながら、彼は言つた。「伯剌西爾へ行くつもりなんだ。」

「それで、奥さんもそんな遠方へ行くのを何とも思つてゐないんですか？」と彼女は訊ねた。

「あれは、今度は行かないんだよ――まあ一年かそこらはね。僕は視察に出掛けるんだよ――彼地の生活狀態がどんな風か調べる爲めにね。」

彼等はかなりの距離を東の方へ走つた。その間、イズは一言も言はなかつた。

「他の者はどうしてゐるかね？」と彼は訊いた。「レッティはどうしたかね？」

「この前私が會つた時には、何だか神經衰弱のやうな風でしたよ。そしてひどく痩せて、頰がこけて、何だか肺病みのやうでしたわ。もうあの娘に戀をするやうな人はないでせうよ。」とイズは氣が拔けたやうに、言つた。

「それから、マリアンは？」

イズは聲を落した。

「マリアンはお酒飲みになりましたの。」

「眞實かい！」

「えゝ。搾乳場から出されてしまつたんですよ。」

「そして君は！」

「私、お酒も飲みませんし、肺病でもありませんわ。でも――私もう、朝飯前に歌ふことなど出來なくなつてしまひましたわ！」

「どうしてさうなんだね？　朝の乳搾りの時に君の『キューピットの園の芝生でよ』や『仕立屋の股引』などの節廻しと來たら、實に鮮かなもんだつたぢやないかね？」

「えゝ、さうでしたわ！　あなたが初めてお出でになつた時分にはね。でも、少し經つてからは、さうぢやなくなりましたわ。」

「どうしてさう止めてしまつたんだね？」

返事の代りに彼女の黒い眼が、ちらつと彼の面に向いて輝いた。

「イズ！――君は何故そんなに弱いんだね――僕のやうな者の爲めにさ！」と言つて、彼は瞑想に沈んでしまつた。

「それぢや――僕がかりに、君に結婚を申し込んだとしたらどうしたんだね？」

「若しさうでしたら私、『はい』と言つたんでせうよ。そして、あなたも戀しがつてる女を妻となすつたことでせうよ！」

「本當かね！」

「えゝ、本當よ！」と熱心に彼女は囁いた。「まあ！　あなたは、今までそれを少しも察して下さらなかつたんですの？」

程なく彼等は或る村へ通ずる岐道の處へ着いた。

「私、降りなければなりませんわ。この向うに居りますから、」イズは、自分の愛を告白してからずつと一言も口を利かないでゐたが、突然かう言つた。

クレアは馬を弛めた。彼は、社會の法則にひどく反感を抱いて、自分の運命を呪はずにはゐられなかつた。それの爲めに正當な拔け道のない一隅へ押し込まれてしまつてゐたからである。かうして罠に掛つたやうになつてゐながら道學的な因襲の笞を甘んじて受けることなどはせず、奔放に自分の將來の家庭を作つて、社會に復讐する事が出來ないといふ理窟もないとも思つた。

「僕は獨りきりで伯剌西爾へ出かけるんだよ、イズ、」と彼は言つた。「僕はね、渡航するといふ理由でなく、一身上の都合があつて妻とは別れたんだ。もう二度とあれと同棲するやうなことは絶對にあるまいよ。僕は君を愛するわけには行かないかも知れないが——あれの代りに、君、僕と一緒に行つてくれないかね？」

「あなたは本當に、私に行つて貰ひたいんですか？」

「本當だよ。僕も隨分ひどい目に會つたんだから、心を休めたいんだ。で、君は少くとも、利害に關りなく僕を愛してくれるんだらう。」

「えゝ——私、行きますわ。」と、暫らく間を置いてからイズは言つた。

「行つてくれる？　で、それがどんなことになるか、君には分つてゐるかね、イズ？」

「つまり、あなたが彼方にゐらつしやる間だけ、私、あなたと同棲することになるんでせう——それで私、滿足なんですわ。」

「だが、覺えてゐて貰ひたいね、君は道德といふ點でもう僕を信賴することは出來ないんだよ。これだけは言つて置くがね、これは惡い行ひをすることになるんだし、文明の眼から見ると——つまりこの文明の眼から見るとね。」

「私、そんなことは關ひませんわ。女が苦しみの絶頂へ來ると、そんなことは關はないもんですわ、またさうする他に仕方がありませんもの！」

「ぢや、降りずにそのまゝ掛けておいでよ。」

四辻を通り過ぎて、一哩二哩と、彼は格別愛情らしいものも見せないで馬車を驅つて行つた。

「君は本當に、大へん僕を愛してゐるのかね、イズ？」と、彼は突然訊ねた。

「えゝ——私、さつきもさうだつて申したでせう！　搾乳場に一緒にゐる間中、もうずつと戀しいと思つてゐましたわ！」

「テス以上に？」

彼女は首を振つた。

「いゝえ、」と彼女は呟いた。「あの人以上ではありませんわ。」

「どうして？」

「でも、誰だつてテス以上にあなたを愛することなんか出來ませんもの！……あの人は、あなたの爲めなら命でも捨てたんでせう。私なんか、とても敵ひませんわ。」

ピオールの巓の豫言者（バラクを連れて、曠野に對するピオールの嶺に至つたバラームのこと）のやうに、かうした場合に、イズ・ヒュウエットも出來ることならば意地惡い言ひ方をしたかつたのであらうが、テスの性格が粗野な彼女の性質に働きかけた魅力は、彼女をしてどうしても讃辭を言はしめないではゐなかつた。

クレアは默つてゐた。かういふ豫期しなかつた、非難の出來ない方面から出たこの率直な言葉を聞くと、彼の胸は躍つた。咽喉には何か堅り泣きが其處で凝結したとでも言つてよいものがあつた。彼の耳は繰り返した。「あの人は、あなたの爲めなら命でも捨てたんでせう。私なんか、とても敵ひませんわ！」

「今までのつまらない話は忘れておくれよ、イズ、」と突然彼は馬の向きを變へながら言つた。「一體、僕は何を言つてゐたのか、さつぱり分らない！　これから、君の歸つて行く細道のところまで逆り返して上げよう。」

「こんなにまであなたに正直にしたのに、まあ、そんな事になるんですか！　あゝ——私どうして我慢が出來ませうになるんですか——どうして出來ませう！」

イズ・ヒュウエットは激しく泣き出した。そして、自分の爲めたことがだん〳〵分つて來ると、前額を打つた。

「此處にゐない人に對してした今の少しばかりの善行を、君は悔いてゐるのかね？　あゝ、イズ、折角の善行を、今悔んでだいなしにしてしまふもんぢやないよ！」

彼女は次第に鎭まつて來た。

「分りましたわ。私、何を言つてたんだか、夢中で分らなかつたんですわ——行きますわと承知したときには！　私は願つてゐたんですわ——とても叶はない筈のことを！」

「僕にはもう、可愛い妻があるんだからね。」

「えゝ、さうですとも！　おありなんですわ。」

半時間ばかり前に通つた細道の角のところに、彼等は着いた。そしてイズは馬車から跳ね降りた。

「イズ――どうか、どうか、僕の一時の輕はずみは忘れておくれよ！」と彼は叫んだ。「實際に無分別だつた、あんまり愚かだつた！」

「忘れろつて仰しやるの？　どうして、どうして！　おゝ私には決して輕はずみのことぢやなかつたんですわ！」

この傷ついた叫び聲が傳へる非難を、自分はどんなに十分受けなければならないかを感じ、また言ひ現はし難い哀れさの餘りに、彼は馬車を跳び降りて彼女の手を執つた。

「うん、だがね、イズ、兎に角、仲よく別れようぢやないか？　どれほどの苦しみを僕が堪へて來てゐるか、君は知らないんだよ！」

彼女は實際に寛容な娘だつたので、これ以上恨みを懷いて二人の別れを傷つけることはしなかつた。

「では、忘れて上げますわ！」と彼女は言つた。

「ところで、イズ、」彼女がまだ側に立つてゐるうちに、教訓者といふ心にもない立場に止むを得ず己を据ゑて、彼は言つた。「マリアンに會つたら、どうか善良な婦女になるやうに、下らなく身を持ち崩すやうなことのないやうにつて、よく傳へて貰ひたいんだ。それを約束しておくれよ。そしてレッティにはかう傳へておくれよ、世間には僕などよりも、もつと立派な人間がゐるんだから、僕の爲めと思つて、賢く、善良な行ひをしてくれなくてはいけないつてね――この言葉を忘れないでね――賢く、善良なだよ――僕の爲めにね。死にかゝつてゐる者が同じく死にかゝつてゐる者に傳へるやうに、僕はこの言葉をあの女たちに送るんだ、僕はもう二度と再びあの女たちに會ふことはあるまいからね。で、君は、イッヂイ（イズの愛稱）、君は僕の妻の事に就いて言つた正直な言葉で、痴行と不信へと向つた怪しい衝動から僕を救ひ上げてくれたんだよ。女つてものは罪深いものかも知れないが、かういふことにかけては、男ほど罪深いものぢやないね！　たゞそのことだけでも、僕は決して君を忘れることは出來ないよ。どうか、君もこれまで通り、善良な、誠實な娘であつておくれ。そして愛人としての價値はなくても、友達としては忠實なものとして、僕を思ひ出しておくれよ。さあ約束して。」

彼女はその約束をした。

「神樣があなたを祝福し、護つて下さるやうに祈りますわ。さやうなら！」

彼は馬車を驅つて行つてしまつた。けれどもイズは小徑へ曲り、クレアの姿が見えなくなるとすぐ切り裂かれるやうな惱みに襲はれて、土堤へ身を投げ出してしまつた。その晩遲くなつてから母の家へ入つたときの彼女の顏は、疲れきつて、不自然な樣子を帶びてゐた。エンヂェル・クレアが彼女と別れ、それから彼女が我家に歸り着くまでの數時間を、イズがどんな風に過したかは誰一人として知つた者はなかつた。

クレアもまたこの娘に別れを告げてから、胸には痛みを感じ、唇はわな〳〵顫はせてゐた。けれども、彼の悲しみはイズの爲めにではなかつた。その夕方、彼はほんのちよつとで、一番近くの停車場へ行く街道を捨てゝ、テスの故鄕と彼とを分つてゐる南ウェセックスの高い山の背を乘り越して行くところであつた。彼を引き止めたものは、彼女の性質に對する侮蔑ではなく、また、かうではないか知らと思はれる彼女の心持でもなかつた。

さうではなかつた。それは、イズの言つた事で確かめられた通り、彼女に愛のあることは分つてゐても、あの事實は少しも變つてはゐないといふ考へであつた。若し彼が最初に正しかつたものなら、今も正しい筈である。そして彼が乘り入れた潮流の勢ひは、今日の午後彼の上に働いたものよりは强い、もつと把握力のある力で心を轉じさせられない限り、依然として彼をその中に入れ、押し流して行かうとしてゐた。歸らうと思へば何時でも直ぐに彼は彼女の許へ歸つて行けた。その夜、彼は倫敦行きの列車に乘つた。そして五日後には、これから船に乘らうとする港で、二人の兄と訣別の握手を交してゐた。

四一

前に述べた多の出來事から、今度はクレアとテスが別れて後、八ヶ月以上を經た十月の或る日へ急ぐことにしよう。テスは一變した境涯に入つてゐた。彼女は箱やトランクを他の者に持たしてゐる花嫁ではなく、まだ花嫁にならない以前のやうにバスケットや包みを自分で運んで行く寂しい女になつてゐた。この試練の間中、樂に生活が出來るようにと夫から十分な手當を與へられたにも拘らず、財布は次第に平たくなつて行くばかりであつた。

再び故鄕のマアロットを去つて、春と夏の間中を、故鄕からもまたタルボセイズからも同樣に遠く離れてゐる、ブラックムーアの盆地からは西の方に當るボート・ブレッディの近

くにある搾乳場で、樂な、主として臨時の仕事に雇はれてゐたから、彼女は、さほど體力を勞することもなく過ごして來た。彼から手當を受けて生活するよりも、彼女にはこの方が好ましかつた。心持の上では、彼女は、依然として全く悒鬱であつて、機械的の仕事は、それを抑へるといふよりも却つて助長した。彼女の意識は、あの他の季節のあの他の搾乳場へ——彼女と顏を合してゐた優しい愛人の面前に行つてゐた——自分のものとしてしつかり捉まへた瞬間、幻覺の中に現はれた姿のやうに消え失せてしまつた人の面前へ。

搾乳場の仕事は、牛乳の出方が減り出すまでしか續かなかつた。といふのは、タルボセイズの時のやうな常雇ひの口には二度と出會はず、たゞ臨時雇ひとして勤めてゐたからであつた。けれども、そろ〳〵畑の收穫が始まつてゐたから、彼女はたゞ牧場から畑へ移りさへすれば、これから先も澤山仕事を見つけることが出來た。そしてこれは、收穫の終るまで續いた。

今までにかけた迷惑や費用の償ひとして、兩親へ贈つた五十磅の半分を差し引いても、クレアから受けた金額はまだ二十五磅彼女の手許に殘つてゐたが、それにはほんの少し手をつけてゐたゞけであつた。ところが、この頃は運惡く雨天續きなので、その間、彼女は止むを得ず手許の金貨に頼らなければならなくなつた。

彼女は、それを手放すに忍びなかつた。エンヂェルが親しく自分の手に渡してくれたのであつた。自分の爲めに光つた新しいそれらを彼の銀行から引き出したのであつた。彼の手に觸れて聖められたのであるから、いはゞ彼自身の形身であつた——これらの金貨は、彼と彼女自身の經驗がつくつた歷史を除いてはまだ何の歷史も持つてゐないやうであつた——だからこれを散らしてしまふのは遺品を捨てるやうなものであつた。けれども彼女はどうしてもさうしなければならなかつた。そして、金貨は一つ〳〵彼女の手を離れて行つた。

彼女は自分の住所を、母親の許へ始終通知しなければならなかつた。が、その境遇は隱してゐた。持ち合せの金も殆んど盡き果てた頃、母親からの手紙が彼女の處へ屆いた。目下非常に困つてゐる、秋雨が家の草屋根を洩るので、すつかり新たに葺き替へなければならないが、この前の葺賃がまだ拂つてないから、それをすることが出來ない。梅も新しくし、二階の天井も張り更へなければならないが、そ

れと前の分の勘定とを合せると、二十磅の金高になる。お前の夫は資産のある方で、屹度今頃は戻つてもゐられるであらうから、この金をお前からどうかして送つてくれることは出來ないか？　と彼女は言つて來た。

テスはもう直きに、エンヂェルの取引銀行から三十磅ほど送られることになつてゐた。そして、如何にも氣の毒な場合であつたので、その金額を受け取るや否や、要求された通りの二十磅を送金した。殘りの分は多の衣類に費さなければならなかつたので、目前に迫つた不順な季節中に備へるには、ほんの名目だけの金額が殘つたのみであつた。到頭最後の一磅がなくなつてしまつた時、この上また金の必要な場合には、何時でも父のところへ依頼するやうにと言つたエンヂェル・クレアの言葉が、彼女の考へに浮んで來て、どうしようかといふことになつた。

が、その手段を考へて見れば見る程、彼女はさうするのが厭になつた。二人の仲違ひの狀態が長引いてゐることを自分の兩親に隱すやうにさせたと同じ細心、自尊心、間違つた羞恥、名稱は何であつても、兎に角さういふクレアの手前を繕ねての心遣ひが、彼が十分な手當をして置いてくれたのに今また自分が困つてゐるなぞと彼の兩親のところへ言つてやる事を押し止めた。彼等は多分もう自分を輕蔑してゐるに相違ない。それに物貰ひのやうなところを見せたら、彼等は更にどんなにか自分を輕蔑することだらう！思案した結果、彼女は、假りにも牧師家の嫁ともあらう者が、今の自分のやうな境遇をどうして舅へ知らすことが出來よう、と考へた。

夫の兩親と交通したくないといふ心持は、時間の經過と共に減じて行くやうに彼女は思つたが、自分の兩親とは、丁度その反對になつた。結婚のすぐ後でちよつとの間行つてゐた兩親の家を出る際には、娘は結局夫と一緒になるものとばかり兩親は思ひ込んでゐた。また、その時から今に至るまで、彼女は、夫の伯剌西爾行きも短い滯在で終り、程なく自分を伴れに歸つて來るか、でなかつたら、一緒になるやうにとの知らせが彼から來ることであらう、が、何れにしてもお互の家族たちへ對し、また世間へ對しては、間もなく夫婦として顏が向けられることであらうと果敢ない事をも無理に望んでゐたから、娘は氣樂に夫の歸りを待つてゐるのだといふ兩親の信念を亂すやうなことは少しも爲てゐなかつた。又その希望を彼女も尙ほ抱いてゐた。最初の試みが失敗に終つたのを埋め合すに足るやうな大出來

の結婚の後だといふのに、兩親の困難を救つた爲めに、自分は今生活をするのに我が手に賴つて行かなければならない捨てられた妻であることを彼等に知らすのは、どうしても堪へ難いところであつた。

彼女は一揃ひの金剛石のことを思ひ出した。クレアがそれを何處へ預けて置いたのか彼女は知らなかつた。また、たゞ用ひることが出來るだけで、賣り拂ふことが出來ないといふことが事實なら、何處にあらうとそれは問題でなかつた。たとひ絶對に自分のものであるとしても、本質的には全く自分のものでなく、たゞ法律上の資格だけで自分の所有とするなぞといふことは、如何にも卑しいことのやうに思はれた。

かうしてゐる間に、一方、彼女の夫が送つてゐる日々も決して試練から放たれてゐるわけではなかつた。伯剌西爾政府から提出された條件と、英吉利の高地で耕作に從事してゐて、その移り變りの中に生れついてゐるあらゆる天候に耐へて來た體質は、伯剌西爾の平原で不意に遭遇するあらゆる天候に、等しく立派に耐へ得られることであらうといふ根柢のない空想との爲めに、その頃彼地へ誘ひ込まれて行つたすべての英吉利の農業家や農業勞働者と同樣に大

雨に濡れ、その他の樣々な艱難にも苦しめられて、丁度この時分、彼は伯剌西爾のクリテイバに近い粘土質の土地で、熱病に犯されて病床に呻吟してゐたのであつた。

話はまた元へ戻る。かうして、テスの最後の金貨が使ひ果されてしまつた時、彼女はそれを充たすべき他の分を當てがはれなかつた。一方ではまた、季節の關係から仕事にありつくことが益々困難になつた。才智や精力や健康や喜んで仕事をする氣持などは、どんな生活の方面でも、さう澤山あるものではないといふことを知らなかつたから、彼女は屋内の仕事を探さうとはしなかつた。都會や、大きな屋敷や、金持で口先の巧い、また田舍風でない動作の人を恐れてゐた。さういふ身分ある方面から例の心痛はやつて來たのであつた。社會は、彼女がそれから得た僅かな經驗に基いて考へたよりも好いものかも知れない。しかし彼女はこのことを明かにする證據を持つてゐなかつた。そして、さういふ事情のうちにあつて、彼女の本能は、彼女にその周圍へ寄りつくことを避けさせた。

春と夏の間だけ、臨時雇ひの乳搾り女として勤めてゐたボート・ブレッデイの先の西の方にある小さな搾乳場では、もう手傳ひは要らなかつた。たゞ同情にだけ縋れば、タル

ボセイズでも彼女の爲めに空きを拵へてはくれたであらうが、其處で送つた生活がどれほど愉快であつたにせよ、彼女は今更歸つて行くことは出來なかつた。打つて變つた身の上にはどうしても堪へ難かつたに相違ない。また彼女が歸つて行くといふことは、折角崇拜されてゐる夫の上に非難を呼び起すことになるかも知れない。彼等の憐憫、または彼女の妙な位置に對する彼等同志の囁きの言葉を、彼女は我慢出來なかつた。尤も、彼女の身の上のことが銘々の胸の中に離れ〴〵に宿つてゐる限り、其處にゐる誰も彼もに自分の境遇を知られてゐたからといつて、彼女は殆んど恐れはしなかつたであらう。彼女の敏感さをたぢろがしめたものは、自分に就いての考へを交換し合はされることであつた。テスはこの區別を說明することが出來なかつた。たださう感ずるといふことを知つてゐるだけだつた。

彼女は今、この郡の中央にある或る高地の農場をさして行くところであつた。其處は、方々廻り廻つた末に彼女の手に屆いたマリアンからの手紙で推薦されてゐた處であつた。マリアンはテスが夫と別れてゐるといふことを、どうしてか聞き込んでゐた——多分、イズ・ヒュウエットを通じてぢあらう——そして、お人好しの、今は酒飲みになつてゐるこの娘は、テスが困つてゐるだらうと思つたので、自分はあの搾乳場を出てからこの高地へ來てゐる、そして此處で是非彼女に會ひたいものだ、彼女が元通りまた働いてゐるといふことが本當なら、此處では他にも人手が要るやうである、といふことを、急いで昔の友達の許へ報知したのであつた。

日が短くなるにつれて、夫の赦しを得たいといふ希望がだん〴〵彼女から離れて行き始めた。そして、一歩毎に自分の數奇な過去から次第に遠のきながら、また自分の正體を晦ましながら、また自分の所在が早速他の大切な人々の眼にとまつて、それが先方の幸福にはならないまでも、自分の幸福となるかも知れない偶然の出來事とか、或は不慮事故とかには少しも意を用ひないで彼方此方と渡り歩いてゐる彼女の無反省な本能には、何處か野獸の習癖とでもいふやうなものがあつた。

彼女が孤獨な地位にあつて、少なからず弱つたことは、自分の容貌、生來の魅力に加ふるにクレアから受けた一種人並優れた氣品のある態度が、人の注意を惹くことであつた。結婚の爲めに調へた衣類の續いてゐるうちは、かういふ好奇心から折々向けられる注視も、彼女には格別の不便

を與へなかつたが　百姓女の外被を着けなければならなくなると直ぐ、一度ならず亂暴な言葉を言ひかけられた。それでも十一月の或る日の午後までは、別に危害が加へられようといふ怖れをまねくことは、何一つ起らなかつた。

彼女は、今行かうとしてゐる高地の農場よりも、ブリット河から西に當る地方が好きであつた。それは、一つにはその地方が夫の父親の家に一層近いからであつて、何時かは、牧師さんを訪問しようといふ氣になつて、人に氣づかれずにその邊りを彷徨ふことが出來るかも知れないといふ考へが、彼女に喜びを與へずにはゐなかつた。しかし、一層高い乾燥した平地で働いて見ようと一旦心を決めたのであるから、彼女は固く心を決めて東の方へ引き返し、チョオク・ニュートンの村をさして徒歩で進んで行つた。そして其處で一夜を過す積りであつた。

小徑は長くて、變化がなかつた。それに、この頃の日はどん〳〵短かくなるばかりであつたから、氣がつかぬうちに、何時の間にか黄昏は彼女の上に迫つて來た。彼女は或る丘の絕頂へ來た。その下の方には小徑が長く蜿蜒と延びてゐるのがちら〳〵見えた。丁度その時、背後に足音が聞えた。そしてしばらくするうちに、彼女は一人の男に追ひつかれた。男はテスの側へ歩み寄つて、言つた——

「姉さん、今晩は。」

その言葉に彼女は丁寧に挨拶した。

空に尙ほ漂つてゐる光が、彼女の頭を浮き上げてゐた。尤も周圍の景色は殆んど暗いと言つてよかつた。男は振り向いて、ぢつと彼女を瞶めた。

「おや、こりや確かに暫くトラントリッヂにゐた娘つ子に違えねえ——ダアバァヴィルの若旦那のお氣に入りだつた？俺ア今ぢやゐねえが、あの頃アあすこにゐたんでね。」

この男は、彼女に粗野な口を利いたといふのでエンヂェルが宿屋で擲り倒したあの裕福な農夫であることが分つた。ぎくりと苦痛が彼女の胸を刺した。そして彼女は何の返事もしなかつた。

「正直にさうだと言つてしまひなせえよ、あの町で俺が言つたことは本當だつてね。尤もお前さんのいゝ人はひどくむきになつてゐたがね——どうだね——横着やさん？　考へて見りや、あの人の亂暴したことを、お前さんは俺に詫びねえぢやなんねえぜ。」

まだ何の返事もテスからは出なかつた。追ひつめられたの逃場はたゞ一つしかないやうに思はれた。彼女は、突

然、後をも見ずに風のやうな速力で逃げ出して、道路を走りつゞけ、到頭林へ通じてゐる門の處まで來た。彼女はこの中へ跳び込んだ。そして尙ほも休まず、もうどんなことがあつても見つかる憂ひはないといふまでに、森の蔭へ深く入り込んだ。

足下には落葉が乾燥してゐた。そして落葉樹の間に生えてゐる柊の藪の葉が密生してゐて、僅かな風をも通さない位ゐであつた。彼女は落葉を掻き集めて大きく積み上げ、その眞ん中に巢のやうなものを拵へた。やがてその中へテスは潜り込んだ。

彼女は其處で眠りについたが、それは自然、斷續的であつた。彼女は何か妙な物音を聞いたやうに思つたが、それは微風の爲めに生じたものだと思ひ込んだ。彼女は、自分が此處で寒さのうちにゐるに引きかへ、何處かはつきりは分らない地球の向う側の暖かい氣候のうちにゐる夫の上を思つた。この世に自分のやうな慘めな者が二人とあるだらうか？　とテスは自分に訊ねた。また、空費した自分の生涯を考へて、「何も彼も空だ、」と言つた。彼女はこの言葉を機械的に繰り返して終に、これは現代には最も不適切な考へだと思ひ返した。ソロモンは二千年以上も前に、その點まではちやんと考へてゐた。彼女自身は思想家の先頭に立つてゐるわけではないが、それよりももつと先まで考へを進めてゐた。すべてがたゞ空に過ぎないとしたら、誰がそれを氣にかけよう？　あゝ、何も彼も空以上に惡いのだ——不正、罰、强制、死である。エンヂェル・クレアの妻は、額に手を當てゝ、その曲線と、柔かい皮膚の下にそれと感じられる眼窩の緣に觸れて見た。そして、さうしながらも彼女は、この骨の晒される時がやがては來るのであらうと考へた。「それが今であつてくれゝばいゝんだけれど、」と彼女は言つた。

かうした氣紛れな空想に耽つてゐるうちに、彼女は葉蔭の間に、新たに妙な音を聞いた。それは風かも知れない、が、風は殆んどなかつた。時には動悸のやうでもあり、時には羽搏きのやうでもあり、また時には喘ぎのやうでもあり、どく〳〵と何か流れる音のやうでもあつた。間もなく彼女は、その物音が或る種の動物から來ることを確かめた。それが頭上の枝の間に起り、續いて地上に重い體の落ちる音となつた時、いよ〳〵それに相違ないと思つた。若し彼女が此處で別な、もつと快い狀態の下に置かれてゐたとしたら、彼女は吃驚したに相違ない。だが、もう人間らしい

氣持をなくしてゐたので、彼女は差し當り少しも怖がらなかつた。

終に日光が空に射して來た。高い空で夜が明けてから暫らく經つて、森の中へも朝がやつて來た。

世間の活動する時間を知らす間違ひのない平凡な光が強くなつて來ると、彼女は早速落葉の小山の下から匍ひ出して、大膽に四邊を見廻した。やがて彼女は、自分を絕えず邪魔してゐたものが何であつたかを悟つた。彼女が一夜の宿とした植林は、丁度此處から急な坂となり、此方側はそこで植林が盡きてゐて、生垣の外側は耕地になつてゐた。樹蔭には數羽の雉子が仆れてゐた。死んでゐるのもあれば弱々しく翼をぴく〳〵させてゐるのもあり、ぢつと空を瞶めてゐるのもあれば激しく勤悸を打たせてゐるのもあり、體を縮めてゐるのもあれば長々と伸ばしてしまつてゐるのもあつた——もうこの上自然の力では持ち堪へ得なくなつた爲めに、その夜のうちに苦しみを終つた仕合せなものを除いては、彼等のすべては死の苦しみに悶えてゐた。

テスは、直ぐにこのわけを知つた。鳥は、前日何處かの遊獵團の爲めに、この片隅へ追ひ込まれたのであつた。之して彈丸に當つて死んで落ちたものや、または日の暮れないうちに死んでしまつたものは、見つかつて運び去られてしまつたが、ひどく傷を受けた多くの鳥は逃げ延びて身を隱したり、或は枝の濃い繁みの中へ昇つて、其處で辛うじて身を支へてゐる間に、終にその夜のうちに出血の爲めに次第に弱り果てゝ、昨夜彼女が耳にしたやうに、一羽また一羽と落ちてしまつたのであつた。

彼女は、幼い頃、折々かういふ人たちが、垣根越しに覗いたり、藪の中を窺つたり、奇妙な身裝をして、血に飢ゑた光をその眼に浮べて銃を向けてゐるのを見たことがあつた。彼等は、丁度さういふ時だけは亂暴で且つ殘忍に見えるが、年中さうなのではなく、實際、秋と冬の一定週間の外は、至つておとなしい人たちであるにも拘はらず、その季節となるとマレイ半島の土人のやうに、無暗と駈け廻つて、生命を奪ふことを——この場合では、ただ彼等のかういふ趣好——自然の潤澤な一族中での一層弱い仲間に對して如何にも禮を失した、また如何にも無慈悲な趣好——を滿足させる爲めに、人工的な手段で繁殖させた無害な鳥の生命を奪ふこと——を目的とするのだ、と彼女は聞かされてゐた。

同じ生物の惱んでゐるものに對しても自分自身に對すると同樣に感じ得る人の衝動に驅られて、テスが最初に思ひついたのは、まだ生きてゐる鳥を、その苦悶から救つてやることであつた。そして、この目的を果す爲めに、彼女は自分の手で見つかる限りの鳥の首を絞めてやり、番人が二度目の搜索にやつて來るまで——多分やつて來るだらうから——そのまゝ、元の場所へ置いた。

「ほんとに可哀さうに——お前たちのやうなこんな慘めな光景を眼の前に見て、自分を世の中の一番慘めな者と思ふなんて！」と彼女は叫んだ。優しく鳥を自分の手にかけながら、彼女は淚を流した。「そして、自分には一抓りの體の痛みさへないのに！　自分は切りさいなまれてはゐない。また自分は血を流してもゐない、自分には、口を糊し、着物を着るに二本の手がある。」彼女は、大自然とは何んのかかはりもない社會の勝手な法則の下に督めを受けた、といふ以外には、更に明らかな根據もない昨夜の悒鬱な考へに對して、自分ながら恥かしいと思つた。

四二

もう眞晝であつた。・こで彼女は用心しながら街道へ出て、再び出發した。だが、近くには人影もなかつたから別に氣をつける必要もなかつた。テスは、きかぬ氣になつて進んで行つた。苦悶の夜を默つて堪へた鳥達の忍耐を思ひ出すと、悲しみが比較的なものであること、また彼女の悲しみなどは、若し彼女が一度世人の思惑を輕蔑するだけの勇氣を振ひ起すことが出來さへすれば、堪へ得られる性質のものであることを彼女は深く感じた。けれども、クレアが世間並みの思惑を抱いてゐる限り、それを輕蔑することは出來なかつた。

彼女はチョーク・ニュートンへ着いて、或る旅亭で朝食をした。其處に居合せた數人の若者は、彼女の美貌を煽さく賞め立てた。彼女は何となく張り合があるやうに思つた。といふのは、彼女の夫もまた自分に向つてこれから先でも矢張りこれと同じことを言ふかも知れないといふ事實がないとは言へなかつたからである。そんな場合がないとも限らないから、身を嗜め、かういふ氣まぐれな戀人たちを避けなければならなかつた。この目的に對して、彼女は自分の容姿の爲めにこれから先危險に陷るやうなことはすまいと決心した。その村を出外れると直ぐ、テスは森の一番深い繁みへ入り、バスケットから一番古い野良着を一枚取り出

した。それは搾乳場でさへ身に着けたことはなかつた——マアロットの畑で働いてゐた時以來身につけたことのないものであつた。彼女はまた仕合はせと或る考へを思ひついて、包みの中から一枚のハンケチを取り出し、丁度齒痛で惱んでゐるかのやうに、頤と、頬を半分ほどと、額とに被さるやうに顔を包み、帽子の下でそれを結んだ。それから、今度は懐中鏡を使つて、小さな鋏で、容赦なく眉毛を剪み取り、かうして下心のある賞讃を受けないやうにして、そわ〳〵しながら進んで行つた。

「なんて變挺な娘つ子だらう！」と次に出會つた男は、伴れの者に言つた。

この言葉を聞いた時、彼女は、自分の身がひどく憐れになつて、涙を眼に浮べないではゐられなかつた。

「でも、私は構はない！」と彼女は言つた。「あゝ、さうだ——私は構はない！　エンヂェルは此處にゐやしないし、誰も私の面倒を見てくれる人はゐないんだもの。私はこれから、何時も醜くしてゐよう。私の夫であつた人は行つてしまひ、もう二度と再び私を愛してはくれないだらう。でも、私は前とちつとも變らずあの人を愛してゐる。そして他のすべての男を憎んでゐる。その男たちに私は嘲笑はせたいんだ！」

テスはかうしてなほ歩き續ける。周圍の景色の一部となつた姿——それは灰色のサーヂの肩衣、赤い毛織の襟巻、色の褪せた粗い外被に蔽はれてゐる毛織の下袴、それから柔皮革の手袋といふ多支度をした純潔なまた單純な一人の百姓女の姿——であつた。その古い衣服の絲といふ絲はすつかり雨に打たれ、陽に焼け、風に吹き晒されて、色がさめ、弱くなつてゐた　彼女にはもう、若い熱情の現はれらしいものは何處にも見られなかつた——

處女の口は冷たく
……
飾りなき襞に襞の重なり
彼女の頭を巻きて。

この外形は、知覺のない位ゐな、殆んど生命のない物へでも向けられるやうな眼付をして眺められたかも知れないが、その内側には、その年齢にも似ず、浮世の無常や、淫慾の殘忍や、愛の儚なさを知り過ぎるほど知つてゐる生々した生命の記錄が潜んでゐた。

その翌日は天氣が悪かつたが、彼女は風雨といふ正直な、率直な、公平な敵には驚かないで、重い足を運んで行つた。彼女の目標は、多の仕事と多の住家とであつたから、一刻も猶豫してはゐられなかつた。臨時雇ひの仕事の經驗には懲りてゐたから、もうこの上さういふ仕事を引き受けることは止さうと決心してゐた。

かうして彼女は農場から農場へと、マリアンから知らせて來た場所を指して進んだ。豫て噂に聞いてゐる其處の仕事の嚴しさは、やつて見ようなどゝは全く思はないのであるが、たゞ其處を、最後の手段として利用しようとは決心した。最初、彼女はもつと樂な仕事を求めてゐたが、何の種類を問はず、さういふ仕事にありつける望みがなくなつて來たので、次にはもう少し樂でなくてもよい仕事を求め、到頭、自分の最も好きな搾乳場や養鷄場の世話を手始めとして、最後には、ちつとも好きでない、面倒な下等な職業——耕作地の仕事、今まで全く進んで志したこともないやうな仕事に從ふやうになつた。

二日目の夕方になつて、彼女は、半圓球の古墳を抱いて——まるで乳房の女神シビリ（希臘神話にある女神）が仰向けになつて臥てゐるかの如く——女神の生れ出た谷と、女神の戀人である谷との間に擴がつてゐる高く低く起伏してゐる白堊の臺地、つまり高原へ達した。

此處は空氣が乾燥してゐて冷たく、長い事道は雨後二三時間もすれば風で眞白に乾いて、埃りが立つた。樹木は極く稀で、いや全然ないといつてもよかつた。普通なら生垣の中で生長しさうなのが、樹木や、藪や、叢などの本來の敵である小作人たちの爲めに、山櫨と一緒に垣の中へむごく折撓められてしまふからである。行手の中央に、バルバロオとネットルコム・タウトの絶頂が見えて、何れも懐しく思はれた。彼女がまだ幼い頃、向う側のブラックムーアから接したときは、空高く聳え立つた城砦のやうに見えたが、この高地から見ると、低い、おとなしい樣子を帶びてゐた。南の方には、幾哩も先の方に、また海岸の方へ向つて丘陵や山の背を越えて、彼女は磨きをかけた鋼鐵のやうな表面を認めることが出來た。それは英國海峽で、遠く佛蘭西の方へ突き出てゐる一角であつた。

彼女の前の、幾らか低くなつた處に、或る村落が名殘をとゞめてゐた。彼女は、實際にマリアンの逗留してゐるフリントコム・アッシに到着したのであつた。かうなるより外どうにも仕方がないやうに思はれた。此處へ來るやうにな

つたのが彼女の運命であつた。彼女の周圍にある耕しにくい地質を見たゞけでも、此處で人手を求めてゐる勞働の種類が、一番荒いものであることが、はつきり分つた。けれども、今は仕事を探し歩くことを控へなければならない時であつた。彼女は、雨さへ降り始めたので、わけても此處に留まることに決めた。村の入口に、破風の往來へ突き出てゐる百姓家が一軒あつた。そこで彼女は一夜の宿を求める前に、先づその軒の下に立つて、夕暮の色の迫つて來るのを眺めた。

「私が、エンヂェル・クレア夫人だなぞと誰が思ふことだらう！」と彼女は言つた。

壁が背中や肩に溫く感じられた。そして彼女は破風の直ぐ背後の內側が此家の爐になつてゐて、その熱が煉瓦を通して來るのだといふことを知つた。彼女は、それに兩手をあてゝ溫め、また頰——雨滴の爲めに紅くなり、濕つてゐる——をも、その心地の好い表面へ押し當てた。壁だけが今の彼女には、たゞ一人の友達であるやうに思へた。彼女は其處から離れる氣が少しもしないで、此處でなら終夜でも過ごせる位ゐに思つた。

テスはこの農家に住んでゐる人々——一日の勞働を終へて、一緒に集まつて——が室內で互ひに話し合つてゐるのを聞いた。それから夕飯の皿のがちや〳〵いふ音も聞いたけれども村の道には、まだ人一人見えなかつた。この靜けさは、やがて一人の女の姿の近付いて來るのに破られた。その女は、寒い晩であるにも拘らず、夏の更紗の上衣を着、目蔽つきの帽子を被つてゐた。テスは直覺的に、それがマリアンではないかしら、と思つた。そして、薄闇の中にはつきりと見分けのつくまで近づいて來たのを見ると、正しく彼女であつた。マリアンは、以前よりも丈夫になり、顏の血色もずつと優れてゐるやうであつた。そして身裝は、際立つて以前よりも見窄らしかつた。これまでゞあつたなら、どんな時でもかういふ有樣で昔のまじはりを溫めようなぞとは、テスは殆んど思はなかつたであらう。が、彼女は極端に孤獨であつたので、マリアンの挨拶に喜んで應じた。

マリアンは丁寧にいろ〳〵のことを質問した。けれども、テスが最初の時よりももつとも好い境遇になつてゐないことを知つて、大へん心を動かしたやうであつた。尤も別居のことは、彼女も薄々聞いてゐた。

「テス——クレアの奧さん——可愛いあの方の、可愛い奧さん！　それで、本當にこんなに酷いの、あんた？　可愛らしい顏を、どうしてそんなに絆へて置くの？　誰かゞあなたを打つたの？　まさかあの方ぢやないでせう？」

「いゝえ、いゝえ、いゝえ！　私たゞ、煩さく言ひ寄られないやうにさうしただけなの、マリアン。」

かういふ亂暴な聯想を起させる繩帶が、むかつくほど嫌になつたので、彼女は取り除けてしまつた。

「それに、襤がついてゐないのね。」（テスは搾乳場にゐた時分始終小さい襤を着けてゐたのだつた。）

「えゝさうなの、マリアン。」

「途中で失くしたんでせう。」

「失くしたんぢやないの。實はね、私、もう見えなんかどうだつて構はないから、着けなかつたの。」

「それにあんた、結婚の指環も嵌めてゐないのね？」

「いゝえ、嵌めてゐるわ。だけど內證でよ。リボンで頸へ下げてゐるのよ。私、結婚してどういふ身分になつてゐるか、また、第一結婚してゐるつてことを、他人に知られると大へん極りの惡い思ひをしなければならないから。」

マリアンは暫らく默つてゐた。

「でもあんたは紳士の奧さんぢやありませんか、こんな暮しをするなんて、どうしたつて當り前とは思はれないわ！」

「いゝえ、當り前よ、全く當り前よ。私は大へん不幸には相違ないけれど。」

「だつて、まあ、あの方があんたと結婚して——それであんたが不幸だなんて？」

「妻つていふものは時には不幸なことがあるものよ。夫の罪からではなく——全く自分たちの罪でね。」

「あんたに罪なんかある譯がないわ、ねえあんた。確かに私、さう思ふわ。それに、あの方にだつてありやしないでせう。だから、何かあんた方お二人とは關係のないことから起つたに違ひないと思ふわ。」

「マリアン、ねえ、マリアン、何も訊かないで、私の力になつてくれない？　夫は今外國へ行つてるし、私、うつかりして頂いた手當も使ひ過してしまつたの。だから暫くの間、前のやうに働かなくちやならないのよ。私をクレアの奧さんなんて呼ばないで、前の通りテスと呼んでよ。此處では人手が要るんでせうか？」

「要りますとも。此處へは來ようといふ者なんかないから、人は何時でも要るのよ。こゝは瘠地で、麥と蕎麥位ゐしかとれないの。私だからゐられるけれど、あんたのやうな人

には、お氣の毒だわ。」

「だつて、あんたぢつて私と變らない立派な乳搾り女だつたぢやないの。」

「えゝ。でも私、お酒を飲み出してから、その方は止めちやつたの。あゝ、今ぢや私の樂しみつていふと、たゞお酒だけよ！　あんたが雇はれゝば、屹度蕪菁掘りをやらされますよ。私が今やつてゐるのはそれなの。でも、あんたにはそんな仕事なんか、好きになれやしないわ。」

「あゝ——どんなことだつて！　あんた、私に代つてお願ひして見てくれない？」

「あんたが自分で話した方が却つていゝと思ふわ。」

「さう。ではね、マリアン、覺えてゝね——若し私が雇はれたとしたら、あの人のことは何んにも言つてくれないやうにね。あの人の名を汚したくないから。」

テスにくらべると、マリアンは粗野ではあつたが、心から信頼の出來る娘であつたので、賴まれたことは何でも約束を守つた。

「今夜勘定日なの、」とマリアンは言つた。「私に從いて來ると、すぐ樣子がわかるわ。あんたが幸福でないなんて、本當にお氣の毒に思ふわ。それといふのも、あの方がゐないからでせう、ね。あの方さへ此處にゐれば、不仕合せなわけはないでせう、たとひお金なんかあんたに呉れないでもね——たとひ奴隷みたいに扱はれたつてね。」

「本當にさうね。不仕合せなわけはないんだけど！」

二人は一緒に歩いて行つて、間もなく、殆んどものすごいくらゐに寂しい一軒の農家へ着いた。見渡す限り一本の樹木もなかつた。一樣に撓められた低い生垣で仕切をされた廣い野の中には、時節柄一つの綠の牧場もなかつた——到る處、休閑地と蕪菁ばかりであつた。

テスは、勞働者の一團が給金を受取つてしまふまで、その農家の扉口の外で待つてゐた。するとやがて、マリアンが彼女を紹介した、當の主人の農夫は不在のやうだつたが、今夜彼の代理をしてゐた妻君は、テスが舊曆告知節（告知節は三月二十五日）まで居るといふ契約をしたので、彼女を雇ふことに少しも異議を挾まなかつた。女で野良仕事をしようといふものは、今は極く稀れにしかなかつた。それに、給金は安いのだから、男手と同じ程度に女手で捗取らせることの出來る仕事には、都合がよかつた。

契約書に署名が濟むと、宿を定める外には、差し當つて、テスにはすることがなかつた。そして、先刻、破風の

ある壁で體を暖めた、あの家に室を見つけることが出來た。彼女の得た生計の道は、つまらぬものではあつたが、兎に角、この多を凌ぐ場所だけは出來たのである。

その夜彼女は、夫のところから萬一マアロットへ手紙が屆きでもしたらと思つて、兩親の許へ新しい宿所を書き送つた。けれども、自分の境遇が慘めであることは言つてやらなかつた——言つてやれば、夫が惡口を言はれることになるかも知れなかつたから。

四三

フリントコム・アッシの農場を痔地だと言つたマリアンの解釋には、少しの誇張もなかつた。この土地でたゞ一つ肥えたものといつては、マリアンだけであつた。しかも、そのマリアンは輸入品であつた。地主が世話をしてゐる村、村だけでやつてゐる村、それから村だけでやつて行くわけでもなく、また地主の世話にもならない村（言葉を換へて言へば在住地主の小作人たちの村、不動產世襲享有者、また地上權所有者の村、土地を貸して地代を取る在外地主の村）と三種類ある村のうちで、このフリントコム・アッシといふ土地は、その第三種の村であつた。

だが、テスは仕事に取りかゝつた。肉體の臆病と精神上の勇氣とを混ぜ合はせたともいへる忍耐は、今ではもうエンヂェル・クレア夫人の小さい特徵ではなく、彼女のたよる綱であつた。

彼女とその仲間とが掘りにかゝつてゐた蕪菁の畑は、石ころの多い白堊質の傾斜地になつてゐる農場中でも一番高い土地に一續きに擴がつてゐる百エイカア餘りもある地面であつた——それは球形、尖形、又は陰莖形の、ばら〳〵に散在してゐる、白い、無數の燧石から成る白堊層の、硅質地脈の露出地であつた。蕪菁の上半は、一つ殘らず家畜の爲めに食ひ取られてしまつてゐた。で、その下半、つまり土中の部分を、これもまた食べられるやうに、鶴嘴といふ鉤形になつた叉で掘り拔くのがこの二人の女の仕事であつた。その野菜の葉といふ葉は、もう殘らず食ひつくされてしまつてゐたから、畑一面は荒涼とした褐色を呈してゐた。それは、恰も頤から前額へかけて、たゞ皮膚のひろがり過ぎない顏のやうに、目鼻立ちのない表情をしてゐた。空も、色こそ異ふが同じ表情をした眞白な虛空といつた顏付をしてゐた。それで、かうして二つの上と下との顏は、終日互ひに面を向け合つてゐた。白い面は褐色の面を見下

し、褐色の面は白い面を見上げ、兩方の間には、前者の表面を蠅のやうに這つてゐる二人の娘の外には、何んにも遮ぎるものがなかつた。

誰一人として、二人の近くへ來るものはなかつた。二人の動作は、機械的にきまりきつてゐたが、その姿は粗布製の『上衣』――袖つきの褐色の前掛が、着物を風に飜へさせないやうに、後で結びつけてある――に包まれて、短い下袴は、踝の上まで届いてゐる深靴を現はし、そして籠手つきの、黄色い羊の皮の手袋を手にはめてゐる。垂れつきの頭巾を冠つてゐるので屈んだ頭に佗びしい感じを添へ、看るものに、初期の或る伊太利畫家の二人マリヤに關する着想を思ひ出させるやうなものであつた。（二人マリヤとは、キリストの磔刑の際、居合せたマリヤ・マグダレーンと、クレオフアスの妻、マリアとをいふ）

彼等は周圍の風景の中に、自分たちが淋しい姿を描き出してゐることにも氣づかず、また自分たちの運命が、正當なのか不正當なのかといふやうなことは考へずに、始終働き通した。彼等のやうなかういふ境遇に在つてさへ夢を描いて生きて行くことは出來た。午後になるとまた雨が降り出して來たので、マリアンはもう仕事はしなくてもいゝと言つた。が、働かなければ賃銀が貰へないので、二人はなほ仕事を續けた。この畑は非常に高い處にあつた爲めに、雨は決して直下することがなく、吹き荒れる風に乘じて、横なぐりに走り、硝子の破片のやうになつて二人を突き刺すので、すつかりづぶ濡れになつてしまつた。テスは今まで、それが一體どんなものなのかを、實際には知らなかつた。濡れるといふにもいろ〳〵程度がある、そして普通に言ふづぶ濡れは、ほんのちよつと濡れたことを指すに過ぎない。だが、畑で仕事をしながらぢつと立ち續け、先づ最初は兩足、兩肩に、次には腰と頭とに、それから背中に、胸に、兩側に、雨水の這ひ込んで來るのを感じながら、それでもなほ働き續け、やがて、鉛のやうな鈍い光が薄らいで、陽の沈んだことを知らせるまで止まつてゐるには、明らかに幾らかの苦行をする氣持、いや勇氣をさへ必要とする。

でも二人は、はたから思ふほど濡れるのを氣にしなかつた。二人とも若かつたし、タルボセイズの搾乳場で、共に住み、共に戀をした當時の事を飽かず語り合つてゐた。あの樂しい青々とした土地、其處では、夏がその惠みを惜しげもなく與へてくれた。つまり實質からいへば、誰にも一樣に、感情の上では、この二人に。テスは、實際はさうでないにしても、法律上では自分の夫である人のことをマリアンと話し合ふのを厭がつてゐたやうであるが、その話題の強い魅力につひ引き込まれて、マリアンの言葉に應答へさへするやうになつた。かうして、前にも述べたやうに、帽子の濡れたたれは烈しく顔をたゝき、上衣はうるさく體に絡みついたが、彼等はこの畫からをずつと、靑々した、日に輝いた、夢のやうなタルボセイズの思ひ出に耽つて暮した。

「晴れた時は、フルウムの盆地から二三哩より離れてゐない丘が此處から微かに見えるのよ、」とマリアンは言つた。「あら！　見える？」とテスは、この土地の新しい取柄を見付けて答へた。

かうして、此處でも他の處と同樣に享樂しようとする生來の意志と、享樂を妨げやうとする外界の意志と、二つの力が働いてゐた。マリアンの意志は、午後の時間が次第に經つて行くと、白い襤褸で栓をした一パイント瓶をポケットから取り出して、力づける方法を心得てゐた。彼女はその瓶から飲むやうにとテスにも薦めた。だが、他の助けを借りないですむテスの空想力は、差し當り、空想の世界を描き出すのに十分であつたから、彼女はほんの形ばかりに

緊つただけで辭退した。それから、マリアン自身はその酒を一あふりあふつた。

「私、もう癖になつちやつた、」と彼女は言つた。「だからもう廢められないのよ、私にはこれだけが樂しみなの――さうでせう、私、あの人を失くしたんですもの――あなたは失くしはしなかつた、だから、屹度こんな物なんかなくつたつて濟むんでせう。」

テスは自分の失つたものを、マリアンの失つたものと同樣大きいと思つてゐたが、少なくとも名義だけでも、エンヂェルの妻であるといふ氣持に動かされて、マリアンの立てた區別を受け容れないではゐなかつた。

かういふ光景の中にあつて、テスは、朝は霜を踏み、午後は雨に濡れながら、奴隷のやうに働いた。蕪菁掘りをしない時には、蕪菁の手入れをするのであつた。その方の仕事では、鉈鎌で土と細根とを削り取つて、根を後で用ひられるやうに貯藏するのであつた。この仕事の時は、二人は若し雨が降れば、草葺の疎籬の傍へ雨宿りすることが出來たけれども、若し霜でも酷い時であると、厚い皮の手袋でさへ彼等の扱ふ凍てた塊りの爲めに、指が凍えるのを防ぐ譯には行かなかつた。それでもなほ、テスは希望を捨てな

かつた。クレアの性格の主なる特色であると彼女が固く信じてゐる寛大さは、晩かれ早かれ彼を自分に結びつけるやうにしてくれるであらう、といふ信念を、彼女は持つてゐた。

酒で巫山戯氣分になつたマリアンは、前に言つた奇妙な形の燧石を見つけ出しては、きやつ〳〵と笑ひ立てるのであつたが、テスは何處までも眞面目に知らない風をしてゐた。彼女等は、ヴァール又はフルウムの盆地が、人の知つてゐるやうに延びてゐる地方を、たとひ見えないにしても、時々見渡さずにはゐられなかつた。そして、灰色の霞の蔽ひ被さつた邊りを、ぢつと見詰めながら、其處で過した過去の日を追想するのであつた。

「あゝ」とマリアンは言つた。「昔の仲間があと一人か二人此處へ來たら、私、どんなに嬉しいだらう！　さうしたら毎日タルボセイズをこの畑へ持つて來ちまつて、あの方のことや、私たちがあすこで送つた樂しい時のことや、それから私たちのよく知つてゐた古いことなどを話し合つて、言はず何もかも皆引き戻すことが出來るのに！」マリアンの眼は潤み、過去の幻が戻つて來るにつれ、聲も次第にぼんやりして來た。「イズ・ヒュエットの所へ手紙をやつて見よう、」と彼女は言つた。「あの娘は今何もしないで生家にゐるんですよ。だから、私たちの此處にゐることを知らして、此方へ來るやうに言つてやつてみませう。それから、レッティももう快くなつてゐると思ふわ。」

テスはこの申し出に少しも反對しなかつた。そして以前のダルボセイズの歡樂を輸入しようといふこの計畫に就いて、次に彼女が聞いたのは、二三日後のことであつたが、マリアンはイズが自分の問ひ合せに對して都合がつけば來ると返事して來たことを告げた。

何年にもなかつたやうな多が來た。それは將棋客の動作のやうに、ひそやかな、しかも定まつた足並をしてやつて來た。或る朝のこと、二三本の寂しく立つてゐる樹や生垣の刺は、恰も植物性の外皮を動物性のものに脫ぎ換へたやうに見えた。枝といふ枝は、悉くその夜のうちに、樹の皮から生えた毛のやうな、眞白い毛皮で蔽はれ、常の四倍もの太さになつてゐた。周圍にある藪や樹木は皆、空と地平線の陰鬱な灰色の上に眞白な線で描かれた、目立つた寫生畫のやうに見えた。蜘蛛の巢は、かういふ結晶力のある大氣に依つて明白にさせられるまでは、誰も氣がつかなかつた、物置小舍や壁の上にその所在を現はし、離れ屋や、柱や門などの突出してゐるところから、白い毛絲の環のやうになつて下つてゐた。

かういふ濕氣の氷結する季節がすぎると、その後には、乾燥した霜の時期が來た。それと同時に、北極の方からは不思議な鳥の群が、フリントコム・アッシの高原へ、靜かに來始めた。それは、痩せこけた物凄い生物で、悲しい眼をしてゐた——それは未だに人間の想像も及ばない、到底寄りつけもしない廣大な極地で、人間にはとても堪へ得られない凝結的な氣候の中で、天地激變の恐ろしい光景を目擊して來た眼であつた。それは又、極光星から射す光の爲めに、氷河の碎ける樣や、雪山の滑り落ちる樣を見、大暴風雨や、水陸狂亂の急轉で半ば盲目にされ、かういふ背景が生んだ表情を失はずにゐる眼であつた。名もないかういふ鳥の群は、テスとマリアンとの直ぐ近くへ來たが、人間に到底見ることの出來ない、彼等の見て來た光景に就いては、ちつとも說明しなかつた。自分の見聞を人に語らうといふ旅行家の野心は、彼等にはなかつた。そして默りこくつた冷靜さで、自分達には何の價値もないいろ〳〵の經驗を捨て去つて、この脊せた高地の眼前の出來事を求めた——これ等の訪問客たちが食料として賞味する何や彼やを掘り出す爲めに、鶴嘴を持つて土塊を掻きまはしてゐる、二人の娘のこせ〳〵した動作に心を配つた。

それから、或る日特殊なものがこの立樹のない地方の空氣に侵入して來た。雨を含んだでもない濕氣と霜にならうといふでもない寒さがやつて來た。それは二人の眼球をびり〳〵するほど冷たくし、前額に痛みを與へ、骨にまで浸み透り、かうして體の表面よりはその芯に働きかけた。雪になるんだといふことを彼女等は知つた。そして、その夜のうちに雪は降り出した。テスは相變らず曖かい破風があつて、その側に立ち止る淋しい旅人を元氣づける百姓家に泊つてゐたが、夜中に眼を覺ますと、草葺屋根の上に騷々しい物音を聞いた。それは屋根が、すつかり風といふ風の競技場に變つたことを知らせるやうに思はれた。朝になつてラムプを點けて起きて見ると、彼女は窓の扉の割れ目から、雪が、內側へ向つて、それは實に細かな雪粉が、眞白な圓錐形をなし、又煙突を傳はつて吹き込んで來ることに氣がついた。そんな風でもう雪は床の上に靴底が埋まる位ゐの深さに積つてゐた。彼女が其處らを歩き廻ると、靴跡が殘るのであつた。戶外では、吹雪が豪所に雪霧を作り出すほど、烈しく吹き荒んでゐた。けれども、戶外はまだ暗くつ

て、何んにも見ることが出來なかつた。

テスは、蕪菁掘りを續けることは、到底出來ないと知つた。小さな寂しいラムプの傍で朝食を濟ましたところへマリアンがやつて來て、天候の變るまでは、他の女たちに加はつて納屋で麥扱きをすることになつたと知らせた。戸外の一樣な闇の衣が、だらしのない灰色の雜色に變り始めると、早速二人はラムプを消して各自持ち合せの一番厚い頭巾にくるまり、毛絲の頸卷を頸に卷きつけ、胸の上で合はせ、そして納屋へ出かけた。雪は白い雲の柱となつて、北極の盆地から鳥の群の後を追つて來たのである。で、一つ〳〵の雪片は見えなかつた。暴風は、氷山や、北極の海や、鯨や、白熊の匂ひを漂はし、雪を運びはするが、地上に深く積らさずにたゞその上を掠めるだけであつた。二人は體を斜めにして、眞綿のやうな畑の中を通つて、出來るだけ生垣の蔭に寄り添ひ、やつとの思ひで歩いて行つた。だがその生垣も、風を防ぐ衝立といふよりは、風を漉さす篩の役しかしなかつた。空氣は、それを苦しめる數限りない白いものゝ爲めに蒼白になるまで痛めつけられてゐながらも、矢鱈に雪を振つたり、振り廻したりして、宛ら混沌とした無色の世界を示してゐるやうに見えた。だが、この二人の若い女は、可なり元氣だつた。乾燥した高地のかういふ天候は元々人の氣を挫くやうなものではなかつた。

「はあ——はあ！　あの悧巧な北國の鳥は、天氣がかうなるのを知つてゐたんですよ、」と、マリアンは言つた。「確かに、あの鳥は、北極星からずつとそのお先觸れをしに來たのよ。あんたの旦那さんはね、屹度今頃は、始終、焦げつくやうなお天氣にあつてるんですよ。本當にまあ、今といふ今、綺麗な奥さんの顔を見さして上げられたらね！　このお天氣で、あんたの縹緻がちつとでも悪くなるわけぢやないし——本當よ、却つてよくなる位ゐだわ。」

「私に、あの人のことを言はないで下さいね、マリアン、」とテスは嚴しく言つた。

「え、、でも、——屹度、あんたはその話が好きなんぢやない？　さうでせう？」

それには答へずに、テスは眼に淚を浮べながら、衝動的に南亞米利加と想像される方面へ顔を向け、そして脣を突き出して、吹雪に向つて熱い〳〵接吻を送つた。

「さう、さう、さうだつてこと私には分つてるわ。でも本當に、夫婦にしてはへんな暮し方だわねえ！　さあ——もうひと言だつて言はないわ！　それで、お天氣のことね、麥

小屋にゐれば、格別體に障るやうなことはないのよ。でも、麥扱つてことは骨の折れる仕事だわ——蕪菁掘りよりもつとつらいのよ。私、頑丈だから堪へられるけれど、あんたは私より華奢だからね。一體どうしてあんたをこんな仕事に向けたのか、私、主人の氣が知れないことよ。」

二人は納屋へ着いて中へ入つて行つた。長い建物の一隅は、麥で一ぱいだつた。中央は麥扱場になつてゐて、其處には晝の間女達が扱くだけの十分な麥の束が、前夜のうちにちやんと麥扱きの機械に入れてあつた。

「あら、イズが來てゐるよ！」とマリアンは言つた。

果してイズだつた。そして彼女達の前へやつて來た。イズは前の日の午後、母親の家から此處までずつと歩き通して來たのだつた。そしてこれほど遠くないと思つてゐたので、遲くなつてしまつたが、それでも丁度雪の降り出す前に着いて、居酒屋に泊つた。農場の主人は、若し彼女が今日來るならば、雇つても可いと、彼女の母親と市場で既に契約してゐたのであつた。それで、彼女は遲くなつて彼を失望させはすまいかと、心配してゐた。

テスとマリアンとイズの他に、隣村から來てゐる女が二人ゐた。この二人が、スペイドの女王の色の黑いカアとその妹のダイヤの女王——トラントリッヂで夜半の喧嘩の折、自分と爭はうとした、女武者の姉妹だと憶ひ出して、テスははつとした。二人は彼女にちつとも氣づいた樣子を見せなかつた、實際に覺えてゐないのかも知れなかつた。といふのは、あの折には、二人は酒に醉つてゐたのだつたし、此處でと同樣に、彼地でもほんの一時の滯在者にすぎなかつたからである。彼等は自ら進んで男の仕事を、例へば、井戸掘、垣結び、溝掘、それから堀割、道路工事と、何でもやつて、少しも疲勞を感じなかつた。彼等は麥扱人としてもまた腕利であつた。それで何處か高慢な態度で他の三人を眺め廻してゐた。

手袋をはめると、一同は麥扱き機械の前に一列に並んで、仕事に取り掛つた。その機械は、橫梁で連結してある二本の柱から出來てゐて、橫梁の下へ今扱かうといふ麥束が、穗先を外側の方へ出して置かれ、橫梁は左右の柱へ釘を刺して留めてあり、麥束が減るに從つて徐々に下して行くやうになつてゐた。

光線が空から下の方へ射して來るのでなく、地上の雪から上へ向つて、納屋の戸口から射し込んで來るのであるから、明るみははつきりして來た。娘たちは、その機械から一

摑みづゝ次々と扱いて行つた。だが、絶えず世間のよくない噂話を繰り返してゐる見知らぬ女たちがゐる爲めに、マリアンもイズも、最初は、思ふ存分に過去の思ひ出話をすることが出來なかつた。間もなく、ぐすゝと雪の上をふむ馬の足音が聞えて來た。農夫が戸口へ馬を乘りつけたのであつた。彼は馬から降りると、テスのすぐ側へ寄つて來て、ぢつと彼女の横顔を眺め入つた。彼女は最初振り向かずにゐたが、彼が餘り瞶めてゐるので、つひ振り向いてしまつた。その時、彼女は、自分の雇主が、彼女の過去のことを仄めかしたので、街道を逃げて追ひつかれまいとした、あのトラントリッヂの土地の者であることに、氣がついた。

彼は、彼女が扱き終つた束を、戸外の積み重ねた所へ運んでしまふまで待つてゐたが、それが終ると、彼は言つた。

「矢つ張りお前は俺の親切を無にして、あんなに腹を立てた娘だな？　お前が雇はれたと聞いた時、俺直ぐ屹度お前に違えねえと思つたんだ！　それが分らねえ位ゐなら、お目にやかゝらねえや！　なあ、初めお前の良い人とあの宿屋にゐた時も、二度目にあの街道でお前が逃げて行つた時もお前は俺を甘くしてやつたと思つたらうが、今度は俺の方が、お前をしてやつたやうだぜ、」と彼は冷酷な笑ひ聲を立てゝ、話を結んだ。

テスは、女武者と農夫との間に、まるで鳥網に捕へられた小鳥のやうに挟まれて、何とも答へないで麥藁を引き續けてゐた。テスは今では人の性格が十分よく讀めるやうになつてゐたので、雇主が優しい言葉をかけても、何んにも怖れるには及ばないことを知つてゐた。心配なのは寧ろ、クレアにあんな風に扱はれて屈辱を受けてゐるから、恨みに思つて、彼女を虐待しはすまいかといふことであつた。概していふと、彼女は男からさういふ感情を以て接しられた方が言ひ寄られるよりもましだつた。またそれに十分耐へられるだけの勇氣があると思つた。

「お前は、俺が惚れてゞもゐると思つてゐるんだらう？　世間には男からちよいと目を向けられると、何でも彼でも眞劍に取るやうな馬鹿な女があるもんだよ。だが、若え女つちよの頭からそんな馬鹿げた考へを抜き出してやるにや一多畑ん中で働かしてやる位ゐいゝことアねえんだ。で、お前は告知節の時までの契約の署名も濟んでゐるんだ。さあ、俺に詫び言を言ふかね？」

「あなたこそ、私に詫びなきやならないと思ひますわ。」

「そんなら宜いよ——どうとも勝手だ。だが、此處ぢやア

どつちが主人か見こみることにしよう。あの束が今日お前の濟した全部かな？」

「さうです。」

「おそろしく見榮えがしねえな。あの娘たちがやつたあれをちよつと見なよ。」（二人の頑丈な女の方を指しながら）「他の者だつても、お前よりや餘つ程成績がいゝぜ。」

「あの人たちは前から習つてゐたんですけれど、私はやつたことがないんですもの。それに、請取仕事で、私たちはしたゞけの仕事の分しか勘定は貰へないんですから、あんたにかゝはりはあるまいと思ひますわ。」

「おや、ところが、あるんだよ。こつちは納屋を早く片付けちまひたいんだから。」

「他の方たちのやうに二時にしまはないで、私は晝過ぎずつと仕事を通しませう。」

彼は、不機嫌さうに彼女の方を見て、出て行つた。テスはこれ以上間の悪い場所はあるまいと思はれるほど、ひどい所へ來たものだと思つた。しかし、男に言ひ寄られるよりはまだましであつた。二時になると、本職の麥扱連は各各の細口壜に殘つてゐる最後の半パイントのビールを呷つてしまひ、鉤を其處へ置いて、最後の束を結へ、それから出て行つた。マリアンとイズもさうする積りであつたのであつたが、テスが他の者より長く働いて、自分の不馴れを補ふ爲めに、居殘らうとしてゐるのを聞いて、彼女一人を置いて行くに忍びなかつた。まだ降つてゐる雪を眺めながら、マリアンは叫んだ。「さあ、水入らずになつたのよ。」かうして、終に話は搾乳場の思ひ出に移つた。そして勿論、エンヂェル・クレアに對する、彼女等の愛情にからまる事柄に入つた。

「イズや、マリアン、」と、エンヂェル・クレアの夫人は、嚴かに、だが、夫人といつても名ばかりであることを知ると、いかにもいぢらしく思はれる嚴かさで言つた。「私今は、クレアのことを、以前のやうにあんた方と一緒に話し合ふことが出來ませんわ。ねえ、私、出來ないでせう。なぜつて今あの方は私から離れてゐるけれど、やつぱり私の夫なんですものねえ。」

クレアに戀してゐた娘が皆で四人、その中でイズは生來一番あばずれのした、とても皮肉な娘であつた。「あの方、戀人としては素晴らしかつたに違ひないけれど、」と彼女は言つた。「あんなに早くあんたから別れて行くやうでは、あまり優しい夫とも思はれないわ。」

「あの人は是非行かなければならなかつたのよ——餘儀なく行つたの、向うの土地を見に！」とテスは辯解した。

「あんたに、この多だけでも凌がしてくれたつてよかつたらうにね。」

「えゝ——それはね、ちよつとした事——思ひ違ひの爲めなの。さうして、そんなこと、あれこれ言ひたくないわ、」とテスは涙聲で答へた。「あの人の爲めに申し開きをして上げることは多分澤山あるでせうよ！　あの人は、他の夫たちのやうに私に默つて行つてしまつたんぢやないの。だから、あの人の居る所は何時でも、私には分るわ。」

この後で、三人は可なり長いこと、麥の穗をつかんで藁を抜き取り、それを脇の下に一抱へに集め、鉈鎌で穗を切つたりして仕事を進めて行きながら、默想を續けてゐた。納屋の中は、藁をしごく音と鎌の物を咬むやうな音ばかりであつた。するとテスは、急に元氣が無くなつて、足許の麥の穗の山と積まれてゐる上へ坐つてしまつた。

「あんたにはとても辛抱が出來まいと、思つてゐた！」とマリアンは叫んだ。「この仕事をするには、あんたなんかよりもつと頑丈な體でなくつちやね。」

丁度そこへ農場主が入つて來た。「ほら俺がゐなくなるとえと、もうお前はこれなんだ、」と彼は彼女に言つた。

「でも、私が損をするだけです、」と彼女は言ひ譯を言つた。「あんたの損になりはしませんわ。」

「こつちでは早く片づけてしまひてえんだ。」と彼は納屋を横切つて、反對側の戸口から出て行きながら、頑なに言つた。

「あの人の言ふことなんど、氣にしちや駄目よ、いゝこと、」とマリアンは言つた。「私、以前にも此處で働いたことがあるの。さあ、あんたは彼方へ行つて横になつてお出でよ、イズと私とで、あんたの束數だけ濟まして上げるからね。」

「あんた方にそんなにして貰つちや濟まないわ。私、あんた達より背が高いんですもの。」

だが、彼女は酷く疲れてゐたので、暫く横になつて休むことを納得し、納屋の端の方の抜き屑——眞直な麥藁が抜かれた後の屑——の積んである上へ凭りかゝつた。彼女が弱つたのは、激しい勞働の故でもあつたが、同時に、夫から離れてゐるといふ問題がまた始まつたので、その爲め興奮した故でもあつた。彼女は慾も得もなくなり、たゞぼんやり見たり聞いたりして、横になつてゐた。そして二人が、

扱いてゐる藁の擦れ合ふ音や、穗を切る音を聞いても、肉體をさいなまれるやうに感じた。

彼女は、自分のゐる片隅から、かういふ物音の外に、二人の呟いてゐるやうな話聲を聞くことが出來た。二人は既に絲口の開けた話題を續けてゐるのだといふことを、彼女は確かめた。が、二人の聲は非常に低かつたので、はつきり聞き取ることが出來なかつた。終にテスは、二人が何を言つてゐるのか、段々知りたくてたまらなくなつた。そこで彼女は、無理にももう快くなつたと思ひ込んで、立ち上つて再び仕事に取りかゝつた。

次にはイズ・ヒュウエットが弱つてしまつた。彼女は前日の夕方十二哩以上も歩き、夜半にやつと床に入り、そしてまた五時に起き出したのであつた。マリアンだけは、酒壜と頑丈な體質のお蔭で、苦しみもしないで、背中や腕に受ける勞苦にも堪へた。テスはイズに、自分はもう快くなつたやうだから、あんたの力を借らないで、今日の仕事は片付け、束數も皆と同じになるやうにするから、と言つて、もう仕事をやめてくれるように乞うた。

イズは有難うと言つて、その申し出を受け容れ、そして大きな戸口を抜け、自分の宿へ通ずる雪路へ向つて見えなくなつた。マリアンは酒のお蔭で午後の今時分になると、何時もさうであるやうに、ロマンティックな氣分を味ひ出すのであつた。

「あの方にそんな事があらうとは思へやしなかつたのよ——決して！」と彼女は、夢見るやうな調子で言つた。「それに、私ほんとにあの方を愛してゐたの！　あの方があんたといふ人を奥さんにしたからつて、そんなことはどうだつてよかつたの。だけど、イズに對するあんな仕打ちはあんまり酷すぎるわ！」

テスはこの言葉を聞いて吃驚し、危く鉈鎌で指を切り落してしまふところだつた。

「夫のことを言つてるの？」と彼女は口籠つた。

「えゝ、さう。あんたに言つちやいけないつて、イズは言つたの。でもどうしたつて、私、言はないぢやゐられないの！　それはね、あの方がイズに頼んだつていふことを言ふの。あの方がね、あの娘に、伯剌西爾へ一緒に行つてくれつて頼んだつてさ。」

テスの顔は、戸外の景色のやうに蒼白になり、なごやかな線は硬ばつた。「それで、イズは行くのを斷つたの？」と彼女は訊ねた。

「それは私知らないわ。兎に角あの方、心變りがしたんだつて。」

「馬鹿々々しい――ぢや、始めから眞面目に言つたんぢやなかつたんでせう！　男のよくやる冗談だつたんでせう！」

「いゝえ、眞面目に言つたんだつて。だつて可なり長い道を、あの娘を馬車へ乘せて、停車場の方へ行つたんだもの。」

「あの人は、あの娘を伴れてなんか行きやしなかつたわ！」

二人は無言のまゝ、麥扱きを續けてゐたが、到頭テスは前觸らしい樣子をちつとも見せずに、急に聲を上げて泣き出した。

「そら！」とマリアンは言つた。「だから私、こんなことあんたに聞かせなければよかつたのに！」

「いゝえ。あんたが言つてくれたんで大へんよかつたわ！　私、今まで當にならない、惱ましい暮し方をして來て、それがどんなことになつて行くか分らなかつたわ！　私もつと度々あの人に手紙を上げるのが本當だつたわ。あの人は私を連れて行くわけにいかないと言はれたけれど、手紙は私の好きなだけいくら度々上げても、いけないとは言はれなかつたの！　私はもうこんな風に愚圖々々してゐたくない！　何も彼もあの人任せにして置くなんて、私ほんとに間違つてゐたし、構はなすぎたわ！」

納屋の中の薄暗い光線は、愈々暗くなつた。そこで二人はもう手元が見えないので、仕事は出來なつかた。テスはその夜、家へ歸り、自分の小さな白塗りの部屋へ入つて獨りになると、急きこんでクレアへ手紙を書き初めた。だが、疑惑の中へ落ち込むと、彼女はそれを書き上げることが出來なかつた。後になつて、彼女は、何よりも大切に身につけてゐる、リボンに通した指輪を取り、自分の身を守らうとでもするやうに、それを夜通し指に嵌めてゐた。自分と別れてから幾らも經たないうちにイズを外國に連れて行かうなぞといふことが出來るやうな、他愛ない愛人だが、實際自分はその妻であるといふ氣持になつて。さういふ事實を知つて見ると、彼女はどうして彼の處へ哀れみを乞ふことが出來よう、また彼をまだ慕つてゐるなどゝ、どうしてそんな心が見せられよう？

四四

納屋での打ち明け話に唆られた爲めか、彼女の考へは、最近一度ならず心を惹かれた方角――遠いエミンスタア牧師館の方へ惹きつけられた。若しクレアの許へ手紙が出したかつたら、彼の兩親を通じて出すように、又若し困つた場合には直接兩親に手紙を出すようにと、彼女は夫から命じられてゐた。けれども、クレアに對して自分は、德義上何を要求する權利も持つてゐないといふ考へで、テスは何時でも、かういふ手紙を送らうとする衝動を喰ひ止めずにゐられなかつた。從つて牧師館の一家へ對しても、結婚後の兩親に對すると同樣に、彼女は事實、存在を失つてゐたのであつた。この雙方へ對して自己を抹殺することは、自分の眞價を公平に考へた上で、受ける資格のない愛や、憐憫といつたやうなものは、何一つ望まうとしない、彼女の獨立的な性格と全く一致するものであつた。立つにも倒れるにも、自分の力に賴り、見も知らない家族のその一人が、たゞ一時の出來心から、教會の帳簿に自分の名と並べて彼女の名を書いたといふ、取るに足らない事實が元になつて、彼女の爲めに出來たその家族に對する單なる名義上の資格などは、拋棄してしまはうと、彼女は覺悟をきめてゐた。

けれども、イズの話を聞いて發熱するほど胸を痛めてゐる今は、何處までも自己抹殺の力を振ひ續けるわけには行かなかつた。夫は何故手紙を寄れなかつたのであらう？

少なくとも旅行する地方だけは彼女に知らせると、はつきり彼は言つたではないか。が、彼は未だにその宿所を知らせる爲めの一行も書き送つては來なかつた。彼は實際に冷淡であるのだらうか？　それとも病氣でもしてゐるのだらうか？　自分の方から先づ書き送るべきだつたらうか？

彼女は思ひ切つて勇氣を振ひ起し、消息を確かめに牧師館を訪れ、そして夫の音信不通に對する悲しみを打ち明けようと思へば、出來ないことはあるまい。若しエンヂェルの父が、世間で噂されてゐる通りに善良な人であるならば、自分の情に飢ゑてゐる立場に同情してくれることも出來よう。自分の生活の上の困難などは、隱さうと思へば隱せるのである。

平日に農場を出ることは、彼女の自由にならなかつた。日曜日がたゞ一つの機會であるに過ぎなかつた。フリントコム・アッシは、まだ鐵道が敷かれてゐない、白堊質の高原の中央に位してゐたので、どうしても歩いて行かなければならなかつた。それに、道程は片道だけでも十五哩あつたので、その計畫を果すには早起きして長い一日をそれに當てなければならなかつた。

それから二週間經つて、雪はもう消えて、續いて烈しい

堅霜（地が堅く凍るだけで、白色の結晶をなさない霜）が降りるやうになつた時、彼女は道のいゝのを利用して、出掛けて見る氣になつた。その日曜日の朝は四時に階下へ降りて行き、そして星明りの中へ歩き出した。天候はまだ順調であつたので、大地が足の下で鉦砧のやうに鳴り響いた。

マリアンとイズは、彼女のこの旅行が、夫に關係があるといふことを知つてゐたから、それに、深い興味を感じてゐた。二人の宿は小徑を少しばかり行つたところの百姓家であつたが、二人は、彼女のとこへやつて來て、いろ〳〵とテスの出發の手傳ひをした。そして舅姑達の氣に入るやうにうんと綺麗な身裝をして行つた方がいゝと、しきりに勸めた。尤も彼女は、老クレアの嚴格な、カルヴィン教の教理を知つてゐたから、身裝をよくすることなどはどうでも構はなかつたし、また、贅澤さへした。悲しい結婚からもう一ヶ年になつてゐた。でも彼女は、時の流行を追はうなどゝはしない、素朴な田舍娘として、人目を惹くに足る裝ひの出來る位ゐの衣服は、あの時の一ぱい詰つてゐた衣裳簞笥の殘骸から、未だに保存して置いてあつた。顏と首の仄紅い皮膚をくつきり浮き上げてゐる、白クレエプの襞のついた鼠色の毛織の長上衣、それから黑天鵞絨の短上衣や帽子などを。

「何んて惜しいこつたらうね、あんたの旦那さんが、今この容姿が見られないつてのは——あんた、本當に美しいよ！」鋼鐵のやうな蒼白い戶外の星明りと、黃色い屋內の蠟燭の光との中間にある闊の所に立つてゐるテスを、しげしげ見てゐたイズ・ヒュエットは、かう言つた。イズは寬大な氣持になり、自分を捨てゝこの場に相應はしい調子で話した。彼女は、目の前で、テスに敵意を示すことが出來なかつた。榛の實より多少でも大きい心臟を持つてゐる程の女ならば、誰だつて出來はしない。それは彼女が同性に及ぼす影響が、全く珍らしい溫か味と力をもつて居り、不思議にも怨恨とか競爭心とかいふ、より劣等な女性の感情を征服するからであつた。

愈々最後に、此方を引つ張つて見たり、觸つてみたり、彼方へ輕く刷毛をかけたりした後で、二人はテスを行かせることにした。彼女は黎明前の眞珠色の大氣の中へ吸ひ込まれた。二人は、彼女が出來るだけ大股で、固い道をこつこつ叩いて行く足音を聞いた。イズでさへ、彼女が望みを達するようにと祈つた。そして、自分の德義心を何も特に崇めてゐるわけではなかつたが、クレアから一時の誘惑を

受けた時、自分の友に對して惡いことをせずに濟んだのを嬉しく思つた。

クレアがテスと結婚したのは、たつた一日違ひの一年前の今日だつた。また、彼が彼女から去つて行つたのは、僅か數日足らないだけの丁度一年前の今日でもあつた。それにしても、からつと晴れ渡つた多の朝、今彼女の帶びてゐるやうな用向きで、かういふ白堊質の山背の稀薄な大氣の中を通り、活潑な足取りで出掛けるのは決して氣の鬱ぐ旅ではなかつた。又、彼女の出發に際して描いた夢想が、義理の母親の氣に入り、その婦人に自分の身の上を一切打ち明けて自分の味方にして、あの家出者を自分の手に取り戻すことであつたのは疑ひなかつた。

やがて彼女は、廣い斷崖の一端に達した。その下には肥土質のブラックムーアの盆地が、今霧に包まれたまゝ靜かに黎明の中に橫はつてゐた。高地の無色な空氣に引きかへて遙か下の大氣は、深い靑色に染つてゐた。彼女が何時も働いてゐる百エイカアもある大規模な圍ひ地とは異つて、彼女の下には、六エイカアにも足らない小さな畑が、幾つともなく並んでゐた。その數が如何にも多いので、この高臺から見ると、さながら、網の目のやうであつた。此處では、あたりの景色が薄茶色を呈してゐた。眼下の彼方では、フルウムの盆地と同じやうに、四圍の風景はいつも靑靑としてゐた。けれども、その盆地でこそ、彼女の悲しみが孕まれたのであつた。だから彼女は以前のやうに其處を愛しはしなかつた。彼女にとつて、ものゝ美しさは、それを感じる人すべてに取つてと同じやうに、物の中にあるのではなく、物が現はすところの事柄にあるのであつた。

彼女はこの盆地を右手に見ながら、西の方へ步一步指して行つた。ヒントックの高地の村々を過ぎ、シアトン・アバスからキャスタブリッヂへ通ずる道路を直角に橫切つて、『惡魔の廚房』と呼ばれる小さい谷を間に挾んでゐるドッグベリイ・ヒルとハイ・ストイとを繞つて進んだ。尙ほ上り道に隨つて行くと、彼女はクロス・イン・ハンドに到着した。其處には、或る奇蹟、または人殺し、或はその兩方が行はれたとかいふ場所を示す爲めの石の圓柱が、寂しく默つて立つてゐた。そこから三哩ほど行つて、ロング・アッシ・レインといはれてゐる羅馬統治時代の眞直な廢道を橫切つた。そこへ越すと間もなく、こゝを後にして、それと交叉してゐる小徑を通つて、丘を降り、エヴァス・ヘッドの小さな町といふよりも村に入つた。此處で先づ里程の半ばを來たことにな

つた。彼女は此處へちよつと立ち寄り、二度目の朝食――彼女は宿屋のやうなところは避けてゐたので、ソオ・アンド・アコーン亭ではなく、教會の側の、とある田舎家で――を腹一杯食べた。

彼女の旅程の後半分は、ベンヴィル・レインを通つて行くので、前よりも平坦な地方へ入るのであつた。けれども、彼女と自分の行く目的地との間の里程が少なくなつて來るに從つて、テスの自信もまた減じて行き、彼女の訪問の企ては一層痛ましく目前に浮び上つて來た。彼女は自分の目的が如何にも仰々しく見え、そして周圍の景色がひどくぼんやりして來たので、時々道に踏み迷ひさうになつた。だが正午時分になると、彼女はエミンスタアとその牧師館がある盆地の一端にある門の傍に立ち止つてゐた。

四角な塔――その下には、丁度今、かの牧師とその會衆が集つてゐると彼女は思つた。――その教會の四角な塔は、彼女の眼には何となく嚴かに映つた。何とか都合して平日に來ればよかつたと、彼女は思つた。あゝいふ信仰の篤い人だから、どうにもならない彼女の場合などは、更に考へてくれないで、特に日曜日を選んで來るやうな女に對して偏見を持つかも知れない。しかし、彼女としては、今、行つて見るより外に道はなかつた。彼女はこんな遠路を歩いて來た重たい深靴を脫いで、塗革の綺麗な輕いのと穿き替へて、それから、さきに脫いだ靴は、其處ならばまた容易に見出せる門柱の側にある生垣の蔭へ隱して置いて、其處の丘を降りて行つた。鋭い空氣から得た生々した顏色は、牧師館に近づくにつれて、我れ知らず次第に薄らいで行つた。

テスは自分に都合よくなるかも知れない何か思ひ設けぬ事が起つてくれゝばいゝと思つたが、そんなものは何んにも起らなかつた。牧師館の芝生にある庭木は、霜風に吹かれて、ざわ〳〵と不快な音を立てゝゐた。彼女は、どんなに空想を働かしてみても、この家が親しい一家の住居であるとは感ぜられなかつた。しかも、性質とか感情とかいふ點からも、彼女と彼等とを分つ本質的なものは何もなかつた――苦しみも、樂しみも、考へも、生も、死も、または死後の生活も、全く同じであつた。

彼女は努めて心を引き立て、廻轉戸を開けて中へ入り、そしてベルを鳴らした。もう船に乘りかゝつたのだ。今更退くことは出來なかつた。いや、まだ船に乘りかゝるところまで行かなかつた。彼女の鳴らしたベルに答へる者は誰

もなかつた。勇氣を出して、もう一度試してみなければならなかつた。彼女は二度目にベルを鳴らした。さうするまでの心の動搖は、十五哩も歩いた後の疲勞と一緒になつて、待つてゐる間の彼女をして片手を腰に當て、肱を玄關の壁に凭せかけて支へしめなければならなかつた。風は刺すやうに冷たかつたので、其處に絡んでゐる蔦の葉は凋んで、灰色になつてゐた。その一葉々々は引つ切りなしに隣りのと擦れ合つて、彼女の神經を攪亂すのであつた。誰か肉を買つて歸つた者のある家の塵箱から風に浚はれた血のついた一枚の紙片が、門の外側の道路を彼方此方と飛び廻つてゐた。餘り輕過ぎて止つてゐる譯にも行かず、飛び去るには餘り重過ぎるといふ風であつた。そして顆切れが數片それに一緒についてまはつてゐた。

二度目のベルは、前のより高かつた。それでもまだ、誰も出て來なかつた。やがて彼女は玄關から歩き出して、門を開けて外へ出た。彼女はまた戻つてもみたいやうな、決心のつかないやうな樣子で、家の正面を瞶めたが、門を閉めた時には、ほつと安心の吐息をもらさないではゐられなかつた。ことによつたら自分が如何なる者であるか見咎められたのかも知れない（どうしてかは彼女には分らなかつたが）そして內へ入れてはいけないといふ命令が與へられたのかも知れない、といふ感じが彼女に附纏つて離れなかつた。

テスは角の處まで行つた。彼女は出來るだけのことはした。けれども目の前の怖れを逃れて、將來の苦しみの種を蒔くやうなことはすまい、と固く決心して、彼女は再び歩みを返し、窓といふ窓を殘らず見上げながら、その家の前をすつかり通り過ぎた。

さうだ――分つた、彼等は一人殘らず教會へ行つてゐたのだつた。父は何時でも、召使まで一緒に、家中一人殘らず是非とも午前の祈禱に參列させるので、一同は家へ歸ると、自然冷たい物を食べることになると、夫の言つたことを、彼女は思ひ出した。だから、祈禱の終るまで、待つてゐさへすればいゝわけであつた。彼女は此處で待つてゐて人目につくのを欲しなかつた。そこで、教會を通り過ぎて小徑へ入らうと、其處を出かけた。しかし、彼女が教會の庭の門の所まで行くと、丁度人々が雪崩れるやうに出て來て、テスはその人々にすつかり圍まれてしまつた。

エミンスタアの會衆は、たゞゆつくり我家へ歸つて行く小さな田舎町の人たちが、見たこともない此處ら邊の者と

は樣子の變つた女を眺めるやうな風に、彼女を眺めたゞけであつた。彼女は步調を早めて先刻通つて來た道を登り、牧師の家族が晝の食事を終へてしまふまで、其處の生垣の間に隱れ場所を見つけようとした。そして彼等に取つても彼女を迎へるには、その方が都合よかつたに相違ない。彼女は直ぐに、敎會歸りの人たちから離れ去つた。たゞ二人の靑年らしい者だけが、互ひに腕を組み合せ、急ぎ足で、彼女の後に步いて來た。

二人が近づくにつれ、何か眞面目な議論に耽つてゐる聲を彼女は聞くことが出來た。そして彼女はかういふ境遇にゐる女によくある敏感さで、その聲のうちに、夫獨特の語調を認めずにはゐなかつた。この徒步者たちは、言ふまでもなく夫の二人の兄であつた。自分の計畫をすつかり忘れてしまつて、テスがたゞ一つ怖れたことは、まだ彼等に面と向ふ準備も出來ないで、こんな取り亂した狀態でゐるうちに、二人に追ひつかれては大變だといふ事であつた。彼等が彼女を誰であるか知る筈はないと思つたけれど、彼女は本能的に、彼等の穿鑿的な眼を恐れたからである。彼等が足早に步いて來れば來るほど、彼女も足早に步いた。彼等は明らかに、長い祈禱の間を掛け通してゐた爲めに冷え切つた四肢に、溫かみを取り返す爲め、晝飯或は正餐に家へ入るに先だつて、短い早足の散步をしてゐるところだつた。

たゞ一人の者だけが、坂を上つて行くテスの先になつてゐた——恐らく少し堅苦しく取り澄してゐるところはあつたが、何處か床しい、淑女らしい、若い婦人であつた。テスが殆んどその女に追ひついた時、義兄たちの足が早かつた爲めに、彼等は殆んど彼女の直ぐ後へ追ひついてゐた。從つて、彼等の話が一こと殘らず彼女に聞きとれる位ゐであつたとはいへ、特に彼女の興味を喚るやうなことは何んにも言はなかつたが、到頭、まだずつと前方にゐる若い婦人を見つけて、彼等の一人は言つた。「マーシイ・チャントだよ。早く追ひつかうぢやないか。」

テスはその名を知つてゐた。それはエンデェルやマーシイの兩親たちが、エンデェルの生涯の伴侶と定めた者で、自分のやうな邪魔者さへゐなかつたならば、恐らく彼が結婚したかも知れない女であつた。このことを前に聞いてゐなかつたとしても、ちよつとの間待つてさへゐれば、それ位ゐのことは、彼女にも分ることであつた。といふのは、兄弟のうちの一人が先づこのやうな事を言つたからである

——「あゝ！　氣の毒なエンデェル、氣の毒なエンデェル！僕はあの美しい娘を見る毎に、乳搾り女だか何んだか知らない者に惚れ込んだ彼奴の輕卒さを、愈々殘念に思ふよ。一寸考へたつて、本當に妙な話ぢやないか。その女があれと一緒になつたかどうだか、僕は知らない。だが、二三ケ月前あれから便りのあつた時には、まだ一緒になつてはゐなかつたよ。」

「僕にははつきり分らない。あれはこの頃ではもう何んにも僕には言はないんだ。あれと僕とが遠ざかるやうになり出したのは、あれの突飛な意見が元だつたが、今度の無分別な結婚は愈々疎々しさの仕上げをしたやうだよ。」

テスはなほ一層足を早めて長い坂を登つて行つた。けれども、彼等から離れようとすれば、どうしても注意を惹かないわけに行かなかつた。終に彼等はすつかり彼女を追ひ拔いて、通り過ぎてしまつた。まだ遙か前方にゐた若い婦人は、彼等の足音を聞きつけて振り返つた。それから、挨拶の言葉があり、握手が交はされ、そして三人は一緒に步いて行つた。

彼等は間もなく丘の上へ着き、そして、此處を彼等の散步の極限とするらしく步みを弛めた。そしてテスがそれより一時間前に、そこへ降りるに先立つて町の樣子を窺ふ爲めに步みを止めたあの門の方へ、三人とも步みを移した。談話中に、この聖職にある兄弟の一人は、自分のパラソルで生垣の中を丹念に探り廻し、そして何かを明るみへ引きずり出した。

「此處に古靴が一足あるよ、」と彼は言つた。「乞食か何かが捨てたんだよ、きつと。」

「跣足で町へ入つて來て、私たちに同情を起させようとするかたりの仕業でせうよ、」とチャント孃は言つた。「さうよ、それに違ひないわ、結構な旅行靴ですもの——少しも破れてなどゐない。何んていふ狡いことをするんでせう！誰か困つてゐる人に上げるやうに、私、持つて歸りませう。」

その靴を見つけ出した本人カスバアト・クレアは、自分のステッキの曲つてゐる部分で彼女の爲めにそれを拾ひ上げてやつた。かうしてらテスの深靴は取上げられてしまつた。

これを聽いてゐたテスは、毛絲の面紗で顏を隱して、其處を通り越したが、やがて後を振り向いて見ると、この敎會歸りの一行は、もう彼女の靴を持つて門の傍を離れ、丘を降りて行く處であつた。

そこで、我々の女主人公は再び歩き出した。涙が、先を見えなくするほどの涙が、彼女の頬を傳つて流れた。彼女がこの一場面を自分に對する非難と解しないではゐられなかつたのは、全く感傷性であり、全く根據のない思ひすぎであることを知つてゐた。それにも拘らず彼女は、それに打ち勝つことが出來なかつた。何等身に防ぐ武器を持たない彼女は、かういふ不幸な前兆をすつかり退けてしまふことが出來ないで、牧師館へ引返さうとする氣になどはなれなかつた。エンヂェルの妻は、まるでさういふ——彼女にとつては——最高の位地にある牧師たちに、侮蔑されきつたものゝやうに、その丘を追ひ立てられでもしたやうに感じないではゐられなかつた。この侮辱は實に何の氣なしに加へられたものには相違なかつたが、彼女が、偏狹でこそあれ、この兄たちに較べれば左程固苦しくもなく、また頑迷でもない、そして慈悲の心といふ天稟を十分に持つてゐる父親に出會つたのではなく、息子たちに出會つたのは、一寸廻り合せが惡かつた。彼女が再び塵にまみれたあの深靴のことを思ひ出した時、その履物が彼等の嘲弄の的になつてゐたことを哀れにさへ思ひ、また、その持主の生涯が如何にも傷ないことを感ぜずにはゐられなかつた。

「あゝ！」と彼女は言つた。そして尙ほ、自分の身を憫んで溜息を洩らしながら「あの方達は、あの人が私に買つて下すつたこの綺麗な方を痛めない爲めに、途中の惡い道をあの靴を穿いて來たのだといふ事を知らないんだわ——さうだわ——あの人達はそれを知らない！　それに、私の綺麗な上衣の色合もあの人が見立てゝ下すつたんだといふ事も考へなかつたんだわ——さうだわ——どうしてあの人たちに分る筈があらう！　たとひ分つてゐたとしても、多分あの人たちは一向構つてなんかくれなかつたでせう。第一あの方たちはあの人を餘り思つてはゐないんだから、可哀さうに！」

それから彼女は、自分の愛してゐる人の爲めに、悲しんだ。その人の古くさい考へが、かういふこの頃の色々な悲しみを彼女に與へることになつたのだ。それから彼女は、自分の生涯の一番大きな不幸が、息子たちを尺度にしてその父親を推し量つた爲めに、愈々といふ大切な時に、こんな風に女々しく勇氣を失つてしまつたことに依るのだとは少しも知らず、彼女は元來た道へ引つ返した。彼女の現在の境遇こそ確かに老クレア夫婦の同情を招かずにはゐないやうなものであつた。人間のうちでも、テスほど絶望しきつてしまはない人の微妙な精神上の煩悶などは、彼等の興味や注意を惹かなかつたが、極端な場合に對すると、彼等の心は一足とびにその方へ傾いて行くのであつた。『稅吏』や、『罪障深いもの』の求めには喜んで應じるが、學者や『僞善者』の苦惱に對しては、一言位ゐは言つてもいゝことを忘れ勝ちであつた。そして、この缺點といふか、偏狹といふか、その性質が、却つて、この場合の取柄となつて、老夫婦は自分等の嫁が、正道を踏み外した人としてはなかなか立派な人間で、自分等の愛を受ける資格があるものと考へたかも知れなかつた。

そこで彼女は、ちつとも希望に充ちてゐはなく、何だか生涯の危機が近づきつゝあるといふ考へを抱いて、もと歩いて來た道を、しを〳〵と戻り始めた。表面的には何の危機も續いて起りさうもなかつた。そして、彼女は、牧師館を訪問しようといふ勇氣を再び呼び起すことの出來るまでは、あの瘠地の農場で働き續けて行く外に仕方がなかつた。彼女は、この歸り途には、恰も自分はマーシイ・チャントなどの有つてゐないやうな容貌を少くとも有つてゐるのだといふことを世間に見せでもするやうに、自分の面紗を拂ひのけてしまふ位ゐに、自身といふものに興味を持つた。

だが、それも悲しくかむりを振つてする位ゐであつた。「そんなものはなんでもないんだわ——何んでもないんだわ！」と彼女は言つた。「誰もそれを愛してはくれない！　誰もそれを振り向いてはくれない！　私のやうな世間から捨てられた者の縹緻を誰が構つてくれるでせう！」

歸りの旅は、行進といふよりは寧ろ彷徨の形であつた。それには元氣もなければ目的もなく、たゞ惰性があるのみだつた。退屈な、長いベンヴィル・レインを辿つて行くうちに、彼女は疲勞を感じ出し、幾度も門に凭りかゝつたり、また、里程標の側で足を休めたりした。

彼女は、やがて七八哩も歩いて來て、その午前に、今とは全然異つた期待を抱いて朝の食事をした村、といふよりも小さな町エヴァス・ヘッドを下に見た嶮しい長い丘を降りて行くまでは、何處の家へも入らなかつた。再び彼女が腰を下した教會の側の田舍家は、村のその端れでは殆んどとつつきの家であつた。この家の主婦が彼女の爲めに厨へ牛乳を取りに行つてゐる間に、テスは通りを見下ろしながら、其處には全く一人の人も通つてゐないのに氣がついた。

「此處らの人たちは、午後のお祈禱に行つてゐるんでせうね？」と彼女は言つた。

「さうなもんかね、あんた、」とその老婆は言つた。「それにやまだ時間が早過ぎるだよ。鐘がまだ鳴り出さねえものね。皆は向うの納屋へ説教を聽きに行つてるんだよ。或る怒鳴り屋が、其處で、祈禱の合間にいつも説教するでねー何んでも、立派な、熱心な信者だつて噂だよ。だからつて、私なんぞ聽きにや行かねえだよ！　説教壇から、おきまりの調子で出る説教だけで私には可い加減こたへるでなあ。」

テスは、間もなくその村の方へ進んで行つた。彼女の足音は、死人の土地でゞもあるかのやうに、村の家々に反響した。村の中程に近づくと、その反響は、他の音の爲めに邪魔された。そして、道から大して離れてゐない所に納屋が見えたので、彼女は、この者が今の説教者の話聲であらうと想像した。

説教者の聲は、靜かな澄み通つた空氣の中に非常にはつきり響いたから、彼女は納屋の閉めきつてある方の側にゐたのではあつたが、その文句を直ちに聞き取ることが出來た。その説教は、想像のつく通り、極端な信仰萬能派式のものであつた。聖ポーロの神學　説明されてあるやうな、信仰に依る承認といふことに基礎を置く説であつた。この隨喜派の固定觀念は、全くの演説口調で、盛んな熱を以つて、述べ立てられた。といふのは、彼には明らかに辯證家としての熟練は、どうみてもなかつたから。テスはその説教の始めを聽いてゐなかつたが、今引用してゐる聖書の句が何であるかは、それが絶えず繰り返されたので、彼女は憶えてゐた——

「愚なる哉、既にイエス・キリストの十字架にかけられしことを、明らかにその眼の前に著はされたるガラテア人よ、眞に服はざるまでに、誰か爾曹を誑しゝか。」（新約聖書、加拉太書、第三章、第一節）

後で、耳を傾けながら、立つて聽いてゐるうちに、この説教者の教義が、エンヂェルの父親の見解を一層熱烈にしたものであることを發見して、テスは愈々興味を持つて來た。そして、この説教者がどうしてさういふ見解を持つに至つたかといふ彼自身の精神上の經驗をこまかに語り初めた時、彼女の興味は愈々高まつた。自分は最も恐ろしい罪人であつたと、彼は言つた。自分は世を愚弄し、悉に無頼の者や放蕩者と交つてゐた。が、目の醒める日が來た。そして、人間的な意味でいへば、それは主に或る一牧師の感化に依つて齎らされたのであつた。最初自分はその牧師をさんざんに侮辱したが、牧師の別れ際に言つた一言が深く自分の瞻に銘じて、どうしても忘れられなかつた。そして終に、神の御惠に依つて、その言葉が自分の心にこの變化を引き起し、御覽の通りの人間になつたのであると。

だが、教義そのものにも增してテスが更に驚いたのは、その聲であつた。それは、あり得べからざることのやうに思はれたが、紛れもなく、アレク・ダアバヴィルの聲であつた。彼女は納屋の正面へ廻つて行き、その前を通つて見た。低い多の太陽は、此方側の、大きな二枚扉の入口へ直射してゐた。その扉の一枚が開いてゐたから、光線は遠く打穀場のずつと奥まで射し込み、説教者と、氣持よく北風を避けてゐる彼の會衆の處まで屆いてゐた。會衆は全く村人ばかりであつたが、その中には、昔のあの忘れ難い日に彼女が嘗つて見た赤ベソキ壺を持ち歩いてゐる男が混つてゐた。しかし彼女の注意は、幾つかの麥の袋の上に立つて、會衆と入口の方へ顔を向けてゐる眞ん中の姿に向けられた。午後三時の太陽は、正面に彼を照らしてゐた。そして、彼の言葉をはつきりと聞いてからずつとテスのうちにだん〳〵食ひ入つて來た、自分を誘惑した者が眼の前にゐるといふ、妙に元氣を殺ぐ確信が、愈々紛れもない事實となつて、實際に現はれるやうになつた。

第六編　改宗者

四五

トラントリッヂを去つてからこの時まで、つひぞ彼女はダアバアヴィルに逢つたこともなければ、またその消息を聞いたこともなかつた。

旅人同志の邂逅は悲しい瞬間――時もあらうにちよつとでも刺戟を受ければ衝突を起し兼ねないといふ瞬間に起つた。だが、記憶は實に馬鹿氣たもので、彼が過去の不身持を悲しんで、改宗者として、公然とまたはつきりと其處に立つてゐるにも拘らず、彼女は或る恐怖に襲はれ、動作の自由を奪はれてしまつて、進むことも退くことも出來ないといふ有樣であつた。

彼女がこの前、彼の顏を最後に見た時、それから輝き出したものがあつたが、今それを思ひ出すと、そして現にまたそれを見ると！……相變らず堂々としてはゐるが、不快な風采であつた。けれども今では、あの黑い口髭はなくなつて、その代りにきちんと手入れをした、舊式な頰髯を生やしてゐた。そして、服裝は半ば牧師風であつた。その變化は、表情まですつかり變へてしまひ、色男氣取りのところは全く彼の目鼻立ちから拔けてしまつてゐるので、ちよつとの間、彼女は彼を同じ人と信ずることが出來にくい位ゐであつた。

最初ちよつとの間、テスの耳にはかういふ口からこのやうな聖書の嚴肅な言葉の續出するのが、氣味の惡い風變りの諧に、怖ろしい不釣合な響に聞えた。まだ四年にならない昔には、この馴れすぎる位ゐになつてゐた口調は、全く反對の目的をあらはす言葉を、彼女の耳に傳へたのであつたから、その對照の皮肉なのに、彼女は全く不快を感ぜずにはゐられなかつた。

それは改心といふよりも寧ろ變形であつた。以前の肉慾的な曲線は、今では信仰の熱情の曲線で調節された。誘惑的だつた唇の恰好は、今では祈願を現はすやうにされた。昨日、放蕩とのみ取れた頰の輝きは、今日は敬神的修辭の華かさに教化された。獸慾は狂信と化し、異教主義は使徒主義になつた。昔、あのやうな力で、彼女の容姿の前に閃めいた大膽なぎよろ〳〵した眼は、今では殆んど凄いやうな信仰の凄じい精力でぎら〳〵輝いた。自分の欲望が妨げられた時には、きまつて現はした意地惡さうな表情は、今では再び泥の中に落ち込みたがつてゐる手のつけられない墮落者を描いて見せる役をつとめてゐた。

容貌は、それだけで見ると、何か不服を言つてゐるやうに見えた。それは持つて生れた顏の性質から逸れて、不自然な印象を與へた。こんな風に容貌が氣高くなつてゐるのが、間違ひである。高まることが僞ることに見えるとは何といふ不思議であらう。

だが、そんなことが有るだらうか？　彼女は、こんな風に感ずる偏頗な感情をもう認めようとはしなかつた。生きてゐる間に、惡德を捨てゝ自分の魂を救つた者は世間に幾人もあるので、ダアバアヴィルはたゞその一人に過ぎなかつた。それなのにどうして彼の場合だけを不自然と考へなければならないのであらうか？　惡い昔の口調で善い新しい言葉を聽いた時、彼女が不快に思つたのは、たゞ惰性的な考へ方でさう思つたに過ぎなかつた。罪が大きければ大きいだけ、聖人となればそれだけ偉くなるのだ。それを知るには、なにも基督教の歷史を深く究めるには及ばなかつたのである。

かういふ印象がぼんやり、何とはなしに彼女の心を動かした。吃驚してぼんやり立ち止つてゐたが、そのお蔭でどうにか身動きが出來るやうになると直ぐに、彼女は彼の目に付かないところへ通り拔けてしまはうと唖然に思ひついた。彼は彼女が逆光線の位置に立つてゐたのだから、まだ彼女に氣づいてゐないことは確かであつた。

けれども、彼女が再び動いた刹那に彼は彼女を認めた。彼女の昔の戀人に及ぼした力は、電氣のやうなもので、彼の存在が彼女に與へた力よりも遙かに强かつた。彼の熱情や熱辯口調の透つた響は、彼から消え去つて行くやうに見えた。彼の唇は、それに乘つてゐる言葉の重味に悶えもし顫へもした。けれども、彼女が面と向つてゐる限り、彼はどうしてもその言葉を述べることが出來なかつた。彼の眼は、一たび彼女をちらつと見てからは、戸惑ひしたやうに、四方八方へ漂つた、たゞ彼女の方へだけは向かなかつたが。けれども二三秒毎に烈しく跳びつくやうに戻つて行つた。だが、この癇癖はほんの僅かの間しか續かなかつた。といふのは、テスの元氣は彼が無氣力となるにつれて回復し、彼女は出來るだけ早く納屋を通り過ぎ、そしてどん〳〵進んで行つたのである。

彼女が反省する力を得るやうになると、彼等の互ひの立

場の變化を思つて、彼女は吃驚した。彼女の身を誤らした彼は、今では聖靈の側に立つてゐる。それだのに彼女は、まだ生れ變つてゐなかつた。そしてまさしく傳說にあるやうに、彼女のサイプラスの女神（サイプラスの島の近くに生れたヴイーナス若しくはアフロダイトのこと。艷麗無比の美女にして、しかも多情で節操に乏しかつた。暗にテスを指す）が突然祭壇の上に現はれると、祭司の靈火が殆んど消えてしまつたといふ結果になつた。

彼女は、振り向きもせず、どん〳〵歩いて行つた。彼女は背中にも、視線を感ずる性質を具へてゐるやうに見えた——彼女の着物までがさうだ——そんなにまで彼女は、あの納屋の外側から彼女の上に注がれてゐるかも知れない、思ひなしの凝視に對して敏感であつた。此處まで來る間といふもの、彼女の胸は頼りない悲しみで滅入つてゐたが、今では、その心配事の性質が變つて來た。餘りに長く抑へられてゐた愛情に對する渴望は、未だに彼女を取り卷いてゐる執念深い過去の、殆んど肉慾的な感覺とその時暫らく置き換へられた。それは悪いことをしたといふ彼女の考へを強くして、實際の絶望にしてしまつた。彼女の初めの生活と現在の生活とを繋ぐ連鎖が切れてくれゝばよいと、彼女は前から望んでゐたが、結局それは切れなかつた。彼女自身が過去のものとなるまでは、過去はやはり完全な過去とはならないであらう。

こんな風な考へに恥りながら、彼女はロング・アッシ・レインの北部を再び直角に横切つて、間もなく、高地へ登つて行く白い街道が眼の前に展けて來るのを見た。その高地の緣に沿うて、彼女はまだこれから先の旅を續けなければならなかつた。そのから〳〵に乾いた靑白い表面は、いかめしさうに、一脈の趣きを與へてゐる。或る褐色の馬の落しもの目標にもその單調を破られてゐなかつた。徐々とこの坂に向つて行つてゐるうちに、テスは背後の足音に氣がついた。そこで振り返つて見ると、あのよく見知つてゐる姿——メソヂスト敎徒らしく如何にも奇妙な服裝をした——、この世では、二人きりでは會ひたくない、と彼女が願つてゐた全世界中でたつた一人の人物が近づいて來るのであつた。

けれども考へる時間も、また避けて遁れる時間もなかつたので、彼女は諦めて、出來るだけ冷靜な態度をとり、仕方なく彼の追ひつくのに任せた。彼女は彼が非常に興奮してゐること、しかし、それは急いで歩いて來たせゐではな

く、內からの感情の爲めであるといふことを知つた。

「テス！」と彼は言つた。

彼女は步調を緩めたが、振り向きもしなかつた。

「テス！」と彼は繰り返した。「僕だ——アレク・ダアバァヴィルだよ。」

彼女はその時始めて、振り返つて彼を見た。するとダアバァヴィルはすぐ側へやつて來た。

「さうでしたわね、」と彼女は冷かに答へた。

「ねえ——たゞそれつきりの御挨拶かい？　なるほど、僕にはそれ以上を望む資格はないんだつけ！　無論ね、」と、輕く笑つて、彼は言ひ添へた。「こんな姿をしてゐる僕を見ると、君の眼にはどこか滑稽な人間に映るだらうね！　だが——それも僕は忍ばなければならない……君は何處か誰も知らない處へ行つてしまつたと僕は聞いてゐた。テス、君は僕がかうして追つかけて來たのを、不思議に思ふだらうね？」

「えゝ、まあさうです。そんなことをあなたにして頂きたくなかつたと、私、心から思ひますわ！」

「さうだ——さういふのも尤もだ、」と彼は、一緒に步いて行きながら（無論彼女の方では厭々ながらではあつたが）物凄く答へ返した。「だが僕を誤解しないでくれ。僕がこのことを賴む譯は、ことによると、君が不意に現はれたので、僕が彼處でへどもどした樣子を見て——若しそれに氣附いたものとすれば——その爲めに君が誤解したかも知れないと思つたからだ。あれはほんの一時の狼狽だつたんだよ。また、君が僕にとつてどんな關係にあつたかを思へば、あれも決して不自然ぢやなかつた。しかし意志の力は僕を助けて、あゝした中を切り拔けさしてくれた——こんなことを言ふと、恐らく君は僕を喰はせ者と思ふだらうが——それからすぐ後で僕はかう感じた、世界中のありとあらゆる人々の蒙るべき天の怒りから、その人々を救つてやるのが僕の義務であり願ひでもあるんだが、さういふ人々のうちでも——もし冷笑したかつたらするがいゝ——僕が如何にもひどい侮辱を加へた女こそ、まさにその人だと感じたんだ。僕はたゞその目的だけでやつて來たんだ——それだけのことだよ。」

「あなたは御自身をもうお救ひになりまして？　慈善は先づ自分から始まると申しますが、」と答へた彼女の言葉には、いくらか輕蔑するやうな調子があつた。

「僕はそんなことを何もしなかつたよ！」と彼は平氣で言

つた。「僕が聽衆に話してゐたやうに、神がすべてをして下すつたのだ。君がどれほど僕に嘲りを浴せかけても、テス、僕が僕自身――さうだ、數年前の老アダム（以前の迷つてゐた人、即ち昔のアレクを指す）に浴せかけた嘲りには到底及ばないよ！　ねえ、それは不思議な話なんだ。信じようが信じまいが、それは自由だが、僕が改心するやうになつたいきさつを君に話してもいゝよ。そして、少くとも聞くだけの興味は感じられることゝ思ふよ。君はこれまでに、エミンスタアの牧師の名を聞いたことがあるかい――聞いてゐるに違ひないが？――老クレア師つていふんだ。あの人の宗派中では一番熱心な一人だし、英國國教々會のうちにいくらも殘つてゐない熱烈な敬神家の一人なんだ。僕が運命を共にした基督教信徒の極端派の連中ほど熱烈ではないが、國教牧師の中では、全く異彩を放つてゐるよ。彼等の中でも若いものとなると、詭辯を弄してばかりゐて、段々眞の教義をぼかしてしまひ、今では本物の影に過ぎないやうなものに變へてしまつてゐる。僕があの牧師と意見の異つてゐるのは、たゞ教會と國家との問題だけだ――つまり『主曰ひ給ふ、爾等彼等のうちより出で、これを離れよ。』（可林多人後書第六十七節）といふ聖典の句の解釋――それだけなんだ。あの牧師こそ、君が名ざすことの出來るどんな人よりも、この國の多くの人々の魂を救ふ殊勝な召使となつた人だ、と僕は固く信じる。あの人のことを君は噂に聞いたことがあるかい？」

「ありますわ、」と彼女は言つた。

「あの人は二三年前、或る傳道團の爲めに說教をしにトラントリッヂへ來られた。そして僕は、その當時實に淺猿しい奴で、あの人が私情をはなれて、僕に道を說き、行くべき道を示してくれたのに、侮辱したんだ。牧師は僕の仕打ちに腹も立てず、いつかは君も聖靈の初穗（改心の情）を受けるだらう――嘲らうとして來た者も、折々はとゞまつて祈ることもある。（ゴールドスミスの「荒村行」中にある次の文句に基く。即ち「彼の唇をもれる眞理は二重の力もて擴まり、夢らんとて來れる阿呆は留まりて祈れり」）と、言つたゞけだつた。牧師の言葉の中には不思議な魔力があつたよ。それは僕の胸へ深く喰ひ込んだ。だが、母を亡くしたことが一番僕の胸に應へた。そして段段、僕は日光を見るやうになつた。その時からまことの考へを他の人々に傳へたいといふのが僕の一つの願ひになつたのだ。そして今日もそれを試みてゐたところだつた。尤もこの邊で說教をするやうになつたのはつひこの頃のことだがね。僕が傳道を始めてから數ヶ月間は、見知らない人たちと一緒になつて英國の北部地方で過したが、その地を選んだわけは、先づ其處で最初の下手な手ならしをして置いて、やがて、說教者をよく知つてゐるし、又放蕩時代にはその友達だつた者に說教をして、自分の眞實さを試すといふ一番嚴しい試驗を受ける前に、先づ勇氣を得て置きたかつたからだ。若し君が君自身をぴしやりと打つ喜びを解することが出來るなら、テス、僕は屹度――」

「そんな話はもう止して下さい！」彼から離れて路傍の踏段の處へ退き、その上へ自分の體を凭りかゝらせながら、彼女はむきになつて叫んだ。「私、そんな突飛なことは信じられません！　あなたは自分で知つて――どんな迷惑を私にかけてゐるか、あなたは自分で知つてる癖に、私に向つてこんな風に仰しやられると、私怒らずにはゐられませんわ！　あなたとか、またあなたのやうな人たちは、私のやうな者の生涯を悲しみで辛くしたり暗くしたりして、それでどこまでもこの世で樂しみをなさるんです。それから、十分それをし盡した時分に、悔い改めることにして、今度は天國へ行つてからの樂しみを得ようといふお考へなので、そりやまあ結構なことですね！　そんなことは大嫌ひです！」

「テス、」と彼は言ひ張つた。「そんな風に言ふもんぢやないよ！　それは非常に新しい思ひつき見たいに僕の胸に浮んだんだ！　君は僕を信じないのかい？　一體どんなところを信じないんだね？」

「あなたの改心を。あなたが宗教で救はれたつてことを。」

「何故？」

彼女は聲を低くした。「あなたなぞよりもずつと善い方が、そんなことは信じませんもの。」

「如何にも女がつけさうな理由だ！　そのずつと善い人つて誰だい？」

「話されませんわ。」

「なるほどね、」と彼は言葉の下に隱れてゐる憤りが、一聲掛ければすぐにも跳び出すといつたやうな調子で、言ひ出した。「僕は善人だなぞとは、どんなことがあつたつて、言へた義理ぢやない――また僕はそんなこと、おくびにも出しやしないだらう、ね。僕は善良といふものに對しては、實際、新參者なんだよ。だが、新來の者が、時とすると一番遠眼がきくつてこともあるからね。」

「えゝ、」と、沈んだ調子で彼女は答へた。「でも、あなたが悔い改めて生れ更つたとは、私には信じられませんわ。あなたが感じてゐるやうな光は、アレク、長く續きはしま

すまいよ！」

かう言ひながら、彼女は凭れ掛つてゐた踏段から向き直つて、彼に顔を向けた。そこで、彼の眼は不圖見馴れてゐる顔や姿の上に落ちたので、ぢつと彼女に見入つてゐた。下等な性質は、今彼のうちに靜まつてはゐたが、確實に拔き取られてゐたわけでもなく、またすつかり柔らいでゐたのでもなかつた。

「そんな風に僕を見ないでくれ！」と突然彼は言つた。

自分の動作や樣子に全く氣がつかないでゐたテスは、すぐ、大きく見開いた不快な眼付を引つ込め、顔を赧らめて口ごもりながら、「御免なさい！」と言つた。それから、これまでにも度々彼女の胸を訪れたことのある、自然から授かつた肉といふ假の宿に住つてゐるのが、何だか自分の誤りではないかといふなさけない感情が、再び彼女のうちに甦つて來た。

「どうして、どうして！　何もあやまることはないよ。しかし、君はその美貌を匿さうとして面紗をつけてゐるが、何故それを取らないのかね？」

彼女は急いで次のやうに言ひながら、面紗を取つた。「これは重に風を除ける爲めだつたんですの。」

「こんな風に命令をする僕は、亂暴のやうに見えようが、」と彼は言葉を續けた。「僕はあまり度々君を見ない方がいい。どんなことにならんとも限らないからね。」

「しつ！」とテスは言つた。

「えゝと、女の顏も今までに、僕を強く支配したんで、今では怖くなつたよ！　傳道者はそんなものには用がないんだ。そして、それを思ふと、忘れたい昔が思ひ出されて來るんだ！」

そのあとでは、彼等の話は段々少なくなり、ぶら〳〵歩いて行きながら、時たま思ひ出したやうに、言葉を交はす位なものであつた。テスは、心の中で一體彼は何處まで一緒に行く積りだらうと怪しみ、またきつぱり命令して歸つて貰ふのも好ましくなく思つた。畑の門や踏段の所へ來ると、彼等は聖書の文句が、赤や靑文字でその上に書かれてゐるのを、度々見つけた。そして彼女は、誰が骨を折つて、こんな揭示をしたのか知つてゐるか、と彼に訊ねた。彼は、その男が今の善くない人々の心を動かす事の出來る手段であれば、たとひ何でも試みずには置かないようにといふ考へから、かういふ警句を書かせる爲めに、自分を始め自分と一緒にこゝで働いてゐる他の人たちに雇はれてゐるのであると、彼女に話した。

到頭道はクロス・イン・ハンドと呼ばれてゐる地點へ達した。吹晒らしの荒涼としたこの高原の場所の中でも、此處が一番淋しい處であつた。畫家や風景愛好家が、一種の淸新な美となつて悲しい調子さへ帶びた消極的な美であると言つてゐる位ゐで、山川の中に求める魅惑とは全くその趣きを異にしてゐた。この土地の名は、そこに立つてゐる石柱——この地方の何處の石切場にも知られてゐない地層から切り出された、見馴れない荒い一本石で、その上には人間の手が無細工に刻まれてゐた——から取つたのである。その由來と目的については、いろ〳〵な說があつた。或る識者達は、嘗つては信仰の十字架がその上に立つてゐて、完全な形態となつてゐたが、今殘つてゐるものはその土臺石に過ぎないといふのであり、他の識者達は、その石はもとから全然今のまゝであつて、境界或は會合の場所を示す爲めに其處へ据ゑられたものであると言つてゐた。兎に角、この遺跡の起りが何であらうとも、これが眞ん中に立つてゐる野原のうちには、見る人の氣分に從つて不吉な又は嚴かな物に感ぜられたし、また今もさう感ぜられ、最も感じの鈍い通行人にも感銘を與へずにはゐない物であつたし、

今もさうである。

「もう別れなければならないやうだ、」彼等がこの地點に近づいた時、彼は言つた。「僕は今晩六時に、アボッツ・サアネルで說敎をしなければならない。だから僕の行く道はこゝから右へ折れて行くんだ。それに、君と話してゐたら何だか僕は氣が變になつて來たよ、テッシイ——何故だかは僕には言へないし又言ひたくもない。僕は別れて、元氣をつけなければならない……君はどうしたわけで、今ぢや法暢に話が出來るやうになつたんだね？　誰がそんな立派な英語を敎へたのかね？」

「苦勞をしてゐる間に、いろんなことを覺えました。」と彼女は濁して言つた。

「どんな苦勞をしたのかね！」

彼女は初めての苦勞——彼に關係のある、あのたつた一つのことを、彼に話した。

ダアバァヴィルは、沈默するより外に仕方がなかつた。それから、「僕はそれを今まで少しも知らないでゐた！」と彼は呟いた。「さういふ苦勞が起りさうになつたと思つた時、何故僕に知らせなかつたんだね？」

彼女は答へなかつた。そこで、彼はかう言ひ添へてその

沈默を破つた——「ぢや——また會ふことにしよう。」
「いけません、」と彼女は答へた。「これ限り私には近寄らないで下さい！」
「考へて見よう。だが、別れる前に此處へ來てくれ。」彼は石柱の處へ歩み寄つた。「これは昔聖十字架だつたんだよ。遺跡などは僕の信條の中にはないが、折々、僕は君を怖れる——今、君が僕を怖れずにはゐられないよりはもつとだよ。だから、この怖れを無くする爲めに、君の手をあの石の手の上に置いて、決して僕を誘惑しないと誓つてくれ——君の美しさや、素振りで誘惑しないと。」
「まあ呆れた——何故そんな必要もないことをしろなんて賴めるんでせう！　まるで私には、思ひもつかないことですわ！」
「それはさうだ——でもそれを誓つてくれ。」
テスは、半ば驚きながら彼のしつこい賴みに從つて、その石の上に手を置いて、誓つた。
「君が信者でないのが殘念だ、」と彼は續けた。「誰か不信仰者が君をしつかり捉へて、君の心を掻き亂さないものでもあるまい。だがもう何も言ふまい。家でなら、せめて君の爲めに祈れるだらう。また屹度祈らう。どんなことが起らないとも限らない？　出掛けよう。さやうなら！」
彼は生垣の中にある獵門の方へ向つて、二度と彼女には眼を向けずに其處を跳び越え、その下の原を突き拔けて、アボッツ・サアネルの方へ歩き出した。彼が歩いて行くところを見ると、その歩調はどこか取り亂してゐた。やがて恰も昔の考へに動かされでもしたやうに、彼はポケットから小型の手帖を引き出したが、その間には、幾度も讀み返したものゝやうに擦り耗り、汚れてゐた折り疊んだ手紙がはさまつてゐた。ダアバアヴィルは、その手紙を開いた。それには、今から數ヶ月以前の日付が記され、クレア師の署名がされてゐた。
その手紙は、始めにダアバアヴィルの改心を聞いた署名者の心からの喜びを述べ、そのことを自分に知らせてくれた彼の親切を謝してゐた。またそれには、ダアバアヴィルの昔の行狀に對するクレア師の赦すといふ眞心からの保證も述べてあり、又この青年の將來の計畫に興味を持つてゐることをも言ひ添へてあつた。彼老クレア師は、多年その奉仕事業の爲めにつくして來た英國國教々會へダアバアヴィルの入るのを非常に望んでゐて、その目的で彼が宗教大學へ入學する爲めには、喜んで力になりたがつてゐた。けれども

このことが長い期間を要することである爲めに、彼の方で望ましく思つてゐないといふのであつたなら、師は必ずしもそれがどこまでも重要であるとは主張しなかつた。あらゆる人は銘々働けるだけ働き、また聖靈に依つて促されたと感ずる方法で働かなければならないとも記してあつた。
ダアバアヴィルはこの手紙を讀み、また讀み、そして、皮肉にも自分を嘲つてゐるやうに見えた。彼はまた、歩きながら覺え書きの中から數節を讀んだ、もう彼の心を苦しめてはゐないやうであつた。
一方テスは、一番近路になつてゐる丘の端を歩き續けてゐた。まだ一哩も來ないうちに、彼女はたゞ一人きりの羊飼ひに出會つた。
「私が今通り過ぎて來たあの古い石は、一體何なんでせうか？」と彼女は彼に訊れた。「聖十字架だつたことがあるんですの。
「十字架——いゝや、十字架なんぞぢやなかつた！　ありや緣起の惡いものなんでさあ、姉さん。ありやね、柱に手を釘づけにされ、その後で縊り首にされた或る罪人の身內の者か昔建てたんでさあ。その骨があの下に埋まつてらあね。何でも魂を惡魔に賣り渡したとかで、まだ時々洟ひ歩くんださうですぜ。」
彼女はこの思ひ設けない凄い物語を聞いて、氣が遠くなるやうに感じ、その一人きりの男を後へ殘したまゝ行つてしまつた。フリントコム・アッシへ近づいた頃には、邊りは薄暗くなつて、この小村へ入る入口の小徑で、彼女は先方からは氣づかれずに一人の娘とその戀人とに近づいた。彼等は格別內證事を話してゐるのでもないらしく、男のひときは優しい口調に應じる若い女の澄んだ屈託のない聲が、他の何物にも邪魔されない澱んだ薄闇に充たされた仄暗い地平線內のたゞ一つの爽かな鎭靜劑として、冷たい大氣の中へ擴がつた。ちよつとの間、この聲はテスの氣持を愉快にしたが、やがて彼女は、この媾曳も、今の自分の苦難を引き出す序曲であつた同じ愛着をどちらかゞ感じたのが元であると解釋して、愈々近づくと、娘の方は落着き拂つて振り向いて彼女を認めたが、若い男はばつが惡さうに行つてしまつた。女はイズ・ヒュウエットで、テスの旅に對して抱いてゐた興味が急に湧きつのつて來て、今までの自分のことなぞはそつちのけにしてしまつた。テスは旅の結果をはつきりは說明しなかつた。それで如才ないイズは、たつた

今テスが見た事に關係のある自分自身の取るに足らない事件のことを話し出した。

「あれは、アムビイ・シードリングつてつて、時々タルボセイズへ手傳ひに來た男なの、」と彼女は平氣で說明した。「わざ〳〵たづね廻つてね、私が此處へ來てゐることを突きとめて、跡を追つて來たのよ。この二年といふもの、私を戀してゐたんだつて。でも、私碌に返事もしてやらなかつたわ。」

四六

空しく終つたあの旅から、もう數日が過ぎた。そしてテスは野良へ出て働いた。多のから風は猶ほ吹いてゐたが、風に逆らつて建てられた柴疎離が屛風のやうになつて彼女を防いだ。屋根のある側には蕪菁切りの機械が据ゑてあつて、その新しいペンキのぎら〳〵輝く青い色は、それがなければ、すつかり沈みきつてゐる景色の中に、謂はゞ聲を與へてゐるやうにも見えた。その正面の眞向うには、多の始めから食用根蕪菁の根を圍つてある細長い塚で、『穴倉』とも言はれるものがあつた。テスは屋根のない一端に立つて、鉈鎌で細根や土を一つ〳〵の根から削り取り、それを綺麗にとりきると、根を蕪菁切りの機械の中へ投げ込んでゐた。一人の男が、その機械の把手を廻してゐたが、その桶からは切りたての蕪菁が出て來て、黃色い切口から發散する新鮮な香は、ふう〳〵鳴つてゐる風の音や、削刃の氣持のよい音や、それから革手袋を嵌めたテスの手にある鉈鎌の音などに伴つて邊りに漂つた。

蕪菁が抜き取られて、見たところ何も生えてゐない農業地らしい褐色の廣い耕地は、一層濃い褐色の條が引かれかけ、それが次第に擴がつて丁度リボンのやうになつた。かういふリボンの筋の一つ〳〵の端に沿つて、急がず休まずに何かゞ十本足で這ひ廻り、畑一面を彼方此方と動いてゐた。それは犁を間に挾んだ二頭の馬と一人の男で、春の種蒔きの爲めに、何も生えてゐない土を掘り返してゐるのであつた。

幾時間經つても、この喜びのない周圍の單調を破るものは何一つなかつた。やがて、土を耕してゐた並んでゐる馬の遙か向うに、一點の黑いものが見えた。それはちつと切れ目のある生垣の一角から出て來て、坂を登つて蕪菁切りをしてゐる人たちの方へ向つて來るらしかつた。ほんの點位ゐの大きさから、だん〳〵大柱戲の柱のやうな形になり、程なく、フリントコム・アッシの方向から來た黑衣を着た男であることが分つた。蕪菁切りの機械を廻してゐた男は、その仕事以外には何も眼にする用事がないので、このやつて來る男を始終眺めてゐた。けれども、仕事に氣を取られてゐたテスは、彼女の仲間がその男の近付いて來たことを彼女に注意するまでは、その男に氣づかなかつた。

來たのは苛酷な監督の百姓グロビーではなかつた。これは、以前は自由で呑氣だつたアレク・ダアバヴィルの生れ變りの、今では半ば牧師の裝ひをした男であつた。說敎に熟してゐる時とは違つて、今の彼には左程の熱心さはなく、それに蕪菁切りの機械廻しの男がゐるので、極りが惡いやうな風であつた。テスの顏にはもう蒼白い悲しみの色が現はれた。そして彼女は、垂布つきの頭巾を顏に一層深く引き下ろした。

ダアバヴィルは近づいて、靜かに言つた——

「僕は君に話したいことがあるんだよ、テス。」

「あなたは、私には近寄つて下さらないといふ、私のこの前の賴みを無駄にしましたね！」と彼女は言つた。

「さうだ。だが、それには相當な理由があるよ。」

「さうですか。ぢや、それを言つて下さい。」

「君が思ひつくことよりも、ずつと大事なことなんだ。」

他人に聞かれはすまいかと、彼は邊りを見廻した。彼等は、蕪菁切りの機械を廻してゐる男からは可なり離れてゐたし、それから機械の運動もまた、アレクの言葉が他の耳に入るのを十分防いでゐた。ダアバヴィルは、テスがその勞働者から見えないやうな具合に陣取つて、それに背を向けた。

「實はかういふ譯だ、」と彼はほんの氣紛れに後悔してゐるやうな態度で續けた。「この前僕たちが會つた時には、君や僕の魂のことを考へてゐたんで、君の暮し向きのことに就いて訊ねることをすつかり忘れてゐた。君が立派な身裝をしてゐたんで、僕はそんなことを考へなかつたんだ。だが、可なり酷いんだといふことが今分つた——あの時よりももつと酷いことを、丁度僕が——君を知つたあの時よりも——君にしては酷すぎる程なんだね。それも、大部分は僕に責任があるんだらう！」

彼女は答へなかつた。そこで、顏を頭巾ですつかり覆うてゐる彼女が頭を垂れて再び蕪菁の細根を取り始めた時、彼は不審さうに見守つた。彼女は、仕事を續けてゐさへすれば、ずつと自分の感情を彼に煩はされることが少ないと

思つた。

「テス、」と不滿らしい溜息を一つして、彼は言ひ添へた——「これまで僕の關係したうちでも、君の場合が一番ひどかつたんだ！　僕は君に言はれるまで、そんな結果になつたらうとは少しも知らなかつたんだ。あんな罪のない生命を汚すなんて、僕は何んて惡黨だつたんだらう！　責任は一切僕にあつたんだ——僕たちのトラントリッヂ時代の、並外れた事柄の責任はね！　君もまた君だよ、君こそ眞正の血統の者で、僕なんかは賤しいその贋物に過ぎないのに、大體どんな結果になり行くかも知らないなんて、何といふ先の見えない若い女だつたんだらう！　僕は實際眞面目に言ふが、動機がよくつても、或は單に無頓着の結果からであるにしても、放埒な者共が張つて置くかも知れない係蹄や網のことも知らないで危つかしくその娘を育てるといふことは、親達の恥だと思ふよ。」

テスはやはりたゞ聽いてゐるばかりで、相變らず自動的に規則正しく、一つの球根を投げ落してはまた別のを取り上げてゐた。從つて、たゞの百姓女が打ち沈んでゐる輪廓を現はしてゐるといふ風であつた。

「だが、そんなことを言ひに來たんぢやないよ、」とダアバァヴィルは續けた。「僕の境遇はまあかうなんだ。君がトラントリッヂを去つてから、僕は母を亡くし、あの屋敷は僕のものになつた。だが、僕はあれを賣り拂つて、亞米利加で傳道事業に身を捧げようと思つてゐるんだ。その事業にかけて、僕は非常に下手なことは疑ひないよ。けれども、僕が君に賴みたいのは、ね君、どうか僕の義務——君を弄んだ惡戲に對して、僕に出來る唯一の償ひを、僕の力で果させてはくれないか——つまり、ね君、どうか僕の妻になつて、僕と一緒に行つてはくれないか？……僕はもうこの大切な書類まで手に入れてゐるんだ。それは老母の臨終の願ひだつたんだ。」

極り惡げにちよつとひねり廻しながら、彼はポケットから一枚の羊皮紙を取り出した。

「それは何んですの？」と彼女は言つた。

「結婚の許可證だよ。」

「駄目です、あなた——駄目です！」彼女はびつくりして後退りしながら、急いで言つた。

「君は厭だつて言ふんだね？　どういふわけだね？」

そして、彼がその質問を發した時、義務を果せないといふ失望ではない或る失望が、ダアバァヴィルの顏を掠めた。

それは間違ひもなく、彼女に對する昔の情慾とでもいふものが復活した兆候であつた。義務と欲望とが手を取り合つて走つてゐた。

「屹度、」と一層もどかしげな調子で、彼は再び言ひ始め、それから燕尾服切りの機械を廻してゐる勞働者を振り向いて見た。

テスもまた、此處では話に結末がつかないと感じた。一人の紳士が會ひに來たので、その人とちよつと其處らを歩いて來たいとその男に告げて、彼女はダアバァヴィルと一緒に縞馬のやうな斑の出來た畑を橫切つて、立ち去つた。二人が新しく犁きかへされたところに來た時、彼は手を差し出して、彼女がそこを越えるのを助けてやらうとした。が彼女は、恰も彼には氣付かないやうに畝また畝の上を飛び越えて進んだ。

「君は僕と結婚してくれないんだね、テス、そして、僕を自分に恥ぢない人間とはしてくれないんだね？」彼等が畝を通り越してしまふと、彼は繰り返した。

「私、出來ないんですの。」

「だがどういふわけで？」

「御存じの通り、私、あなたに對しては、ちつとも愛情がないんですもの。」

「でも、時が經てば君もそれを感ずるやうになるだらう？　恐らく——君が本當に僕を赦すことが出來るやうになると直ぐに。」

「いゝえ、決してなれませんわ。」

「何故さう頑固なのかなあ？」

「私は他の方を愛してゐますもの。」

この言葉は彼を吃驚させたやうに見えた。

「さうか？」と彼は叫んだ。「他の人を？　だが、道德上に正しいとか正當だとかいふ考へは、君には何の力もないんだらうか？」

「さうです、さうです、さうなんです——そんなこと仰しやらないで下さい！」

「ぢや、どうせ、その人に對する君の愛だつて、ほんの一時の感情で、今に君が壓倒してしまふかも知れやしない——」

「いゝえ——いゝえ。」

「さうだとも、さうだとも！　さうでない譯はないぢやないか？」

「それをあなたにお話しするわけには行きません。」

「言はなければ君の名譽に關はるぢやないかね！」
「ぢや申しますが……私、その方と結婚しました。」
「えゝ！」と彼は叫び、急に立ち止つて、ぢつと彼女を眺めた。
「私、言ひたくはなかつたんです——言ふつもりはなかつたんです！」と彼女は辯解した。「そのことは、此處では内密にしてあるんです。内密でないまでも兎に角薄々しか知れてゐないのですわ。そんなわけですから、どうか、お願ひしますから、私に何も訊かないで下さい！　そして私たちは今では他人同志だといふことを、忘れないでゐて頂かなければなりませんわ。」
「他人同志——僕たちがかい？　他人同志！」
その瞬間、彼の昔の皮肉がその顏に閃めいた。しかし、彼はそれを全く抑へてしまつた。
「あの人が君の夫なんかね？」手眞似で、蕪菁切りの機械を廻してゐる男を指しながら、機械的に彼は訊ねた。
「あの人ですつて！」と彼女は昂然として言つた。「まさか、さうぢやないわ！」
「ぢや、誰とだね？」
「私の言ひたくないことは、訊ねないで下さい！」と彼女は顎んだ。そして彼女の仰向いた顏と睫毛の深い眼からは、彼に對して哀願するやうな光が閃めいた。
ダアバァヴィルは當惑した。
「しかし、僕はたゞ君の爲めに訊ねたんだ！」と躍起となつて、彼は言ひ返した。「あゝ、神樣どうぞ！——こんな言葉を使つては相濟まない次第だが、——僕は、誓つて言ふが、全く君の爲めを思つて此處へやつて來たんだよ。テス——そんな風に僕を見ないでくれ——僕は君に見詰められると耐へられないんだ！　さういふ眼は、基督以前にも以後にも、確かになかつたよ！　さうだ——僕はあわてたくはない、どうしてもあわてたくはない。白狀するが、君を見たんで、君に對する愛情が眼をさまして來たんだ。それから起る一切の感情と一緒に消滅してしまつたものと信じてゐたのに。しかし、僕は、結婚に依つて、僕等二人は淨化されるだらうと思つてゐた。『不信の夫は妻に由りて潔くなり、不信の妻は夫に由りて潔くなればなり。』（哥林多人前書第七章十四節）と僕は獨言を言つた。しかし、この考へも叩き落されてしまつた。そして、僕はそれから來る失望に堪へなければならないんだ！」
彼は眼を地上へ落して、不機嫌に考へ込んでゐた。

「結婚した、結婚した！……さうか、さういふことなら、」と許可證を靜かに二つに引き裂いてポケットへ押し込みながら、全く落着いて彼は言ひ添へた。「結婚が駄目になつたものとすれば、僕は君と、たとひどういふ人であるにもしてもその夫に、何か爲めになることをしたい。まだ澤山訊きたいことがあるけれども、無論、君の意志に逆らつてまで訊かうとは思はない。が、君の夫を知ることが出來たら、僕はもつとたやすくその人と君の爲めになるかも知れないんだ。その人はこの農場にゐるのかね？」
「いゝえ、」と彼女は呟いた。「遠方へ參つてゐますの。」
「遠方へ？　君を置いてか？　どんな夫なんだらう、その人は？」
「あゝ、あの人の惡口を言はないで下さい！　かういふことになつたのも、あなたのせゐです！　あの人に私たちのことが分つてしまつたんです——」
「えゝ、さうか！……そりや氣の毒なことだ、テス！」
「えゝ。」
「だが、君を置き去りにして——君をこんなに働かして置くなんて！」
「あの人が私に働かせてゐるんぢやありませんわ！」と彼女は、胸の底からの熱情を示し目の前にゐない人を庇はうと、跳び立つて叫んだ。「あの人はこのことを少しも知らないんです！　私だけの勝手な考へから、こんな事をしてゐるんですの。」
「ぢや、手紙は寄越すのかね？」
「私——私、あなたには言はれません。私たちの間だけで、他人には言へないことが色々ありますから。」
「勿論、寄越さないといふ意味なんだね。君は捨てられた妻なんだ、ねえテス！」
彼は衝動に驅られ、突然振り向いて彼女の手を取つた。その手には水牛皮の手袋が嵌つてゐたので、彼はその中にある手の生命も形も現はしてはゐない、手觸りの惡い革の指を摑んだだけであつた。
「いけません——いけません！」ポケットからでも拔くやうに、その手袋からするりと手を引き拔き、手袋だけを彼の手に握らせたまゝ、彼女は恐ろしさうに叫んだ。「あゝ、どうか行つて下さい——私と、私の夫の爲めに——行つて下さい、あなた御自身の基督教の御名に代つてお願ひします！」
「あゝ、あゝ、行くよ、」と彼は唐突に言つた。それから手

袋を彼女に突き返して、向き直つて行かうとした。けれども再び振り向いて彼は言つた。「テス、神はよく知つておいでだが、僕は、君の手を取つたからといつて、君を騙さうとしたんではないよ！」

自分たちのことにばかり氣を取られてゐたので、今まで彼等の氣づかなかつた畑の土を打つ踏の音が、すぐ背後で止つた。そして次のやうな聲が彼女の耳に聞えた——

「一體全體お前は何をしてゐるんだ。今時分、仕事を放つたらかして置いて？」

百姓のグロビーは、もう遠くから二つの姿を見附け、一體畑で何をしてゐるのか、それを知りたくて馬を乘りつけたのであつた。

「この娘にそんな物の言ひ方をしないでくれ！」とダアバヴィルは、顏を某督教徒らしくない或る表情にくもらして、言つた。

「なあるほどね、旦那！　それで、一體メソヂストの牧師さんが、この娘に何の用があるつてんですかね？」

「此奴は一體誰だい？」とテスの方を振り向いて、ダアバヴィルは訊ねた。

彼女は彼のすぐ側へ寄つて行つた。

「行つて下さい——お願ひしますから！」と、彼女は言つた。

「何だつて！　あの壓制者に君を任せて行けつて？　どれ程彼奴が下等であるかは、すつかり彼奴の顏に書いてある。」

「あの人は私に手荒なことはしやしません。あの人に限つて、私を思つてもゐませんよ。私、告知節の日には、此處を出ることが出來ます。」

「分つた。僕は言ふことを聞くより外に、何の資格もなさうだ。しかし——まあいゝ、さよなら！」

彼女を責める者も怖かつたが、もつと怖い守つてくれる者が厭々ながら其處を去つてしまふと、百姓は、なほ小言を續けたが、それは男女の事とは全然關係のない攻撃であつたから、テスは非常に冷靜にそれを受けてゐた。擲らうと思へば彼女を擲るかも知れないこの石のやうな男を主人とすることは、以前の經驗の後では、一つの安堵と言つてもよかつた。彼女は仕事の舞臺である畑の頂上の方へ、默つて引つ返した。丁度いま終つたばかりの會合にすつかり心を奪はれてゐたので、彼女はグロビーの馬の鼻が、殆んど自分の肩に觸れてゐたのも知らない位ゐであつた。

「告知節の日まで働くつて、さう約束するからにや、見事にやり終せるかどうか見てゐてやるぞ、」と彼は怒鳴つた。「女つていふ奴ア當になんねえからなあ——今から言ふかと思へば、今度はあゝだと吐かすんだ。だが、もう〳〵我慢しちやゐねえぞ！」

一度言ひ負かされたことのある怨恨から自分をいぢめる程この農場にゐる他の女たちをいぢめはしないことを、テスはよく知つてゐたから、彼女は、金持のアレクの妻になつてくれと、たつた今言はれたばかりの申し込みを受けられる境遇で進んで受けたとしたら、その結果はどうであらうと、ちよつとの間想像して見た。さうすれば、たゞ彼女の現在の苛酷な雇主に對してばかりでなく、彼女を輕蔑してゐるやうに思はれる世間に對する屈從から全く脫するやうになるであらう。「でも、いけない、いけない！」と息を切らしながら、彼女は言つた。「今あの人と結婚してしまふ譯になんか行かない！　私には本當に厭な人だ。」

その夜すぐ、彼女はクレアに自分の苦しい境遇は打ち明けないで、變らない愛情を誓つて訴へるやうな手紙を書き始めた。言外の意味を汲み取ることの出來るほどの者ならば、誰でも、彼女の大きな愛の後に、打ち明けられてゐない祕密なことが起るかも知れないといふ、或る異常な恐怖——殆んど絕望といつてもよいもの——が潛んでゐるのを看破つたことであらう。が、彼女はまた、自分の衷情は吐露しないでしまつた。あの人は、イズに同行を求めたことがあつたのだ。だから大方自分を少しも思つてはゐないに相違ない。彼女はその手紙を、自分の箱の中へ收めた。そして、それがエンヂェルの手に屆くやうなことが、これから先にもあるだらうかと訝つた。

このことがあつてから、彼女の每日の仕事は隨分烈しかつた。やがて、農夫に取つては極めて大切な日——聖燭節の市の當日（二月二日で、基督が生れた時シメオンが、「異敎の徒を明るくする光、イスラエル人の光榮」といつたのに起る。敎會で使ふ蠟燭を聖別するといふのがこの儀式の仕事である）となつた。次の告知節から十二ヶ月間の新しい契約が結ばれるのはこの市であつて、農業勞働者の中でも、自分の働く場所を取り換へたいと思つてゐる者は、時機を外さずにこの市の開かれる田舍町へ出て行つた。フリントコム・アッシ農場の勞働者たちの殆んど全部が、其處を逃げ出さうとしてゐたので、早朝に小山續きの地方を越えて、十哩から十二哩ほど先にあるその町の方へ多くの人々が出掛けて行つた。その町へ行かないものは極く僅かであつたが、テスもその一人であつた。彼女もまた

春の支拂日には、無論此處を出るつもりでゐたが、再び戸外の仕事に雇はれる必要のなくなるやうな事が何か起りはしないか、といふ、漠然と生じた希望を持つやうになつたからであつた。

もう冬は終つてしまつたのかと思はれるばかりの、この季節にしては不思議に穩かな靜かな二月の一日であつた。彼女がやつと晩飯を濟ましたか濟まさない位ゐの時に、下宿の一人となつて今日は彼女がたつた一人で占領してゐた田舍家の窓に、ダアバアヴィルの姿が影を投げた。

テスは跳び立つた、けれども訪問者は、もう扉をノックしてゐたので、どうしても逃げ出すことは穩當でなかつた。ダアバアヴィルのノッグや、扉口へ歩み寄つた足の調子には、この前彼女が會つた時の彼の樣子から見ると、何と言つていゝか分らない或る性質の相違があつた。それは本人が、恥ぢてゐる行爲のやうであつた。最初彼女は扉を開けまいと思つたが、さうするのも矢張り無分別の仕方だつたので、彼女は起ち上り、鍵を上げておいて急いで後へ退つた。彼は先づ入つて來て彼女を見、それから口を開く前に、一脚の椅子へどかりと掛けた。

「テス——僕はやつて來ずにはゐられなかつたんだ！」と彼は、ほてつてゐる顏を拭いて、絶望的に切り出した。その顏にはまた、興奮の赧らみが加はつてもゐた。「僕は少くとも君の安否を訊きにでも來なければ、濟まないと感じたんだ。實際、僕はあの日曜日に君を見るまでは、君のことなど考へてはゐなかつたよ。それが今では、どんなに努めてみても、君の面影を拂ひ除けることが出來ないんだ！善良な女が、惡い男の氣を害するなんていふことのある譯がない。けれども、實際はさうなんだ。若し君が僕の爲めに祈つてだけでもくれたなら、テス！」

不滿を抑へつけてゐる彼の樣子は、殆んどいたましいくらゐであつたが、それでもテスは、彼を哀れには思はなかつた。

「世界を動かす大きな『力』が、私の爲めにその計畫を變へると信じることを、禁じられてゐるのに、」と彼女は言つた。「どうしてあなたの爲めに祈れませう？」

「君は本當にさう思つてゐるのかね？」

「えゝ、さうです。生意氣にさうでないと考へるのを直されましたから。」

「直されたつて？　誰に？」

「どうしても言つてしまはなければならないんなら申しますが、私の夫からです。」

「あゝ——君の夫——君の夫！　實に厭だ！　何日かも、君が何かそんなことを仄めかしたのを憶えてゐる。かういふ事柄について、君は實際何を信じてゐるんだね、テス？」と彼は訊ねた。「君は全然宗教を持たないやうだ——恐らくそれも僕の爲めだらうが。」

「でも、私にはありますわ。尤も、人力以外のことなど何んにも信じないけれど。」

ダアバアヴィルは、疑はしさうに彼女を見た。

「ぢや、僕の取つてゐる方針は、皆間違つてゐると君は思ふんだね？」

「大部分はね。」

「ふん——しかし、僕はそれをもう確實に信じてゐるんだよ、」と彼は不安らしく言つた。

「私は、『山上の垂訓』の精神は信じてゐます。また私の愛する夫もその通り信じました！……だけど、私は信じません、あの何を——」

こゝで彼女は、自分の否定說を洩らした。

「僕は、」とダアバアヴィルは無愛想に言つた。「君の愛する夫の信じたものは何に依らず君も信じ、彼の斥けるものは何に依らず君も斥け、君自身では少しの穿鑿もせず、或は追究もせずにゐるんだね。それは全く君たち女のしさうなことだ。君の心は、彼の奴隸になつてゐるんだ。」

「えゝ、あの人は何でも知つてゐるから！」どんなに完全な人でも、況して夫などゝするには自分に資格のないエンヂェル・クレアを信ずる得意な、單純な調子で、彼女は言つた。

「さうか、だけど、他人の否定說を、そんな風に頭から受け容れてしまふもんぢやないよ。君にそんな懷疑說を吹き込むなんて、その男は、しつかりした者に違ひないな！」

「あの人は、私の意見を無理に强ひるやうなことは決してなさいません！　あの人は、この問題で私と論じようなどとは決してしませんでした。それでも、こんな風に、私はその問題を考へたんです。教義を深く調べた後にあの人が信ずるやうになつたものは、教義などをまるで覗いたこともない私が大方信じるやうなものよりは、ずつと正しいことだと。」

「何時もどんなことをその人は言つてゐたかね？　何か知ら言つたに違ひないが？」

彼女は思ひ返して見た。エンヂェル・クレアの言つた言葉

の精神を了解しなかつた時でも、その字句を正確に記憶してゐたので、彼が折にふれ彼女を側に置いて獰言を言ひながら頻りと考へ込んでゐた時、彼女は、彼の用ひる容赦のない論争的な三段論法に耳傾けてゐたので、今それを思ひ出した。それを述べる時には、彼女もまた愼重に忠實にクレアの調子や態度を現はした。

「もう一度それを言つてくれよ、」と、非常な注意を凝らして聽いてゐたダアバァヴィルは言つた。

彼女はその議論を繰り返した。それからダアバァヴィルは、彼女の後に隨いて、その言葉を考へ深さうに呟いた。

「外には何もないのかね？」と彼はやがて訊ねた。

「或る時は、何かこんなやうなことも言つてましたわ。」

彼女は他の一つを述べたが、それは恐らく、『哲學辭典』（ボルテール著）からハックスリイ（一八二五―九五年、生理學比較解剖の大家で、無神論者。ボルテールも無神論者）の『論文集』に亙る系統の多くの書物には、往々有り勝ちなものであつた。

「あゝ――まあ！　どうして君はそれを覺えてゐるんだね？」

「私はあの人が信じることを信じたかつたからです。尤もあの人は、私にさうさせたがつた譯ではないんですの。そして私は、うまく取り入つて、あの人の考へを少しばかり話して貰ひました。それを私十分に理解してゐるとは言へませんが、それが正しいつてことは知つてますの。」

「ふん。君は自分で知らないことを、僕に教へられるつてんだね！」

彼は考へ込んだ。

「で、私は精神上の運命をあの人と共にすることにしたんですわ、」と彼女は續けた。「私はそれを違はして置きたくなかつたんです。あの人にとつていゝことは、私にとつてもいゝことなんですもの。」

「その人は、君がその人にも劣らない甚だしい異端者だつていふことを知つてゐるのかね？」

「いゝえ――私、一度だつてあの人に話したことなんかありませんの――私が異端者であるかないかなんて事は。」

「なるほど――結局、君は今日では、僕よりも仕合せなんだよ、テス！　君は、僕の教義を說教すべきものとは信じてゐないんだ。で、それを控へたからつてちつとも君の良心を辱しめやしないんだ。僕はそれを說教すべきだと信じてゐるが、惡魔のやうに信じ、且つ恐れ戰いてゐるんだ。といふのは、僕がそれを說教するのを急に止めて、君に對

する情慾に負けてしまふからだ。」

「どうして？」

「だつて、」と彼はぶつきら棒に言つた。「僕は長い道中を此處まで今日君に會ひに來たんぢやないか！　が、家を出る時はキャスタブリッヂの市へ行くつもりだつたんだ、僕は今日午後の二時半に、彼處で荷馬車の上から『道』を說くことを引き受けてゐたからね。そして丁度今時分、其處では同胞たちが皆僕を待つてゐるんだ。これが廣告だよ。」

彼は胸のポケットから、前に述べた通りダアバァヴィルが『福音』を說く筈の、日時及び會合の場所の印刷されてゐる一枚のポスターを引き出した。

「でも、どうして其處へ行けますの？」と時計を眼にしながら、テスは言つた。

「僕は、其處へ行けやしないよ！　此處へ來てしまつたんだから。」

「何ですつて、あなたは說教するやうに本當に定めて置いて、それで――」

「僕は說教をするやうに定めて置きながら、其處へ行かないんだ――自分で一度は賤しめた一人の女に會ひたい燃えるやうな欲望の爲めにね！――いや、言葉にかけ、眞實にかけて、僕は君を決して賤しめはしなかつた。若し賤しめてゐたら、今このやうに君を愛せる筈はないんだ！　僕が君を賤しめなかつた理由は、いろ〳〵な事があつたに拘らず、君が少しも汚れてゐない爲めなんだ。君は自分の立場を知ると、早速また僕から身を退いてしまつた。僕の好き勝手になつてはゐなかつたんだ。それで、この世の中に、僕にはどうあつても輕蔑の出來ない女が一人あつた。そして君こそ、その女なんだ。しかし、君が今僕を賤しめるのは、尤もなことだ！　僕は、自分が山上で禮拜してゐるものと思つてゐたのに、まだ森に仕へてゐる事が分つたよ！　はゝゝ！」

「おゝ、アレク・ダアバァヴィル！　それはどういふことなんです？　私、何をしたんでせう？」

「したんでせうだつて？」と彼はこの語に卑しい冷笑を含ませて言つた。「何もしてゐないよ、故意にはね。だが、君は僕のあの、所謂墮落の仲立ち――知らずして仲立ちとなつたんだ――僕は本當に、あの『世の汚れを脫れ、また之に累はされて、打ち勝たれた』――その後の結果はその初めよりも惡い――『敗德の下僕』たちの一人なのだらうか？」と、自問する。」彼は彼女の肩へ手をかけた。「テス、ねえ、

僕は、君を再び見るまでは、少くとも社會救濟へ向ふ途上にあつたんだ！」彼は、恰も彼女が子供でゞもあるやうに、頓狂に彼女を搖ぶりながら、言つた。「で、何故君はあの時僕を誘惑してしまつたんだね？　その眼とその口とを再び見るまでは、僕はおよそ男として十分しつかりした者だつたんだ――確かに、イヴの口以來、これほど人の心を狂はす口は決してなかつた！」彼の聲は沈み、彼の黑い眼からは、熱した狡猾い光が閃めき出した。「この魔性の女、テス、この可愛いバビロンの妖婦（富と贅澤とを極めたバビロンの町の艷麗な女といふ意）――を再び見るや否や、僕は君に刃向ふことが出來なくなつたんだ！」

「あなたが私に再びお會ひになるのを、私だつてどうする譯にも行かなかつたんです！」と、彼女は身を退きながら言つた。

「そのことは分つてゐる――繰り返して言ふが、僕は君を責めちやゐない。が、事實は矢張り元の儘だ。あの日、畑で君が虐待されてゐるのを見て、君を保護すべき法律上の資格を僕は持つてゐないことを――それを持つことが出來ないことを思ひ、一方それを持つてゐる人は、全く君を顧みないらしいことを思ひ、僕は氣が狂ひさうだつた。」

「あの人を責めないで下さい――あの人は今こゝにゐないんですから、」と彼女は非常に興奮して叫んだ。「正しく扱つて上げて下さい――あの人は一度もあなたに仇をなすつたことはないでせう！　あゝ、あの人の正しい名に傷をつけるやうな、何か淫らな噂の廣まらないうちに、その人の妻のところを去つて下さい！」

「行くよ――行くよ、」と彼は迷夢から醒めかけた者のやうに言つた。「僕は、あの市で憐れむべき醉拂ひの馬鹿者共に說敎すべき約束を破つてしまつた――こんなほんとの惡戲をしたのはこれが始めてだ。一月前だつたら、こんなことを思つただけでも僕は慄へ上つてゐたんだらう。僕は行かう――誓ひを立てる爲めに――そして――あゝ、僕に出來るだらうか！　遠ざかつてゐることなどが。」それから不意に――「たつた一度、テッシイ――たつた一度！　ほんの昔の友達甲斐に一度、お別れにこの腕へ――」

「私には今どうする事も出來ないんです。アレク！　私は立派な方の名譽をこの手にお預りしてゐるんです――考へて見て下さい――恥ぢて下さい！」

「ちえッ！　なるほどね、さうだ――さうだとも！」自分が弱いのを殘念がつて、彼は脣を噛み締めた。彼の眼は、世俗的の信仰も宗敎的の信仰も、同じやうに現はれてゐた。彼は、改宗して顏の皺の中に眠つてゐたあの昔の發作的な情慾の屍が、復活の時のやうに眼を醒まし、一度に集まつて來るやうに思はれた。そして、思ひ切り惡く出て行つた。

今日の約束をこんな風に破つたのは、一信者のちよつとした墮落だとダアバヴィルは公言してゐたものゝ、エンヂェル・クレアの言葉をそつくり鸚鵡返しにして出したテスの言葉は、彼の心に深い印象を與へて、別れて後も尙ほ彼の心を動かしてゐた。自分の立場が危くなるといふ、つひこれまでは夢にも思はなかつたことが生じて來たので、元氣がすつかり痲痺させられでもしたやうに、彼は默つて進んで行つた。彼の氣紛れな改宗は、もと〳〵理性とは何の關係もないことだつた。それは恐らく、新しい感覺を求めて歩く輕率な人間のたゞの醉狂に過ぎず、また母の死に會つて、一時感動した結果であつたのだ。

テスが彼の熱狂の海に落してやつた二三滴の理窟は、その沸騰する熱を却つて冷して固くするに役立つた。彼女が彼に傳へた結晶になつてゐる言葉を、再三再四考へながら、彼は獨言をいつた。「あの悧巧な男は、あの女にあゝいふことを言つて、俺があの女へ戻る道を開いてゐようとは夢にも思はなかつたんだ！」

四七

それは、フリントコム・アッシ農場の一番終ひまで殘つた麥堆の打穀である。三月の朝の夜明けは不思議にぼんやりしてゐて、東の地平線が何處にあるかを知らせるものもない。麥堆の梯形になつた頂上が、薄闇にくつきり浮き上つてゐる。それは多の雨風に洗はれ、晒され通して、寂しく此處に立つてゐたのであつた。

イズ・ヒュウエットとテスとが仕事場へ着いた時には、僅かにがさ〳〵いふ音のみが、彼等より他の者が先に來てゐることを示してゐた。明るさが增して來るに連れて、やがて堆積の絶頂に二人の男の影法師が映つた。彼等は忙しさうに麥堆の『屋根下ろし』をして、麥束を投げ落す前の用意として葺草を剝ぎ取つてゐた。そしてこの仕事が進行してゐる間に、イズとテスは薄茶色の前掛を掛けた他の女勞働者と一緒に、ぶる〳〵顫へながら、其處に立つて待つてゐた。それは百姓のグロビーが出來ることならばこの日暮れまでに仕事を片付けてしまふつもりで、そんなに早くか

ら彼等を此處へ無理に來させたのであつた。麥堆の軒の直ぐ下には、まだやつと見えるか見えない位ゐだが、女たちが來てこれから仕へようとしてゐる眞赤な暴君——材木で組立てられた革紐と車輪のついた機械で、それの動いてゐる間はどこまでも女たちの筋肉や神經の力を勝手にいつまでも働かさうとする打穀機——が据ゑてあつた。

少し離れた處にもう一臺のぼんやりした姿が見えた。この方は眞黒で、しゆう〳〵とはぢきれさうな音を吐き續けて、いかにも力を澤山貯はへてゐることを物語つてゐた。楡の樹の傍に突き出てゐる長い煙突とそこから上る溫氣とは、そんなに日光の助けを借りないでも、この小さい世界の『主腦動力』となつて活動する機械が此處にあることを說明してゐた。この機械の側には、煤けて汚れ切つた背高といふものゝ生れ變りかと思はれる一人の黑い動かない人間が、側に石炭を山と積んで、ぼんやり立つてゐた——それは機關手であつた。彼の風采や顏色は飛びはなれて變つてゐるので、土着のものを驚かし騷がす爲めに、わざ〳〵まるで違つた黃色い穀物と黃色い土壤とから成つてゐるこの地方の、一筋の煙さへない透明な空氣の中へ彷徨ひ込んで來たトーフェット（猶太人が子供を犧牲に捧げて仕へたといふ火神を祠つたエルサレムの谷）の生物か何かのやうな姿を彼に與へた。

姿に現はれた通りのものを彼は感じてゐた。彼は農業界にこそゐたが、その世界の者ではなかつた。こゝの野良の者は、蔬菜や風雨や霜やそれから太陽に仕へてゐたが、彼は火と煙とに仕へてゐた。彼は自分の機械を持つて農場から農場へ、地方から地方へと渡り歩いた。といふのは、まだウェセックスのこの邊では、蒸汽の打穀機は巡回的なものであつたからである。彼は聞き馴れない北部地方の調子で話し、その考へは內に向つて、自分のことばかりを思ひ煩ひ、彼の視線は自分の鐵製機械の上に向いて周圍の光線などには殆んど氣づかず、又さういふものには、まるで一顧をも拂はなかつた。そして土地の者とは是非とも必要な交りだけをして、恰も或る古くからの宿命に從つて厭でも火界の魔王である主人へ奉仕する爲めに此處を徘徊してゐるものゝやうであつた。彼の機械の車輪から、麥堆の下にある眞赤な打穀機に繋がつてゐる長い帶革が、農業と彼との間をつないでゐるたつた一つの聯絡線であつた。

彼等が麥堆の覆ひを取り除けてゐる間、彼は自分の移動動力庫の傍に無關心に立つてゐた。その機械の熟した眞黑な姿の周圍では、朝の空氣が顫へてゐた。彼は準備の仕事

には用がなかつた。火は白熱して待つてゐた。蒸汽は高壓に達してゐた。間もなく、彼はこの長い帶革を、眼にもとまらない速力で動かすことが出來るのであつた。その帶革の延びてゐる以外の世界は、たとひ穀物であらうと藁であらうと、その他何んであらうとも、彼にとつては全く同じやうなものであつた。若し土地の怠け者の誰かゞ、彼に向つて何といふ者かと訊ねれば、彼は『機關手』と簡單に答へるだけであつた。

日光が隈なく行き亙つた頃には、覆ひはもう取り除けられてしまつた。男たちは銘々の位置に就き、女たちは麥堆へ登つた。かうして仕事は始まつた。百姓グロビー——いや、みんなが呼んでゐるのに從へば、『あいつ』——は、もつと早くからやつて來てゐた。彼の命令で、テスは機械の臺の上の麥を食ます男の傍に立たされた。それは彼女の仕事が、順序は彼女の次であるけれども麥堆の上に立つてゐるイズ・ヒュエットから渡される束を一把々々解くことであつたからである。すると麥を食ます男は、それを手早く受け取り、瞬く間に一粒殘らず拂ひ落してしまふ廻轉鼓輪の上に擔げることが出來るのであつた。

機械は始め一二度故障を生じて、日頃それを嫌つてゐる連中をひそかに喜ばせたが、間もなく大速力で進行した。仕事はどん〳〵捗取つて、終に朝飯時になつた。その時、打穀機は三十分ばかり止められた。それから食事後に再び回轉し始めると、この農場の機械にかゝつてゐる者以外の力は、悉く藁堆を作り上げる仕事に向けられた。その藁堆の堆積は、側へ盛り上がり始めた。忙しい小晝飯が、銘々の位置を去らずに立つたまゝで濟まされ、それからまた二時間すると正餐時に近づいた。疲れを知らない車輪は絶えず廻り續け、打穀機の突き刺すやうなぶん〳〵いふ音は、廻つてゐる網籠の側にゐる誰も彼もの骨髓までも震はせてゐた。

だん〳〵高くなつて行く藁堆の上にゐる老人たちは、樫板の納屋の床の上で連枷で打穀することに馴れてゐて、また選り分けることまですべてを手でやつてゐたが、彼等の考へに依れば、手ぬるくはあつたものゝ結果はその方が良好であつた過去のことを話し合つた。麥堆の上の人達もいくらかお喋りをしてゐた。けれども、機械の方にかゝつて汗を流してゐる連中（テスも無論その中の一人であつたが）はお喋りをし合つてその務めを迂濶にする譯には行かなかつた。こんな風に始終仕事が積つてゐるので、テスは辛く

感じて、フリントコム・アッシへなど決して來なければよかつたと思ひ始めるやうになつた。麥堆の上の女たち——わけてもその中の一人であるマリアン——は、折々仕事の手を休めて、細口壜からビールだか冷たい茶だかを飲んだりまたは顏を拭いたり、着物についた藁片や殻を拂つたりしながら、無駄話を取り交はすことが出來た。だが、テスにはちつとも休む暇がなかつた。といふのは、鼓輪は決して停ることがなかつたから、それに食ましてゐる男も手を休めることが出來ず、その男に解いた束を供給してやらなければならない彼女もまた、手を休める譯に行かなかつた。尤も、鈍くて困るといふグロビーの反對があつたにも拘らず、時々マリアンが半時間位ゐ彼女と仕事を代つてくれることはあつた。

多分或る經濟的の理由からであらうが、この特殊な務めに選ばれるのは、普通は女であつた。そしてグロビーは、テスを選んだ動機を、彼女は束を解く技倆もあり敏捷でもあるから非常に都合がよく、また耐久力もある女の一人であるからと說明した。なるほどこれは事實であつたかも知れない。無駄話を妨げてゐる打穀機のぶん〳〵いふ音は、麥の供給が一定の量より足らなくなる毎に、音を高めて唸り出した。テスと麥を食ませてゐた男とは、ちつとも側見をすることが出來なかつたので、彼女は晝飯時の少し前、一人の男が門の所から音も立てずに畑の中へ入つて來て、二番目の堆積の下へ立ち、この場の光景を、特にテスを眺めてゐたことに、少しも氣が付かなかつた。彼は流行柄のスコッチ織の三つ揃ひを着、そして派手なステッキを振り廻してゐた。

「ありや誰なの？」とイズ・ヒュウエットがマリアンに言つた。彼女は最初この問ひをテスにかけたのだつたが、彼女にはそれが聞えなかつた。

「誰かの情人だらうよ、」とマリアンは簡單に言つた。

「さあ一ギニー賭けてもいゝよ、あの人はテスの後を跟けてゐるに違ひないわ。」

「いゝえ、違ふわ。近頃あの人の後をつけ廻つてゐるのは、怒鳴り屋の牧師さんだわ。あんなめかし屋ぢやないのよ。」

「さうよ——あれは同じ人ぢやないの。」

「あの說教者と同じ人？　だつて、まるで違ふぢやないの！」

「あの人は黒の上衣や白の襟飾を脫いで、頬髯を剃つてしまつたのよ。でも、やつぱり同じ人だわ。」

「本當にあんたさう思ふ？　ぢやあの人に知らしてやらうよ、」とマリアンは言つた。

「お止しよ。あの人は直ぐに見つけるわ、ねえ。」

「それはさうと、說教をして廻つたり、結婚した女に言ひ寄つたりするなんて、大して立派なことだとは思はれないわ。いくらあの人の旦那が外國にゐて、考へように依つては、寡婦のやうなものだからつてね。」

「あゝ——あの男、テスに對して惡いことなんか出來るもんですか、」と不愛想にイズは言つた。「あの人の心は、穴へ嵌つてへばりついてしまつた荷車みたいなもので、居据つた處からとても引き上げられるもんぢやないわ。とてもとても口說いたつて說教したつて、七ツの雷が怒鳴つたつて、あの人を引き離すことは出來ないわ、たとひ離された方が本人の爲めになる時だつてね。」

晝飯の時が來て、廻轉機は停つた。そこでテスは自分の場所を離れたが、機械の震動の爲めに膝がひどく顫へるので、殆んど歩けない位ゐであつた。

「私のやうに、あんたも本當に一杯やるといゝんだのに。」とマリアンは言つた。「さうすりやそんなに蒼白い顏なんかになりはしないわ。あれ、まあ、あんたの顏はまるでものに憑かれてゞもゐるやうだわ！」

テスがすつかり疲れてゐたので、若し訪問者のあることに氣づいたなら、食慾を奪はれてしまふやうな惡い結果になりはすまいか、と氣立ての優しいマリアンは、ふと考へついた。そこで彼女は、テスを誘つて堆積の向う側の梯子から降りさせようと思つた。丁度その時、例の紳士が此方へやつて來て、上を見上げた。

テスは「まあ！」と短い小さな叫び聲を發した。それからその直ぐ後で、急いで彼女は言つた。「私此處でお晝を食べますわ——麥堆の上で。」

彼等はみんな家から餘程離れてゐる時には、折々、こんな風に麥堆の上で食事をした。だが今日は、どちらかと言へば風が烈しく吹いてゐたので、マリアンやその他の者は下へ下り、藁堆の下へ坐つた。

新來の客は、服裝の樣子こそ變つてゐたが、實際もと傳道者のアレク・ダアバヴィルであつた。一目見ただけで生れつきの俗氣が戻つて來たことは明らかだつた。——テスが最初自分を讃美した男として、また所謂從兄として知つた昔の派手な思ひ切つた裝ひをした元の彼へ、たゞ三つ四つ年を重ねただけで、殆んど變らないまゝで歸つたのであ

つた。今までゐた場所に居残つてゐようと決心して、テスは、地上から見えない麥束の間に坐つて食事を始めた。やがて間もなく、梯子を上る足音が聞えて來た。そして直ぐ後から堆積——もう麥束の長方形の平坦な臺になつてゐる——の上へ、アレクが姿を現はした。彼は麥束を跨いで來て、一言もいはずに彼女の眞向ひに腰を下ろした。

テスは、極く手輕な食事として携へて來たうちの分厚な一片のパンケーキを食べ續けた。他の連中は丁度その時分には皆麥堆の下に集つてゐたが、そこには散らばつた藁が心地の好い避難所をつくつてゐた。

「この通り、また來たよ、」とダアバァヴィルは言つた。「どうしてあなたはさう私を苦しめるんですの！」叱責を指の先からまで閃めかしながら、彼女は叫んだ。

「僕が君を苦しめる？　君こそどうして僕を苦しめるんだ？　と君に訊きたいと思ふね。」

「まあ、私はいつだつてあなたを苦しめたことなんかありませんわ！」

「君は苦しめないつて言ふんだね？　だが苦しめてゐるんだよ！　君は僕に憑いてゐるんだもの。つひ今のこと、君がきつい光と一緒に向けたあの眼ね、それが少しも變らずに夜も晝も、僕の處へやつて來るんだ！　テス、君が僕たちの子供の事を僕に話してからといふものは、強い清教徒的な水となつて流れてゐた僕の感情が、まるで俄かに君の方へ開いてゐる道を見つけ出し、どつと一時に迸り出したやうなものなんだ。宗教の道はそれきり干上つてしまつたよ。しかもさういふ風にしたのは君なんだ！」

彼女は默つてぢつと目を据ゑてゐた。

「何ですつて——あなたは說教をすつかり止してしまつたんですか？」と彼女は訊ねた。彼女はエンヂェルから、近代思想の當にならないことを、安價な熱狂を侮蔑することが出來る位ゐには聞き覺えてゐた。が、流石に女で、彼女は少し吃驚した。

わざと嚴格を裝つて、ダアバァヴィルは續けた——

「すつかり。キャスタブリッヂの市で、醉漢たちに說教する筈だつた何時かの午後から、約束を殘らず破つてしまつたんだ。同胞たちに、僕は何と思はれてゐるか分らない。ははゝゝ！　同胞だ！　屹度、奴等は僕の爲めに祈るに相違ない——奴等は奴等流に親切なんだからね。だが、僕の知つたことぢやない！　僕は信仰の出來なくなつたものに、どうしてくつついて行けるものか？——それこそ卑劣極まる僞善になるだらう！　奴等の間で、僕は神に對して不敬の言をなさざるやう惡魔に引き渡されたヒメナヨとアレキサンデル（「或人よき良心を棄て、信仰を失へり。此の如き人の中にヒメナヨとアレキサンデルあり、我かれらをサタンに付せり、是れらをして誹謗を言はざらしめんが爲に懲すなり。提摩太前書。第一章十九節、二十節）のやうな立場に立つたのかも知れない。何といふ素晴らしい復讐を君はしたもんだらう！　僕は何にも知らない君を見て、瞞したんだ。四年後に君が會つて見ると僕は熱心な基督教徒になつてゐた。それから君は僕の心を動かし、恐らく僕を完全に地獄落ちとするんだらう！　だがテス、昔の所謂僕の從妹、これは僕一流の物の言ひ方なんだから、そんなに恐ろしく心配な顏をしてはいけないよ。勿論、君は何もしたんぢやないんだ、たゞ君の美しい顏と形の好い姿を失はずにゐるといふだけのことだつたんだ。君が僕を見附けないうちに、僕は麥堆の上に見たんだ——きちんとした前掛のやうなものもそれを引き立てゝ見せたし、それからあの垂布の女帽——若し君が危險を避けてゐたいと望むなら、君たち野良の娘は、決してあんな帽子を被るべきぢやない。」數分の間、彼は默つて彼女を見詰め、それから一度皮肉に笑つて、また始めた——「僕はかう信じてゐるんだ、獨身者の使徒ポール、僕はそれの代理者の積りでゐたんだが、その彼でさへもこんなに美しい顏に誘惑されたら、屹度、僕のやうに、その女の爲めに傳道の犁を捨てゝしまつたかも知れないんだ！」

テスは言ひ譯をしようと試みたが、この場合彼女はどうしてもすら〳〵と口を利くことが出來なかつた。彼はそれには頓着なく言ひ添へた——

「さうだな、結局、君が與へてくれるこの樂園は、恐らく他のどれにも劣らない佳いものだ。しかし、眞面目に話すとね、テス。」ダアバァヴィルは起ち上つて、更に近くへ寄り、麥束の間へ横に靠れかゝり、肱を立てゝ體を樂に支へた。「この前に君に會つてから、あの人が言つたといつて君が話したことを、始終考へてゐるんだ。僕は、こんな黴の生えた古臭い信條には、どつちかといふと常識が缺けてゐるやうに見えるといふ結論に到着したんだ。どうして僕があの可哀さうなクレア師の熱心にひどく焚きつけられて、あの人に輪をかけてまで氣狂ひのやうに働くやうになつたのか、僕には分らないんだ！　この前會つた時、君が驚くべき夫の知識——その人の名を君は決して僕に言はないのだが——を賴みとして、君の言つた、決して獨斷主義を含まない所謂倫理說を有つてゐるといふことには僕は贊成しな

いね。」

「だつて、若しあなたに――何とか言ひましたね――あ、獨斷主義は有てないとしても、少くとも慇懃と純潔の宗教はもてませう。」

「どうして、どうして！　僕はそんな種類の人間とは違ふよ！『かうせよ、さうすれば死後お前の爲めになる、あゝせよ、さうすればお前の爲めにならない』と誰も言つてくれる者がなかつたら、僕は熱することが出來ないんだ。そんなことはどうでもなれだ。他に誰も責任を持つてくれる者がないなら、僕は自分の行爲や情慾に責任など感じないつもりはないんだ。それで、僕が若し君であるとしても、ねえ君、やつぱりそんなつもりはないよ！」

彼女は論じ立て、人類の原始時代には全くはつきり區別のついてゐた宗教と道德といふ二つの事柄を、鈍い頭の中でごつちやにしてしまつてゐるのだ、と彼に言つてやらうと試みた。だが自分は、エンヂェル・クレアの默り勝ちな性質と、自分が全然訓練を缺いてゐること、自分が理智よりも感情の器であることなどの爲めに、議論を進めることが出來なかつた。

「まあ、どうだつていゝさ、」と彼は言葉を續けた。「この通り、ねえ君、僕は昔のまゝでゐるんだよ！」

「いゝえ、あの時の通りではありませんわ――決してあの時の通りではありません――違つてゐますわ！」と彼女は懇願した。「それに私にはつひぞ熱といふものがなかつたんです！　おゝ、何故あなたは信仰を守つてゐなかつたのです。それを失つた爲めに、私に向つてこんな風に物を言ふやうになるんだつたら！」

「君がそれを僕から叩き出してしまつたからさ。それで、君の可愛い頭にも禍あれといふわけなんだ！　君の夫は、自分の教義がやがて自分の身の上に祟らうとは、夢にも思はなかつたらうな！　はゝゝゝゝ――僕はね、君が僕を背信者にしてくれたのが、それにしても恐ろしく嬉しいよ！　テス、僕はこれまでよりも一層君に迷ひ、同時にまた君を可哀さうにも思つてゐるんだ。いくら君がかくしても、僕には分るんだ、君がよくない境遇にゐるといふこと――當然君を愛していゝ人から顧みられないでゐるといふことはね。」

彼女は、口へ入れた食物も咽喉へは通すことが出來なかつた。彼女の唇は、乾いてしまひ、窒息しさうであつた。麥堆の下で飲み喰ひしてゐる勞働者たちの話し聲や笑ひ聲

は、恰も四五丁も先の方でされてゐるやうに、彼女には聞えて來た。

「そりや私をいぢめるといふものです！」と彼女は言つた。「ほんの少しでも私の爲めを思つて下さるなら、どうして――どうしてこんな話を私に仰しやれるんでせう？」

「なるほど、さうだ、」と彼は、少したぢろぎながら言つた。「僕は、自分の行ひを種にして、君を責めに來たんぢやなかつた。僕はね、テス、君がこんな風に働かされてゐるのを好まない、といふことを言ひに來たんだ。そして君の爲めにわざ〳〵來たんだ。君には僕でない夫があるんだつてね。なるほど、多分さうだらう。が、僕はその人を見たこともなければ、また君はその名を僕に話したこともない。その人はまるで、神話中の人物みたいだ。けれども、たとひ君にその夫があるとしても、その人よりは、僕の方がずつと君に接近してゐるやうに思はれるね。僕は、兎にも角にも、君の苦しみを救ひ出さうとするが、その人はしない。その見えざる顏に幸あれだ！　僕がよく讀んでゐた嚴格な豫言者ホジヤ（舊約全書、何西阿第二章七節）の言葉が思ひ出されるよ。君はあれを知らないかね、テス？――『彼女はその戀人の後を慕ひ行けども、追ひつくことなく、これを尋ぬれども遇ふことなし。是において彼女言はん、我行きて我が先の夫に歸るべし。かの時、我が狀態は今にまさりてよかりき！』……テス、僕の馬車は丘の直ぐ下に待つてゐる、そして――可愛い僕の戀人、あの人のでなく！――後は言はなくとも君には分るだらう。」

彼が話してゐるうちに、彼女の顏はだん〳〵黑ずんだ朱の色に燃えて行つた。が、彼女は返事をしなかつた。

「君は僕の墮落の原因だつたんだ、」彼女の腰の方へ腕を延ばしながら、彼は續けた。「君も喜んでその附合ひをしてくれるのが當然だ、そして君が夫と呼んでゐる淺分曉漢を永久に捨てることだ。」

杓子菓子を食べる爲めに先刻脫いだ革手袋の片方が、彼女の膝の上に載つてゐた。そこで彼女は、何の前知らせもなく、手首のところを摑んで怒りに任せて、その手袋を眞直ぐに彼の顏を目掛けて叩きつけた。それは、戰士の籠手でゐるやうな重い分厚なもので、ぴしやりと彼の口に當つた。若し空想する事が許されるならば、この行動こそ、弓矢を取つた彼女の祖先が相當に訓練されてゐた早業の再發とも見られないことはなかつた。アレクは、横になつてゐた位置から烈しく跳び起きた。彼女が打つた箇所には、眞